

# 弁天山古墳群の調査

大阪府文化財調査報告

第 17 輯

1967

高槻市教育委員会

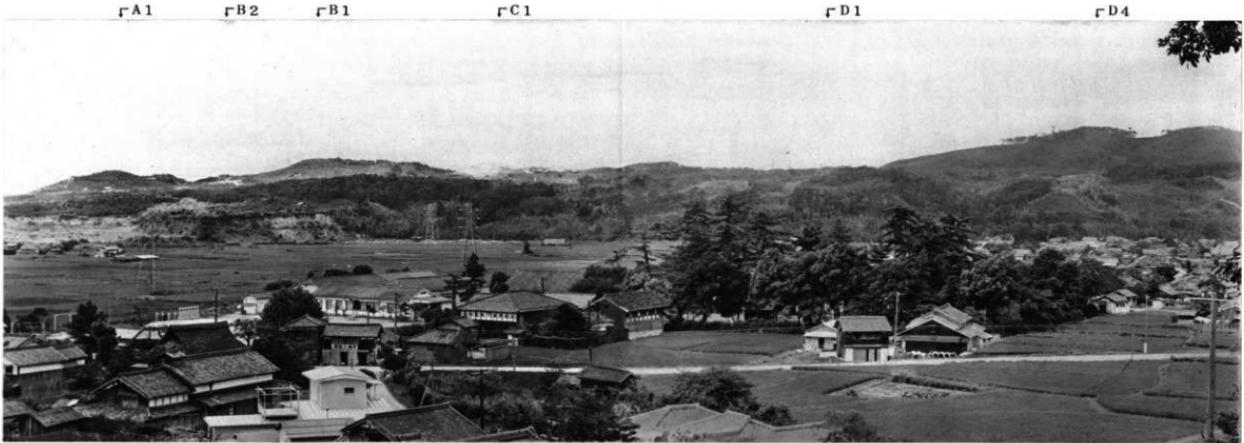
# 弁天山古墳群の調査

大阪府文化財調査報告

第 17 輯

1967

高槻市教育委員会



東方からみた弁天山古墳群全景



弁天山古墳群位置図

## 序

先に発刊いたしました塙脇古墳群調査、紅葉川及岡本山東地区遺跡調査に引続き、このたび、高槻市文化財調査報告書第3冊として、赤天山古墳群発掘調査報告書を刊行することになりました。

本市の郡家、奈佐原、岡本、服部などにわたる北部丘陵地帯には赤天山前方後円墳を中心として推定14基の高塚墳墓が群在しております、それらは前期墳墓として著聞するものがありました。

丸紅不動産株式会社はこの群集墳墓を含む地区を買収し、ゴルフ場および住宅の建設計画をし、昭和38年5月10日に上木工事等による埋蔵文化財包蔵地発掘届出があり、文化財保護委員会で現地調査の結果、主墳たる赤天山と岡本山の両前方後円墳は保存し、その他は止むを得ず記録保存することになったのであります。

記録保存のための発掘調査費用はすべて原作者負担とすることになりましたが、丸紅不動産関係者の配慮によるところ多大であり深く敬意を表する次第であります。

調査は本市教育委員会と大阪府教育委員会との共催のもとに同年7月1日鍛入の式典を挙行し、綿密に周到な計画により9月末日に発掘調査を完了したのであります。文化財保護の上から慶びに堪えません。

ここに調査発掘のためにご苦労になりました関係各位ならびに大阪府教育委員会に対しまして深く感謝の意を表しまして、本報告書刊行の序文といたします。

昭和42年3月

高槻市教育委員会

教育長 入谷唯一郎



## 目 次

### 弁天山B 2号墳

堅 田 直

1. 古墳の位置.....	1頁
2. 調査の経過.....	1
3. 外部構造.....	3
4. 内部構造.....	6
5. 遺物各説.....	11
6. 結語.....	17

### 弁天山B 3号墳

堅 田 直

1. 古墳の位置.....	19
2. 調査の経過.....	19
3. 外部構造.....	22
4. 内部構造.....	26
5. 遺物各説.....	30
6. 結語.....	33

### 弁天山B 4号墳

堅 田 直

1. 古墳の位置.....	37
2. 調査の経過.....	37
3. 外部構造.....	38
4. 内部構造.....	38
5. 遺物各説.....	39
6. 結語.....	42

### 付録標称 弁天山 4号墳

堅 田 直

1.はじめに.....	43
2.古墳の位置.....	43
3.調査の経過.....	44
4.外部構造.....	44
5.内部構造.....	44
6.結語.....	45

### 弁天山C 1号墳

原 口 正 三

西 谷 正

1. 調査の経過.....	47
---------------	----

2. 墳丘の調査.....	60
3. 内部施設.....	77
4. 考察.....	113

弁天山D1号墳 田代克己

1. 古墳の位置.....	131
2. 調査の経過.....	131
3. 墳丘.....	132
4. 内部主体と遺物の出土状況.....	133
5. 遺物.....	133

弁天山D2号墳 田代克己

1. 調査の経過.....	137
2. 墳丘.....	143
3. 内部主体と遺物の出土状況.....	146
4. 墳輪.....	149
5. 遺物.....	151

弁天山D3号墳 田代克己

1. 調査の経過.....	159
2. 墳丘.....	159
3. 内部主体.....	160
4. 遺物.....	161
5. 結び.....	162

弁天山D4号墳 北野耕平

1. 古墳の位置.....	169
2. 墳丘の形状.....	169
3. 内部構造.....	171
4. 遺物の配列.....	173
5. 遺物.....	173

弁天山古墳群編年表 ..... 179

## 図版目次

### B 群

図版B 1	弁天山B 2号墳 外形
(1)	東方からみたB 2号墳
(2)	西方からみたB 2号墳
図版B 2	弁天山B 2号墳 内部施設
(1)	東郷 粘土郷遺存状態
(2)	東郷 粘土郷（棺内落下被覆粘土除去および南縁被覆粘土上下鉄刀等露呈状態）
図版B 3	弁天山B 2号墳 内部施設
(1)	東郷 粘土郷
(2)	東郷 粘土郷（被覆粘土除去後）
図版B 4	弁天山B 2号墳 内部施設
(1)	西郷粘土郷（上）と東郷粘土郷（下）
(2)	同 上
図版B 5	弁天山B 2号墳 内部施設
(1)	西郷・東郷 墓塚と排水施設
(2)	西郷・東郷 墓塚底
図版B 6	弁天山B 2号墳 内部施設
(1)	東郷 排水溝上の遺物
(2)	東郷 排水施設
図版B 7	弁天山B 2号墳 内部施設
(1)	西郷 粘土郷遺存状態
(2)	西郷 粘土郷（落込粘土除去後）
図版B 8	弁天山B 2号墳 内部施設
(1)	西郷 粘土郷木棺痕跡
(2)	西郷 排水施設
図版B 9	弁天山B 2号墳 内部施設
(1)	東郷 棺内の遺物
(2)	漆塗空室出土状態
図版B 10	弁天山B 2号墳 遺物
	東郷出土 銅鏡類

- 図版B11 弁天山B 2号墳 遺物  
 (1)鉄劍・鉄刀（東櫛出土）  
 (2)鉄器類（東櫛出土）  
 (3)石劍（東櫛出土）・管玉・勾玉（西櫛出土）
- 図版B12 弁天山B 3号墳 外形  
 (1)北方からみたB 3号墳  
 (2)東方からみたB 3号墳
- 図版B13 弁天山B 3号墳 内部施設  
 (1)後円部粘土層遺存状態  
 (2)同上
- 図版B14 弁天山B 3号墳 内部施設  
 (1)後円部粘土層遺存状態 右西櫛 左東櫛  
 (2)後円部粘土層（落込粘土除去後）
- 図版B15 弁天山B 3号墳 内部施設  
 (1)後円部東櫛粘土層（被覆粘土落込横断面）  
 (2)後円部西櫛粘土層（被覆粘土落込横断面）
- 図版B16 弁天山B 3号墳 内部施設  
 (1)後円部粘土層（被覆粘土除去後）  
 (2)後円部東櫛 粘土床断面
- 図版B17 弁天山B 3号墳 内部施設  
 (1)後円部東櫛 粘土床下の状態  
 (2)後円部西櫛 粘土床横断面
- 図版B18 弁天山B 3号墳 内部施設  
 (1)後円部東櫛 木棺痕跡（南端）  
 (2)後円部西櫛 木棺痕跡（南端）
- 図版B19 弁天山B 3号墳 内部施設  
 (1)後円部西櫛 棺内出土鉄劍  
 (2)東櫛 棺外出土鉄斧  
 (3)東櫛 棺外出土鉄劍他  
 (4)後円部西櫛・東櫛 鉄器類出土状態
- 図版B20 弁天山B 3号墳 遺物  
 後円部西櫛・東櫛出土鉄器類
- 図版B21 弁天山B 3号墳 内部施設

	(1) 前方部東櫛 (左)・西櫛 (右) .....
	(2) 前方部東櫛・西櫛 墓域 .....
図版B22	弁天山B3号墳 内部施設 .....
	(1) 前方部東櫛 粘土櫛遺存状態 .....
	(2) 前方部東櫛 粘土櫛 (落込粘土除去後) .....
図版B23	弁天山B3号墳 内部施設 .....
	(1) 前方部 西櫛 (棺内発掘前) .....
	(2) 前方部 西櫛 (棺内発掘後) .....
図版B24	弁天山B3号墳 遺物 .....
	(1) 前方部西櫛 棺内遺物 .....
	(2) ガラス小玉 .....
	(3) 前方部西櫛 棺内出土鉄器類 .....
図版B25	弁天山B4号墳 外形 .....
	(1) 北方からみたB4号墳 .....
	(2) 西方からみたB4号墳 .....
図版B26	弁天山B4号墳 内部施設 .....
	(1) 主体部遺存状態 (棺内発掘前) .....
	(2) 発掘後の棺内 .....
図版B27	弁天山B4号墳 遺物 .....
	(1) 棺内遺物出土状態 .....
	(2) 鉄斧(1)・鉄鎌(2)・錘(3)・珠文鏡(4)・ガラス小玉(5) .....

## C 群

	図版C1 弁天山C1号墳 外形 .....
	(1) 東南方からみたA1・B1・C1号墳 .....
	(2) 北方からみたC1号墳 (調査前) .....
	(3) 南方からみたC1号墳 (調査前) .....
図版C2	弁天山C1号墳 外形 .....
	(1) 東北方からみたC1号墳 .....
	(2) 南方からみたC1号墳 .....
	(3) 西方からみたC1号墳 .....
図版C3	弁天山C1号墳 外形 .....
	東方からみたC1号墳 .....
図版C4	弁天山C1号墳 外形 .....

上空からみたC 1号墳（毎日新聞社提供）	.....
図版C 5 弁天山C 1号墳 外部施設	.....
(1)後円部背面	.....
(2)後円部背面	.....
図版C 6 弁天山C 1号墳 外部施設	.....
(1)前方部からみた後円部南側	.....
(2)前方部からみた後円部北側	.....
図版C 7 弁天山C 1号墳 外部施設	.....
(1)南方からみたくびれ部	.....
(2)北方からみたくびれ部	.....
図版C 8 弁天山C 1号墳 外部施設	.....
(1)後円部前面の突出部（南側）	.....
(2)後円部前面の突出部（北側）	.....
図版C 9 弁天山C 1号墳 外部施設	.....
(1)後円部からみた前方部およびくびれ部	.....
(2)後円部前面の葺石と埴輪	.....
図版C 10 弁天山C 1号墳 外部施設	.....
(1)前方部前面	.....
(2)前方部の南側稜角	.....
図版C 11 弁天山C 1号墳 外形実測図	.....
図版C 12 弁天山C 1号墳 内部施設	.....
(1)後円部堅穴式石室と粘土櫛の遺存状態	.....
(2)粘土櫛除去後の堅穴式石室	.....
図版C 13 弁天山C 1号墳 内部施設	.....
後円部堅穴式石室・粘土櫛実測図	.....
図版C 14 弁天山C 1号墳 内部施設	.....
(1)後円部堅穴式石室（壁体最下部）	.....
(2)後円部堅穴式石室（墓塚底の粘土と排水溝）	.....
図版C 15 弁天山C 1号墳 内部施設	.....
(1)後円部堅穴式石室（墓塚底の粘土と排水溝）	.....
(2)後円部堅穴式石室（粘土除去後の墓塚底）	.....
図版C 16 弁天山C 1号墳 内部施設	.....
(1)後円部堅穴式石室（東側壁）	.....

- (2)後円部竪穴式石室（木棺北端の痕跡）.....
- 図版C17 弁天山C 1号墳 内部施設.....  
後円部竪穴式石室 遺物出土状態.....
- 図版C18 弁天山C 1号墳 内部施設.....  
(1)棺内の遺物（北側遺物群）.....  
(2)棺内の遺物（南側遺物群）.....
- 図版C19 弁天山C 1号墳 内部施設.....  
後円部竪穴式石室実測図.....
- 図版C20 弁天山C 1号墳 内部施設.....  
(1)前方部粘土幕.....  
(2)前方部粘土幕（粘土床と排水施設）.....
- 図版C21 弁天山C 1号墳 内部施設.....  
(1)前方部粘土幕 薙塚.....  
(2)前方部粘土幕 土師器（棺外北端）.....
- 図版C22 弁天山C 1号墳 内部施設.....  
前方部粘土幕尖端測図.....
- 図版C23 弁天山C 1号墳 遺物.....  
(1)二神二獸鏡（後円部竪穴式石室 棺内）.....  
(2)四獸鏡（後円部竪穴式石室棺内）.....
- 図版C24 弁天山C 1号墳 遺物.....  
三神三獸鏡（後円部竪穴式石室棺内）.....
- 図版C25 弁天山C 1号墳 遺物.....  
勾玉（1～9）・管玉・石鏡（10）・車輪石（1）（後円部  
竪穴式石室 棺内）.....
- 図版C26 弁天山C 1号墳 遺物.....  
石鏡（1～4）・車輪石（5～7）（後円部竪穴式石室 棺内）.....
- 図版C27 弁天山C 1号墳 遺物.....  
合子・筒形石製品（後円部竪穴式石室 棺内）.....
- 図版C28 弁天山C 1号墳 遺物.....  
管玉（後円部竪穴式石室 棺内）.....
- 図版C29 弁天山C 1号墳 遺物.....  
銅鏡（1～19）・鉄刀子（20～22）（後円部竪穴式石室 棺外）.....
- 図版C30 弁天山C 1号墳 遺物.....

鉄鎌（1～4）・鉄鉗（5、6）・鉄鋸（7）・鉄斧（8、9）

（後円部堅穴式石室 棺外）.....

図版C31 弁天山C 1号墳 遺物.....

土師器・筒形石製品・ガラス小玉（前方部粘土築）棺材

（後円部堅穴式石室）.....

図版C32 弁天山C 1号墳 遺物.....

埴輪A（1）・B（2）・C（3、4）.....

図版C33 弁天山C 1号墳 遺物.....

埴輪D（1、2）.....

図版C34 弁天山C 1号墳 遺物.....

(1)埴輪E.....

(2)埴輪E.....

図版C35 弁天山C 1号墳 遺物.....

(1)埴輪E（3～12）.....

(2)埴輪F（1～9）.....

図版C36 弁天山C 1号墳 遺物.....

(1)埴輪F（10～19）.....

(2)埴輪F（20～26）・土師器（27、28）.....

## D 群

図版D 1 弁天山D 1号墳 外形 内部施設.....

(1)北方からみたD 1号墳.....

(2)主体部全景.....

図版D 2 弁天山D 1号墳 内部施設.....

(1)棺内に遺物（東側）.....

(2)同 上（西側）.....

図版D 3 弁天山D 1号墳 外形.....

D 1号墳外形実測図.....

図版D 4 弁天山D 1号墳 内部施設 遺物.....

(1)D 1号墳内部主体実測図.....

(2)棺内出土鉄器類・滑石製小玉.....

図版D 5 弁天山D 2号墳 外形.....

(1)南方からみたD 2号墳（調査前）.....

(2)東方からみたD 2号墳（調査前）.....

- 図版D 6 弁天山D 2号墳 外形.....  
 　(1)南方からみたD 2号墳（調査後）.....  
 　(2)東方からみたD 2号墳（調査後）.....
- 図版D 7 弁天山D 2号墳 外形.....  
 　(1)西方からみたD 2号墳（調査後）.....  
 　(2)北方からみたD 2号墳（調査後）.....
- 図版D 8 弁天山D 2号墳 外形.....  
 　上空からみたD 2号墳（産経新聞社提供）.....
- 図版D 9 弁天山D 2号墳 外形.....  
 　D 2号墳 外形実測図（調査前）.....
- 図版D 10 弁天山D 2号墳 外形.....  
 　D 2号墳 外形実測図（調査後）.....
- 図版D 11 弁天山D 2号墳 外部施設.....  
 　(1)前方部前面からみた葺石.....  
 　(2)後方部からみた前方部.....
- 図版D 12 弁天山D 2号墳 外部施設.....  
 　(1)東方からみた前方部.....  
 　(2)前方部東側面・くびれ部.....
- 図版D 13 弁天山D 2号墳 外部施設.....  
 　(1)東側くびれ部上段葺石と埴輪.....  
 　(2)西側くびれ部上段葺石と埴輪.....
- 図版D 14 弁天山D 2号墳 外部施設.....  
 　葺石実測図 1、2、3.....
- 図版D 15 弁天山D 2号墳 内部施設.....  
 　(1)後方部内部主体と埴輪.....  
 　(2)同 上.....
- 図版D 16 弁天山D 2号墳 内部施設.....  
 　D 2号墳内部主体実測図.....
- 図版D 17 弁天山D 2号墳 遺物.....  
 　(1)棺内出土上鉄釦類・滑石製小玉.....  
 　(2)家形埴輪.....
- 図版D 18 弁天山D 2号墳 遺物.....  
 　(1)形象埴輪.....

- (2)円筒埴輪・他.....
- 図版D19 弁天山D 3号墳 外形 内部施設.....  
(1)東方からみたD 3号墳.....  
(2)内部主体.....
- 図版D20 弁天山D 3号墳 外形.....  
D 3号墳外形実測図.....
- 図版D21 弁天山D 3号墳 外部施設.....  
(1)南側面葺石.....  
(2)北側面葺石.....
- 図版D22 弁天山D 3号墳 内部施設 遺物.....  
(1)内部主体実測図.....  
(2)鉄劍（棺内）・形象埴輪・須恵器 .....
- 図版D23 弁天山D 4号墳 外部施設.....  
(1)前方部東側における葺石と埴輪の配列.....  
(2)後円部北側における葺石と埴輪の配列.....
- 図版D24 弁天山D 4号墳 外部施設.....  
(1)前方部よりくびれ部にいたる葺石と埴輪の配列.....  
(2)同 上 葺石の配列細部.....
- 図版D25 弁天山D 4号墳 外形 外部施設.....  
(1)D 4号墳外形実測図.....  
(2)墳丘および葺石・埴輪の配列実測図.....
- 図版D26 弁天山D 4号墳 遺物.....  
(1)水鳥形埴輪破片.....  
(2)家形・槿形埴輪破片.....
- 図版D27 弁天山D 4号墳 遺物.....  
(1)左 朝顔形埴輪破片 右 円筒埴輪.....  
(2)鉄小札 右方3列は籠手小札.....
- 図版D28 弁天山D 4号墳 遺物.....  
(1)鉄製鞍金具破片.....  
(2)鉄製輪轂金具破片.....

## 挿図目次

### B 2号墳

第1図 弁天山B 2号墳の外形と東西両櫛の墓坑実測図 （実測 石南、縣、江頭、河原、原、原田、山木） （製図 吉田富美子）	4
第2図 墳丘の断面（上は東西、下は南北トレンチの断面） （実測 石光、堀江） （製図 吉田）	6
第3図 東櫛構造と遺物配置の実測図 （実測 中垣、石山） （製図 吉田）	8
第4図 棺床肩部出土の鉄刀（写真 高橋）	9
第5図 西櫛構造と遺物配置の実測図 （実測 石附） （製図 吉田）	10
第6図 玉類出土状態（写真 高橋）	11
第7図 東西両櫛の断面 （実測 加藤、今西、原） （製図 吉田）	12
第8図 方格禽文鏡（上）内花文鏡（下） （実測 吉田）	13
第9図 弁天山B 2号墳碧玉製石劍尖実測図 （実測 吉田） （製図 吉田）	14
第10図 鉄劍・刀子・鉄斧・鏃・鉗尖実測図 （実測 石附） （製図 吉田）	15
第11図 鉄刀実測図 （実測 石附） （製図 吉田）	15
第12図 勾玉・管玉実測図 （実測 石附） （製図 吉田）	17

### B 3号墳

第13図 弁天山B 3号墳実測図 （実測 吉本、小南） （製図 吉田）	23
第14図 弁天山B 3号墳前方部端、発掘後実測図 （実測 吉本、小南） （製図 吉田）	24
第15図 弁天山B 3号墳後円部断面図 （実測 牧野、小南） （製図 吉田）	24
第16図 弁天山B 3号墳前方部断面図 （上）南北トレンチ（下）東西トレンチ （実測 吉本、小南） （製図 吉田）	25
第17図 弁天山B 3号墳後円部東西櫛構造と遺物配置の実測図 （実測 吉本、近泰、丸山、小南、石川） （製図 吉田）	26-27
第18図 弁天山B 3号墳前方部東櫛構造実測図 （実測 高木、新活） （製図 吉田）	28
第19図 弁天山B 3号墳前方部西櫛構造と遺物配置実測図 （実測 高木、新活、今西） （製図 吉田）	29
第20図 弁天山B 3号墳後円部東西櫛出土遺物実測図 （実測 吉本） （製図 吉田）	31
第21図 弁天山B 3号墳前方部東西櫛出土遺物実測図 （実測 白石） （製図 吉田）	33

## B 4号墳

- 第22図 弁天山B 4号墳埴丘断面図 (上)南北トレンチ (下)東西トレンチ  
(実測 萩木、近森、伊藤(E)、齊藤、今西、県)  
(調査 吉田) ..... 38
- 第23図 弁天山B 4号墳粘土塙構造と遺物配置図 (実測 白石、高木、伊藤)  
(調査 吉田) ..... 39
- 第24図 弁天山B 4号墳出土遺物実測図 (実測 白石)  
(調査 吉田) ..... 41
- 第25図 弁天山B 4号墳埴丘出土有舌尖頭器 (写真 堅田) ..... 41

## 旧4号墳

- 第26図 弁天山旧4号墳地形図 ..... 43

## C 1号墳

- 第1図 弁天山C 1号墳 外形実測図 (調査前) ..... 49
- 第2図 弁天山C 1号墳 区画図 ..... 58
- 第3図 弁天山C 1号墳 後円部前面葺石実測図 (I) ..... 60-61
- 第4図 弁天山C 1号墳 墓丘断面図 (A—後円部前面・B・A—前方部前面) ..... 60-61
- 第5図 弁天山C 1号墳 前方部前面葺石実測図 (II) ..... 62-63
- 第6図 弁天山C 1号墳 左側くびれ部葺石実測図 (III) ..... 64-65
- 第7図 弁天山C 1号墳 後円部背面葺石実測図 (IV) ..... 70-71
- 第8図 弁天山C 1号墳 右側くびれ部葺石実測図 (V) ..... 74-75
- 第9図 弁天山C 1号墳 前方部右側稜角葺石実測図 (VI) ..... 74-75
- 第10図 穹穴式石室北東部墓道附近断面図 ..... 79
- 第11図 弁天山C 1号墳 穹穴式石室棺内遺物配置状態 (頭辺) ..... 81
- 第12図 弁天山C 1号墳 穹穴式石室棺内遺物配置状態 (足辺) ..... 82
- 第13図 後円部粘土塙縦断面 ..... 84
- 第14図 弁天山C 1号墳 前方部粘土塙実測図 (粘土床と排水施設) ..... 88
- 第15図 二神二獸鏡 (穹穴式石室棺内) ..... 89
- 第16図 四獸鏡 (穹穴式石室棺内) ..... 90
- 第17図 三神三獸鏡 (穹穴式石室棺内) ..... 91
- 第18図 石鏡・車輪石 (穹穴式石室棺内) ..... 92
- 第19図 勾玉・管玉 (穹穴式石室棺内) ..... 94
- 第20図 合子 (穹穴式石室棺内) ..... 95
- 第21図 感形石製品 (穹穴式石室棺内) ..... 96
- 第22図 钏嵌 (穹穴式石室棺外) ..... 98

第23図	鎌・鋸・鉗・刀子(堅穴式石室棺外) .....	99
第24図	鐵刀(堅穴式石室棺外) .....	101
第25図	木棺材(堅穴式石室) .....	101
第26図	ガラス玉・筒形石製品(前方部粘土櫛) .....	102
第27図	土師器(前方部粘土櫛棺外) .....	103
第28図	埴輪(A類) .....	104
第29図	埴輪(B類・C類) .....	105
第30図	埴輪(D類) .....	107
第31図	埴輪(D類) .....	108
第32図	埴輪(E類) .....	109
第33図	埴輪(上:E類、下:F類) .....	110
第34図	埴輪(F類) .....	111
第35図	埴輪(1~6・11)・土師器(8~10)・弥生式土器(12) .....	112
第36図	模文鏡(後円部粘土櫛) .....	112
第37図	弁天山B 1号墳 外形図 .....	114
第38図	弁天山A 1号墳 外形図 .....	115
第39図	弁天山C 1号墳 地山想定図 .....	117
第40図	弁天山C 1号墳 削上図 .....	118
第41図	弁天山C 1号墳 復原図 .....	119

#### D 1号墳

第1図	D 1号墳 出土鉄剣実測図 .....	134
第2図	D 1号墳 出土鉄器類実測図 .....	135

#### D 2号墳

第3図	D 2号墳 墳丘縦断面実測図 .....	143
第4図	D 2号墳 後方部横断面実測図 .....	147
第5図	D 2号墳 a 主体出土鉄器実測図 .....	151
第6図	D 2号墳 b・c 主体出土鉄器実測図 .....	153
第7図	後方部頂出土土器形埴輪実測図 .....	154
第8図	D 2号墳 墳頂部土坑出土埴輪実測図 .....	155
第9図	後方部頂埴輪上坑内出土須恵器実測図 .....	157
第10図	西側くびれ部出土土師器実測図 .....	157

### D 3号墳

- 第11図 D 3号墳 a 主体出土鉄剣実測図 ..... 161  
第12図 D 2号墳 墳丘復元図 ..... 165  
第13図 D 2号墳 墳丘地割想定図 ..... 165

### D 4号墳

- 第1図 後円部北側より出土の須恵器破片 ..... 171  
第2図 後円部頂上の調査状況 ..... 171  
第3図 後円部頂上遺物散布状態 ..... 172  
第4図 鉄器類実測図 1鉄刀片、2鉄鎌、3肩庇付舟の脛底部分、  
4同管状鉄製品、5銅留鉄片、6頸甲破片 ..... 174  
第5図 鉄小札実測図（1～5椎定草摺、6～10籠手） ..... 175  
第6図 鞍金具、輪轂、鉄地金銅板金具実測図 ..... 177  
第7図 鉄器実測図 1・2鉄具破片、3鉄斧、4鉄鑿 ..... 178

# 弁天山B2号墳

堅田直



## 1. 古墳の位置

弁天山B2号墳は、高槻市岡本41番地にある。

高槻市は、大阪の北郊にあって、琵琶湖から大阪湾に注ぐ淀川が形成する肥沃なる摂津平野のほぼ中央部にあたっている。この淀川の右岸に当る西方には丹波高原に連なる北摂山地がせまり、その麓をとりまくように洪積台地が発達している。この洪積台地が平野と接する傾斜変換線にそって西国街道が縱貫している。古くこの街道に沿った洪積台地上に古墳の造られていたことは、連続する兵庫県萬葉山古墳<sup>①</sup>、池田市茶臼山古墳、茨木市将军山古墳<sup>②</sup>等によってよく知られている。弁天山B2号墳は、それらに連なる高槻市岡本山古墳<sup>③</sup>、弁天山古墳、大藏司山古墳等の規模の大きい前方後円墳のまわりに点在する小規模の封土を持つ古墳で、特に弁天山古墳の位置する丘陵の文丘上に造営されたものである。

現在、岡本山古墳の前方部の一部と、この丘の尖端部を結ぶ線上に「名神高速道路」が縱走したため景観は一変したが、なおよく摂津平野を眼下に見おろす景勝の地にある。

## 2. 調査の経過

弁天山古墳群のほとんどが丸紅不動産株式会社の宅地造成工事によって破壊されることになったので、大阪府教育委員会、地元の高槻市教育委員会を中心となって「弁天山古墳群調査委員会」を編成して発掘調査に当ることになったそれは前述されたところである。

さて、弁天山B2号墳は堅田直が発掘担当者となって班を編成し発掘調査を実施した。班編成は次のとおりである。

発掘担当者 堅田 直（帝塚山大学助教授）

〃 調査員 石附喜三男（札幌大学専任講師）

〃 助理員 今西通晴、伊藤晃、宇都宮哲朗、加藤信勝、高木宗次郎、原博、堀江門也

参加者 有光有学、県敏大、新店敬造、石山英勝、江頭正子、大橋忠雄、奥田美奈子、河原宣子、齊藤秀起、田中則夫、近森佐太郎、堤克彦、中垣和男、原田典和、浜田日出子、山木充子、吉田一将、村上利孝

発掘調査は昭和38年7月12日から22日までおこなった。以下調査日誌を抄録してみよう。

昭和38年

- 7月12日 晴 B2号墳、旧4号墳、B3号墳、B4号墳の全体写真を撮影。B2号墳の実測と旧4号墳の芝刈り。
- 7月13日 晴 旧4号墳の遠景写真、C1号墳の全景写真を撮影、B2号墳、旧4号墳、B3号墳の測量。その後B2号墳は、トレンチを設定し発掘を開始
- 7月14日 晴 封土を全体に掘り下げ、主体部の搜索。
- 7月15日 曇のち雨 封土を全体に掘り下げ、主体部の搜索。
- 7月16日 晴 封土の中から、南北に走る粘土層を発見。（後に西側から粘土層を検出、よって以後東層とよぶ）
- 7月17日 晴 東層を検討。
- 7月18日 晴 南北東西両セクション壁の断面を実測。東層の検討継続。
- 7月19日 晴 南北断面を実測。粘土層のりんかくを出す。
- 7月20日 晴 東層の内部を清掃し、写真を撮影。
- 7月21日 晴 やぐらを組み写真撮影。キャンプ開始。
- 7月22日 曇のち雷雨 やぐらを東層の東側に移し、全体写真完了。
- 7月23日 晴のち雨 東層の清掃と実測。
- 7月24日 晴 粘土棺床の平面形のプラン実測終了。中央部から東側のみ、木棺底部の朱の追跡。
- 7月25日 晴 棺床の西半分を棺床の朱を頼りに追求。棺床と被覆粘土の落下状態を撮影。
- 7月26日 晴 棺床と被覆粘土落下状態の関係状況を図に書き入れ、清掃。遺物出土状態の全景、部分写真を撮影。
- 7月27日 晴 棺の両端部を残して西側の被覆粘土をはずした、両端の小口押さえ粘土の状態見通し図を作製。
- 7月28日 晴 棺部両端の部分を残して被覆粘土をはずした状態での遺物出土状態を撮影。遺物出土状態の実測。
- 7月29日 晴 遺物の実測、取り上げ。
- 7月31日 晴 遺物の取り上げ。主体の調査。
- 8月1日 晴 遺物の取り上げ。粘土層の調査。
- 8月2日 晴 新らたに西側に粘土層を検出、西層と名づける。プランの実測。

- 8月3日 晴のち雨 西櫛の被覆粘土陥没部を検出。
- 8月4日 晴 西櫛の棺床の追求。被覆粘土写真撮影。被覆粘土をはずし朱を検出。
- 8月5日 晴 西櫛の全体および部分写真撮影。棺床の平面および遺物出土状況の実測。
- 8月7日 晴 東櫛の排水溝の状態の写真を撮影。
- 8月8日 晴 東櫛の排水溝の平面の実測。小口押さえの粘土を、先端末尾とも半分に掘り割って追求。
- 8月9日 晴 西櫛の排水溝を出し、棺床粘土の清掃およびそのセクションの記入。
- 8月10日 曇のち雨 西櫛の棺床粘土の細部を実測。西櫛の排水溝の小礫の実測、東櫛の地山掘りこみ状況のプランおよびセクションを記入。
- 8月12日 曇 東西櫛の清掃、全体写真を撮影。
- 8月13日 晴 東櫛の排水溝中の積石状況の実測。西櫛の排水溝状況を撮影。
- 8月14日 晴 西櫛の排水溝の図を完成。西櫛の縦のセクションを図に記入。各種の図の細部を修正。
- 8月18日 晴 盛土を除去し写真撮影。
- 8月19日 晴 地山を掘り下げ写真撮影。実測の基準線をはる。
- 8月20日 晴 東西、南北両トレントの地山を掘り下げ、東西トレント、南側セクションを実測。
- 8月21日 晴 地山の追求。
- 8月22日 晴 トレントの実測図を完成、発掘調査終了。

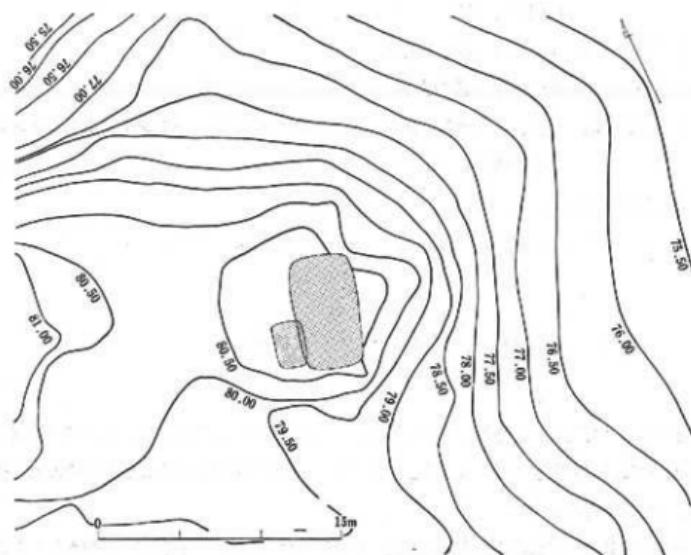
### 3. 外 部 構 造 (図版B1)

弁天山B2号墳、B3号墳、B4号墳は、前方部を北西位に向ける弁天山古墳（標高約90m）の後円部の尖端に延びる開折された丘陵上の支丘が長く台地上に延びたその上（標高約77m）にある。

**形態の規模** 当墳は丘陵上に数開折され叉状になった尾根の芯根部に築造されたものである。しかし墳丘は戦時中、松根の採集、または高射砲陣地構築用の土砂採集場となっ

て若干荒らされたということで墳丘を損じたかも知れないが、それまでに雨水等による土砂の流出によって変形されたことは、当丘陵の一部が山砂利層で構成されていることによって充分推察させる。例えば粘土棺床を埋めた墓坑の縁が地表面に露わされていくらか削平されていることによっても充分理解出来る。これらから、もとの墳丘の形態を求めるることは正確を期すことは出来ないが、一応実測図によって現状の墳丘形態を見てみよう。

墳丘は、丘陵の自然傾斜面に沿った上面に造られているので、傾面の上方からみれば、例えば標高80m線を通る台地をベースとしてわずか約1m突出しただけで、ほとんど墳丘らしい高さを備えていないことになるが、これを丘陵の下方からみた場合一応標高77.5m線が墳丘の基底部をなすように見える。すなわち斜面の下方からみた場合には比高が3.5mに達するように見える効果がある。このことからどちらを基準にするかによって墳丘の規模の計測結果も異なってくるのである。古墳の立地上の一般的な性格からいえば、これはあくまでも下から見上げるというもので標高77.5m線を古墳の基底とすべきである。ただ

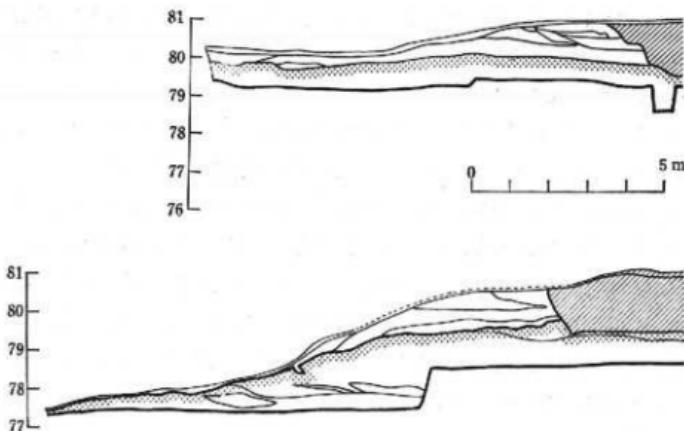


第1図 弁天山B 2号墳の外形と東西両側の墓坑実測図

しこれはあくまでも東斜面下方にとどめる範囲であり、西斜面上方にあっては、墳丘の上縁を通る標高80.5m線と、西側の丘陵斜面を通る標高80.5m線との間にその境界を求めるべきものだと考えられる。この境界を求めるためこの地区にトレンチを設定して調査したが、この部分の土砂が、流出しているので明確に決定することが出来なかった。かって古墳を実測して、その水平基準線をもって古墳の規模を決定しようとする傾向があることに對して注意を促したことがあるが、それは、当時の古墳の墳丘築造に際して一応見かけの水平を設定されたとしても、如何なる場合にも水準を決定された事実はないのであるから、実測図上に投影されるものではなく、あくまで見かけの計測が必要である。当古墳のように傾斜の水平距離が36mで5mの傾斜をもつ丘陵上にあっては、わざわざ、墳丘を築造するために丘陵を削平して平坦面を造成してから行なう必要はないのである。

以上の観点から墳丘は円墳に属す径約20m、高さ約3.5mの規模のものであると判定した。(第1図)

**墳丘の構造一断面** 弁天山B 2号墳の立地は、台地の又状の基根部に当っているので、特に東斜面では適当に地形を取り入れ、地山を削り整形しているようである。この点を検べるため、墳丘を東西、南北の方向にトレンチを設定し、切断した。まず東西トレンチの北側の断面第2図(上)についてみてみよう。墳丘のはば中央に東部の墓坑が墳頂から掘り込まれている。その墓坑の下底部をなす黄褐色含砂粒埴質土は、完全な地山である。この地山の層の上面を壇として上は盛土層で、その下は地山である。先に述べたように、墳丘の東麓では地山層を削取して整形している状態が知られる。また盛土について特に興味深く感じられたのは、墳頂の東縁端の盛土状態をみると、この地点から盛土を始め、その後、そのために出来た凹所に盛土した様子が知られる。なぜ墳頂の縁に特に盛土をしたのであろうか、ここで一応考えられることは、側面の下方から膨めた効果をまず驗めすためであったろうか、また南北断面を第2図(下)によってみてみよう。東西断面と同じように中央の墓坑の下底部をなす地山の黄褐色含砂粒埴質土を壇として上部に盛土を別けることが出来る。また、これらいずれも盛土の状態から墓坑は墳丘の築成過程に形成したのではなく、墳丘築造後に掘り込まれたものであることが知られた。(第2図)



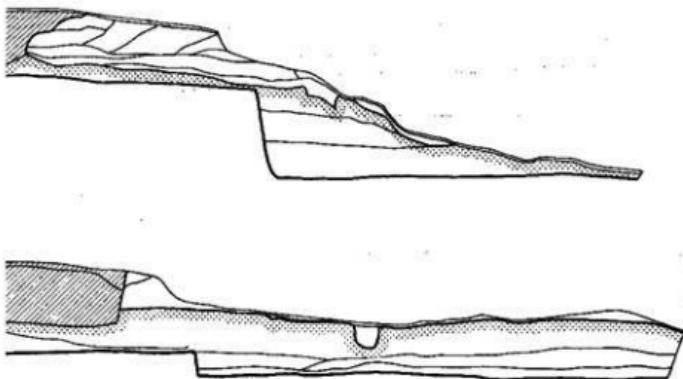
第2図 墓丘の断面（上は東西、

#### 4. 内部構造（図版B 2～B 9）

主体部は粘土塚に属するもので二基ある。それを東塚、西塚と名付ける、東西両塚ともに、北東位約10度の方向をとっている。まず、東塚からべてみよう。

##### 東塚（第3図）

**墓坑** 主体部の粘土塚を埋葬するために造られたのが墓坑である。一般的には、この墓坑の上縁の上部に封土がのっているものだが、封土の上部は若干流失しているので表土直上に検出された。この墓坑は円墳のほぼ中央部に墳頂から掘り込まれ、坑底は地山に接してそのほとんどが盛土中に穿たれている。坑底はわずかながら北側が高く傾斜をもって造られている。墓坑は上段と下段にわかれる形態に属すもので、その規模は上段の上縁の長さ6.78m、巾3.4m、高さ0.7m、下段の上縁の長さ6.2m、巾1.8m、墓坑の基底部は長さ6.65m、巾約1.4mで墓坑全体の深さは約1.5mである。すなわち、二段になった台型の坑が穿たれたのである。このように造られた坑底に、中央より少し西よりに長さ約6m、巾約0.7mのU字形の凹みをこしらえ、さらに南端に深さ約0.4m、巾約0.6mの暗渠にするための穴を穿っている。以上のように木棺を安置するための基礎が墓坑を掘り下げるとき恐らく同時になされたものと考えられるのである。

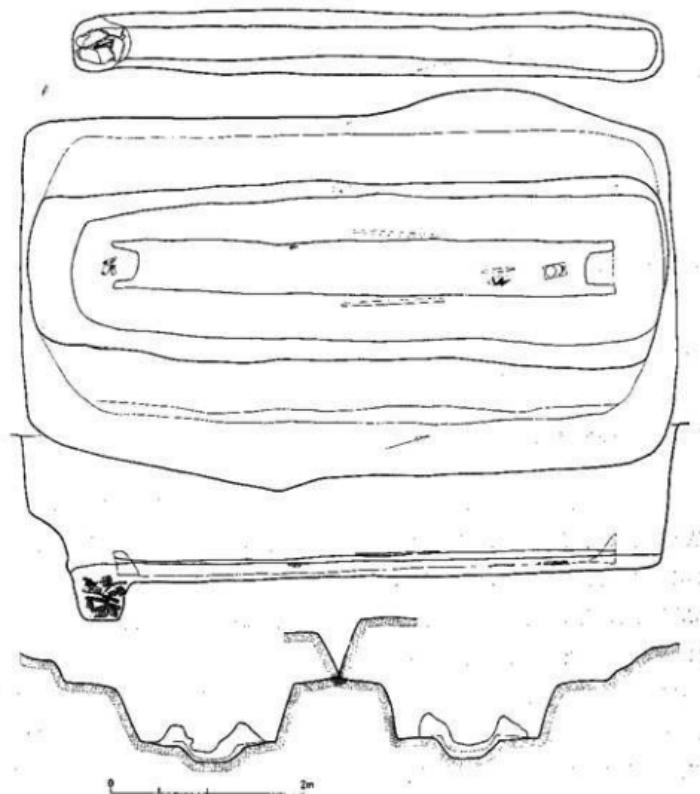


(下は南北トレンチの断面)

**粘土櫛** 墓坑を掘り込んだ際、平坦な地山の坑底に木棺を安置出来るようにU字形に坑底の長辺に平行して、窪められている。この際、木棺の長さよりも充分余裕をもたせている。木棺を安置する前にこのように、掘り窪めた坑底に黄褐色粘土を敷きつめ棺床として木棺をその上に安置している。木棺は、すでに消失してそのあとをとどめないが、粘土に残った圧痕によって知ることが出来る。

それによると、木棺の長さは約5.1m、直径約0.6mのもので北側がやや太いものであることが判明した。その際、この粘土棺床上にペニガラを塗抹していた。また、木棺の両側、粘土棺床面の平坦面に鉄刀が副葬されていた。このように、木棺の下半部は粘土棺床に安置されているので、粘土に取りまかれた状態になっているが、上半部はおそらく、木棺むき出しのままであったろうと推察される。次の段階にこの木棺の上半部を、厚さ約10cmの被覆粘土で取り巻くのである。すなわち、このように、粘土櫛は、粘土棺床と被覆粘土によって構成されているのである。

ともに被覆粘土は内部に陥没した状態になる。発掘は、このことを想定して推進し、これをはっきり証明した。例えば、和泉黄金塚古墳中央部において、粘土櫛の断面図を作るため切断したとき、棚状のものがあるて、そこから鉄刀等を多量に検出したこと<sup>④</sup>が報告に述べられている。それはあくまで棚状という施設でなく、粘土棺床側に出来た平



第3図 東櫛構造と遺物配置の実測図

壇面上であって、正確に調査しなかった結果であろう。

木棺の両端は、ほぼ垂直の厚い板でささえていたようで、その外側から粘土を厚く入れておさえたような状態であった。

また排水溝はめくら暗渠であって、その孔によく前期古墳の石室に利用されている、板状節理をもつ石英粒面岩、緑泥片岩等が、投入されていた。興味を引いたことは、この暗渠は墓坑底部全面に対して造られたのではなく、木棺の両端が丁度、この暗渠の上にくるようにして、しかもこの上面を一切被覆粘土でとり巻くという、すなわち、粘土襍の構造

の中に、粘土棺内のみの排水設備を組込んだものを造ったのである。この排水溝の上面に鐵斧、鎌等の工具類が副葬されていた。

遺物の出土状態（図版B 9(1)）

**棺内遺物** 粘土棺床の北側に漆塗鏡（図版B 9(2)）が、その内部に鏡二面と石劍一個が収納された状態で遺存していた。また、そのすぐ北側30m離れた位置に鐵劍一口が切先を南にむけ、その横に用途不明の漆塗りのものがあった。またこれより、約2m北側粘土棺床の西側面に刀子一本が密着していた。

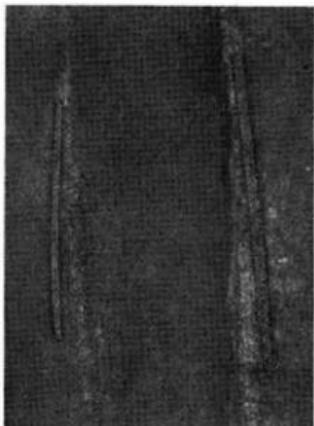
**棺外遺物** 粘土棺床の肩部にあたる平坦面のほぼ中央位に木棺にそわし、刃部を内に向け切先は北をさす方向に鐵刀（第4図）が、副葬されていた。しかし、東側の方は西側に較べて、大振のものである。棺の南端で嚴密な意味からいえば、棺外遺物になる、被覆粘土によって、完全に覆われた暗槻の上から、鐵斧2個、鎌、鉈等が検出された。これは木棺の埋葬にも必要な器具の類であったかも知れない。

西槻（図版B 7・8）（第5図）

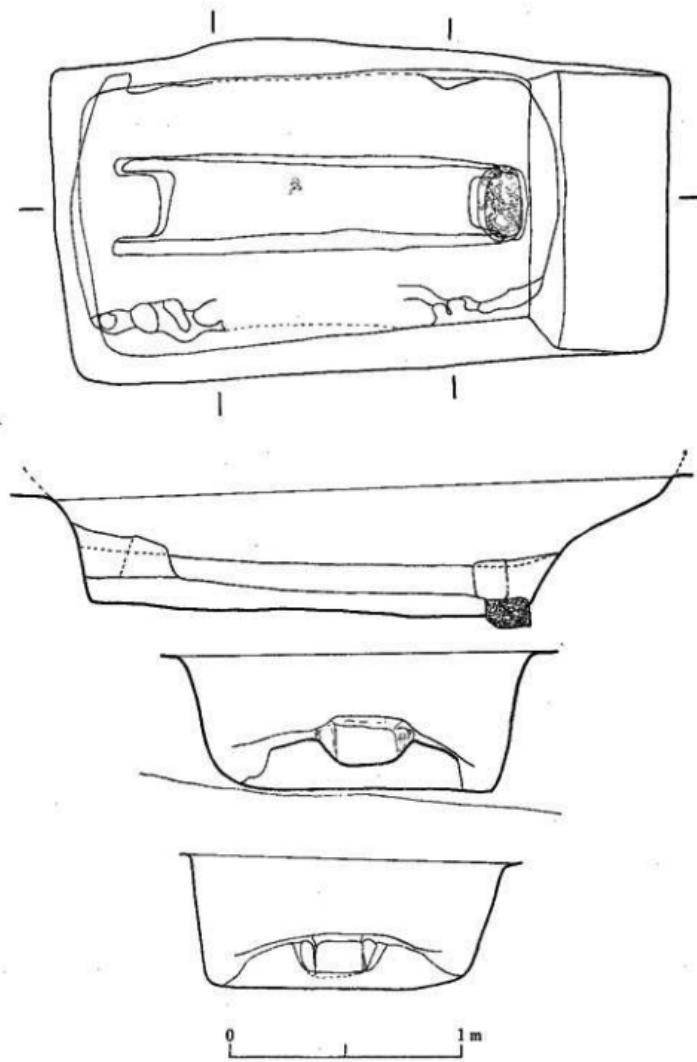
西槻は東槻の西側にあって、規模は小さくその半分にも達しない。

**墓坑** 墓坑の上縁の長さは約2.65m、巾約1.4m、坑底の長さは約1.88m、巾約1.16m、深さ約0.6mで段のない台型をさかさまにした形態である。坑底は平坦であるが、南側は、暗槻のために、長さ約32cm、巾約17cm、深さ約12cmの孔を穿っている。坑底の傾斜は1.88mに対して約10cm北側の方が高くなっている。

**粘土槻** 墓坑の底部に、良質の青白色粘土を厚さ約10cmでぎっしりと敷きつめ棺床としていた。木棺は遺存しないが木口板でおさえていた状態が赤色顔料の塗抹によってよくしられた。規模は、全長約1.7m、その内側は約1.2m、北端での巾約40cm、南端では巾約35cmである。この被覆粘土は良質でカマボコ状に中央にふくらみをもたせたもので、坑内一ぱいに拡げて被覆している。この被覆粘土が坑壁と接する西側において、人の足痕



第4図 棺床肩部出土の鐵刀



第5図 西郷構造と造物配置の実測図

状のものが被覆粘土上面に遺存していた。その大きさをはっきりと判明出来るのは數ある中で一つぐらいで、約22cmあった。このような小さい墓坑の中で被覆粘土を墓坑一杯に敷きつめるのであるから、当然、土を踏まずに墓坑から脱出することは出来ない。木棺を被覆するためには、よく水分を加えねたものであるから足型が残っても不思議なことはない。検出出来ないのがむしろ不思議な程である。排水溝を東櫛と同様に木棺の北端の下底に造り、小石をぎっしりと詰め、その上部を被覆粘土で全体を覆い粘土櫛の構造に組み込んでいた。

#### 遺物出土状態

粘土棺床のほぼ中央において縁  
泥石製の勾玉と碧玉製の管玉2  
個、そのうち1個は欠損したも  
のを副葬していた。その状態か  
ら紐に通して、頸にかけさせて  
いたのであろう。（第6図）

東櫛と西櫛との関係 東櫛  
と西櫛との関係は第7図に示す

ように、その墓坑が互に重なり

あった状態で検出した。これをみると、西櫛が造られた後に東櫛が造られたことが、東櫛の縁辺が西櫛の内に入りこんでいることによって知ることが出来る。しかし、西櫛の大きさを比較すれば数倍の差があり、しかも西櫛の木棺の内側が約1.2mのもので、たとえ被葬者が女であったとしても成人遺体を埋葬することは恐らく不可能であったろう。むしろ、東櫛の被葬者の子供であったのではなかろうか。この円墳の規模及び、先に埋葬された筈の西櫛が、墳丘の中心から西側にかたよって埋葬され、さらに中心に埋葬すべきものを充分予想して設置されていることによっても考えられるであろう。



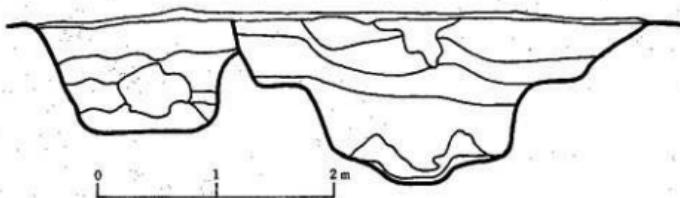
第6図 玉類出土状態

## 5. 遺物各説 (図版B10・11)

#### 漆塗鏡

粘土棺床で検出したとき原体はすでになく、單に漆の被膜のみを遺存していたが、鏡2

面、石鉗 1 個を収納する蓋であると判明した。蓋は長辺約 22cm、短辺約 11cm で、1 対 2 の比率になっている。また深さは蓋が斜めに押されてへしゃがった状態であったので、約 4cm あると判定出来た。遺存の漆は、細長い節片状になって剥離するので、竹で籠んだものに漆を塗ったものであると判断された。しかし、これは蓋の側面であり、この蓋については、ただちに判定は出来ないが、同じ棺床上に検出した鉄劍の横に漆まくが遺存していた。この漆の状態から皮状のものに刺繡して漆を塗ったものであるらしく、材質が異っているので一考を要する。しかし底部の場合は、鏡を除去したときその下からほとんど風化してばらばらになった、薄い「へぎ状」の桧の板に漆を塗ったものを検出した。底部は側面と異った材質を用いて底板とすることは充分考えられるのである。これらから、もとでは、立派な宝物を入れるにふさわしい蓋であったことが推察されるのである。

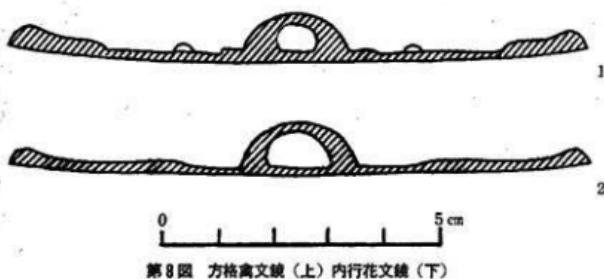


第 1 図 東西南北の断面

#### 方格禽文鏡

この方格禽文鏡は棺中におさめられていた漆塗蓋の中に収納されていた 2 面の鏡のうちの完形のもので、鏡背に一部縁背を生じているが黒灰色の光沢のある良質の白銅製の舶載鏡で直径 10.2cm ある。鏡面は凸状を呈し、鏡背は平縁とよばれるもので縁辺の断面形がカマボコ状をなす素文でまわし、次に複線波文帯、一線をはさんで櫛齒文帯があり、そこから一段下って縁から内区になり、櫛齒文帯になっている。内区の主要文帯は、方格の一辺にそれぞれ外に向かいあって、二禽ずつを配し合計八禽を画いている。この禽文帯の禽の間に雲状のものを配して、飛禽の状態を示したもののが相い隣りに四禽ある。方格の各辺ごとに禽の間に「一」状のものがある。恐らくは、「T」型のあとをとどめるものであろう。紐座は円窓で、方格は二線にてめぐらされ、その紐座から方格の角にむかって対角線が放射状につながっている。さらに、その方格の角の尖端部に八個の乳が配されている。鏡の表面の摩滅は著しいものではないが、とくに外縁及び鏡背の角が摩滅しているのが目

立つようである。時期は、後漢末に属するものと推考される。(第8図1)



第8図 方格禽文鏡（上）内行花文鏡（下）

#### 内行花文鏡

方格禽文鏡と塗装度の中に納められていた一面で、破損はなはだしい。質は分析の結果をみなければ明確でないが、鏡の具合で青銅質の質のあまりよくない偽製鏡とみられる。鏡の直径は9.8cmである。鏡面は凸状で鏡背は平線、縁辺はカマボコ状の素文である。次に梯齒文帶がめぐり、その内にごくわずかであるが、一段下って内区となり梯齒文帶となる。この梯齒文帶の中央に一線がありあたかも、梯齒文帶が二重にめぐらされているようにみえる。主要文帶は鏡上りのわるい上に手づれしているようにみられるので明確でないが、内行花文鏡と推定される。紐座は円錐で、紐のひも通し孔は大きく、しかもいくらくかその一方が大きく、片側に寄せられているようである。これは紐につけたひもを片側によせ、持ちやすくしたためであろう。これを示すものとして紐孔の片方がよく摩耗しているようである。この点さきの方格禽文鏡も同様である。このようないわゆる小形の懷中鏡と大形の台にすえて使用する鏡との摩耗の位置の差は当然現われる筈である。(第8図2)

#### 碧玉製鏡一個

塗装筐の中に鏡二面と一緒に収納されていた。塗装筐にはいったまま検出したときは、鏡と並べられ、その半分が鏡の下になっていたので、完形品であるかのようにみられたが、欠損品であった。これは、きわめてきめの細かい淡緑色の碧玉製で、表面はよく磨かれ、光沢を持っている。外側の上半分に放射状の幅の広い溝を(復原してみた状態では)24条ほどこし、下半部はくりがあり、その中央に細い溝を一条配した形式に属する。外径7.6cm、内径5.95cm、高さ1.4cmである。(第9図)

### 鉄剣 一口

粘土棺床上に剣身を南側にむけ、あたかも被葬者の頭上または、頭上にかざすような位置にあった。全体に木質部がわずかに遺存していて、装着されていたことが判定出来る。全長34.7cmで、そのうち剣の刃部の長さは26cm、巾は鉢の端部で2.6cm、茎とのさかいで3.4cm、厚さ刃部の中央で0.7cm、鉢は丸みをもたず直線的でいかにもシャープな感じである。茎は刃部の基部で2.5cm、その端で1.4cmである。目釘穴は不明である。(第10図1)

### 鉄刀 二口

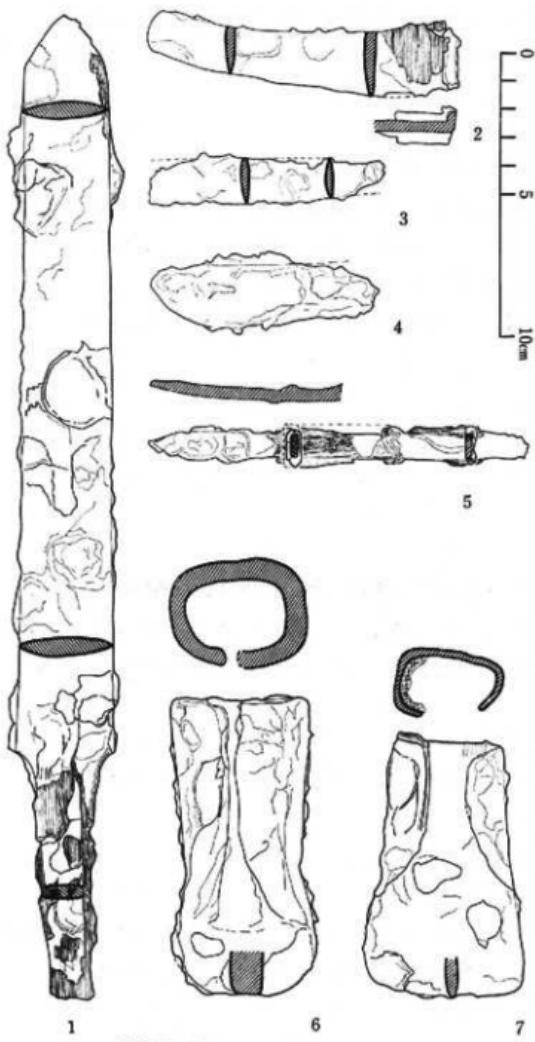
粘土棺床の両側に、すなわち東側に大振(2)、西側に小振(1)の鉄刀二口が刃先を南に向けて埋められていた。両刀ともわずかに木質部が遺存していた。刀の形式は大小の差がある、いずれも刃部が内ぞりで、茎部につながる部分が更に内側にまがり内湾刀的なものであるが、むしろ直刀に属するものであろう。各部における計測表を掲げておく。(第11図)

第1表 井天山3号墳刀計測表(cm)

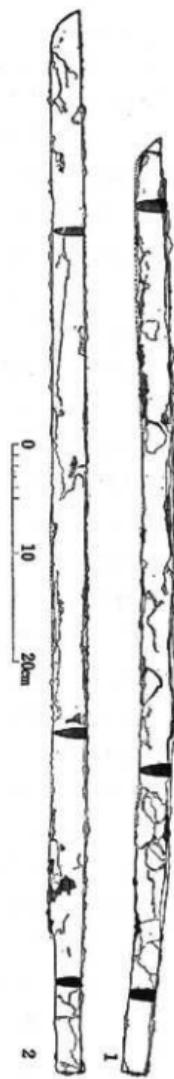
	全長	刀身長	身幅		背厚	茎長	茎幅	反幅
			切先	刃部				
1	85.9	69.0	2.5	3.0	0.7	16.9	2.5	0.5
2	98	84.3	2.6	3.4	0.9	13.7	2.2	0.6

### 鉄斧 1個

粘土棺床の南端、すなわち木棺の外端で暗渠上にある位置に、他の工具類と共にあつ



第10図 鉄剣・刀子・鉄斧・鎌・鎧・実測図



第11図 鉄刀実測図

た。この鉄斧の形態には2種類あって、その1つは、第10図6のような重厚な感じのするもので、全長19.5cm、柄の挿入部の長さ約7cmあって刃部の長さ3.5cmで、比率とすれば刃部の短いものに属すようである。刃部の巾は5cm、厚さ1.0cm、相当の打撃をもって使用しても耐えうるようなものである。(第10図)

#### 扁平鉄斧 1個

鉄斧類と併出した。第10図7に示すように全長10.7cm、刃部の長さ8.6cm、柄の装着部2.3cm、その先端の折返しが0.7cm、刃部の巾は先端で1.5cm、基部で2.4cmである。形としては、刃は外湾する珍らしい形式のもので、刃の内湾しているものと較べて機能的に当然その差があるわけで、それが用途別に如何に使いわけられたか興味ある問題である。柄の装着部に木質がよく遺存していた。木質は緻密の堅質のもので櫻類に属するものとみられる。(第10図)

#### 鉄刀子 1本

粘土棺床の上面で検出した。錆化によって形態は明確でないけれど、全長8.1cm、刃部5.5cm、巾1.4cmある。刃は錆化しているけれども相当するどかったことは、現状からも推察出来る。(第10図3)

#### 鉄鎌 2本

鉄斧、鉄刀子類等と併出したもので第10図5に示すように、ほぼ完全で、全長13.3cm、刃部は4cm、巾0.9cm、刃部はごくわずかに表へそっている程度である。茎の長さ9.3cm、巾0.8cm、厚さ0.4cmで断面は長方形をなしている。なお断片的ではあるが、木質部が茎に遺存していた。

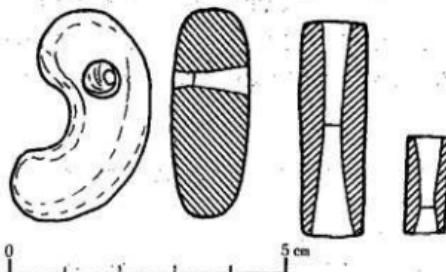
第10図4に示すように、扁平な大形に属すもので恐らく茎が欠損して刃部のみ遺存したもので全長の推定はこれからは無理である。刃部の長さ8cm、巾最大値で2.3cm、厚さ0.3cmのものである。(第10図)

#### 西都綠泥石製勾玉 1個

白地に緑色の斑点のある美しい綠泥石製のものである。これは一見、姫川産の硬玉製のものと酷似するが、花崗岩などに脈状をなして狹まっているものである。形態は比較的とのったもので長さ3.8cm、頭部での厚さ1.2cm、胴部1.3cm、尾部1.1cmで調ぶくれのものである。穿孔は一面から行なわれている。(第12図)

#### 碧玉製管玉 2個

比較的大形のものと、小形のものとである。大形のものは長さ約3.8cm、両端では径約10cm、中央部での径約1.1cmの中太のものである。これは製作途上、技術的に未熟の時に生じる現象である。表面はざらつきのある褐色がかった淡緑色の碧玉製である。また小形のものは長さ約1.65cm、径約0.75cmの表面は滑沢のある草色の碧玉製である。これは出土したときから、一部欠失していた。使用途上破損したものであろう。これら両管玉は両端から穿孔をおこなっている。(第12図)



第12図 勾玉管玉実測図(実大)

## 6. 結 語

弁天山B2号墳の調査によって墳丘、粘土櫛や遺物上に新しい知見を加えることが出来た。いまこれを簡単にまとめて結語にかえる。

○墳丘は地形をたくみに利用して、墳麓では削取、墳頂に盛土をしていることが墳丘の断面から明確にとらえることが出来た。

○粘土櫛の構造は櫛床と被覆粘土とに分離することが出来た。そして埋葬過程として、櫛床の肩部にできた平坦面、すなわち木棺の両側に遺物を副葬することが判った。

○粘土櫛の構造体の中に暗渠排水設備を組んでいた。

○被覆粘土の表面に人の比較的小型の足型が残っていた。もし子供でなければ女性であったのだろう。

○東西両櫛の粘土櫛の埋葬時の前後関係は墓坑の切り込み合いの状態によって西櫛の方が古いものであると判別した。しかしその古く埋葬された西櫛は、墳丘の中央部からずらした位置にあり、しかもその規模の差からも、当初、墳丘の築造は東櫛の被葬者のために用意されたのであろう。

○東櫛の粘土櫛床上で我が初めての鏡と石鉈を入れた漆塗盃を検出した。

○漆塗度の内から後漢末と推定される方格飛雲禽文鏡と彷彿鏡とを検出した。

最後に弁天山B 2号墳の築造年代は鏡や石鏡、鉄製品等の形式、主体部の構造からいえ  
ば、前期古墳に属するものであり、4世紀末に比定されるべきものであろう。

#### 註

①海原木治「浜津萬葉山古墳」（『日本古文化研究報告』4）

②堅田直「池田市茶臼山古墳の研究」（『大阪古文化研究会学報』第1輯）

③小林行雄「茨木市守軍山古墳調査概報」日本考古学協会総会発表要旨

昭和39年夏土地造成のため破壊されるに先だち、茨木市教委によって主墳の石室を北側の丘陵上に  
移築された。

④名神高速道路建設工事にともない前方部の実測調査が行なわれた。

⑤日誌の整理は帝塚山大学奈良とし子達の手をわざらわした。

⑥元地主の談による。

⑦堅田直「池田市茶臼山古墳の研究」（『大阪古文化研究会学報』第1輯）

⑧島田義等「和泉貴金塚古墳」（『日本考古学報告』第5冊）

⑨ここに使用された石英粗面岩は北摂山地特に猪名川の上流多田銀山をもって有名な多田に産すもの  
であるが、碌泥片岩は和歌山県紀の川流域に産すものでこの付近では産出しないので移入されたもの  
であると考えられる。弁天山C 1号墳の主体部は石英粗面岩、碌泥片岩等の石材を用い石室を築  
造しているが、その上半部が古い時代に完全に破壊され石室底盤が遺存するのみであるが、案外そ  
の石材が搬出利爪されたのかも知れない。B 2号墳の築造年代からみても一応考えられないことも  
ない。

⑩坑底全体の排水をするならば坑底に排水溝が造られねばならないが、当墳では木棺内にたまる水の  
みを排水することにされたから、「吸込み式」で充分こと足りたのである。

⑪柔い土及び粘土等に踏み重ねられて残された足跡等はいかに多数あっても最後に足を抜去したもの  
のみが他と較べて明確に出来る程度である。

⑫小清水卓二博士に鑑定をお願いしたところ保存状態の関係から検鏡による同定は不可能であるけれ  
ど、木目等の感じからみれば松であると考えられるということである。

⑬小林行雄博士の御教示による。

⑭小清水卓二博士によると妙らしいということである。

⑮辻山次郎博士の鑑定による。

弁天山B3号墳

堅田直



## 1. 古墳の位置

弁天山B 3号墳は、高槻市岡本35番地にある。

当墳は先述した弁天山B 2号墳、旧4号墳と同じ洪積丘陵の文丘上の尾根にあって、B 2号墳の東方約80m、標高約67mの、丘陵の東縁部に近い眺望のよい位置に尾根に添つて前方部を東に向いている。(第18図)

## 2. 調査の経過

弁天山B 3号墳は、調査以前は単なる円墳として考えられてきたが、調査中にこのB 3号墳の東側約24mの位置に、粘土層の存在することが判明、これを別の古墳とし、両墳の関係を検討した結果、これらは別個のものでなく、前方後円墳の形態をとるものであることが判った。その結果、この古墳はB 3号墳に吸収統合した。したがって調査班は次の如く後円部と前方部との二班編成した。

発掘担当者 堅田 直

### 後円部調査

調査員 吉本亮俊

補助員 小南一郎、近藤秀一、近森佐太郎、牧野、井上、石田、丸山亮平

参加者 畠敏夫、山野、広畑、田中則夫

### 前方部調査

調査員 白石太一郎

補助員 高木宗次郎、新居教造

参加者 村上利孝、花岡巖、伊藤晃

発掘調査は、昭和38年7月12日から8月27日まで行なった。以下後円部と前方部とにわけ、調査日誌を抄録してみよう。

### 後円部の調査

7月12日 晴 B 3号墳の地形測量。

7月13日 晴 引き続き地形測量。

- 7月14日 晴 引き続き地形測量、4mの間隔で4区設定する、発掘を開始。
- 7月15日 曇のち雨 発掘継続。
- 7月16日 晴 発掘継続。
- 7月17日 晴 土手の幅をせばめ、1、2区の境界線を確認。粘土構の追求。
- 7月18日 晴 中心の墓坑の確認、粘土構の追求、二重の掘り方の追求。
- 7月19日 晴 粘土構の追求、掘り方の追求、掘り方内の掘り下げ、不明粘土質遺構の追求。
- 7月20日 晴 掘り方内の掘り下げ、外側掘り方線と内側掘り方を追求、粘土構の追求。
- 7月21日 晴 清掃、構上の排土、撮影、簡単な平面図の作成。
- 7月22日 曇のち雨 掘り方を完全に出し清掃、撮影。
- 7月23日 晴 外側の掘り方の追求。
- 7月24日 晴 平面図作成。
- 7月25日 晴 1、2号の縦断面1、横断面図の3を作成、内部の掘り下げとおちこみ粘土排除。
- 7月26日 晴 引き続き構内のおちこみ粘土排除、写真撮影、遺物は短剣一振と鉄片が出土。
- 7月27日 晴 清掃、撮影、朱の痕跡をたよりに粘土を排除、漆を伴った木質が出土。
- 7月28日 晴 粘土床上の粘土を排除、鉄、刀、剣、斧、漆片が出土。
- 7月29日 晴 清掃、撮影。
- 7月31日 晴 平面図作成。
- 8月1日 晴 引き続き平面図の作成、遺物の取り上げを行なう。
- 8月2日 晴 外側の掘り方の追求。
- 8月3日 曇のち雨 石膏を流しこみとり上げた。石膏の為、汚れた構内を清掃。
- 8月4日 晴 東西の外側の掘り方の追求、撮影。
- 8月5日 晴 西構の南端部を実測、棺端を石膏型にとった。
- 8月7日 晴 粘土の排除。
- 8月8日 晴 清掃、撮影、断面図の実測。
- 8月9日 雨 清掃、撮影、台風の為中止。
- 8月10日 晴 清掃、撮影、粘土床下の土層上面の平面図、断面図作成。

- 8月12日 晴 清掃、撮影、柱端の石膏型をとる、断面の土層を調査。
- 8月13日 晴 東部の粘土床下の上層の掘り下げ、東西トレンチ断面図完成。
- 8月14日 晴 東部の掘り下げ、撮影。
- 8月15日 晴 西部の東側の被覆粘土の平面図、断面図を作成。
- 8月16日 晴 清掃、撮影、残りの粘土、土手上の粘土をはずす、断面図続行。
- 8月18日 晴 東部3mの土手をはずし西部の東側の図作成。
- 8月19日 晴 西部の粘土を排除、撮影。
- 8月20日 晴 清掃、撮影、3m断面図完成。
- 8月22日 晴 4m断面図完成（東西）3～4m間のセクション図完成 3～4m間の突出部の排土。
- 8月23日 晴 3m断面（東西）図に着手。
- 8月24日 晴 3m断面図完成。
- 8月25日 晴のち雨 平面図（回み）断面図（南北西向き、中心線）完成。
- 8月26日 晴 中央トレンチ（東西）の中央部の断面図作成。
- 8月27日 晴 中央トレンチ（南北）断面図完成、本日で作業終了。
- 前方部の調査**
- 8月14日 晴 B3号墳前方部調査開始、主体部探査、坑を検出、土坑内排土、粘土様検出露呈。
- 8月18日 晴 坑内排土作業続行、鍬、土器小片検出、撮影実測、主体部と平行をなす施設の坑検出、坑内掘り下げ。
- 8月19日 晴 西部坑の掘り下げ、構造のおよその規模確認、鍬先、鎌、鉋、刀子、不明鉄器出土、清掃、撮影。
- 8月20日 晴 東部発掘、被覆粘土をはぐ、割竹型木棺であること確認、ガラス小玉、管玉出土、遺物実測撮影。
- 8月21日 晴 東西両部粘土床掘り下げ、撮影実測。
- 8月22日 晴 墳丘周辺補足測量、トレンチ2本を入れ前方後円墳の可能性追求。
- 8月23日 晴 東西両部土坑の写真撮影、墳丘を切断するトレンチを入れる。周辺部踏トレンチ断面図作成。
- 8月24日 晴 墳丘断面図完成、東側地山企面露呈、図上にて前方後円墳の可能性を追

求、前方部調査終了。

### 3. 外 部 構 造 (図版B12)

**形態の規模** 弁天山B3号墳は、はじめ円墳であると考えていたが、実測等によつて、墳丘の一部が東側に続くことがわかり、さらに、その先端部に粘土構のあることが確認された。(第14図) このことから前方後円墳ではないかという疑問が生じた。

ところが当丘陵は、弁天山B2号墳、旧4号墳において見られたように、その地質の性質上、封土の流出が大で、墳形も著しく変化していることが当然予測されるのであるが、現状においては、とうてい墳形を描き出すことが不可能のように思われた。

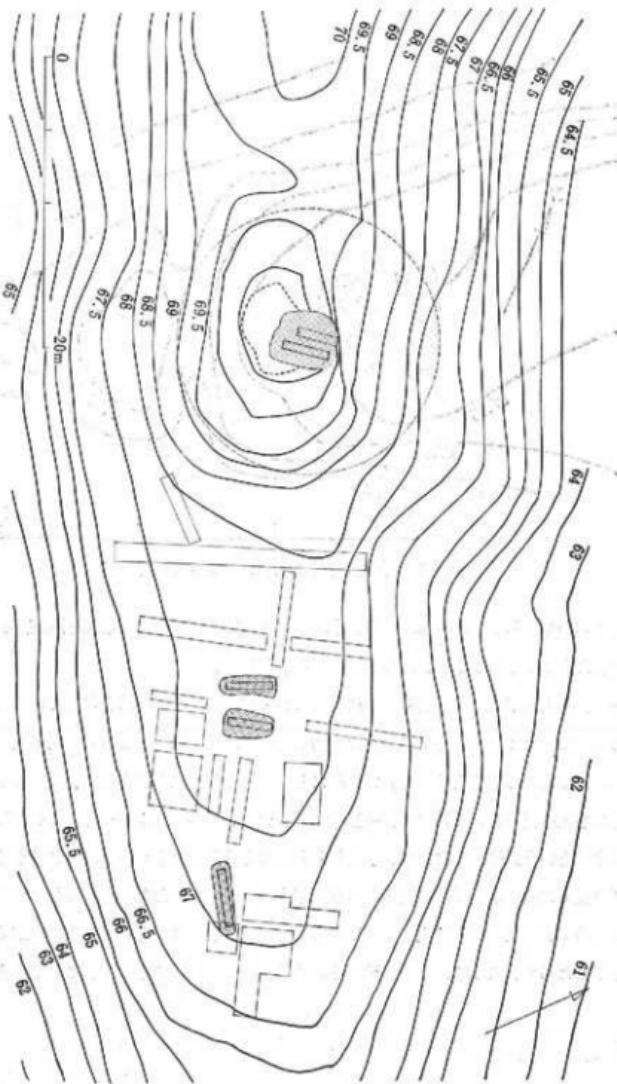
しかし、このような地形的なことや、前方部における粘土構、封土の高さをも復元して形態を推定すると、どうしても前方後円墳にならざるをえないということになった。

だが、これを、明確に、形態の一部でも検出する必要がある、そこで前方部の端と推定する位置にトレンチを穿ち、前方部端を探すこととした。その結果、予測どおり前方部端のくびれた部分及びその角は流失せず、むしろ土砂が堆積して遺存することが判明した。さて、この前方部端は、地山を削り取り、ほぼ直線的に画していたが、施設はなかった。これを実測図に示したのが第14図である。(第14図)

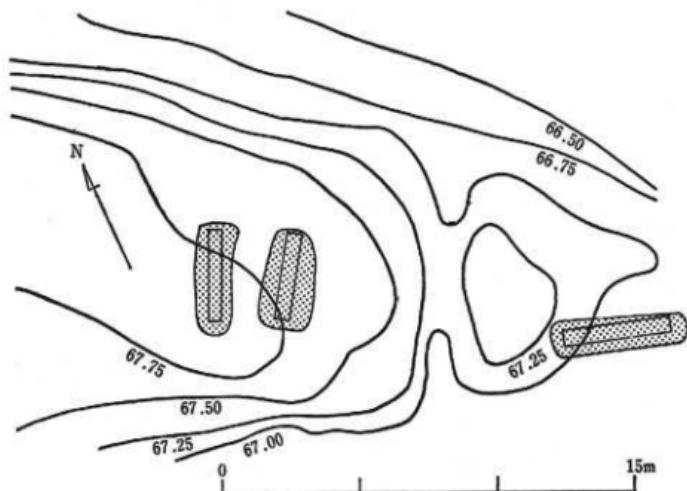
また、このような丘陵の尾根にある流失しやすい土砂で出来た古墳では、丘陵の両側の方が土砂の流出が著しいから、現状では後円部の円形部も主軸の両側が削られて細長く梢円形になる、しかし、主軸の線上にある墳丘の底辺部はよく遺存しているので、もとの後円部の範囲を充分に推定することが出来た。このようにして得た当墳の規模は、直径約18m、全長約41m、前方部端での巾約11mである。なお高さについては、弁天山B2号墳についてみたように、前期古墳は地形をたくみに取り入れ築造されているので、盛土の厚さだけをもってその高さを決めるべきではなく、古墳の範囲がどれだけかという点からみるべきである。このようにみれば、当墳の基底部は、後円部では標高約69m、前方部では標高約67.5mを結ぶ線上にある。(これは全長に対して約15mの傾斜をもつためである)

**墳丘の構造断面** 墳丘の構造についてわずかに触れたが、いまこれを墳丘の断面から見てみよう。

まず後円部、第15図は東西トレンチ北壁の断面図である。墳丘の基底をなす地山はその



第13図 弁天山B 3号墳実測図



第14図 弁天山B3号墳前方部端発掘後実測図

両端において、わずか約10cm低く、平坦になっている。この程度なら削りとったものか、また自然地形のままか、どちらとも判定しかねる。

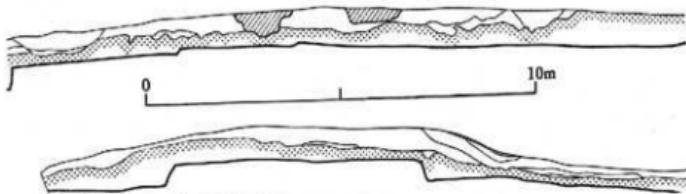
一方、盛土直下の地山は黄褐色の粘質土であって、著しく凹凸状をなしている。地山そのものがこのような状態を呈するのは、雨水等の自然的原因よりむしろ理由不明の人為的原因に依るものだと考えられる。いずれにしても墳丘築造過程にあって、地山の自然面の上部に盛土を重ねたのではなく、一旦地山面を何らかの形で整えるべく、それは決して平坦にするという意味ではないが、手を加えたのであろう。もし推定が許されるならば、例えば墳丘築造前の地表面には何らかの形で草木類が覆っていたんだろう。これに直接盛土されたならば、当然地山と盛土との間に何らかの物質、または部分的にわずかながら隙間が遺存するだろう、ここではその痕跡すら認められなかった。すなわち、これは盛土する前



第15図 弁天山B3号墳後円部断面図

に除草抜木された結果地表に凹凸が出来、その状態が残ったものとみなされるのである。なお地山は墳丘の両端において西側は東側よりも約1m高く傾斜して、すなわち前方後円墳の主軸に添って傾斜しているのである。したがつ墳丘の形態も傾斜にそってみられるることは前項に述べた。盛土は、中心部で厚さ約1.5mある。

次いで前方部、第16図前方部の断面図である下図上は南北トレンチ西壁の断面で、盛土



第18図 卍天山B-3号墳前方部断面（上）南北トレンチ（下）東西トレンチ

は約60m、櫛の墓抗は地山まで達しているが櫛の墓抗は盛土中に當まれている。地山面は後円部と同様に凹凸が著しい。下図は前方部の主軸線に添った東西トレンチ北壁の断面図であり、トレンチの東側（図では右）は前方部端の状態をよく示している。これに較べ西側はなだらかに傾斜して後円部に接続しているのである。

## 4. 内部構造

主体部は後円部に二基の粘土櫛と前方部に同じく二基の粘土櫛の埋葬施設があった。いまこれを後円部の内部構造から見てみよう。

**後円部** 後円部のほぼ中央に北東位の方向をとる粘土櫛を二基、部分的に、あい重なる状態で検出した。いまこれを、東側にあるものを京櫛、西側にあるものを西櫛とよぶことにする。(図版B17) この東西両櫛は同時に埋葬されたものではなく、第17図の粘土櫛の横断面図に示すよう、両櫛の重なりから見れば西櫛の方が東櫛よりも先行することが明白であろう。

### 後円部西櫛

**墓坑** 頂部が著しく流失して、粘土櫛自身がほとんど露出寸前まで墳頂部が削られているので、墓坑も確かにところは、その底部だけで現在ではその上縁部を知ることは出来ない。坑底部での規模は、長辺約5.1m、巾約4.3mの隅丸の不整形な長方形で、坑底は平坦である。(図版B17) 部分的に東櫛と重なっている。

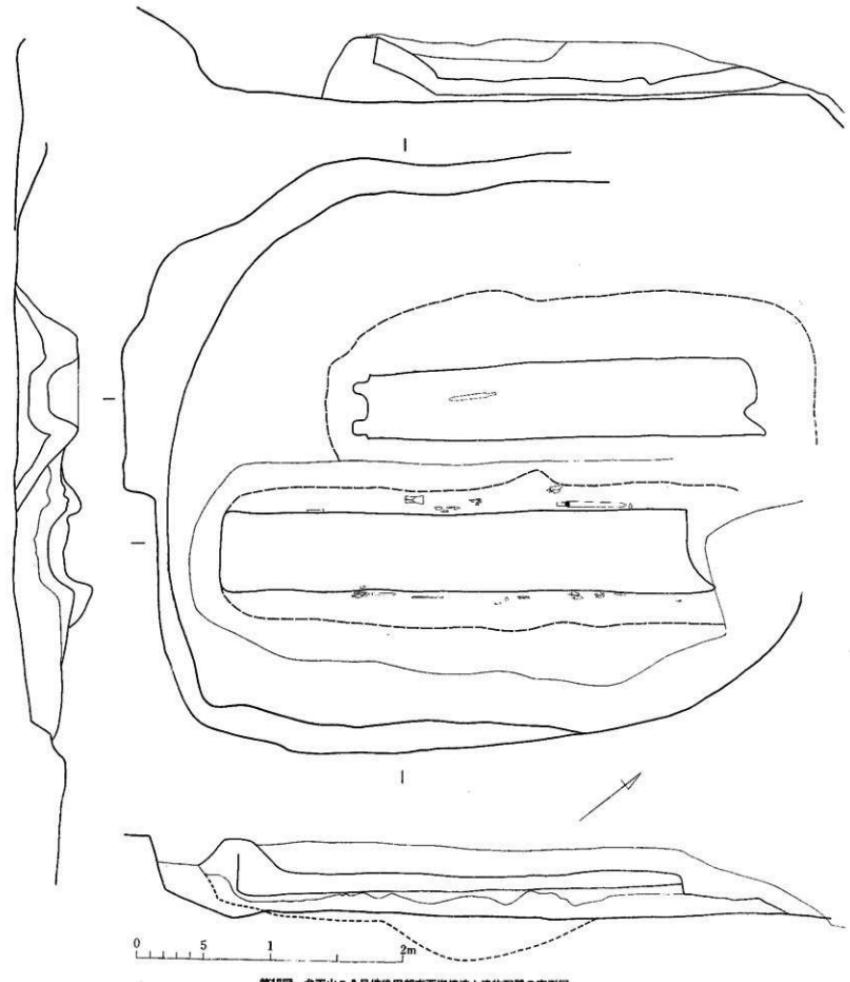
**粘土櫛** 平坦な坑底に厚さ約15cmの精良な青白色粘土をもってその肩部を円くかまぼこ状にふくらませた巾約1.3m、長さ(遺存部分)約3.0mの規模で、中央がU字形に凹んだ粘土棺床を設置、その上に木棺を安置し、その上面を厚さ約10cmの被覆粘土をもって覆ったものである。

**木棺** すでに消失しているが、粘土棺床上にその跡をよくとどめ、形態を知ることが出来る。(図版B14(2)) その北端は失しているが、その規模をみると、遺存する全長約3.3m北端部での巾が約0.55m、南端部が0.5mの径をもつ少なくとも底部が円筒状をなす木棺を埋葬していたと考えられる。北端部の構造は不明であるが、両端部の木棺底部は圓形になっているので、木口板はおそらく組み合わせのものを用いたと考えられる。(図版B15(2)) なお赤色顔料は多量に使用され、棺床に厚く塗抹されていた。

**遺物出土状態** 棺内の南端近くに、切先を南に向けた鉄劍があった。(図版B19)

### 後円部東櫛

**墓坑** 西櫛の墓坑の上にさらに重ねて東櫛の墓坑が穿たれたので、東櫛の墓坑が潰されてその範囲は明確でない。しかし、坑底部で東西櫛の掘り方の重なり状態がごく一部分



第17図 弁天山B3号墳後円部東西櫛構造と遺物配置の実測図

遺存していたが、坑底の縁辺として決定することは出来なかった。しかし、第17図において、墓坑と両粘土槨との位置関係をみると、その重なり状態がおぼろげながら推定できるようである。

このようなことから、墓坑の重複による両槨の前後関係ははっきりしなかったが、東槨が西槨の端で上になって重なっていたことから、東槨が西槨よりも後に埋葬されたものであると判った。

**粘土槨**　西槨の埋葬後、墳頂部が平坦になり月日が経たのちには、埋葬位置はおおよその見当がついたとしても正確を期することが出来なかつたであろう。再び墳頂部を穿ち追葬するとき、当然それはよけようとされたであろうけれども、このような小規模な墳丘にすでに埋葬されている粘土槨をさけることは不可能でどこかで重なり合うのはあたりまえであった。このような事態を迎えた追葬者たちは、先の粘土槨を破壊して除去するという非常手段をとらず、事前策として、部分的に露出した西槨の東側の上面及び新たに追葬すべき木棺を安置する位置に黄褐色粘質土を厚さ約25cmで敷き中央をU字形に回めた基礎台を造つた。その状態は、図版B16及び同B17(1)の写真によって示すところである。この基礎台の上縁の平坦面が東側で広く、西側と接する西側でせまくなっていることは、西槨によって規制されたのであろう。

ここで非常に興味をひいたことは、この基礎台を造るに際して、粘土の柔い状態のとき足で踏みしめて整形して行った過程が、よく残された足跡によって知られたことである。

(図版B17(1))

このように、U字形に回めた基礎台をしつらえ、その上面に上質の青白色粘土を厚さ5cm及至10cm敷いて棺床としていた。この場合図版B16(1)の写真に示すように、西槨(右)の棺床の肩部がかまぼこ状になっているのに較べて、それは平坦面をなしていた。東槨の遺物はすべてこの平坦面に副葬されていた。(図版B16・19)

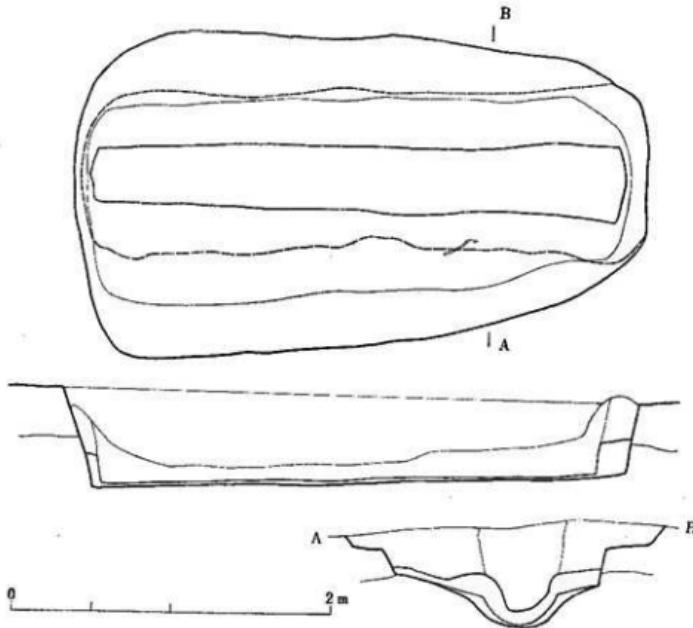
**木棺**　遺存しないが、棺床の上面、及び粘土槨の南端にその形態がよく残され、(図版B18(1))削竹形木棺に属するものと考えられる。遺存している状態でその規模をみると、全長は約3.07m、北端巾は約60cm、南端で巾約60cmのものである。この木棺の上面をさらに精良な青白色粘土をもって被覆していたのである。図版B15(1)は木棺が消失するとともに、被覆粘土が陥没した状態の部分を示した写真である。

**遺物出土状態**　棺内遺物はなかった。先述したように棺床肩部で遺物を検出したので

あるが、これは被覆粘土で覆われた粘土棺内に包蔵されたもので、厳密な意味では棺外である。だから、これらの遺物は「棺内棺外遺物」とも称すべきであろう。さてこの棺内棺外遺物の出土状態を、棺をはさんで東側の北端からみてみよう。(第17図)

北端近くに鉄斧があった。この部分は崩れて若干削りとられた可能性があり、鉄鎌の残片と考えられる。これを証す如く、約45cm離れた南側に矢柄の羽根の部分に塗布されたと思われる謙膜が残っていた。次いで、鉄鎌が2本または3本ずつ束になって3箇所、鉄刀1口、鉈2本が配置され、また木棺の西側の北端に鉄劍と束にした鉄鎌や鉄斧が切先や刃先をいずれも北に向け、棺に添わせて副葬されていた。(図版B19)

**前方部** 前方部で主軸にはば直交し、南北方向に並列した二基の粘土棺を検出した。上部はほとんど流失し、かろうじて底部を残すのみである。東側にあるものを東棺、その



第18図 弁天山B3号墳前方部東棺構造実測図

他を西櫛とよぶことにする。この両櫛は墓坑で約1.5m、粘土櫛の中心線から約2.4m離れたところにあって、どの部分も重なりあっていない。両櫛の状態から埋葬順序を決定することは、ほとんど不可能であるが、木棺埋葬方向等から、同時期に埋葬されたものでないことは確からしい。(図版B21)

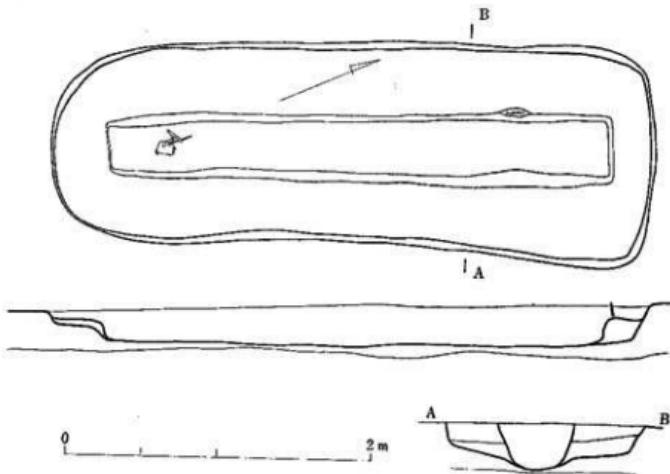
前方部東櫛 (図版B22)

**墓坑** 長さは約3.6m、巾約2mで、両側に段がある。坑底をU字形に掘り凹め、その上部にごくわずか粘土を敷き、棺床を整えている。

**木棺** 遺存していないが、その跡を明瞭にとどめている。規模は底部で全長約3.1m、北端で約41cm、南端では約32cmである。棺の形態は、図版B22(2)に示すように、湖竹型木棺に属するものである。被覆粘土は下段坑いっぽいに拡がり、巾約80cmで木棺と同様に北の方巾広く、また高くなっている。おそらく被葬者の頭部が北側に向けられていたと推察される。

**遺物出土状態** 遺物は棺内においてガラス製小玉が4個散乱していた。棺内棺外遺物として棺床東側で鉈1本を検出した。(第18図)

前方部西櫛 (図版B23)



第19図 犬天山B3号墳前方部西櫛構造と遺物配置実測図

**墓坑** 長さは約3.5m、巾約1mで、その中に棺床を造らず、平坦な坑底に木棺を安置し、その横に埋めもどしの土を入れた程度のものである。

**木棺** 遺存しないが、その跡から、長さ約3.3m、北端巾約45cm、南端巾約33cmの割竹形式のものであったと推定される。(第19図)

**遺物出土状態** 棺内の南端近くで鉄鎌、鎌、斧、刀子等が、かたまたた状態で副葬されていた。(図版B24)

## 5. 遺物各説 (図版B20 第20図 第21図)

### 鉄刀一口 (図版B20、1)

鉄刀は東櫛の東側、棺床肩部の中央部に副葬されていた。切先は3cmほど欠失している。遺存全長は約71cm、推定全長約74cmのもので、刃部は真直、直刀に属するものである。茎部と刃部とのつながり部で内側にわずか折れ曲った感じである。(第20図1)

### 鉄劍2口 (図版B20、2・3)

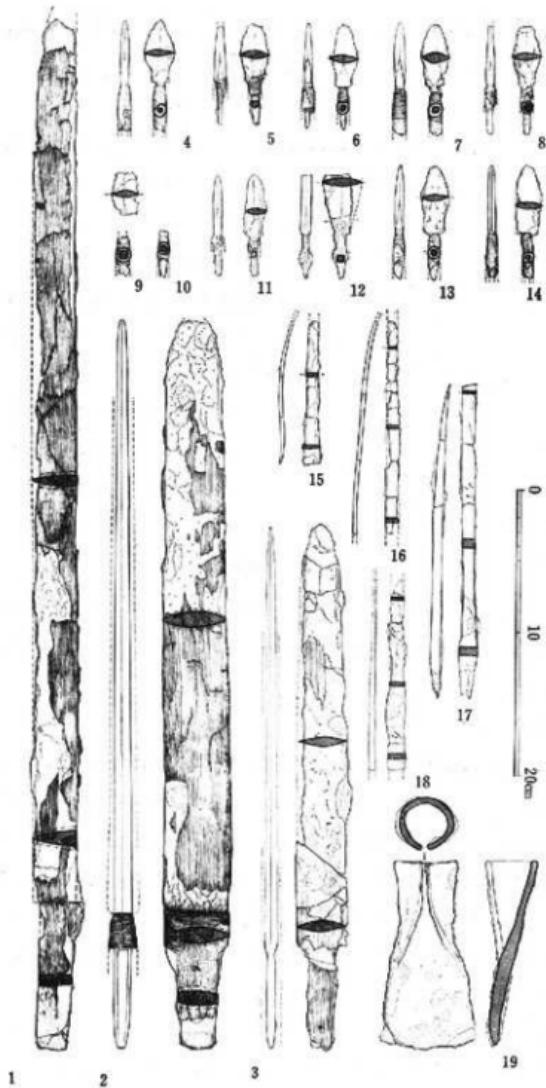
第22図2の鉄劍は、東櫛の棺床肩部西側に副葬されていたもので、表面によく木質部が銹着して残っている。肉眼的であるが、材質は桧様のものである。<sup>⑨</sup> 茎部の柄の装着部は、糸でよく巻きしめ、さらに漆で固めた状態がよく残っている。鉄劍としては大型のものである。22図3の鉄劍は西櫛の棺内に副葬されていた。身に木質部がよく遺存していた。茎部の中心より端寄りに、目釘穴が一孔ある。(第20図2・3)

第2表 弐天山B3号墳刀劍類計測表 (cm)

全長	刀身長	身幅		背厚	茎長	茎幅
		切先	刃基部			
1	74	63.5	2.5	3	0.8	10.5
2	51.5	42.0	4	4.6	1.0	9.5
3	36.5	29.2	2.2	3.5	0.7	7.3
						1.9

### 鉄鎌 11本 (図版B20、4~14)

鉄鎌は東櫛の棺床肩部から数本ずつ東になって検出された。それを各々の鎌についてみると、木櫛東側の南端近くにあったのは第22図4・14・8、その北側中央部に5・12・9がそれぞれ束状になっていた。これらすべて、まだ銅鎌の形態が残った感じのするもの



第20図 弁天山B 3号墳後内部東西櫛出土遺物実測図

で、14を除く他は、大小があつても同形式のものである。茎部の着装部は、よく残り、系巻の状態が明白である。（第20図4～14）

#### 鉄斧1個（図版B20、19）

鉄斧は木棺の西側中央より南よりに副葬されていた。全長が約13cm、柄の挿入部の長

第3表 丹天山B-3号墳鉄鎌計測表

番号	全長	刃部長	刃幅 (最大)	刃厚	茎長
4	7.7	4.4	2.1	6	
5	7.8(推)	4.8(推)	2.1	6	
6	7.6	4.5	2.0	6	
7	8.0	4.7	2.0	8	
8	8.4(推)	5.0(推)	2.0	6	3.4
9			2.0	5	3.0
10					3.2
11	7.0	4.4	1.8	6	
12	9.0(推)	6.0(推)	2.8	6	3.0
13	8.1	4.7	2.2	6	
14	8.0	5.0	1.9	4	3

さ約7cmで刃部の長さ約6cm、刃幅は約6.5cm、比率からいえば刃部の長いものに属す。（第21図10）

#### 鉄鎌4本（図版B20、15・16・17・18）

第21図15・16は東側の東側に同じく17・18は西側、各2本ずつ副葬されていた。このうち完形を保っているのは17で全長約21.6cm、刃先はのみ状を呈すもので、茎の断面は長方形の比較的厚いものである。他はやや小形に属するものである。

#### 鉄鎌1個（図版B24、1）

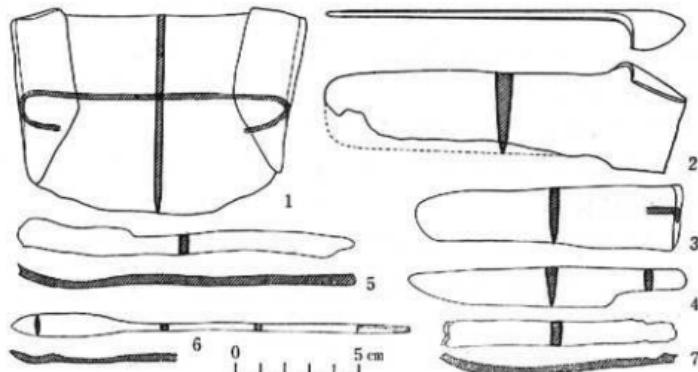
前方部西側の棺内に副葬されていた鉄鎌で両端を折り曲げたもので刃部は丸味をもったもので長さ約8cm巾は上縁で約12cm、刃部で約10cmである。

#### 鉄鎌類2個（図版B24）

前方部西側の棺内に副葬されていた鉄鎌類で、第21図2の大形のものと同3の小形のものとの2種類がある。大形のものは全長約14cmで、背厚が約0.6cm、刃の巾が約3.5cm、柄の装着部は柄と刃部とが鈍角になるように背部の角を斜めに折り曲げられている。手に持った場合には、重量感が相当あるよう、柄の装着部の折り曲げ角度からみると鎌というよりも木の枝等を充分に切ることの出来る鉈に属するものであろう。小形のものは刃部に直角に柄が装着出来るようにその一端を折り曲げている。全長は約10.2cm、巾は約2.3cm、厚さ0.3cmである。

#### 鉄刀子1本（図版B24、4）

前方部西側の棺内から出土した刀子で全長約11.2cm、刃部の長さ約8.5cm、巾約1.5cm、背厚0.5cmの形の整ったものである。（第21図4）



第21図 弁天山B3号墳前方部東側出土遺物実測図

#### 鉄鏃 3本 (図版B24、5・6・7)

第21図5は前方部東側の墓坑内の埋もどしの土の中から出土した鉄鏃で、刃部の先端が欠失している。全長約13.5cm、刃部の長さは約5cm、巾1.3cmで柄部は直線であるが、刃部で彎曲している。同7は西側から同6と棺内から出土したもので同5と同じく先端部を欠失しているがほぼ同じ形態である。同6は一辺が約0.3cmの方形の断面をもつ細長い柄の全長約16.2cmのもの、刃部は長さ約4.5cm、巾約1cmで刃部が反っている。柄の装着部になる茎の長さは約21cmである。

#### ガラス製小玉 (図版B24(2))

前方部東側棺内では散ばった状態で検出したガラス製の小玉である。ガラスは青色で透明なものであり良質のものではない。表面には気泡が残っている。(第4表)

第4表 弁天山B3号墳東側出土  
ガラス小玉計測表

番号	長さ (mm)	外径 (mm)	内径 (mm)
1	4.0	5.5	2.6
2	2.9	4.3	1.8
3	2.8	4.0	1.3
4	3.0	3.8	1.4

## 6. 結語

弁天山B3号墳は調査の初期にあっては単なる円墳であると考えられていたが、調査の進行と共に

にそれが前方後円墳を形成するものであることが判明した。当墳のように流出しやすい土砂で構成する墳丘であっても、また特に前方部においては、その主体部の大部分が削られ

てしまって底部のみを残す現状であっても、なお、墳丘の顔を検することによって前方部の前方端及びその肩がよく残っていることを確認し、墳形を充分に求め得ることが出来る可能性のあることを証明した。

結語として今まで判明した成果を簡記してみよう。

○後円部で、追葬者が先の被葬者の粘土桶に対して特別な施設を造ってこれを護ったことが明らかになった。

○粘土桶の肩部の形を大別すると、平坦なものと、カマボコ状のものとに分類することが出来る。今まで副葬品では、ほとんどその前後関係は不明であったが、後円部の調査の結果から粘土桶肩部の平坦なものは、カマボコ状のものに較べて後出のものであると判った。

○B 2 号墳の粘土桶の上面において若干見られた足跡は、作業の最終的な段階に墓坑から脱出する時に残したものであるが、当B 3 号墳後円部東側の基礎合を造るに際して、無数の足跡を残したように足で粘土をこねて整形したことが明らかになった。現在でも陶工や左官などは土の木目を整え、練るために足ですべての作業を進めているのを見る時、その共通性を感じられる。しかしそこに出来た足跡の大きさが約 20cm で男子の成人の残したものとすると小さすぎないだろうか。むしろ女性的な足跡として考えられるのである。後に土器造りが女性によってなされて行く一課程の萌芽がすでにこの段階ではらんできたかどうか、今後に残された問題である。

○前方部における東西桶の前後関係を説明出来るものは何もなかった。しかし、木棺の大きさ設備等から考えるとあまり時期的にへだたったものではなかろう。また、前方部、後円部を通して、後円部の 2 埋葬の後に前方部が埋葬に利用されたことは明らかであろう。

#### 註

①日誌の整理は帝塚山大学奈良とし子娘の手をわざわした。

②かつて京都府西山 1 号墳（前方後方墳）を調査した際、墳丘の全長が約 80m の規模があるにもかかわらず盛土はわずか 1m であった。

③藤沢一夫氏が大阪府「畿内市史」の第 3 節（古墳文化とその遺跡）のなかで墳丘の築成について「築成の最下層は厚 60cm のならされた緑色粘土層、その上は帶輪紫色の混灰粘土層で、この層中に内部主体は埋蔵される」とさらにこれが桜塚古墳群の全体に採用されていると述べられているように墳丘築成前にある程度の地ならしが行なわれたことが知られる。当 B 3 号墳の凹凸のあるもの

は珍らしい。

- ④木棺を直接安置するのは棺床であり、この棺床を造るための台床を一応ここで基礎台と名付けた。
- ⑤小清水卓二博士による。



# 弁天山B4号墳

堅田直



## 1. 古墳の位置

弁天山B 4号墳は、高槻市岡本35番地にある。

このB 4号墳は調査前にはまったく不明であったが、B 3号墳の前方部を調査中検出したものである。

## 2. 調査の経過

このように、B 4号墳の調査は当初予定されていなかったので、あらたに次のように直編成を行なった。

発掘担当者 濱田 直

調査員 白石太一郎

補助員 今西通晴、加藤信勝、近森佐太郎

参加者 井上、大橋忠雄、近藤喬一、小南一郎

発掘調査は昭和38年8月3日から同18日まで施行した。調査日誌を抄録してみる。

8月3日 晴 No. 2、No. 3の杭うち、4区に区分して地表面削平。

8月4日 晴 B 4号墳の調査を開始。

8月5日 晴 棚及び杭を検出それの検討。

8月7日 晴 写真撮影、排土作業、珠文鏡1個、ガラス小玉10個、を検出、朱面の追求。

8月8日 晴 棚を露呈、鉄斧頭1、鎌1、打製石槍1、鐵鏃1、土師器片若干を検出、写真撮影、同状況を実測、東斜面及び西斜面にトレンチを設定。

8月9日 晴のち雨 東西斜面のトレンチの掘り下げ、台風の為午後は作業中止。

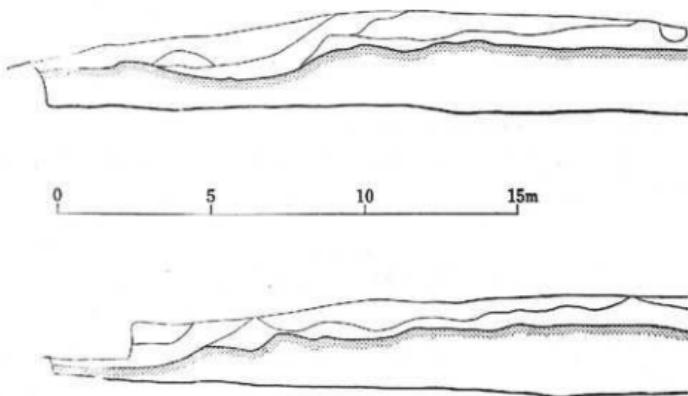
8月10日 晴のち雨 実測、平面図完成。

8月12日 晴 地形図に発掘区画を記入、墳丘断面一部作成、全景写真撮影。

8月13日 晴 棚床を露呈、写真撮影、実測主体部の調査完了。

8月14日 晴 墳丘中央部を切断、墳丘を十文字に断ち切るトレンチを完結。

8月18日 晴 墳丘断面図を完成、B 4号墳の調査を完了。



第22図 弁天山B4号墳墳丘断面図（上）南北トレンチ

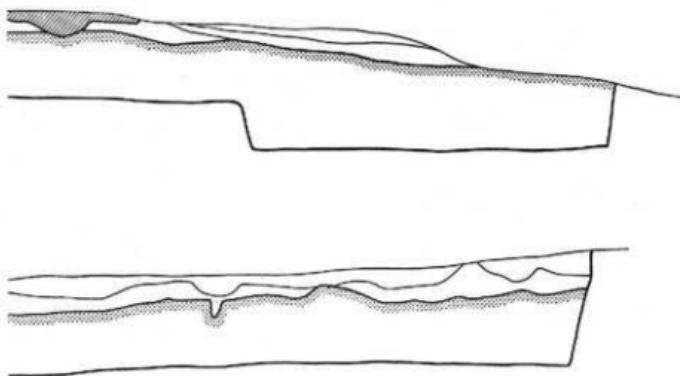
### 3. 外部構造（図版B25）

弁天山B2、B3号墳において見られた如く、墳丘の流失ははなはだしいものがあった。それでもなお外部から墳形を識ることが出来たが、当墳では完全に流失、主体部も底部を残す程度までになっていた。しかし第14図によれば、B3号墳の前方部に接して隆起部があり、少し位置がずれて木棺が安置されている。もとはやはり墳丘をもつたものであることは、第22図の断面図によって理解されるであろう。

### 4. 内部構造（図版B26）

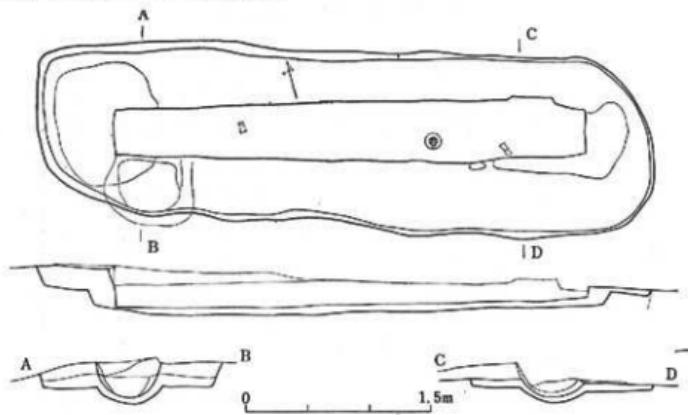
**墓坑** ほぼ東西に長軸を置き、長さ約5m、東での巾約1.05m、西での巾約1.4mで西側で括がっている。（第23図）

**木棺** 遺存しないが棺床によくその形態をとどめている。棺の長さは約4m、東端巾は0.45m、西端巾は0.36mのU字形の底部をもつ割竹形に属するものである。（図版B26）ただし棺床には粘土は使用されていないが、小口板をおさえるため灰白色の粘土塊がおかれている。



(下) 東西トレンチ

遺物出土状態 東側からみると鉄鎌、珠文鏡、ガラス製小玉、鉄斧と部分的にかたまらず拡がって埋葬されていた。(第23図)



第23図 弁天山B 4号墳粘土築構造と遺物配置図

## 5. 遺 物 各 説 (図版B 29(2))

珠文鏡

珠文鏡は棺の中央部の東よりに埋葬されていたもので鏡面に一部縁背が生じているが、比較的良質の青銅鏡で、経6.6cmの小形のものである。鏡面は凸状を呈し(第24図1)鏡背は平縁とよばれるもので、内区は一段下って櫛齒文帯があり、次いで二線を画して珠文帯が続いている。文様帶全体の感じとしてはあまり上手ではない。例えば線のつぶれ、珠文帯の珠の間隔の不均等がみられる。使用度における手づれはあまりみられない。なお鉢孔の摩耗がほとんどみられない。

#### 鉄斧

鉄は前の中央より西側に副葬していたもので全長約8.5cmで柄の差込部になる袋状の長さは約5.5cmの一般的な形の鉄斧である。(第24図2)

#### 鉄鎌

鉄鎌は棺内の東端近くに副葬されていたもので全長約12cm、巾約3cm、背厚約0.4cmのもので、柄の装着部を直角に折り曲げている。(第24図4)

#### ガラス製小玉 (図版B24、5)

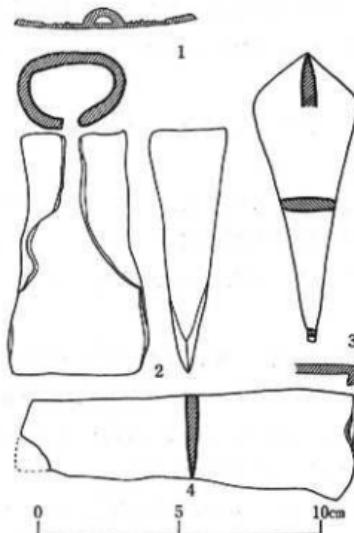
第5表 弃天山B4号墳出土ガラス小玉計測表

	長 (mm)	外 径 (mm)	内 径 (mm)		長 (mm)	外 径 (mm)	内 径 (mm)
1	3.3	3.9	1.7	16	2.2	4.0	1.5
2	3.1	4.1	1.8	17	3.1	4.0	1.9
3	3.0	4.1	1.8	18	2.9	4.4	1.7
4	4.1	4.0	1.5	19	2.9	4.5	1.8
5	2.5	4.7	1.9	20	3.0	5.0	2.0
6	2.5	5.0	1.8	21	2.6	4.5	1.6
7	2.9	5.1	1.9	22	3.0	3.8	1.7
8	3.7	4.7	1.5	23	2.9	3.8	1.2
9	3.4	4.1	1.4	24	3.0	4.0	1.8
10	2.8	4.1	1.2	25	2.9	4.0	1.6
11	2.9	4.3	1.5	26	2.9	4.0	1.1
12	2.8	4.4	1.8	27	2.9	4.0	1.2
13	3.9	4.0	1.9	28	3.1	4.1	1.9
14	3.6	3.1	1.7	29	3.0	3.6	1.2
15	2.6	4.8	1.9				

棺内で一個所に塊まつた状態で検出した青色の不透明のガラス製の小玉である。(第5表)

#### 鉄鎌

鉄鎌はB 4号墳の墳丘表土直下で検出した。当墳と直接関係づけられるかどうか不明である。茎の部分が消失して全体は不明であるが刃部がよくのこっている。形態は菱形で、その刃部の全長約10cm、巾約3.7cmのやや大型に属するものである。



第24図 弁天山B 4号墳出土遺物

#### 有舌尖頭器 (第25図)

有舌尖頭器はB 4号墳の墳丘表土から検出したもので、先端部は消失しているが、よくその特徴をそなえている。遺存部の全長は約6.7cm最大巾約2cmである。



第25図 弁天山B 4号墳検出有舌尖頭器

## 6. 結 語

B 4 号墳発掘調査まで確認されていなかったもので、B 3 号墳の前方部を調査した際検出したものである。いま調査結果を簡単にまとめて結語とする。

- 墳丘を構成する封土がまったく流失していた。しかし B 3 号墳の封土の状態からみればもとからあまり封土を持たず、木棺を覆い他と割す程度の盛土であったと考えられる。
- 埋葬施設も B 3 号墳の前方部の粘土層とよく類似するが、さらに簡素化された地山直葬的なものである。
- 出土遺物に日本製の珠文鏡があつて、前述の古墳のどれよりも新しい年代、ほゞ 5 世紀中頃から後半にかけてのものであると判断された。
- 有舌尖頭器を表土より検出したが、これは付近に散布するものが、流入したものである。

このように赤天山 B 1 号墳を丘陵の最上とするこの支丘の末端部に造られた B 4 号墳はここでは、最も新しいものであった。B 1 号墳と B 4 号墳との間を繋ぐ古墳は、それぞれ丘陵上から末端部に向けて造ったようで時代とともに下降したように見られ、各々の築造時期を異にし、年代的に重なるものは見受けられなかった。

古墳群と古墳との関係を得られた。各墳の時期的な継続はあえてここで述べるまでもなく、各墳についてみてもらいたい。

### 註

①調査日誌の整理は帝塚山大学奈良とし子娘のお世話になった。

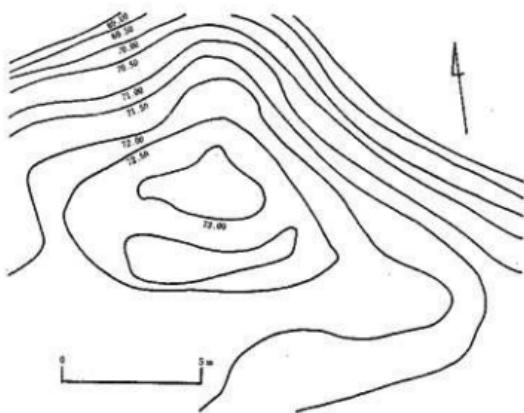
付、旧仮称 弁天山4号墳

堅田直



## 1. はじめに

弁天山4号墳は調査以前においては円墳であると考え登録されていたものである。しかし調査結果からいえば、調査員の努力にもかかわらず埋葬施設と考えさせるものは何ひとつ検出することが出来なかった。はたして古墳といいうものであるのか、あるいは後世の盛土であるのか「疑わしきは罰せず」という論法からいえば、ここで古墳の類に入れて報告するのは適切ではないけれど、一応調査結果を簡単に報告しておく。



第26図 弁天山旧4号墳地形図

## 2. 古墳の位置

弁天山4号墳と称せられるものは、高槻市岡本41番地にある。

弁天山4号墳はB2号墳とB3号墳とのほぼ中間に当り、B2号墳から北東約30mの地点、標高73mの丘陵の北縁部に立地する、みはらしのよい位置にある。

### 3. 調査の経過

弁天山4号墳の墳形から、古墳として疑問がないではなかったが、一応古墳であるという前提のもとに班を編成し調査した。次の如くである。

発掘担当者 堅田 直

調査員 波多野忠雅

補助員 豊嶽、伊藤正樹、加藤信勝

調査は7月25日から8月13日まで施行した。

### 4. 外部構造

弁天山4号墳は肢状になって東へ延びる台地の北縁に接している。すなわち墳丘の北側は台地の北縁の一部をなし、急斜面を形づくっている。この墳丘は、外見するときわめて不整形な円墳状をなすものである。これを実測図(第26図)の上から判断すると、標高72.50mを通る線が墳丘の基底部となり、直徑約10mを算す。ただし盛土の部分はそれよりもわずかで、墳頂中央部で直徑約5mの範囲を示す高さ約1mの規模のものである。

### 5. 内部構造

発掘調査は墳丘を横断するように、東西、南北の2方向に墳頂部で直交するトレンチを設定し、区画をもうけて、数段ずつ掘り下げて行った。盛土中において埋葬施設はまったく検出できなかった。ただ、墳丘の南側の盛土と地山の接する位置に、木炭片と焼土がブロック状になって見出されたが、その新古のほどは不明であった。しかし確かにいえることは、埋葬施設として利用されたものではないということである。

さらに、地山直接に墓坑を穿っているかどうかを調査したが、それらしきものを検出することはできなかった。だが、ほぼ墳丘の中央位にあたる位置で、長さ約60cm、巾約30cmの長方形の人為的な坑が穿たれ、その内に土がつまっていた。その坑内を精査したが何も検出することはできなかった。さらにその坑につまっていた土をくわしく調べると、

墳丘に積みあげられている灰白色の粘土質のものがはいっていたので、盛土する前にすでに坑があって、坑埋めと同時に盛土したものとみられた。これから判断すると、埋葬のために掘られた坑であるとは考えられない。

出土遺物なし。

## 6. 結語

この赤天山4号墳の墳丘は、確かにわずかではあるが盛土されていたので、これをもって墳墓であったとするならば、すでに埋葬施設が流出してしまったと見るべきであろう。だが、B2号墳では、その表土層が相当流出し、B3号墳にいたってはその封土そのものが、すっかり消失しているにもかかわらず、なおその跡を明確にすることが可能であった。4号墳ではその遺構はもとより、遺物の残片すら見出すことが出来ず、現状では古墳であると断定することが出来ない。しからば何故の盛土か、その年代は、という疑問に対して解決を与える何ものもない。



# 弁天山C1号墳

原 口 正 三  
西 谷 正



## 1. 調査の経過

調査の全期間はほぼ3つの段階にわかつことができる。第Ⅰ期は墳丘の現状実測及び墳丘全域にわたる外部施設の調査（7月12日より8月16日までの期間）、第Ⅱ期は主として内部埋葬施設の調査（8月18日より10月11日までの期間）、第Ⅲ期は蓋石等墳丘外部施設の実測（10月12日より12月1日までの期間）である。<sup>④</sup>以下作業の主要な部分について記述することにしたい。

### 〔第Ⅰ期〕

第Ⅰ期は主として墳丘の外部施設の調査を行なった。初め墳丘を中心とする付近一帯の現状を測量し、それと併行して墳丘の外部施設の調査を行ない、古墳の形態・蓋石・埴輪等についての知見を得た。ついで墳丘の全景・細部等の撮影を行なったあと引き続き墳丘の詳細な実測図を作成した。

第1日（7月10日） 銀入式。調査に先立ち、予め墳丘の全面に茂生する蘆木の刈取りが行なわれ、銀入式までには完了していた。

第2日（7月11日） 雨天のため測量に着手できなかったので、もっぱら副査の諸準備に当てた。

第3日（7月12日） 測量は北野を上担とし、後円頂部の基準点（標高94.57m）を基準に、等高線間隔1m、縮尺200分の1で作図することとした。免山篤氏が来訪されたので先年調査した際の状況について説明をきく。それによれば、現在後円頂部にある細長い溝状の凹みは粘土郷のあった位置に相当するもので、当時後円部は南西部と北西部がかなり崩壊し、その断面に粘土の施設が露出して、なかに浅いU字形の朱墨面を認めたという。発掘の結果、古墳の主軸に平行して、墳頂より浅い位置に粘土郷1個が存し、両側には各々40～50cmの幅で礫石を充填した部分があったという。なおその西端は崩壊していたので精査しなかったが、多数の板石が散乱しており、それがさらに下方に続き、天井石とみうるものも認められたので、粘土郷の下には堅穴式石室があると推定した。板石の小口に朱が塗ってあり、裏には粘土を固めた部分もあって、その板石の状態から粘土郷と直交する位置（すなわち墳丘主軸に直交する位置）に石室があったと想定したという。

第4日（7月13日） 測量と併行して、午後から後円部南斜面に幅3mのトレンチ（c

トレンチ) を設定して、葺石等の外部施設の調査に着手した。

第5日(7月14日) また前方部南斜面(bトレンチ)、前方部東斜面(aトレンチ)にそれぞれ幅2mのトレンチを設けて、葺石・埴輪の遺存状態を調査することにした。

第6日(7月15日) 当初本占墳の北に接して、もう1基の占墳(第10号墳と呼んだ)があると考えて、この地域をも含む測量を実施した。その結果、前方後円墳の大きさは全長約73m、前方部幅約40m、後円部の高さ約8.5mであること、また既掘の粘土壁は中輪線上に位置し、堅穴式石室と推定される構造は本来後円部の中央を占めていた可能性の大きいことが判明した。

一方、各トレンチでは葺石斜面の下縁に大きな塊石(基石)を布置していることが知られるにいたったので、まず上段の部分についてトレンチの幅を拡張することにした。後円部では崩壊した部分が大きいため、葺石の遺存範囲はさして広くなく、後円部Ⅰ段斜面の崩壊状況は両側が特に複雑な状況にある。

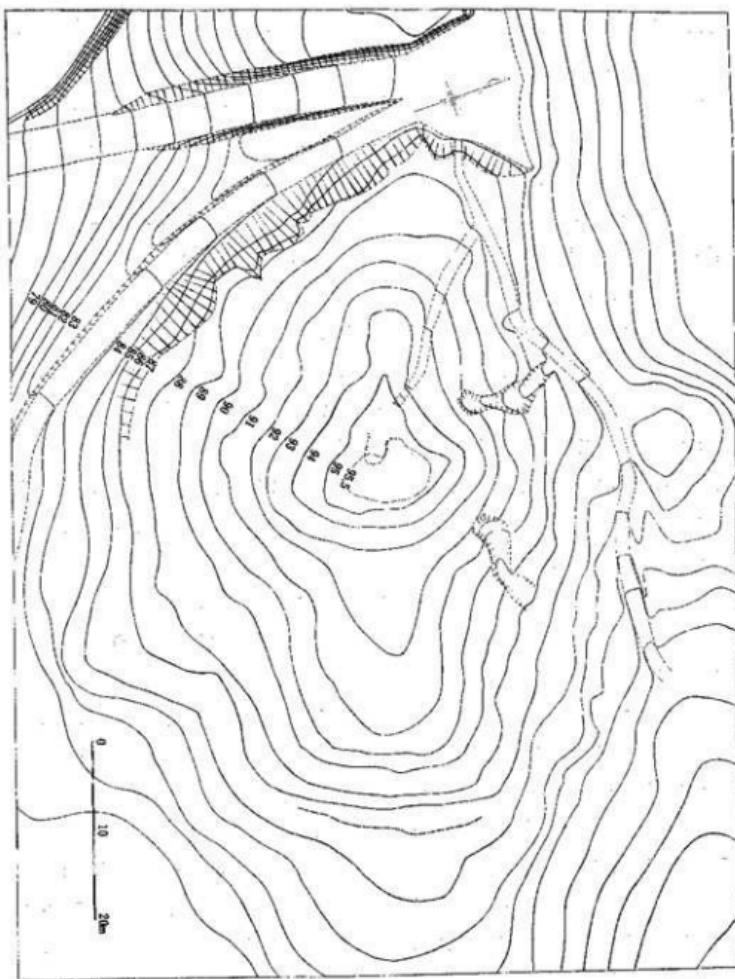
第8日(7月17日) 各斜面で中位の段を発掘しはじめる。前方部右(南側)Ⅱ段(前方部最上段)で、1m<sup>2</sup>当たりに使用されている葺石の個数と、テラスに堆積した葺石量を数えてみた。その結果、幅員1m内に落下堆積した個数は約200個を数えるのに対し、その上方の段の斜面で幅1m、斜面長1mの範囲内に使用されている葺石の個数は108個であった。もしテラスを越えて下方へ転落したものがあったとしても、テラスに堆積した石の量をもってすれば、斜面長2mに相当することになる。現在、基石より斜面の上方へ1mしか遺存していない葺石面に、さらに2mを加えるなら、斜面の全長は3mに及ぶことになり、前方部Ⅱ段のもとの高さを推定する手掛りになるかもしれない。本日よりベルトコンベア3台を使用しはじめる。

第10日(7月19日) 前方部の知見に従って、後円部右(南側)斜面のくびれ部寄りの地区(後円部右侧前面)をも併行して発掘しはじめる。この地区では埴輪の破片を多数認めたが、原位置を示すものは全くなかった。

第11日(7月20日) 前方部右側面Ⅲ段下縁の基石列は、前方部前面へむかって下降していくことが判明した。また前方部前面にあっては、Ⅲ段斜面の葺石は甚だしく崩落し、そのため本日に到ってようやく基石列を把むことができた。

第12日(7月21日) 前方部右側面でⅣ段の葺石を発掘しはじめる。

第13日(7月22日) 前方部右側面Ⅲ段からⅣ段へ調査を進めた結果、Ⅲ段上方に認め



第1図 弁天山C-1号墳外形状測図(調査前)

られたような平坦部（テラス）はIV段の上方には設けてないことが判明した。こうした構造上の相違がⅢ、IV段にあるとすれば、前方部前面でもこのような構造のあることを想定して調査する必要がある。

第14回（7月23日） 前方部稜角部は既に落しく崩壊しているが、Ⅱ段基石列によつて或いは稜角の原状を見出しうるかも知れないと考え、同部の調査を進めたけれども、基石列さえ崩落していて、上記の期待はもてないことが判明した。

一方、後円部前面右側Ⅱ段の上半部は、その上のⅠ段斜面の崩壊が甚だしいため、Ⅰ段下縁の基石列を検出するのは容易ではない。この調査中、Ⅰ段下辺一帯で円筒埴輪片が多数出土したが、いずれも倒壊流下したもので、原位置を示すものはなかった。

第16回（7月25日） 北東よりの全景撮影にそなえて、後円部左側Ⅰ段斜面の調査にも着手した。その結果、同Ⅰ段下縁のテラスには円筒埴輪の基部を残すものがあって、これまでどの部分でも見出されなかつた埴輪列の検出が期待できるような状況になった。

また、前方部右側IV段の葺石は、右側面と前面から稜角へむかって追求はじめたところ、当初考えていたよりもかなり下方まで敷設してあることが判ってきた。ただし、葺石を布置する状況は必ずしも小口積みの方法によっているのではなく、恰も投棄したかの如き惑がある。そのため、上方から落下した塊石との判別が極めて困難である。こうした布置状態はIV段の傾斜が比較的緩やかなことに関係していると考えられる。

他方、右側くびれ部Ⅱ段を発掘したところ、くびれ部の隅角は極めてよく造っており、特に屈折部下縁に、上面の平坦な塊石1個を据えてあるのが注意を惹いた。このくびれ部のテラスには、上方より落下したとみられる埴輪片が多数堆積し、塊石や埴輪片を除くと、平坦部には径4～5cmの砂利を敷きつめてある面があらわれ、これまでに検出したテラス表面の状況とは違っていることが知られた。

第18回（7月27日） 前方部右側IV段の葺石面が後円部へ連続しているかどうかという問題は、A1号墳（岡本山<sup>⑨</sup>）の例を参考するととき、ここでも亦検討すべき点であったから、前方部右側IV段の葺石面を後円部にむけて追求した。その結果、A1号墳ほど明瞭な界線は存しないけれども、前方部のIV段葺石面は前方部のみに付属するものであることを確認することができた。

夕刻、既に発掘した葺石面の範囲やテラスの構成などを200分の1平面図に記入した。

第21回（7月30日） 本日より僅かに残存している後円部背面の葺石遺存状況を検討す

る。

第23日（8月1日） 古墳の東方を貫流する芥川を探査通行した結果、葺石に利用されている塊石は浜津峠よりも下流の西ノ河原以南に多い。このことから判断して葺石の大多数は芥川一帯から採取したと考えてよいであろう。

第24日（8月2日） 前方部左側Ⅲ段及びⅣ段の斜面を発掘する。同部の葺石は落下堆積したものが多く、原状の探索は困難を極めた。一方、後円部前面の調査を開始する。その結果、左右両側に埴輪列を発見し、また中央下縁では大型の埴輪円筒の基部を見出した。左右埴輪列とも基部のみ残存し、左列の方が個体数も多く、一列に配列された状況をとどめていた。

第26日（8月4日） 後円部Ⅱ段下縁のテラスは全面に砂利を敷きつめていることが知られた。このテラスの現存幅員は1.2~1.3mを測る。

第28日（8月6日） 後円部Ⅱ段下縁のテラスに認められた砂利敷は、調査範囲を拡張した結果、ほぼ同じ幅で後円部をめぐっていたと判断されるに到った。

第30日（8月8日） C1号墳北側の隆起部（当初、古墳の可能性を考えて第10号墳と呼んだ）の中央にトレンチを入れて調査した結果、同部は地山粘土層が露出し、何ら遺構、遺物は存しないから、古墳ではないと判断した。本日をもって、墳丘表面の埴輪・葺石の発掘を終る。

第31日（8月9日） 墳丘各所で発見した埴輪片の取上げを行なう。

第32日（8月10日） 墳丘の撮影に備えて葺石面の清掃を行なう。

第33日（8月11日） 後円部左側崩落部の上半を清掃したところ、後円頂部は褐色土が盛土されており、頂部表面より約1.5m下方のところに粘土の地山が横たわっていることが判明した。撮影にそなえて終日葺石全面の清掃を行う。

第34日（8月12日） 墳丘の全景及び各部の細部撮影（8月15日に終了）。撮影に当っては予め撮影計画を樹て、それに必要な機器等を準備した。

#### 〔第Ⅱ期〕

第Ⅱ期は主として内部施設の調査を実施したが、その前半にあっては後円部埋葬施設の発掘と併行して墳丘表面の詳細な測量を行なった。しかし、後円部石室の調査が進行するに従って、墳丘の測量は一時中止した。また石室の調査が遺物の検出を終って実測図の作成に移行すると、これに併行して前方部埋葬施設の調査が始まった。以後10月10日

まで前方・後円両丘の埋葬施設の調査が併行して進行したのである。

第39日（8月18日） 後円部埋葬施設の発掘を開始した。後円部については既に2基の埋葬施設のあることが判っていたが、両基の埋葬施設がどのような関係にあるかはなお疑問の点があった。そこで調査は崩壊部分を手懸りに、両施設の所在を確かめることから着手した。後円部右側の崩壊部の表上を剥いでゆくと、墳丘長軸と斜めの方向に8m前後にわたって石室墓塚の外縁があらわれた。また前面寄りでも墓塚外縁の界線を認めた。前面寄りでは現地表下約1mのところで墓塚底部に達した。底部には板石が僅かに遺存し、石室はかなり破壊されているらしい。

一方墳丘の測量を開始する。葺石の遺存部を全て発掘し終えたので、全域についてあらためて正確な測量を行なうこととした。水準点は調査当初に使用した後円頂部の基準杭を利用し、墳形を明確に図化するために、等高線は50cm間隔とし、縮尺100分の1図を作成することにした。なお、葺石等の細部実測図を作成することも考慮して、あらたに墳丘長軸に基線を設定し、これを軸とす方眼図面を設けた。

＜基線の設定＞ 後円部II段下縁の基石列は極めて完好的な円弧を形づくっており、一見同一円周上に接続するかのように思われたので、これを検証する意味からも、以下のような作業を行なった。まず、後円部II段の右側及び左側の各基石列で、それぞれくびれ部の隅角を基点として弦15mをとり、その中点より交角90°を丘頂に延長して、両者の交点を求めた。また後円部II段後側の基石列においても弦15mをとって前記と同様に中点を丘頂に延長した。このようにして得た3本の線の交点は、墳頂で15cm・20cm・25cmの小三角形を形づくる結果になった。この小三角形内に後円部の中心を設定することとし（實際には後円部II段の右側及び左側の各基石列で求めた延長線の交点を用いた）、これと同時に後円部前面の幅（後円部I段下縁の基石列が前面突出部へ屈折する隅角を結んだ長さ）の2分点を結んで前後へ延長し、これを墳丘長軸の基線とした。

第40日（8月19日） 後円部埋葬施設については、石室墓塚の基底部礫石と考えられるものの及び排水溝を発見した。その結果、堅穴式石室の長軸は墳丘の長軸と斜行していることが明確になった。また粘土層の墓塚が石室の墓塚に重複していることを確認した。墳丘の測量及び遠景撮影（東北方より望む）を行なう。

第41日（8月20日） 石室及び粘土層の両墓塚を明確に出す。粘土層の東北側は墓塚壁が階段状になっており、段状部に粘土塊が5～6個分かためておいてあった。恐らく木棺

埋置の際使用された粘土の残余を置いたものであろうか。粘土床には酸化鉄の赤色顔料が認められたが、床面まで搅乱されていた。粘土床の周囲には礫を敷いた排水施設が認められた。

第42日（8月21日） 壁穴式石室の発掘に着手。夕刻までに東北壁の一部を検出し、粘土床にのった銅鏡を2個発見した。

第43日（8月22日） 石室の幅を西北部で確認。西側の側壁は殆んど破壊されており、壁体最下部の板石が単に1枚しか残っていないか、或いは墓塚底部の粘土が露出しているといった状況である。板石の間には礫が詰めている。石室の北壁付近は著しく搅乱されており明確でなかったが、石室の内部で粘土床の肩部が遺存しているのを確かめることができた。この肩部には鉄刀片がのっていたが、ついで側壁破壊部でも混入した鉄刀片を発見した。

第46日（8月25日） 昨日までに石室墓塚内の清掃を終ったので、愈々粘土床内部の調査に入る。石室壁体の遺存状況は甚だ良くない。とくに西側はほとんど失なわれ、東側もまた中央部が高さ30~40cm程度造っているにすぎない。石室を構成している板状の石は灰褐色のものと緑色のものと2種あって、後者は量的には少ない。板石の間には礫がつめている。粘土床肩部で銅鏡4、鉄刀1を検出した。また石室の南端も確認した。

第47日（8月26日） 前方部上表面の東北寄りにあった起伏部一帯を削って、前方部の埋葬施設の探索を開始した。同部一帯にある礫石群は当初埋葬施設に関係するものではないかと考えて慎重に探索したが、その拡がりは部分的なもので、赤褐色の盛土を薄く蔽っている黄褐色土層上にあったから、特に埋葬施設とは関係のないものであろうと判断し撤去した。

上記の作業と併行して、後内部石室内の粘土床の調査を開始した。13時30分頃中央南寄りで鏡（三角縁神獸鏡）の一部を発見した。ついで、これより約2m北寄りで同じく鏡の遺存しているのを知った。それぞれの周辺部を発掘していくと、南寄りでは碧玉製の筒形石製品1個、合子の蓋と身各1個、車輪石、石鉤各1個、大型の管玉約30個を発見した。北寄りでは鏡2面のはか碧玉製石鏡、車輪石等を見出した。鏡はいずれも表を上方にむけてあった。北寄り（北群）の2面は比較的小型で、それらのうち北側の鏡（四獸鏡）は完形を保ち、その表面には布帛に包まれた痕跡がみられた。また南側の鏡（二神二獸鏡）は数片に破碎していたが、その表面には黒色の漆膜が被っており、恰も鏡面に納めてあったか

のようにみえた。この2面の鏡のある位置ではなお木棺材が遺存していた。二神二獣鏡の南には水銀朱が広がっており、小さい勾玉や管玉が散乱し、両側には車輪石や石劍が並んでいた。

これまで石室墓塚内の調査が進行するにつれ、著しく破壊された石室の状態からは殆んど副葬品の遺存することは期待しがたいと考えていたから、遺物の出現に接し急拠予定を変更せざるを得なくなつた。8月18日以来継続していた墳丘の測量は殆んど最終段階に達していたが、後円部背面の葺石遣存部と付近一帯の測量を完結させ、残余の作業は石室内部の調査が終ったあとに行なうこととした。かくして全員深更にいたるまで、カーバイドランプのもと棺内遺物の調査に専念した。折りから関西テレビによる撮影が行なわれ、秋々と照らすライトは遺物の検出を容易にしてくれた。作業を終えたのは23時30分、宿直員を留めて下山した。

第48日（8月27日） 早朝から棺内中央に落下した板石を除去する作業を続行する。中央部では角のある硬玉の勾玉1個を検出したのみであった。また北群の南一帯では小形の管玉や勾玉が厚い朱の中に散乱していた。それらは恰も被葬者の頭に懸けてあったものが、糸が切れたために散乱したかのような状態であった。棺内の北の遺物群と南の遺物群との距離は1.6m前後を測り、ほぼ成人の身長に相当する。棺内両遺物群を比較するとき、北群を頭辺とし、南群を足辺と推定することは棺幅の広狭と玉類の遺存状況からみてほぼ誤りないであろう。だとすれば、棺内中央に唯1個遺存した有角の勾玉の位置は腰辺に相当する。

第49日（8月28日） 棺内の清掃に終始する。

第51日（8月30日） 昨日は雨のため作業中止。本日は棺内の遺物出土状況を撮影するため、再度棺内を清掃する。

第53日（9月1日） 前方部で探索中の埋葬施設は墳丘長軸線上にいれた幅50cmのトレンチによって、前方部前面よりほぼ7.5m後円部へ寄った付近にあることが判明した。墓底は幅2.5m、長さ6mの長方形で、その長軸は墳丘長軸に対して直交していた。

第54日（9月2日） 後円部では竪穴式石室の実測を開始し、前方部では墓塚の内部を発掘した。前方部の墓塚内には長さ5.3m、幅1mの粘土構が横たわっており、その両端は合状に整えられてあって、ほぼ原状を保ち、中央では上面が細長く落込んでいた。

第55日（9月3日） 後円部では石室内の遺物の取上げを北群から開始した。前方部で

は粘土櫛内の発掘に移った。これと併行して前方部表土を広範に削り、盛土と地山面の境界を検出する一方、盛土の部分については各盛土ブロックの平面的な広がりを追求した。その結果、櫛より後円部の側は地山が露出し、盛土は櫛より前面までの間だけであること、また盛土部分の表面を削ってみると赤褐色の粘土質の土や黄褐色の砂質土がブロック状に拡がり、しかも相互に重なりあっていることが判った。そこで、試みに墳丘長軸線の北側で盛土ブロックの境界を追求してみた。その結果、前面に沿ったブロックが最も深く、ついで北斜面寄りのブロックが重なり、最後に中央のブロックが重なっていた。部分的調査とはいえたこの重複関係は墳丘を構築する際の土砂の積き方を示しているとみてよいであろう。だとすれば、上砂は初め前方部前面に沿って赤褐色の土をおき、その後北斜面寄りに土をおき、最後に内向みになった中央部に砂質の土をおいたことが推定できる。墳丘封土の築成については最終的に封土を断ち切って検するとしても、その際1ブロックずつの盛土を順次上方から剥取ることにより、どのように盛土がおかれていったか平面上の作業も実施したいと考えた。

第56日（9月4日） 石室内遺物の取上げを継続して行なう。本日は南群の遺物を主に取り上げた。また前方部では粘土櫛を回収する排水用の礫を消掃した。

第57日（9月5日） 後円部粘土櫛の平面実測を開始した。

第59日（9月7日） 後円部石室の平面・立面の実測と後円部粘土櫛の断面を実測。また前方部粘土櫛の平面および立面の実測を開始した。

第60日（9月8日） 後円部粘土櫛を回収するバラスは南側で深く落ち込み溝となって西側の壁穴式石室の壁体上に及んでいるので、それらの重複した関係を光明し、併せて実測図を作成した。前方部では粘土櫛の棺内より遺物出土。中央に筒形石製品1個、西寄りにガラス小玉6個があった。

第62日（9月10日） 前方部粘土櫛の内木口を取りはずしにかかる。東端で土師器1個と小型丸底壺1個とを発見した。

第65日（9月13日） 前方部粘土櫛の棺の両側縁をはずし粘土床を出す。さきに発見した2個の土師器に接して、さらに小型丸底壺1個が出土し、計3個となる。これらの土器は東側小口板の外側にまとめておかれたり、棺の東小口部を被覆した粘土によって完全に被われていた。

後円部石室では、既に移動しているとみられる石は取り除き、原位置にあった板石のみ

を残して平面図を作成することにした。一昨日より平面図作成のための割付けを行なったが、昨日で完了したので、木日より平面実測を開始した。石室内より管玉が1個出土。前方部粘土構造の遺物はすべて昨日までに取上げて完了した。

第71日（9月19日）既に11日より調査に従事しうる者は西谷、吉本、渡辺の3名となり、天候も漸く安定しなくなった。後円部の石室と粘土構造の実測にはげんだけが容易に進捗しなくなった。前方部では墓壇内の礫敷を断ち切ったところ、礫中より埴輪の破片を数個発見した。これらの埴輪片は既に埴輪に配列されていたものが、前方部粘土構造を構成する際に混入したもので、後円部埋葬主体（石室）との前後関係を示唆していると考えてよいであろう。

第74日（9月22日）後円部では石室の壁面に沿って排水溝（幅30cm、深さ10cm前後）がめぐらされており、その中にはパラスがつめられ、壁体最下部の板石はこの溝を覆っていることが判明した。

第76日（9月26日）石室の板石は壁体最下部の1枚のみを残して他は全て撤去し、再度平面図を作成することにした。

前方部では粘土構造の周囲にある排水用パラスを除去し、粘土床の実測を行なう。

第77日（9月27日）後円部石室の北端を検査した結果、幅10cmの崎曲した落ち込みを発見した。この落ち込みは恐らく木棺の北端に当たってあつた木口板の痕跡であろう。その後、南端でも同様の落ち込みを発見した。石室の東西の断面図を作成。

第86日（10月7日）石室墓壇内の排水溝に充填してあったパラスを除去し、ひきつき石室の粘土床を撤去しはじめたところ、木棺南端の粘土中から鉄鎌2（大形のものと小形のものと各1個）、鐵刀子1個、鐵斧2個（火形1、小形1）が出土した。

第87日（10月8日）石室の粘土床を除き掘方を全部出した。これによると、木棺はあらかじめ墓壇の中央に溝状の掘り込み（幅1m、長さ10m）をつくり、この掘り込みを含む底全面に厚く粘土を敷いたのち木棺を置いたとみられる。粘土は溝状の落ち込みだけでなく、墓壇の周りの排水溝を除く全面に敷いてある。

#### 〔第二期〕

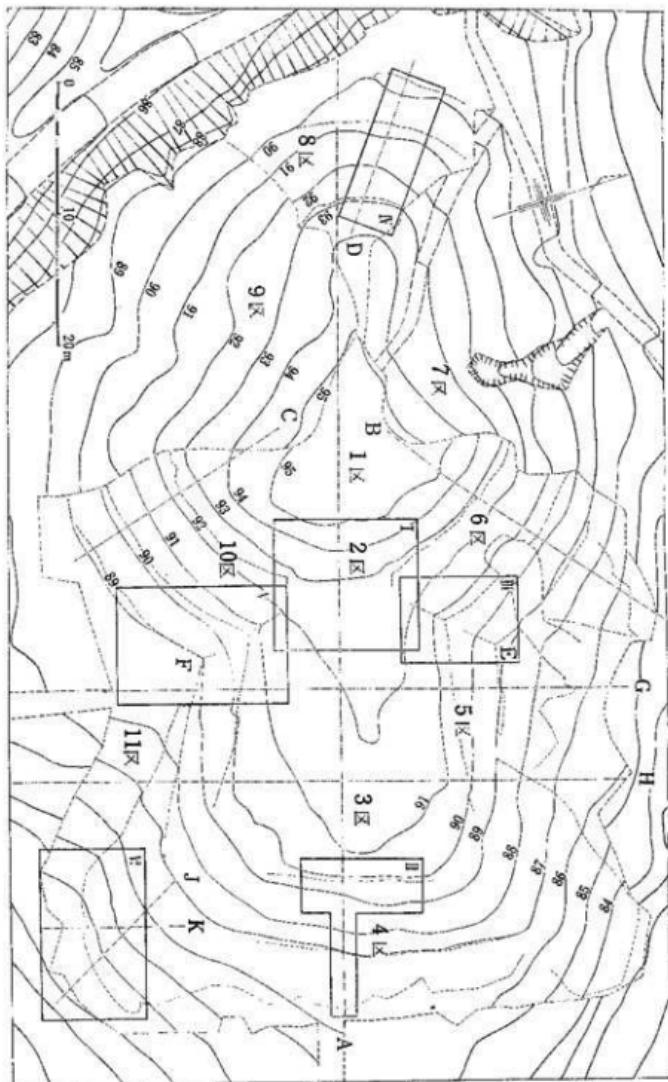
埋葬施設の調査が終了すると、10月12日から蓋石・埴輪の外部施設の細部実測と封土についての調査を行なった。蓋石は遺存する全城について詳細な実測図を作成することが望ましいけれども、実測に従事しうる人員と遺存状況を考慮して、最重要の部分についての

み実施することにした。すなわち、前方部の前面中央、同右稜角、左右のくびれ部、後円部前面、後円部背面の各所と、現在遺存している葺石斜面の企基石列及び封土断ち割りを行なう個所について20分の1図を作成した。また、封土の断ち割りは封土築成の状況を知るために重要な調査であるから、可能な限り実施することにしたが、なお十分に成果をあげ得たとはいえない。特に封土の断面調査に併行して実施する予定であった盛土ブロックの平面的追求をなし得なかつたことは遺憾である。

断面実測を行なった個所はつぎのとおりであった。墳丘長軸、前方部右稜角、前方部横断、前方部右側面、左右くびれ部、後円部左斜面、同右斜面及び背面(長軸に対しN20°)、その他必要な部分。

第92日(10月14日) 既に後円部背面、くびれ部、前方部前面の基準点の割り付けを終ったので実測にかかる。一方、墳丘長軸に沿って幅1mのトレントを設定し、封土の調査を行なう。これによって、後円丘は旧丘頂を削って円丘の外郭を整え、頂部には盛土を約1.5mほど積んで築成していること、盛土の積み方は墳丘外部を先ず高くし、内方へ傾斜させながら積み上げ、最後に中団みになった中央に土を盛く方法をとっていることが判明した。また、後円部前面に近い部分で、盛土直下の地山面に土師器の細片が埋没していることを検出した。これらの土師器片は細片であるため、如何なる器形か判別困難であったが、破片のもつカーブその他から、おそらく壺様のものと推定される。これらの土器片の抜がりは十分確認し得なかつたが、墳丘長軸に設けたトレント内の状況からはさして広範なものとは考えられない。

第102日(11月2日) 前方部で墳丘長軸に沿って断ち割りを行なう。これはさきの後円部の断面に連接するものである。後円部前面の下半部が全て地山を削って形成してあったように、前方部もその中央部までは地山を削平してあって、盛土の積まれているのは中央部より前面にかけての前半部分にすぎない。ちょうどこの境目に前方部粘土櫛が位置している。ただし粘土櫛の墓塚は地山中に位置するよう作られている。前方部前面の断面にあらわれた盛土の状況も、さきに後円部の盛土でみたと同じような構築法をとて築かれていた。なお注意すべきは、前面において、地山と盛土の境目に黒色有機物の薄い層が存したことで、この黒色有機層は地山の傾斜角度から考えて、旧地山表面に存した草木類の炭化したものではなかろうか。葺石は小口積みに積まれているが、葺石の背後には裏込めの土砂があつて、地山は階段状に刻まれている。また大阪学芸大学の赤塚教授により、



第2図 井天山C-1号墳区割図

堅穴式石室の石材及び蓋石について、岩石学的な調査が行なわれた。

第112日（11月12日） 墓輪片をすべて取上げる（リング箱16個分）。

第113日（11月16日） 後円部北側にトレンチを設け、封土に関する断面調査を行なう。後円部の段は、南側では3段に築成されているが、北側では4段に築成されている。上の3段は墳丘をとりまいているが、最下段は前方部の最下段と連繋していて、北側のみに作られている。その終端は崩壊しているため明確でない。

後円部Ⅰ段下縁の基石列は、平面的には良好な円弧をなしていないが、断面上にみられる封土及び蓋石の構築は他の地区的調査結果と同一である。なおⅡ段からⅠ段にかけてテラスを含む部分の封土の構築法を知ることができた。それによると、Ⅰ段及びⅡ段下縁のテラスもまた築成当初から計画的に土を盛っていったものである。

第118日（11月24日） 高槻市中央公民館（桃園小学校）において調査報告会開催。

第122日（12月1日） 前方部前半部の盛土の調査及び諸基準点の点検と記入を行なつて長期の調査を終了した。

#### 註

① 調査が実際に完了したのは開始後122日目の12月1日であった。その間に従事した人員は延1,694人にのぼる。従事した人員の動員からみると、夏季休暇の終る8月末日迄にその約85%が従事したことになり、しかもこの動員数の大部分は墳丘外部施設、中でも蓋石調査に要した人数であった。

赤天山C1号墳の発掘調査に参加された諸氏、およびその後の遺物整理に従事された諸君の氏名は以下のとおりである。

（発掘調査参加者）有光有学・磯田義賀・伊藤正樹・畠田哲道・大関行一・加藤信勝・加藤優・加藤房明・河野通明・小林孝・田中柳太郎・山宮久史・徳潤彰・中村徹也・中島泰・浪貝毅・浜岸宏一・酒木久・林紀昭・堀江門也・松田勝代・丸山志平・吉木亮俊・渡辺英俊（遺物整理参加者）石田正男・井尻哲雄・伊藤俊夫・大船孝弘・清水良夫・富成哲也・長谷憲治・山内康夫・米山久夫。

なお、遺跡・遺物の撮影は高橋猪之介氏が担当された。

② この古墳の南に位置するA1号墳（岡本山古墳）の調査は、畿内前期古墳の墳丘外部施設について新知見を加えたものであった。名神高速道路敷設に伴って前方部の一部が破壊されることになったため、大阪府教育委員会が昭和35年春、墳丘の現状実測及び前方部の一部を発掘した。ついで昭和35年夏、三島郷土史研究会が前面石の補足的調査を行なった。この2回の調査により、墳丘表面の墓石構造が判明した。（大阪府教育委員会『大阪府の文化財』1962）

## 2. 墳丘の調査

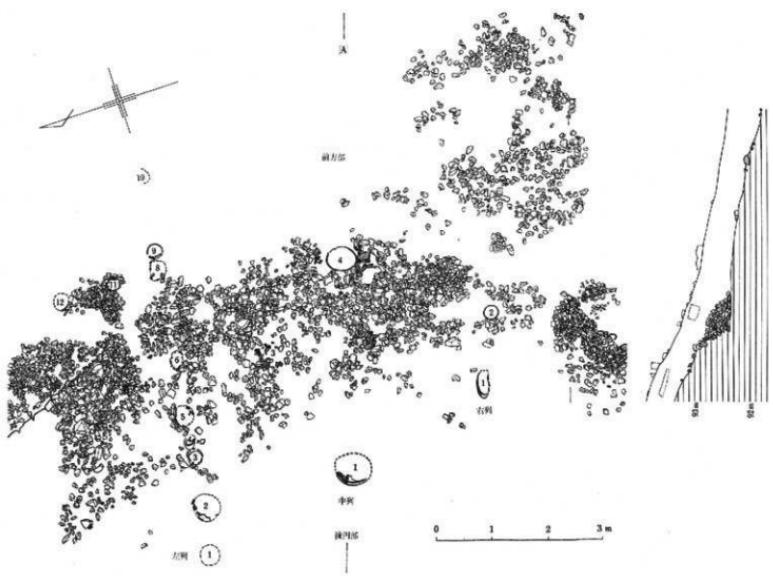
従来、墳丘の調査は内部主体の調査に従属して行なわれるのが一般であったが、近年にいたって漸く墳丘の全面的な発掘調査の実施をみるにいたった。しかし畿内における前期古墳について、丘稜上に位置する古墳がどのように構築されているのか、また墳丘の正確な原形はどのようなものであるのか等なお不明な点が多く残されている。

さて、墳丘の調査は前方丘及び後方丘の数個所を併行させながら、丘頂から丘麓へ向って、崩落した土砂・葺石・埴輪片等を検討しつつ調査していくのであるが、記述の便宜上、墳丘を第2図の如く区分し、各区ごとに大略 a 封土、b 葺石、c 売輪の順に記述することにしたい。

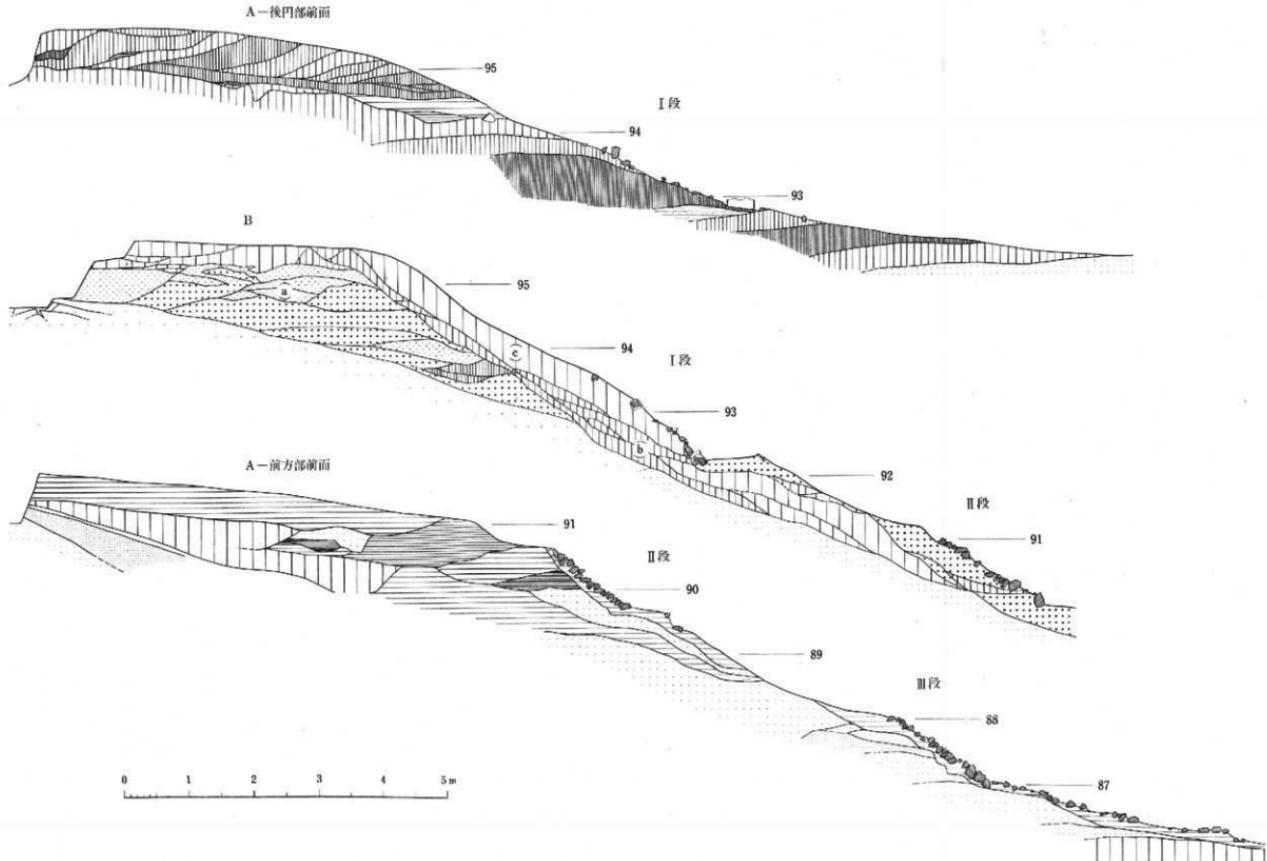
〔第1区〕 後円丘頂部には壘穴式石室とこれにはば併行重複した粘土壁の2基の埋葬施設が存する。調査の際には既に粘土壁発掘跡が溝状の凹みとなり、加えて後円丘の南北2個所は大きく地崩れしていた。そのため同頂部は著しく原形を損じ、第8区に寄った大部分の範囲は、馬の背状に地山の粘土層が露出していた。これに対して第2区に寄った方はほとんど疎をまじえない赤褐色土が広がっていて、上面はほぼ10m四方が平坦であった。ただ、第6区寄りの方が最も高く（標高95.69m）、第10区の方へ緩く傾斜していた。この平坦部には、一片の埴輪片さえ見出すことができなかつた程であるから、墳頂部の構造については明らかでない。

〔第2区〕 （第3図・第4図A）後円丘の前方部側の斜面は調査時、後円部前面と呼んだが、この部分は調査前から葺石や埴輪が露出していた。葺石上面に堆積した土砂を除くと、比較的緩やかな斜面をもつた突出部があらわれた。

突出部の右側は比較的良好原状を留めていた。1段下縁の基石列はこの部分で前方部へむけて屈折している。前方部へ屈折した部分の基石列は、現在長さ58cmを測るが、地山の削除されている状況をも考慮すると、もと1m前後であったと推定される。この部分の構造をみると、地山の粘土層を削ったあと、比較的大きな石を基礎におき、その上に径10cm前後の石を小口積みにして突出部の側面を形成している。側面の高さは現在屈折部で45cmを測るが、上端は既に流失しているから50cm余と推定される。以上のことから、



第3図 井天山C 1号塙後部前面石査測図(1)



第4図 弁天山C1号墳 墓丘断面図 (A - 後部前面, B + A - 前方部前面)

右側面には底辺1m、高さ50cmの三角形をした側面がつくられていたことになる。これに対する左側にも、同様の突出側面があったと考えられるが、現在は基石列の一部を留めているにすぎない。しかし1段下縁のテラスに敷かれた小石敷きがこの部分で終り、屈折部より1mの位置に円筒埴輪の基部が認められるから、右側とほぼ同様の側面がつくられていたと考えられる。かくして、後円部の第Ⅰ段前面には、本来幅8m、長さ1mの突出部が設けてあったことが判明した。

第2区とした部分の下半は、地山を削り残してつくられているが、上半は土を盛ってつくられている。長軸に沿って設けたAトレンチによると、葺石下縁に位置する大型埴輪は地山を掘り凹めてたてられており、この中心より斜面長約4mの間は粘度質の地山を削って傾斜面をつくっている。その傾斜度は $23^{\circ}30'$ を測る。地山の最上層は砂礫を多量に含む固い灰褐色土層であって、中央の墓埴輪に続いている。これより上の層はいずれも比較的軟かく、かつブロックごとに分断されており、層の重なり具合も地山の層序と異なった様相を呈していて、明らかに人為的に盛り上げられたことを示している。さきの大型埴輪の中心より水平距離6.7m(総高94.65m)のところで土師器の細片が見出されたことも両者を分つ証左となしうるであろう。

葺石は斜面下半部にのみ造っていたが、斜面の傾斜が前方部へ移るあたりで散漫になり、特に明確な境界を指摘できるような状況にはなかった。右半部は葺石の遺存範囲が狭いけれども小口積みの状況を良く留めていた。しかし、墳部へ転落した石が右くびれ部上面にまで広がっていて、一見前方部上面にも部分的に葺石をおいたかのように思われたが、左半部に同様の広がりを見ないこと、また散漫に点在していることなどから、これを転石として除去した。かくして確実に原位置を保っているとみられる石のみをたどると、ゆるやかに前方部へ外野する一線を得る。その線は後円丘斜面の傾斜変換線に相当し、中央部に短径40cm、長径55cmを測る楕円形の大型埴輪の基部が遺存していることと併せみると、ほぼこの線を葺石下縁の線と考えてよいであろう。葺石の大きさは必ずしも一様ではない。また特に塊石を連接して区画するといったような調所「隔線」は見出せなかった。上半部の遺存状況がよくないのは盛土のため崩壊しやすかったからであろう。

斜面には、さきの大型埴輪をはさんで対称的に埴輪が上下一列に並べられていた。左側の埴輪列は原位置を認めたもの9基であるが、もとは10基以上の円筒埴輪が一列に並んでいたとみられる。いずれも円形の基部のみであって、上部はほとんど失われ

ている。それらの大きさは径30cm前後のものと、径40cm前後のものと大略2種が認められる。埴輪個々の間隔は接してたてられているものもあって一様でない。この埴輪列が本来どのように配列されていたかということは、現在の遺存状況では十分知り得ないけれども恐らく列の上方は埴頂部の肩にまで達していたとみてよいだろう。しかし下方は葺石下縁までであったとするか、或いは下縁より2mを距てた所に唯1個原位置を保つ円筒埴輪の基部が残っており、この位置がくびれ部上縁に近いことから、さらに前方部左側上縁にも埴輪列を想定し、これに連繋していたと推定するか2様の解釈ができる。

一方、左側の埴輪列に対置して右側にも斜面に一列に並べられた埴輪列があつたらしい。現在2基の基底部を留めるにすぎないが、その間隔は約1mである。ここでも木米10基以上の埴輪が並んでいたと推定される。両埴輪列にはさまれた地域では、ききの大型埴輪のほかに、この埴輪から斜面長約4mの位置にもう一基の大型埴輪の基底部が残っている。両大型埴輪の中間に埴輪片がかたまって発見されたが、原位置に遺存しているものとは認め難い。<sup>③</sup>

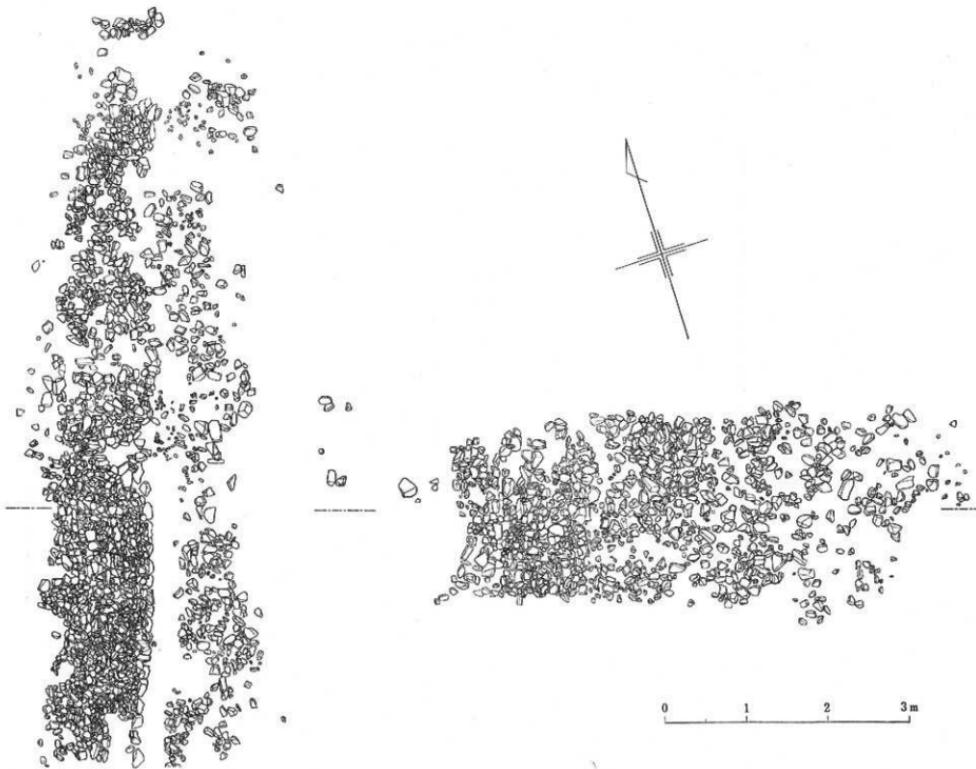
以上にみたように、後円第I段丘前面では左右両側にそれぞれ10個以上の埴輪が近接して並べてあり、そのほぼ中央にはやや間隔をあけて大型の埴輪がおいてあったことが推定できる。（第3図）

#### 註

① その中上方の1個は基底部であつて整理の結果埴輪E類としたものに相当する。この類の基底部原位置を留める唯一の例である。

② 破片接合の結果、中央列上方の大型埴輪が転落したものと判明した。

〔第3区〕 前方丘の頂部は調査前地肌がかなり露出していた。全般的に左側がやや高くなつておらず、右くびれ部付近では既述の如く崩落した葺石が散乱していた。これらの石のはかは特に指摘すべき礫や埴輪等は存しなかつた。後述するとおり前方丘には粘土塚1基が存したのであったが、高塚を探索するため頂部全域を2mごとに区画して削平した。その結果、前方丘前面肩部より9~10mのあたりで、封土の質が変化することに気付いたが、これは後日トレンチ断面に地山と盛土の相違として顧われた。長軸線上に設けた幅50cmのトレンチの断面では、地山の線は粘土塚のあるあたりから前面へむかって下降している。他方、後円丘へ寄った方は平坦に削られていて、直接地山が露出している。盛土は前端での厚さが1.5m前後とみられ、後円丘と同じように前面の低い方から築き上げてある。



第5図 井天山C1号坑前方部前面石実測図(II)

また粘土塚東壁に沿った横断面でみると、地山の最高部は長軸線より北側2m付近であって露出している。すなわち地山は左側が高く、右側にゆくほど下降している。ところで上段の原石斜面が遺存しているのは、左右両側面とも、長軸線より7、8m付近であるが、この点での地山の下降の度合は、最高所（標高91.6m）と比較すると北側で70cm南側で155cm低く、南側が大きく下降している。粘土塚の墓塚はこの地山を穿つてつくられることは後述のとおりである。

〔第4区〕（第5図・第4図A）前方部前面は調査時Ⅲ段（最上段）の葺石面が一部南側で露出し、小口積みになっている様子が知られた。上方より土砂をとりのぞき、崩落した石塊を吟味しながら葺石面を追求していった結果、3段に築成されていることが判明した。

長軸に沿って設けられたAトレンチでみると、封土の下半は地山を利用し、上半は土を盛って高くしてある。Ⅱ段の葺石のあるあたりで、地山上に黒色に炭化した有機物の薄い層が広がっていることが注意にのぼった。またⅢ段葺石の下部では地山に階段状の刻みがあって、その上に薄い土層があって葺石が置かれていたから、恐らく葺石を置く際に地山を削り、裏込めしながら葺き上げたのであろう。IV段は緩い傾斜である。

上半部の盛土はⅢ段巾位まで斜面に沿って土をおき、Ⅱ段付近から外側を高くし、内方へ傾斜させながら盛り上げてある。盛土に砂質土を利用したためか、Ⅲ段・Ⅱ段では部分的に削れているところがある。

葺石はⅡ・Ⅲ段では従20cm程度の大きな塊石を斜面の基礎におき列べ、その上に径10cmのやや小さい石を小口積みに積み上げてある。両段とも上半は崩落していて、原斜面は完存しないが、遺存部の傾斜角を測ると、Ⅱ段の傾斜角度は39°30'、Ⅲ段は34°30'である。この傾斜角度により、Aトレンチで各段の斜面の長さを復原すると、Ⅱ段は3.7m、Ⅲ段は4.5mとなる。この場合、Ⅱ段の上端はGトレンチでの現最高部92.1mを前方丘上面の高さと仮定した数値であって、前方丘上面が前面寄りできらに高く築成されていたとすると、Ⅱ段の斜面の長さは増大する。逆に、もしⅢ段の斜面長をⅢ段のそれとほぼ等しかったと仮定すれば、前方丘上面の最高部は92.6mになる。

基石列は左右の稜角が崩壊しているため完存しないが、現存基石列の長さは、Ⅱ段では13.2m、Ⅲ段で19mを測る。いずれも一直線に配列されてなく、中央で外彎している。また基石の高低差は次表のとおりである。

(単位:m)	右 塙	中央 部	左 塙	最 低 位	最 高 位
II段 菱石列	89.18	89.71	89.71	89.18	89.85
III段 基石列	86.49	86.90	86.98	86.49	87.01

菱石構築に關係があるとみられる「隔縫」ないし「石列」らしきものは、部分的には認められるけれども顯著ではなく、相互の間隔を求めうるものはない。しかし、II・III段の菱石面には、大きな石を多く積み上げたところと、小さい石を多數使用したところとがあるて、菱石面にムラを生じている。IV段の菱石は単に布陳されただけであって、特に小口積にしてあるところはなかった。これは傾斜が緩やかなためであろう。また石の大きさも径20cm前後の比較的大きいものが多い。斜面長4m前後の幅で墳丘下縁を葺いてあるが、その外縁は明確でない。

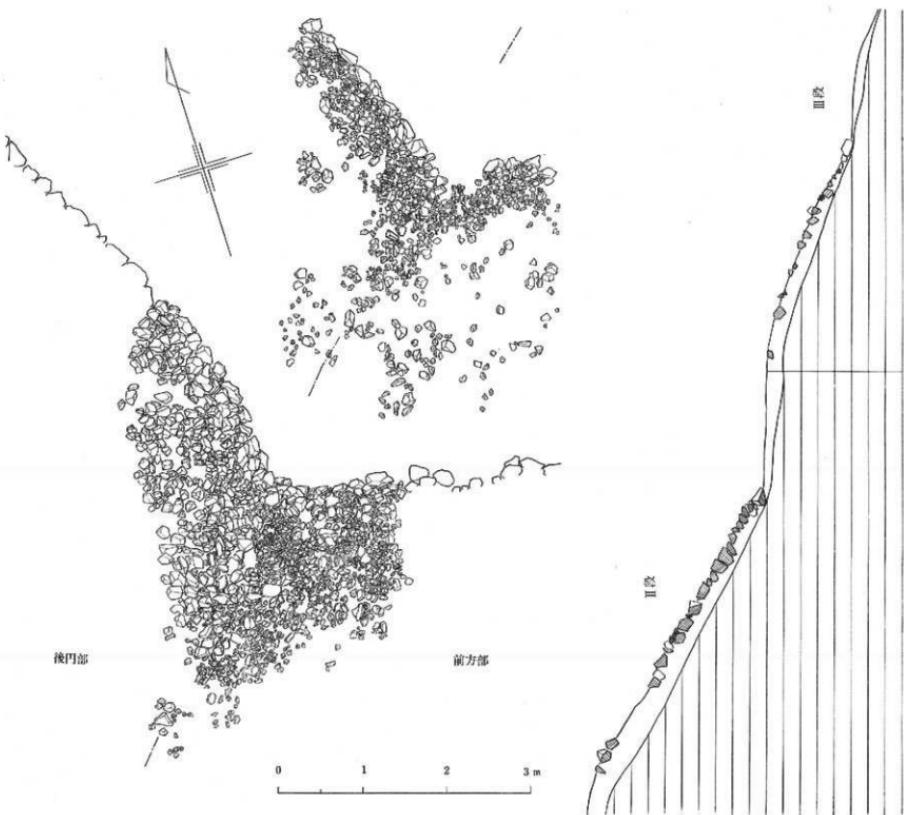
II段下縁のテラスの幅は現在50cm前後しか遺存せず、小石敷も認められない。III段菱石面の傾斜角度を延長し、II段基石列の高さで復原したテラスの幅は1.8m内外になる。IV段にはテラスと呼ぶことのできる平坦部は存せず、直接IV段菱石斜面となる。

埴輪はII段斜面からIII段斜面にかけて破片を発見したが、原位置を示すものは全くなかった。おそらく埴輪は盛土部分の地崩れに伴って崩落したのであろう。ただ、破片中に朝顔形埴輪や形象埴輪とみられる破片が少數存するけれども、総体的には埴輪の量は少ない。

〔第5区〕 左側くびれ部から左側稜角までの前方丘東北側面を第5区とする。ここでもほぼ3段に築成されていたが、最下段は上方から崩落した土砂と塊石とが混在して、その原状を明確に知ることはできなかった。特に前方丘稜角は全面的に流失し、これに近い部分は各段とも著しく混亂した状況にあった。また墳麓には後世積み上げられた粘土が堆積していた。この堆土は後円丘左前面に掘開された濠の堆土であろう。

この区域の斜面は地山を削って成形してある。地山は砂質土であって容易に掘鑿しうる。斜面の下半には厚く淡褐色砂層が存したが、検討した結果、上方より流下堆積したものと判断した。特に稜角に近い部分は堆積土中に菱石・埴輪片が多數存した。

II段斜面下縁の基石列は、くびれ部より前面へかけ、14.7mにわたって遺存し、原菱石面が遺存する幅は、くびれ部付近で最も幅広く、斜面の長さは約4mを測る。しかし中央部付近では斜面長1mで、上方は崩落して地山が露出している。H1トレンチではIII段に



第6図 井天山C 1号線左側くずれ部葉石実測図(Ⅲ)

遺存する葺石面の斜面長は1.7mで、傾斜角は35°30'、Ⅲ段は32°30'である。前方丘頂部を92.1mとすると、斜面復原長はⅡ段で3.3m、Ⅲ段で2.8mとなる。またGトレーニングでの傾斜角は33°20'である。前方丘頂部を92.1mとした場合、葺石斜面の復原長は3.3mとなり、崩壊した部分は僅少であることを知る。基石は大形の塊石を4~5cm掘りこんで据えてある。石の並びはほぼまっすぐ列んでいるが、平面的には2~3mを単位としたゆるやかな波状を呈している。また立面上には前面へむかってわずかに下降している。すなわち、くびれ部基石の高さが90.33mであるのに対し、中央部では90.22m、遠存部東端で

(単位m)	くびれ部	中央部	東端	最低位	最高位
Ⅱ段基石列	90.33	90.22	89.84	89.84	90.33
Ⅲ段基石列	89.24	88.91	—	88.91	89.24

89.84mを示す。この下降率は右側の同部と比較するとき極めて小さい。葺石は小口積みになっているが、後円丘の同斜面と比較すると、使用されている石の大きさはやや小さいものが多い。

Ⅲ段の基石列はくびれ部より前面へ7.2mしか遺存せず、亦斜面の葺石の遺存範囲もくびれ部付近で斜面長2.3mの幅を留めているが、他の部分では基石列より上方へ30~40cm程度しか遺っていない。基石の配列はくびれ部より3.25mのところで外方へ0.4m屈折し、前方へ延長されている。そして稜角に近い部分は大きく崩壊していて原状は知りえない。Ⅳ段斜面の遺存状況は極めて良くないが、くびれ部付近では基石列と推定される石列が部分的に存在した。しかしこの上方に積まれたはずの葺石が全く見出せなかつたから、果してこの石列を基石と認めてよいかどうか疑問である。前方部稜角に近いところでは広範に葺石群がみられたが、転落した石との区別が困難であり、この区と対象的には11区の葺石面下縁で見出したような基石の配列は存しなかつた。また堆積した砂質土や石群中から、円筒埴輪・形象埴輪の大形の破片が多数出土したが、原位置にあるものは全くなかつた。これらは上方に樹てあった埴輪が転落したものであろうが、この部分に破片が多数集中していることから、或いはこの丘麓にも本来埴輪が存したかもしれない。

Ⅱ段のテラスはくびれ部付近では1mの幅を示し、Gトレーニングで70cm、II 1トレーニングで1mである。前端では全く崩れて遺存しない。Ⅲ段下縁のテラスはくびれ部付近で約80cmであり、基石列屈折部では幅30cmを測る。Ⅳ段のテラスはほとんど不明である。

〈左くびれ部〉（第6図）くびれ部の葺石遺存状況は他の部分より比較的良好的な状態に

ある。前後両丘斜面の接する隅角部に設けたトレンチの所見によると、Ⅲ段では葺石面の傾斜角が30°強であるに対し、地山面の傾斜角は28°30'で、両斜面の傾斜は近似している。同様のこととはⅢ段の同部でも指摘できる（葺石面22°、地山面20°）が、地山と葺石との間に介在する裏込めの土砂が20~10cmの厚さであることをも考慮すると、くびれ部の外形は地山を削取る際に大体の形が造られたとみてよい。しかし、厳密に云えば、地山傾斜面よりも葺石によってできあがる面がいくらか傾斜度が大きくなる。このような差は他の部分でも屢々見られるが、恐らく葺石構築の施行される裏込めの土砂の入れ具合で惹き起されるのであろう。

Ⅲ段では後円丘斜面に積み上げられた石の大きさが径20cm内外の大きい塊石を多量に使用しているのに対し、前方丘斜面は径10cm前後の石を多量に積みあげてあって、一見して両斜面の相違を指摘できる。しかも両斜面の接する隅角では大形の塊石がほぼ一列に並列して積みあげられている。このような石列はⅢ段の同部位にも残存している。しかし顯著ではない。恐らくこの石列は墳丘の葺石面にまみられる「隙縫」と同様のものと考えてよいであろう。

くびれ部のテラスは屈折部であるため幅広く残っていたけれども、小石敷や埴輪等は何等見出せなかった。

〔第6区〕 後円丘の北側は大きく崩れてその約半分近くを失っているので、左側のくびれ部からこの崩壊部までの間を第6区とする。この区域は調査時後円部左側前半と称した。墳丘の原状を追求した結果、4段の葺石斜面を認めたが、この地区の中央部には疊が掘られてあったため、Ⅱ段斜面以下では幅2~3mが破壊されていた。調査の際、疊跡は深さ2m内外であった。この疊にあらわれている地層は砂質土の地山であって、盛土の形跡は認められなかった。作業中、墳丘表面で除去した土砂をもって原状に近く埋めたことを断っておく。

さて、この疊跡壁面や塚の北側に近接して設けたBトレンチ及び北側の崩壊部分にあらわれた状況から判断すると、墳丘に利用されている丘陵はもともと北側にいくらか張り出していたと考えられる。このことは調査当初第10号墳と呼んだ北側の起伏部がこの古墳の後円丘に接続する位置にあることからもいえる。

ところで墳丘表面の葺石等を全部露呈したあと、墓石列のつくる円弧には直交するように設定したBトレンチについて、以下墳丘の構造を観察してみよう。（第4図B）

トレンチの底面にあらわれた地山は砂質土であり、その傾斜角は大略 20° 内外である。

B トレンチの断面にあらわれた現地山面の最高部は94.8mを測る。頂部からゆるやかに下降する地山の上半部は青灰色砂質土で、92m以下は暗黄色の砂質土である。上半部の94m付近には地山・盛土の境目に薄い赤褐色の礫化鉄の層が認められた。93m付近で小さな段になっているが、この段は上方の盛土と関係がある。また90m付近ではほぼ水平となり、II段基石上に達する。これより下方はすべて暗黄色の地山であるが、表面より深さ 40cm 内外はやや赤味を帯びておりやや固い。

盛土は墳頂部が最も厚く160cmを測る。トレンチの断面にあらわれた盛土は、大きくわけて黄色砂質土（図に点で表わした部分）と赤褐色粘土質土と（図に縦線で表わした部分）に分かれ、それぞれまた細かい界線で区分される。このように細分される各ブロックの重複関係をたどることによって、後述のように盛土作業がどういう順序で行われたかを知ることができる。

最初、後円部第I段の基部に近い93m付近から土砂をおきはじめ、これと同時に、93mから90mあたりまでの地山面が削りとられ、大略 95.3m付近まで盛上げて後円丘の概略を築いた（a 盛土群）。ところで 93m 付近では地山の小さな段を基部とする傾斜面が認められるから、一見この面で盛土斜面の調整が行なわれた可能性がある。再び赤褐色粘土質の盛土が I段基部付近から斜面に沿っておかれはじめ、II段の基本となる部分がつくられるとともに、さきの砂質土からなる I段の盛土を蔽うた（b 盛土群）。そして、その後に I段斜面から頂部にかけて赤褐色粘土質の上（c 盛土群）が厚く置かれて丘頂の平坦面がつくられた。最後に II段に黄色砂質土をおいて、II段の形がつくりあげられた。その際、I段下縁のテラス上面を整えるために、いくらか削ったことも考えられる。このようにして出来上った墳丘の斜面に下方から葺石が積まれていったのであろう。

葺石は他の地区と比較して良く残っていた。この地区的斜面は4段ないし5段に分かれると、最も低いV段は小口積みになつてないため、上方より崩落した転石とも考えられる。他の段は基石列がはっきり認められた。IV段下縁の基石列が認められたのはこの地区だけであって、前方部斜面へ及ぶものかどうかは塙のため破壊されていてわからない。各段の基石列の高さをくらべると次表のとおりである。

下記の表によつて知られるとおり、いずれの段でも、くびれ部が高い。また低い部分はいずれも B トレンチの付近であつて、20~30cm の高低差を示している。

(単位m)	くびれ部	中央部	北端部	最低位	最高位
I段基石列	92.68	92.51	92.50	92.42	92.68
II段基石列	90.33	90.33	90.19	90.09	90.33
III段基石列	89.24	89.09	(88.94)	88.93	89.24
IV段基石列	—	—	86.0	—	—

基石列は円く配列されているが、同一の円周上にあるのではなくて、5m内外の長さをもって区切ることのできるような弧が連接されている。この円弧は恐らく葺石の積み上げ作業の単位を示していると推定される。たとえばII段斜面の葺石をみると、くびれ部から5m1単位の範囲に使用されている葺石は、径15~20cmのものが多いに対し、つきの1単位には10~15cmのものが多く用いられているという違いがある。しかし両単位の間には「隔線」と呼ぶような石の配列は認められない。また葺石面の上部が崩落しているため、このような相違が斜面上端まで及んでいたかどうかは知り得ない。I段斜面の葺石はかなり良く造っていたが、部分的には二重に積まれているところがあった。特にI段前面の造り出し部からBトレーナ付近までの間は、基石列もやや複雑な凹凸をもつ配置をしてあった。

テラスはI・II・III段の各下縁をめぐっているが、V段とIV段の下縁にはテラスがあつたかどうかは疑わしい。もしV段斜面の石群を板石でないとすれば、テラスは当初からなくて、前方丘前面下縁部と同様の構造であったと考えられる。現在、造存しているテラスはいずれも肩部が崩壊しているため、本来の幅員を計測できるものはない。しかし葺石面の傾斜角が一定であると仮定して、各段ごとに復原的に求めると、次表のような数値を得る。

	傾斜角	テラスの幅(復原値)
II段斜面	34°	1.7m
III段斜面	39°	1.65m
IV段斜面	29°30'	0.3m
V段斜面	20°	0.3m

I段斜面の傾斜角は32°30'内外であるから頂部を95.7mとした場合でも斜面の実長は約6mで最も大きく、II段は約4m、III・IV段はそれぞれ約2mとなり、その比は3:2:1:1である。

I段下縁のテラス上面には、I段前面の突出部から約6mの範囲に小石を敷いてあった。

この石敷は突出部に近いところではまま2～3重になっていたが、大体は1重に敷いてあった。このテラスのもっと西の部分や下方の各テラスにも敷いてあったかどうかは明らかでない。

小石敷の間に基部のみを留めた円筒埴輪が4個分見出された（南側から11、12、13、14の番号を付して呼ぶ）。その中3個（11～13）は突出部の近くで、他の1個（14）はI段下縁テラスの西端で見出された。11は既に述べたように造り出しの下縁隅角部にあって重要な意味をもっていると考えられる。この埴輪は葺石列屈折部から外方へ1mを隔てた位置に樹っており、その円形の基部の周囲には丁寧に小石をめぐらしてあった。このことからも、テラスに散乱する小石が初めから敷設されたものであることを知ることができる。なお内部には小石は見当らなかった。11の北へ1m隔てて12の円筒埴輪がある。この位置も葺石列より約1m離っている。13は痕跡程度であって、やや明確でなかったが、基石列より約0.8m離れてたてられ、12との間隔は1mを測る。14は西端に唯1個あったのみであるから、隣接円筒との相互間隔を求められないが、基石列との間隔は約1mであって、11とは直線上約13mを測る。これから考えて、I段下縁テラスの埴輪は基石より1m外方に樹てられ、相互の間隔は1m前後であったと推定される。II段以下のテラスで埴輪の原位置を留めているものはなかった。埴輪片の出土量がI段斜面からII段斜面にかけて多量であったことも併せ考えると、本末、埴輪が樹列べられていたのはI段下縁のテラスまでであったろう。

〔第7区〕 北側へ崩落した地区で、その下方には幅約2m、長さ約10mの防空壕跡が存在した。壕の壁面は黄褐色の砂質土からなる地山である。

崩壊部の北側の谷斜面がややふくらみをもっているのは地にりによって生じたものであろう。

〔第8区〕 後円部の北と南の崩壊部に挟まれた西北の部分で、調査時は後円部背面と呼んだ。この部分は北の尾根に最も近く、前方部とは正反対の位置に当る。この地区的北側には階段がつくられていたため損壊したところもあった。また南側の崩壊部（第9区）に寄ったところは崩落した葺石と土砂が混在して原状を留めていない。

表土を除去した結果、葺石が遺っている斜面が3段ほど見出された。各テラスの高さは他の地区とほぼ等しく、後述の第10区の状態等から判断して本末3段になっていたと考えられる。

墳丘長軸に沿って設けたAトレンチ及びその北へ20°の角度をもって断ち割ったDトレンチによると、現在葺石が遺存している部分は地山を削って段をつくり、葺石は直接地山上に据えてあることが判った。葺石の造っていないところは地山が露出しているが、これは恐らく盛上部分が流失したためであろう。Aトレンチでは、葺石を除くと薄い黄灰色の土があり、その土の下には前方部前面でみたと同じような地山を削った段状の凹みが認められた。上記のような状況にあったから、盛上と認めうるほどのものはなかったけれどもI段・II段の葺石裏側には裏込めの土砂が薄く存した。もっとも第9区の崩落部に近い部分では地山上に積まれた盛土が遺存しているのを認めた。

I段下縁の葺石列は現在約7.5m、II段は約13.5m、III段は約7.5mほど遺存していた。各基石列の高さを遺存部で計測した結果は次表のとおりである。

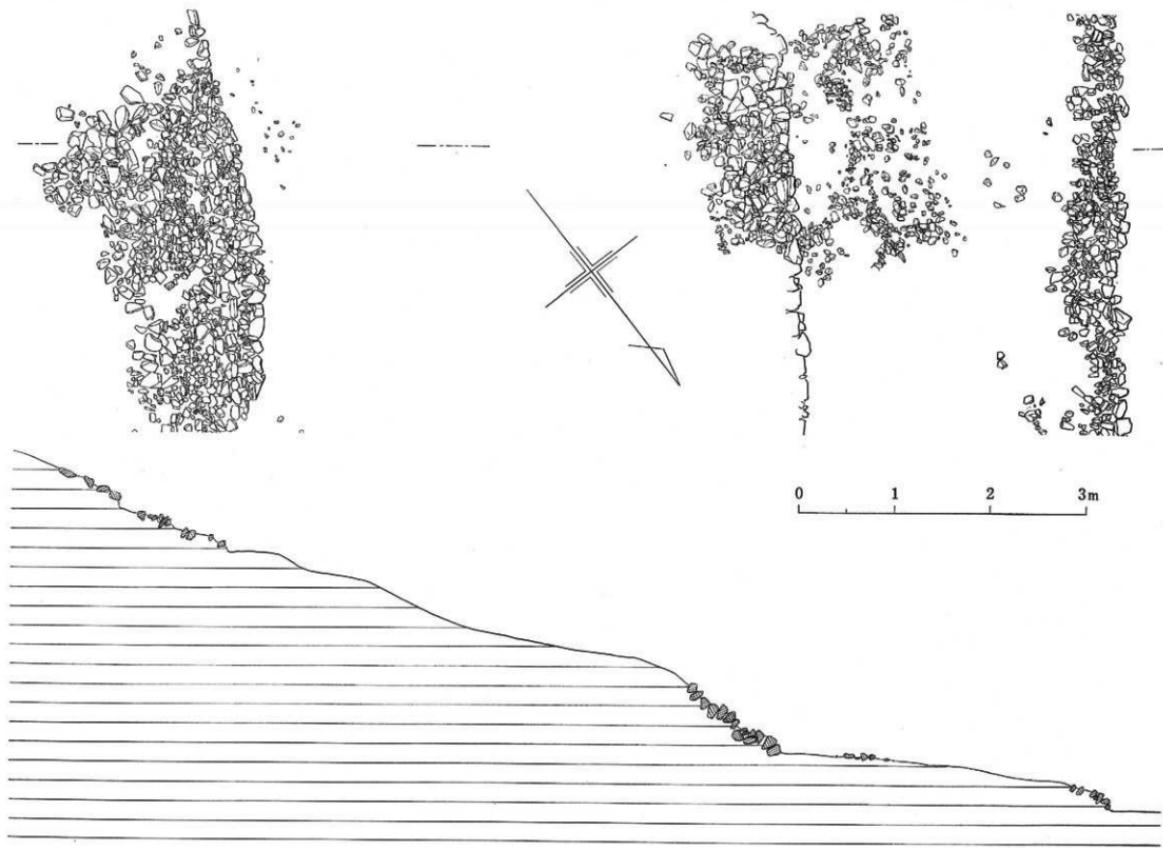
I段下縁基石列及びII段下縁基石列では南側へ低くなる傾向があり、III段では逆に北側へ低くなっている。これは後円部をめぐるテラスが尾根頂部では高く、南北の谷側ではや

(単位m)	北端	中央	南端	最低位	最高位
I段下縁基石列	92.73	92.69	92.63	92.48	92.73
II段下縁基石列	90.38	90.47	90.28	90.28	90.47
III段下縁基石列	89.69	89.91	—	89.69	89.91

や低くなっていたことを示唆している。

I、II段下縁の基石は径20cm内外の石を用いてあるが、III段のものはやや小さいものが多く、部分的には単に葺石下縁をそろえたにすぎないものさえある。ここでも基石列は円弧の連続した形にならべられているけれども、1単位の円弧の長さはほぼ3m前後であって、III段基石列では長さ約1.5mの円弧も認められる。

原葺石面が現在造っている幅は、I段は2m、II段は1.2m、III段は0.5mであって、III段斜面が小であるのは本来III段の高さが低くつくられているからである。最も低いのはDトレンチ付近であって、0.6mを測る。また斜面に葺いてある石も、I・II段は大きな石がみられるのに対し、III段斜面では小さい石が多い。葺石斜面の傾斜角をAトレンチの位置でみると、I段は31°、II段は32°、III段は33°(Dトレンチで計測)を測るが、これによって復原した各段の斜面の長さはI段では約6m(墳頂を95.7mとしたとき)、II段は約4m、III段は約2m(Dトレンチで復原)となる。これは、さきに第6区Bトレンチでみたと同様の数値である。



第7図 弁天山C1号坑 後内部背面露石実測図(IV)

また各テラスの幅はⅠ段下縁で約2.4m、Ⅱ段下縁で2.6mとなる。ところでⅡ段下縁のテラス上面には小石が一重に敷いてあった。小石敷の違っている幅は最も広いところで1.15mを測るが、肩部付近が損傷しているため、Ⅲ段斜面の葺石との続き具合は判明しない。他のテラスでは同様の遺構は認められなかった。

埴輪片もⅡ段下縁のテラスが多かったが、原位置を確認しうるものはなかった。ただ、破片が散乱している箇所の間隔をみると、0.8m、1.5m、3.0mといった程度である。この上のⅠ段下縁のテラス及び葺石面でも少量の埴輪片を認めたが、Ⅲ段基石列の外方では殆んど認められなかった。

Ⅲ段下縁基石列の外方は表土を除いて調べたけれども、單にゆるやかな傾斜面になっており、特に注意すべき遺構は認められなかった。傾斜面の端は埴籠をめぐる道のため削られ幅4m前後の崖になっている。この道を距てた向い側はほぼ同じ高さの尾根が続いており（最も高い部分で92.1m）、両方の傾斜から判断すると、もともと道のある部分が低くなっていて、道幅の拡張に伴って3~4m低くなつたと推定される。もしそうだとすれば後円部の背後を特に切削加工するようなことはなかったとみられる。

〔第9区〕 この区は南側へ大きく崩れた部分であつて、地にりのため後円部の約4分が失われている。北側の崩壊部と比べるとその傾斜は緩い。さきに第8区の南縁崩壊部に近いところが盛土であること、さらにこの斜面の根部を通る道には現在でも地下水がにじみ出でていて、雨後には崖面の上砂が崩れることがあることも参考するなら、恐らく崩壊した部分は殆んど盛土であった可能性がある。またこの部分は、後述のように、後円部埋葬施設の排水溝が導き出されている部分であったから、これもまた墳丘の崩壊を促す一因をなしたかもしれない。

〔第10区〕 調査時、後円部右側前面と呼んだ部分で、さきの崩壊部から南側くびれ部までの間をさしている。斜面全体に茂生した草木を截り表土を除くと、3段の傾斜面があらわされた。斜面の葺石の遺存状況はいずれも良いとはいえないけれども、円形に配列された基石列は良く違っており、各基石列の描く圓錐は小円錐の連結されたものであるとはいひも同一中心から描かれたかのように整然としていた。実際、Ⅲ段下縁基石列を基準に6区、8区、10区の各区から求めた円の中心を使用すると、この区の3つの基石列がつくる円錐は殆んど同心円であつて、しかも6区の同位基石列もまたは同じ円周上にのることは注目してよい。

ちなみに中心から各基石列までの半径の水平距離を示すと、I段下縁では13.8m、II段では18.7m、III段では21.9mを測る。

さて、崩壊部に近いこの区の西端で、各基石列とほぼ直交する位置にCトレーニングを設定した。これによると、現在遺存しているのは殆んど地山であって、この状況はくびれ部に近い部分でも同様であった。ただI段では、葺石の遺存する部分は地山であるが、墳頂部に近いところは僅かな盛土部分が認められた。Cトレーニングの断面にあらわれたところではI段下縁の基石から斜面長約0.8mのところまでは地山に直接葺石を積んでおり、その作られた葺石斜面もやや急であるが、これより上方は傾斜を変え約35°内外である。墳頂部に近いCトレーニング上端の現地表の高さは94.95mであるが、これより1m下降したところまでの勾配は大体10°、さらに1m下降すると20°程度の勾配である。ところで6区のBトレーニングの断面でみられる地山最頂部は94.8mであるから、ほぼ似た位置であるとみて、同様に計測してみると、上から1mの範囲は約12°を、その下の1mの範囲では約18°の勾配を示しており、B・C両トレーニングで見る限りほぼ似た勾配を示している。このことから恐らくCトレーニング付近の砂礫を含む固い地山の現表面は、それほど多く流失しているとしてもよいであろう。もしそうだとすると、もとこの地山面にはBトレーニングと同様の盛土が積まれていたと想定される。その盛土の下端と考えられ淡黄色の土が地山の切込み内にあって、この上に葺石が小口積になっている状況がCトレーニングI段の状態であろう。この地山の切込みがどのような意味をもつかは断定できないけれども、或いはBトレーニングI段a盛土群の斜面下縁で地山が削られていることと対応するものであるかもしれない。だとすると、I段の盛土が行われる段階で、予めその下縁が切りそろえられたことを推定できる。第10区のII段はくびれ部に近い部分を除いて大幅に崩壊しているため、現在は地山が広く露出し、その上面に崩落した転石が散乱している。現在葺石の遺存する部分は墳丘築成に伴って地山が削りとられたことを示しており、II段斜面の状況はIII段においてもほぼ同じである。ただII段裾部の地山の切込み斜面はI段裾部の同部と似た傾斜度(43°~44°)であって、共にこの部分が高さ50cm程度に削りとられたとみられる。これはテラスの幅を括げることにもなるが、この部分に葺石が2~3重に重ねられていたことを併せ考えると、葺石下縁を強固にするための配慮であったとも考えられる。II段裾部では地山を階段状に刻んだ刻目が遺存していた。

以上のように地山がほとんど露出していて盛土は少部分にしか認められなかったけれど

も、葺石の下方には裏込めの土砂が薄く存した。

葺石はいずれも小口積みになっているが、先述のようにⅠ・Ⅱ段裾部では重複して積み上げられた部分がある。その場合、内側の葺石はやや小さいものが多い。基石は大きい石を擲んで列べているが、Ⅲ段下縁のものはやや小さいものが多い。各段の基石列の高さは次表のとおりである。

(単位m)	西 端	中 央	くびれ部	最 低 位	最 高 位
第Ⅰ段 基石列	92.31	92.45	92.35	92.31	92.45
第Ⅱ段 基石列	90.17	90.13	90.30	90.12	90.30
第Ⅲ段 基石列	89.07	89.04	88.99	88.99	89.15

これによると、Ⅰ・Ⅲ段は中央部が高く、Ⅱ段は中央部がやや低い。

基石列は他の地区と同様に小円弧が連続された形に配列されており、Ⅰ段は2.5m、Ⅱ段は3~4m、Ⅲ段は4mごとに区切ることができる。さきに第6区でこの円弧は葺石の積み方と関係があることを推測したが、この区の第Ⅱ段斜面の葺石をみると、遺存する葺石面は三角形を呈している。そして、さきの小円弧はこの三角形の下辺に相当し、しかもこの三角形の遺存部では、小口積みに積まれた個々の葺石が三角形の両斜辺を思わせるように、斜上方に積み上げられた箇所がみられる。遺存状況が良好でないため、すべてにわたって指摘し難いけれども、葺石の遺存範囲が三角形を呈しているのは、偶然このようになったのではなくて、葺石を墳丘斜面に積み上げる際、基石列の各小円弧を底辺とした円錐斜面を基本として構築していった結果、このような遺存状況を呈するに至ったとも考えられる。

さて、各段の葺石遺存部によって傾斜面を求めるに、第Ⅰ段は35°内外、第Ⅱ段は30°30'、第Ⅲ段は35°を測り、墳頂部を95.7mとすると第Ⅰ段葺石斜面の復原した長さは約6mになり、Ⅱ段は約4m、Ⅲ段は約2mとなる。

Ⅰ・Ⅱ段下縁に遺存するテラスの幅は30~40cm程度にすぎないが、上記の傾斜角によって復原すると、Ⅰ段下縁で1.8m、Ⅱ段下縁では1.5mになる。Ⅰ段下縁のテラスで突出部に近い部分と、Ⅱ段下縁のテラスでくびれ部に近い部分には小石敷が認められた。前者は薄くて小範囲であるが、後者は2~3重に敷かれてやや広く、くびれ部より約4mの範囲に拡がっている。

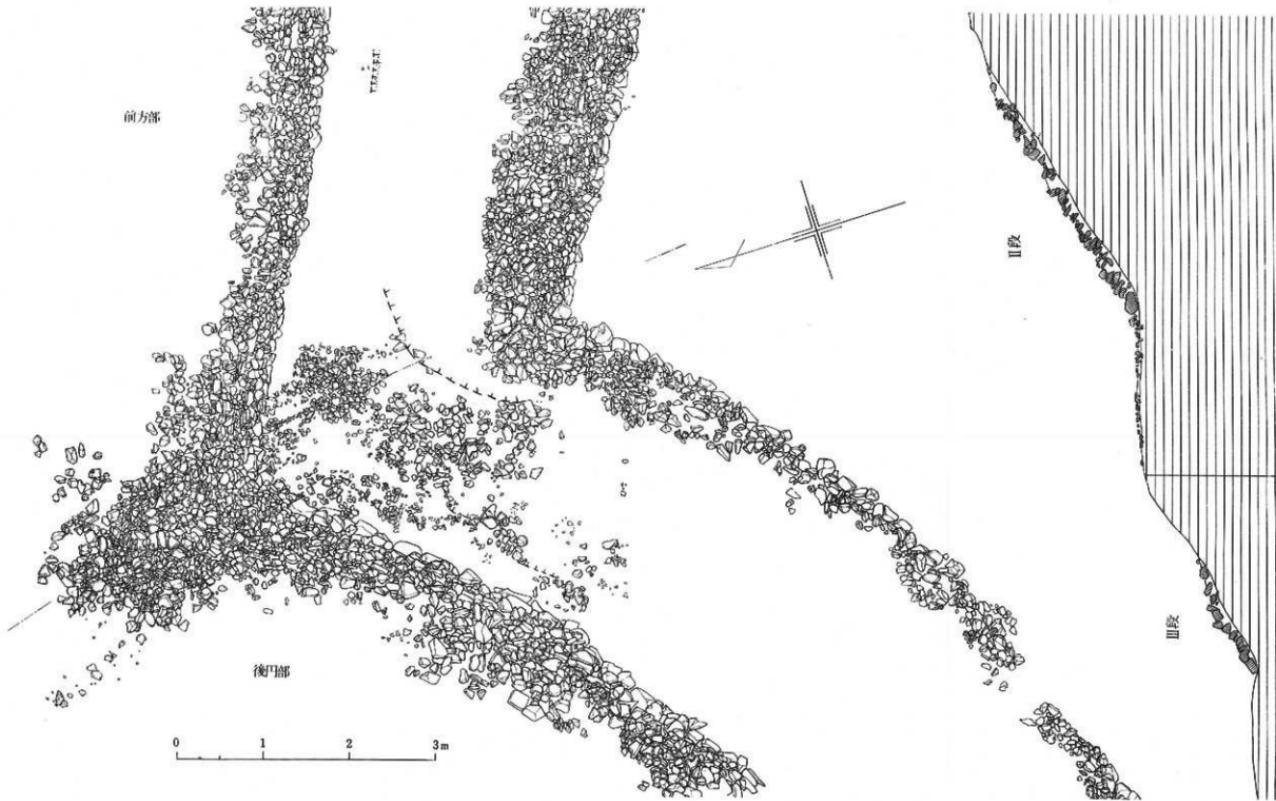
Ⅰ・Ⅱ段下縁のテラス及び斜面には埴輪の破片が多数堆積していた。なかでもⅡ段下縁のくびれ部に近い部分は特に多く、円筒埴輪のほか形象埴輪の破片も多い。斜面の葺石間

にまま埴輪片を見出したが、原位置に留まっていると認められるものはなかったから、これらは墳頂部及びテラスに樹ててあったものが倒壊崩落したものであろう。

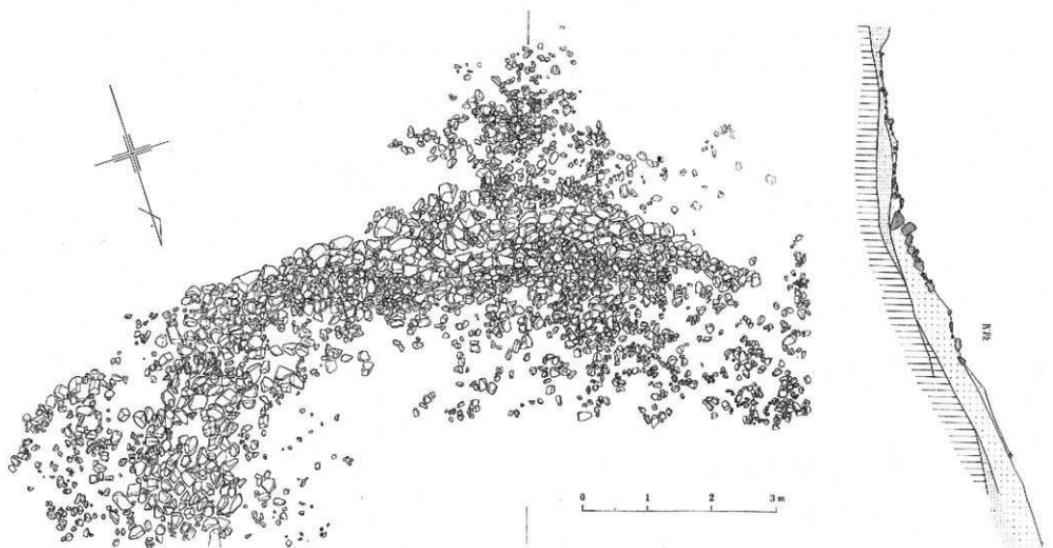
Ⅲ段下縁より外方は、厚さ15cm前後の表土を除くとゆるやかに傾斜する地山の平坦面が拡がっていた。この平坦面は恐らく墳丘築成の際、削平されて生じた平坦面であろう。この部分には特記すべき遺構は何等認められなかつた。

〈右くびれ部〉（第8図）調査前、くびれ部は崩落した葺石や土砂が厚く被り、灌木が繁つていて、くびれ部の形状は漠然としていた。くびれ部の堆積土を除くと良く遺存した葺石斜面があらわれた。なかでもⅡ段のくびれ部は大部分が原斜面をとどめていた。後円部と前方部の両斜面が接する隅角に設けたトレンチでは、葺石直下は固い地山であった。葺石の裏には積み上げに際してつめられた僅かな土砂が存したにすぎない。葺石はまず大きな石（径20～30cm）を基礎に据え、それから上方へやや小さな石（径20～10cm）を小口積みに積み上げてある。Ⅱ段の墓石では斜面の下縁に径25cm余の石が平坦面を上にして据えてあった。またⅡ段の隅角部では石を2～3重に積み、互に間く噛み合うように積んでいた。石の組み方からみると、前方部と後円部の両斜面は、この隅角部を低位として、この部分から斜上方へ積み上げていったとみられる。

Ⅱ段葺石斜面の傾斜角は32°30'、Ⅲ段では34°であり、Ⅱ段上面を92.35mとすると、復原斜面長はⅡ段で3.8m、Ⅲ段で2.5mとなる。Ⅱ段下縁テラスの幅は現在1.6mほど遺存しているが、本来1.9m内外であったと考えられる。しかもⅢ段の葺石の厚みが水平的には30cm前後であるから、現存幅員は原状に近いと考えられる。Ⅱ段下縁のテラス面には小石が敷いてあるが、小石は2～3重になっており、隅角に近い程厚い。埴輪片は形象埴輪、円筒埴輪片が多数出土したが、原位置を示すものは全くなかったから、特にこの部分に埴輪が樹立されていたかどうかは判らない。大多数の破片は恐らく上方より転落したものであろう。Ⅲ段の葺石は下方に斜面長1.5mほどしか遺存していないが、隅角より後円部寄りでは、斜面上縁に小口積みになった葺石面があつて、肩部の原状を或程度知ることができる。これによるとテラス上面の小石敷と斜面の葺石とは漠然としていて、特に一線をもって割するほど明確な界線は存しない。しかし、こうした状態が他の肩部にも及ぼしうるかどうかは分明でない。Ⅲ段基石列の外方は10区の外城で述べたように地山が平らに削られていて特に記すべき遺構は存しない。



第8図 井天山C1号墳 右側くびれ部石実測図(V)



第8図 弁天山C1号墳 前方部右側後角石実測図(VI)

### 註

① 但し、6区ではⅠ段下縁基石列は、造り出し部へ屈折する部分と、北端部が円にのるだけで、その中間部分は円周より内方にあって一致しない。また8区はいずれも円周の外方にあって、この古墳の後円丘が本来橢円形の平面であったことを推定させる。

〔第11区〕（第9図）調査時、前方部右側と呼んだが、ここではかなり厚い崩土の堆積がみられた。はじめ葺石遺存状況を探索するために設けたbトレンチでは、Ⅱ段下縁の堆積が最も厚く、現地表面から葺石面までは深さ1m前後であった。ちなみに葺石の下縁で原墳丘表面と現地表との水平面での差をみると3.5mとなる。

堆積上を除くと、くびれ部寄りでは2段の葺石斜面があらわれたが、前方部中程から前面へかけては3段の葺石斜面があらわれた。Ⅱ・Ⅲ段はいずれも上半部が崩壊して地山が露出していた。くびれ部の隅角から前面へ約5m距たあたりからⅣ段の葺石面がはじまり、それは前方部前面のⅣ段葺石面につながっていた。くびれ部寄りでは、地山を削った上に直ちに葺石をおいていたが、稜角に近い部分は盛土が認められた。Ⅱ・Ⅲ段下縁の基石列はほほまっすぐに配列してあるが、注意してみると5mを1単位とするようなゆるやかなふくらみが認められる。各基石列の高さを示すと次の表の通りである。

（単位m）	くびれ部	中央部	東端	最低位	最高位
Ⅱ段下縁基石列	90.30	89.90	89.20	89.20	90.30
Ⅲ段下縁基石列	88.19	88.52	88.87	88.87	88.70
Ⅳ段下縁基石列	—	88.63	83.40	83.40	88.63

Ⅳ段の葺石面は必ずしも良く造っているとは云えない。発掘に際して特に落石との分離が困難であった。しかし稜角付近では径40~50cmの大きな石を葺石斜面下縁にならべ明瞭に墳丘の下縁を割してあった。

さて、この区ではG・H・J・Kの4つのトレンチを設けたが、Gトレンチでは地山を削ってつくった2つの斜面が認められ、葺石はこの地山面に直接積まれていた。現在遺存する葺石面はⅡ段で斜面長1m、Ⅲ段で1.8mであり、その勾配はⅡ段葺石面で39°40'、Ⅲ段のそれで35°30'である。もし、前方部上面を92.1mとすると、Ⅱ段斜面の長さは約3m、Ⅲ段で約2.5mとなる。Ⅲ段下縁の基石列より外方は平坦な地山面がゆるやかな傾斜で下降しており、薄い表土(10~20cm)下には特に遺構は認められなかった。

Gトレンチの東7mのところに設定したHトレンチでは3つの葺石斜面が認められた。いずれの斜面でも遺存する葺石は地山上におかれている。葺石面の傾斜角はⅡ段が42°、

III段が $28^{\circ}30'$ 、IV段が $12^{\circ}$ である。II段の傾斜が急であるのは、さきに10区で指摘したように、テラスの幅をつくるためか或いは葺石斜面の下縁を強固にするために地山に切込みを設けたためかもしれない。だとすると、この傾斜角をもってただちにII段葺石面の傾斜角とすることはできないことになる。しかし、一応Gトレーニングの例にならって、II段葺石面の復原長を求めるとき、約3.9mとなり、III段葺石面の場合は約3.1mになり、IV段葺石面は現在の幅2.1mとさして変わらないと考えられる。また、I段下縁のテラスの現存幅員は0.8mであるが、復原して得られる数値は約1mになる。これは5区のHトレーニングのところで求めたII段下縁テラスの復原数値と殆んど一致する。III段下縁には基石列は認められるがテラスではなく、直ちにIV段の葺石面が接している。またこのトレーニングの位置ではIV段下縁の基石列は認められなかった。

Jトレーニングは稜角部に設けたトレーニングであって、墳丘長軸線に直交する方向で設定した。このトレーニングでは主にIV段斜面とその外域との関係を知ることができる。この位置になると、地山上に盛土が認められる。IV段の裾部における地山は暗褐色の粘土質土崩であって、その傾斜角は $25^{\circ}$ 内外である。それに対し、IV段基石より外方は平坦になり、さらに基石から2m外方では緩やかに下降している。恐らく地山はこの部分ではいくから削られたとみられる。

地山には砂質の盛土が約30cmほど加えられ、この上に葺石が小口積みに積まれている。基石は径30~40cm内外の大きな石を用い、その外方には小さな石が散乱していた。現在遺存している葺石面での傾斜角は $26^{\circ}$ 内外で、地山面の傾斜角と近似する。

稜角部に設けたKトレーニングでは、同部の上方の大部分が流失しているため、裾部しかわからない。葺石は下端より斜面長約2.5m程度遺存するにすぎない。上方の崩壊部に露出している土層と同様の土層(地山)が葺石遺存部の直下にもあって、葺石が直接地山上におかれていることを示している。もっとも、基石より外方は3mほどの平坦面があって、この平坦面から先は更に下降しているから、ここでもまたJトレーニングでみられたと同様に墳丘築成に伴って、地山が削られたことが考えられる。基石に使用されている石は径約50cmもある巨大な石が据えてある。このトレーニングから西へ約8mほどの間は葺石の外縁が明瞭である。一方葺石斜面では大きな石の多い部分と、小さな石の多い部分とがある。こうした状態は4区III段葺石面や8区の葺石面などでもみられる。この区の裾部に巨大な石が目立って多く使用されているのは、稜角部の裾部を強固にする意味から大きな石

が選ばれたのであろう。

### 3. 内部施設

#### A 後円部堅穴式石室

後円部の、推定直径約16mの墳頂部のほぼ中央には、墳丘の長軸の方向と51.5°の角度で斜行して堅穴式石室一基を包蔵している。石室は調査当時の現状では、少しく後円部の背後に寄っているように見えたが、これは墳頂部の後面の破壊によって生じた錯覚であった。堅穴式石室は、後円丘の北側と西南側における崩壊と、古くからの石材採取を目的とする盗掘によって、いちじるしく損傷を受けていた。石室の所在する部分は、四所となり、その周辺に、板石が散乱していた。撲滅を受けた板石を除去していく、石室の全貌を追求したのであったが、構築の順序にしたがって記述を進めよう。

#### 1. 墓 塚 (図版C14・15・19)

墓塚は墳丘築成後に掘られている。墓塚は長方形をしている。墳丘および石室の破壊によって、墓塚壁は、南側と東側の一部を残すにすぎない。北側および西側は、ほとんど墓塚壁を残さず、かろうじて、下底部の隅角を認めた程度である。南壁上縁は、東から西へ下降していて、中央では、墓塚下底面と交接するばかりになっている。これに対して東の東南隅では、現墳頂から約1.5mの深さに、墓塚の下底面がある。東壁上縁はそのほぼ $\frac{1}{3}$ が、粘土梯によって、削られている。粘土梯墓塚底と石室墓塚底の深さの差は石室墓塚のほぼ中央で測ると、約0.8mであるが、石室墓塚底面は東側の現墳頂面からは、深さ約1.85mの位置にある。石室墓塚北西隅は、旧地盤の脊稜部にあたるところから、壁面の一部を造存し、その深さは約数10cmであった。

いま、墓塚の下底面によって、規模を見ると、長方形の四辺とも若干の彫みをもつていて、ほぼ中央で最大となりその東西幅は5.27m、北端幅は4.63m、南端幅4.77mを測る。同じように、南北中央の長さは10.06m、東端の長さは9.77m、西端の長さは9.31mである。壁面の傾斜角は、南壁で58°、東壁では60°あるいは61.5°が計測された。

墓塚底は平坦な底面をしているが、長軸方向のほぼ中央には圓部が南北方に長く走る。上縁の長さ10.06m、幅約1.44~1.015m、下縁の長さ約9.66m、幅1.0~0.81m、深さ0.36~0.3mの断面弧形である。すなわち、木棺が埋葬される部分を墓塚の設定の際にあらか

じめ掘りくぼめて、用意されているわけである。墓塙底面の凹所をなす最下底において、北端よりも南端付近が約0.16~0.22mほど低くつくられている。平坦な塙底面も南にいくにつれて下がっていて、その高低差は20cmをこえる。

## 2. 壁穴式石室（図版C12~16・19）

壁穴式石室の壁体の構築に先だって、排水施設と粘土床が施設される。粘土床が敷設されてから排水施設がつくられる。すなわち、粘土の上に、パラスが覆っているところがあるからである。しかし、次の点については疑問がのこる。つまり墓塙底中央に南北に走る凹所の南端付近には、粘土床の周間をめぐる排水施設と同じ用材のパラスが、粘土床下に落ちこんでいた。また墓塙底凹所の両端付近では、その部分にあたる粘土床の上面には、排水施設のパラスが存在しないか、あるいは存在しても疎で、壁体の板石間に埋められたパラスの一端とも考えられる状況であった。排水施設は墓塙下底面に接し長方形の墓塙壁に沿って、パラスを使った排水溝が四周している。ただし、今、上に述べたように、中央南北に掘られた凹所にあたる部分はパラス敷を欠いている。パラス敷は、幅約0.4~0.15m、深さ0.08~0.06mを測る。この四周するパラス敷は西南隅において、墓塙外へ抜ける排水溝へと通じている。この排水溝は下底の幅0.25mの規模をもつが、上部を欠失するとともに、1.0mの長さしか遺存していない。この範囲においても0.05mほど下降している。用材は、拳大の河原石で、チャート・頁岩・砂岩を使用している。

次に、排水溝を除き、排水溝で囲まれるべき墓塙底全面に、粘土床が敷かれる。中央の凹所では、木棺の埋置される部分は、あらかじめU字状の弧形にくぼませたらしく、その上、木棺の重圧によってゆるやかなカーブを描いている。そのほかの部分は、ほぼ水平に貼られている。厚さは、0.2~0.05mであるが、とくに、凹所の部分は、木棺の下部で0.27~0.21m、棺外北端で0.44~0.18m、南端で0.31~0.27mの厚さをもっている。

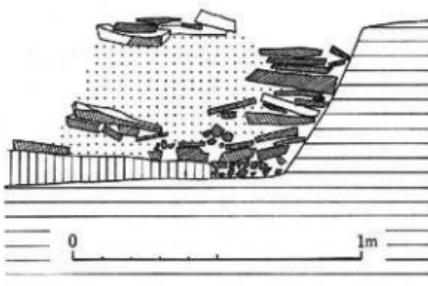
木棺は、墓塙のほぼ中央に、あらかじめ準備された粘土床の上に埋置されたらしい。木棺は粘土床に残った圧痕から考えると割竹形である。中央北寄りの部分の棺材の一部が遺存していた。（図版C31、第25図）棺材は、京都大学農学部付属木材研究所の林昭三氏に鑑定を依頼したところ、高野槇であることがわかった。木棺の粘土床にのこった圧痕によると、長さは約5.26mである。粘土床上面での幅は、北端で0.87m、南端で0.78mになる。深さは北端で0.26m、南端で0.19mであるが、南端の底は、北端の底より、約0.13m低くつくられている。中央付近において粘土床にのこった曲率から直径を求めるとき、約83

cmとなる。

木棺の両端には、木口板がおかれていたことがわかった。両端付近において、不整な粘土があり、板状片岩が凹みに落ちこんだような状況で認められたので、それらを除去していくと、赤色顔料の塗布された一面を認めた。これは、木棺の輪郭に平行し、半径にして、北端で約0.13~0.1m、南端で0.11~0.08m大きい木板であったらしい。木口板の厚さは北端で0.19m、南端で0.15mである。(図版C16(2))

木棺の四周を被覆する竪穴式石室は、さきにみたように、その壁体のはほとんどが破壊されていた。側壁は辛うじて遺存した基底の状況では、木棺の周囲に、長さ約6.8m、北端幅1.16m、南端幅0.1mの長方形の空間を残して、墓壇壁との間に構築している。したがって、石室の内法は北側の方がわずかながら広いわけである。側壁下底南側内面は、東西の長辺の間に、南短辺を挟むようにしてつくられている。しかし、どちらが先に置かれたかという問題解決にはならなかった。隅角の設定には適当な板状片岩が選択されてほとんど同時におかれたものであろう。

側壁は遺存が悪く、もっとも遺存状況のよい東壁の一部(第10図)において、最大高



第10図 竪穴式石室北東部墓壇壁附近断面図

0.52mを示すにすぎない。わずかに現存する東壁より見ると、木棺に面する内面は、板状節理にそって割った片岩の真直な木口の一辺を揃えて平積みにしてつくられている。そして、上部へいくにしたがって持ち送られたらしく、その傾斜角度は、約80°を示している。そのため、

石室横断面は、おそらく台形をしていただろう。側壁内面には、ベンガラが塗抹されている。独立積の部分は、板状片岩が相互にかみ合つように積まれていて、壁体全体が重層的に構築され、その結果、天井石の荷重を全体に配分する効果を果している。それでもなお、片岩間に生じた空隙には、パラスを詰めて、側壁を堅牢にしている。

側壁の高さについては、東壁沿いの部分が、ほぼ等しい高さに残り、しかも、その上面に粘土が貼られているので、その部分について、構築当時の状況を伝えているものと思

う。その部分での高さは、0.4m前後である。この点に関していえば、側壁高は0.4m以上になり、石室中央部での現存最大高は0.52mであるが、先きの木棺復元径からいうと、0.62m以上の高さが必要となる。石室中央部が、墓域壁沿いの部分より高くなっている実例が多いことを考えると、中央部の側壁の高さが0.62m以上で、それを大きく隔たらない高さに推定できる。

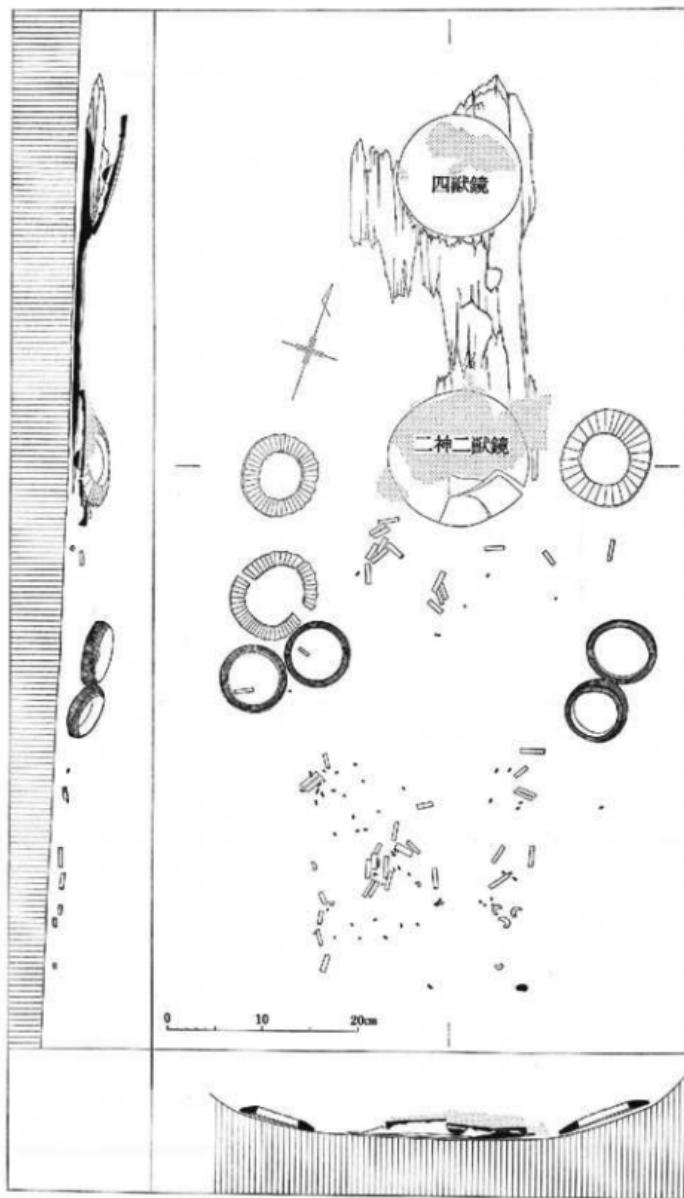
墳体最上面は、先きにも述べた、東壁の一帯の状況から類推すると、全面にわたって粘土で被覆されていた可能性がある。

側壁の板状片岩は、大阪学芸大学助教授赤塚久兵衛博士の鑑定によると、ほとんどが、石英粗面岩であるが、結晶片岩も少量を含んでいる。この種の石英粗面岩は、兵庫県武田尾・有馬・三田付近や京都府下丹波、さらに、讃岐地方に産出する。結晶片岩については、和歌山県紀の川流域から、愛媛県西条付近に産地が知られる。

天井石については、こん間の調査では、まったく何ら知見を見なかった。しかし、免山篤氏によると、「石室上部は天井石で覆われた如く、それと思われる矩形の火形の石が若干存した」といわれる。もとは、幾枚かの天井石が架構されていたのであろう。

### 3. 遺物の配置(図版C17・18)

遺物は石室の著しい破壊に伴なって散逸しているものもあるかもしれないが、かなり多くの出土をみた。遺物の出土位置は、棺内と棺外にわかれれる。棺内は赤色顔料が一面に塗抹してあり、そこに副葬された遺物の内木棺の幅の広い北側の一群は、南側の一群よりも高いレベルに位置し、頭飾りと推定される玉類を含んでいることによって、頭辺の遺物群として一括できる。したがって棺幅の狭い南側に位置して、低いレベルにある一群は脚辺の遺物群となる。頭辺の遺物群は人頭大の広さの空間を残して、その北側と南側に、碧玉製管玉と硬玉製勾玉が朱に混じて多数に散乱する。北側の玉類は、中形の管玉がほとんどであるが、南側の玉類は、中形と小形の管玉に加えて、勾玉があり、全体の数も多い。人頭大の空間の両側には、碧玉製腕輪が並らぶ。この腕輪の位置にも若干の管玉が混じる。西側の腕輪には、車輪石1個と石鏡2個に、少し北に寄って車輪石1個がある。東側の腕輪は、石鏡2個と、少し北に寄ってさらに車輪石1個からなる。北側の玉類に北接した位置に、二神二獣鏡が1面、背面を下にしておかれている。この鏡の北には、ほぼ16cm離れたところに、獸形鏡が一面、背面を下にしてある。この2面の鏡の下に広がって、木棺の棺材の一部が遺存する(第11図)。



第11図 弁天山C 1号墳竪穴式石室棺内遺物配置状態（頭辺）



第12図 井天山C 1号墳竪穴式石室棺内遺物配置状態（足辺）

南側の玉類の南端から、南へ約55cmの腰辺にあたるところ、異形の硬玉製勾玉が1個出土している。

頭辺の遺物群の南端から、約1.35m南へ離れたところから、脚辺の遺物群がはじまる。北寄りの位置に、大形の碧玉製管玉が35個、かたまってある。この管玉の東側には、木棺の長軸と平行な方向に碧玉製筒形品1個が接してある。西側には対称的に、碧玉製合子1個があるが、蓋と身は分離している。南寄りの中央には、三角縁波文帶三神三獸鏡が1面、背面を下にして置いてある。鏡の下からも、さらに、管玉が4個出土した。鏡の西側には、石鏡が1個あるが、その一部は鏡の下になっている。この石鏡と先きにふれた合子との間には、車輪石が1個介在している。（第12図）

棺外の遺物は、石室内の棺側と粘土床の粘土中との二つの出土位置に大別できる。

まず、棺側の遺物は、東側から見ると、いずれも武器である。棺内頭辺の腕輪の東の位

置に銅錠13本が一群となってある。これから、北へ50cm以上の距離を隔てて、同じように銅錠9本があり、さらに、北へ約50cmの間隔をもって、7本からなる銅錠群がある。けっきょく、合計29本の銅錠が、ほぼ50cm余の間隔をもって、三群に分けて、おかれていることになる。三群のうち、中央群の3木の銅錠は、二次的に移動した状況であったが、それを除くと、ほかの銅錠は、すべて切先を北に向いている。頭辺から腰辺にかけては、鉄刀が1振、切先を南に向いていた。

西側の棺側には、武器と農工具があった。西側は、石室の破壊がひどく、側壁の下底もほとんど消滅していた。このため、西側棺外遺物も造存状況はよくなかった。まず、木棺木口部に南接して、鉄器群がある。北寄りに鎌が2個、南寄りに東から鉗・刀子・鉤各1個ずつ出土した。棺外西側から、刀子・鉤各1個を採集したが、これも上の一組の鉄器と近接していた可能性が高い。頭辺から腰辺にわたる西棺側には、東棺側の鉄刀と対称的な位置に、鉄刀が4個の破片となって検出できた。

棺外遺物のうち、南木口板部の直下で、粘土床の粘土中に塗り込められた状態で鉄器群があった。鉄器は、斧大小各1個、鎌大小各1個、そして刀子が1本である。(図版C19)

#### B 後円部粘土塚

後円部には、竪穴式石室の上部で、石室東壁の一部に重なった位置に粘土塚がつくられている。方向は、竪穴式石室とほぼ平行し、前方後円墳の長軸の方向とは斜行する。

##### 1. 墓 塚(図版C12)

墓塚の北端および西辺は、土砂崩れなどによって破壊されているので不明である。

平面形は大きく言って、長方形の基塚であるが、塚壁の造作している東側の長辺には、2段の階段状をなす掘り残しがつくっている。塚底は平面的であるが、中央の北端と南端には、長辯凸形の凹所をつくっている。

断面で見ると、南側の短辺は、約75°の傾斜に掘られ、凹所の塚底までの深さは、現地表から1.1mを測る。横断面の状況を中央付近で見ると、東壁は、現地表から約60°の傾斜で、約0.3m掘り下げ、そこに、0.04mの傾斜をもって、幅0.46mの平面をつくる。そこから約55.5°の傾斜角度で、0.46m掘り下げる。これが第1段である。第1段の上面には粘土塚用材の粘土塊がら5個ほど放置してある。第2段はそこにはさらに、幅約27cmの平面をつくる。そこから58°の傾斜で、14cm下がり、塚底の隅角をなす。塚底は水平に近いが、石室の墓塚内に重なる部分で、粘土棺床の下にくる部分は、5cm内外の深さにくぼ

められている。縦断面でみると、(第13図) 南北両端に凹所をつくっていることは、先にも述べたところであるが、北端の凹所は、長さが1.16m以上、塙底からの深さ20cmである。南端のそれは、長さが、1.25m以上で、深さは、塙底から17cm前後である。



第13図 後円部粘土塙縦断面

ているが、その過半を失っている可能性があり、明らかでない。

## 2. 粘 土 塙 (図版C12・13)

粘土塙は、まず、塙底両端に設けた凹所にパラスを詰めて、排水施設をつくる。パラスは土砂を混入せず、よく洗われていた。それに西接した石室東壁の一部に、パラスを多量に含む部分が認められたが、これについては、幅0.9m、厚さ20cm位の排水溝として、粘土塙両端につくられた排水施設が西方すなわち石室東壁上面に導びかれていた状況を伝えるものと考える。

粘土棺床は、粘土塙の下に位置する堅穴式石室の墓塙壁のほぼ上部につくられる。その際、墓塙底との間には、5cm前後の厚みをもつ砂質土を介在させている。粘土棺床の厚さは、ほぼ10cm前後である。中央部分での曲率半径から、木棺の直径を求めるとき、58.5cmとなる。粘土棺床の現長は4.79mを測るが、北端付近における底面の立ち上りの部分を、木棺の北限と考えると、木棺の長さは、4.37m以内ということになる。

墓塙と粘土棺床との間は粘土棺床の上面の高さまで、灰白色の砂質土がつめられ、その上面には、パラスや、なかには、堅穴式石室の用材である結晶片岩の板石を10枚片まじえて、一重に敷かれている。この敷石は、南端の排水施設に通じている。粘土棺床の東側の所見では、その敷石の上面が、墓塙東壁の第2段の上面にほぼ一致している。粘土棺床は、

この両端の凹所の高低差は、13cmで、南側が低い。塙底も南へいくにしたがって低くなり、その差は16cmである。石室の上部にあたる塙底は、石室墓塙の埋め土の中に掘られ

北寄りの方が多いとも広い幅をもっている点と、先に述べた通り、北へいくほど底面が高くなっている点をあわせて考えると、木棺内には、北側に頭部をおいた遺骸の葬られていたことを推定しうる。

なお、墓塚内北端で、埴底面を掘り下げて凹所をつくっていることを確認した。南端の同じような施設が、排水溝を設けるためのものであったと考えられたが、北端の凹所についてはこの部分の粘土棺床が厚くつくられているということ以外には、はっきりした性格はつかめない。南端の場合でも、凹所全体にパラスが充填されているのではなく、とくに、粘土棺床南端の南側には、若干の空間を残しており、そこは、粘土棺床が厚くつくられている。どちらも、棺床端付近のみ、粘土を厚くしている共通性を問題にすれば、木棺木口部の施設と関係するものかもしれない。

粘土棺床上面から上部については、すでに免山氏によって調査が行なわれており、このたびは何ら明らかにし得なかった。免山氏によると、木棺上部は、「割石を混じた質の悪い粘土で覆われ、その上は山土となって」いたとのことである。

### 3. 遺物の配置

こん回の調査では、遺物を検出しなかったが、かつて免山氏が調査された時に若干発見されている。すなわち、粘土棺床の中央より北側寄りに銅鏡1面が、「鏡面を下にして置かれた鏡背には藤様のものが炭化して付着していた」。そこより南側へ「1.2米の所に軸にそうて少し右よりに鉄劍が一口」切先を北に向けてあった。ほかには混入物かもしれないが、「土師質の土器片が一片藤の中央辺より出土」している。

## C 前方部粘土塚

前方部のほぼ中央には、墳丘長軸と直角の方向に、粘土塚の構造をもつ埋葬施設1基が存在した。粘土塚の中央が、墳丘の長軸から北へ約1.6mの位置にきていることが示すように、北側へ寄ったところにある。

### 1. 墓 塚 (図版C21)

粘土塚の構築は、墓塚の設定からはじまる。墓塚は、下底部の規模で、南北約5.48m、東西約2.2mの長方形をしている。

表土を除去してからの現状では、墳頂面の規模は、南北5.92m、東西約2.6mを測る。深さは、北側で約0.7m、南側で約0.32mを計測できるが、被覆粘土の頂部が、南側を例にとると墓塚底より、0.48mのところにあるので、もともとの墳頂面よりの深さは、それ

以上であったことは容易に推定できる。墓塙底はほとんど水平に掘られている。墓塙壁は、だいたい  $55^{\circ}$  から  $65^{\circ}$  の傾斜をもっている。墓塙が設定された基盤をなす墳丘は、墓塙東壁の断面状況より見ると、墓塙長軸の中央やや北寄りのところの墳頂部から、墓塙南壁下底を結ぶ線より上部は盛土によっている。それ以外の墓塙の大半は、地山を掘り込んでつくられたものである（第14図）。

## 2. 粘 土 棺（図版C20・22）

粘土棺は、墓塙の中央やや東寄りに位置している。塙底には、まず、下面の長さ約4.9m、幅約0.8～0.9m、上面の長さ約4.7m、幅約0.5mで、断面台形の粘土棺床を築いている。厚さは、後に述べる木棺の中仕切付近の北端では、16cm、南端では6.5cmを測る。墓塙底が、ほぼ水平であるから、棺床上面の北端が、10cm近く高い位置にあることがわかる。この粘土棺床の上に、木棺が安置されている。木棺は割竹形であることが、棺床の断面から容易にわかる。木棺の長さについては、粘土棺床の両短側上縁が高く隆起しているが、そこから内側へ約5cmはいったところで、低くなつて、水平面に変わるところがあり、その部分を棺端として考えることができる。その間の長さは4.5mになる。木棺の幅は中仕切板付近で測ると、北部では0.5m以上、南部では0.4m以上である。棺内と考えられる部分の粘土床には、赤色顔料の焼抹がみられた。棺の両端には、木口の部分に充填した粘土塊がおかれている。その直下の、棺端から0.3mまでの部分には赤色顔料がないので、その部分が、棺外にあたり、棺端から0.3mのところに、中仕切の木板があったことが推定できる。

このような木棺を、粘土棺床におくと、木棺を転動しないように安定させるために、棺床との空隙に、さらに粘土をつめている。粘土棺床の両短辺の内傾する側面と、木口をつめた粘土塊の傾斜面が連続した面をなしていることを見ると、棺土棺床と粘土塊の作業は接近していたと考えられる。また粘土塊も、木棺を安定するための工程と理解できる。したがって、粘土塊の位置も、粘土棺床と、木棺の底面との間を、粘土でつめる作業とほとんど同じ工程であったろう。次に粘土棺床の周囲で、墓塙壁との間にバラスをめぐらしている。この作業が、粘土棺床の上に、粘土をつめた後に行なわれたことは、その粘土の上面をバラスが覆っていることによってわかる。厚さは、約0.2mで、その上面は、ほぼ棺底の高さにくる。その後、棺身の高さまで、バラスの上面も半分ぐらいまで含んだ範囲に粘土を敷き、最後に、棺蓋をも被覆して、粘土棺の築成は終わっている。木棺はすでに、

腐蝕して遺存せず、したがって、棺蓋をも被覆していた粘土は、落下して、棺内に堆積していたが、棺内底面に広がる赤色顔料を境として、両者は明瞭に分別できた。

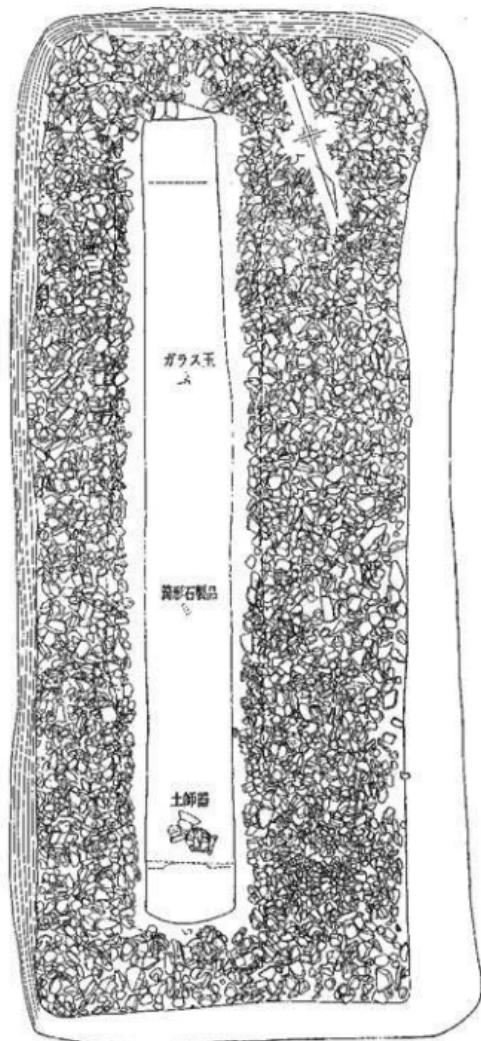
### 3. 遺物の配置(図版C21・22)

墓塚内粘土棺の出土遺物は、出土状況によって棺内と棺外に分けることができる。

棺内からは、中央北寄りに、腐蝕した碧玉製筒形石製品1個が下部を北方に向けて出土した。また、南寄りの位置からは、ガラス製小玉6個をかたまとった状態で発見した。

棺外では、北側中仕切板の外から、土師器の小形丸底壺2個、壺1個が一群となって出土した。また北側木口部粘土塊の外側を被覆した粘土巾で鉄片2個が出土した。棺北部の方々、わずかながら、幅が広く、また、高くなっていることからのみ北方に頭部を考えると、頭辺に土師器、腰辺に筒形石製品、そして、足辺にガラス小玉という配置が想定できる。なお粘土棺をとりまくバラスの上面西側中央北寄りのところや、バラス中では東側中央北寄りの棺床側辺などで、埴輪の破片を検出した。

0 1 2 m



第14図 弁天山C 1号墳 前方部粘土層実測図（粘土床と排水施設）

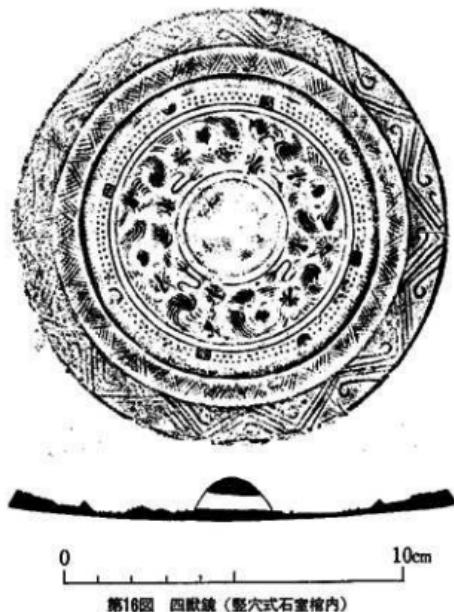


第15図 二神二獸鏡（豎穴式石室棺内）

D 遺 物（図版C23～36）

(1) 吾作銘帶二神二獸鏡（図版C23(1)、第15図）　径14.6cm。青銅製。中央の紐のまわりに一周の圓線がめぐる。内区は、4個の乳の間に、二神像と二獸形を配置している。神像は、おそらく西王母と東王父を表現したもので、それぞれ脇侍を1個ずつ従えている。獸形は、竜と虎を表わしている。内区と外区との間は、銘帯と齒文帶がみられる。銘帯は「吾作明寛白有孫子大吉利宣子孫」と判読できる。外区は鋸齿文・複線波文・齒文からなる。外縁は、若干匙面をもつ、三角縁に近い平縁である。文様は精緻に鋳出されている。白銅に近い材質は、随所に黒色の光沢を放っている。舶載鏡の優品である。

(2) 四獸鏡（図版C23(2)、第16図）　径13.15cm。青銅製。中央の円形紐座のまわりに円環がめぐる。内区は4個の素乳のそれぞれを囲んで横向きの獸形が4個あり、それぞ

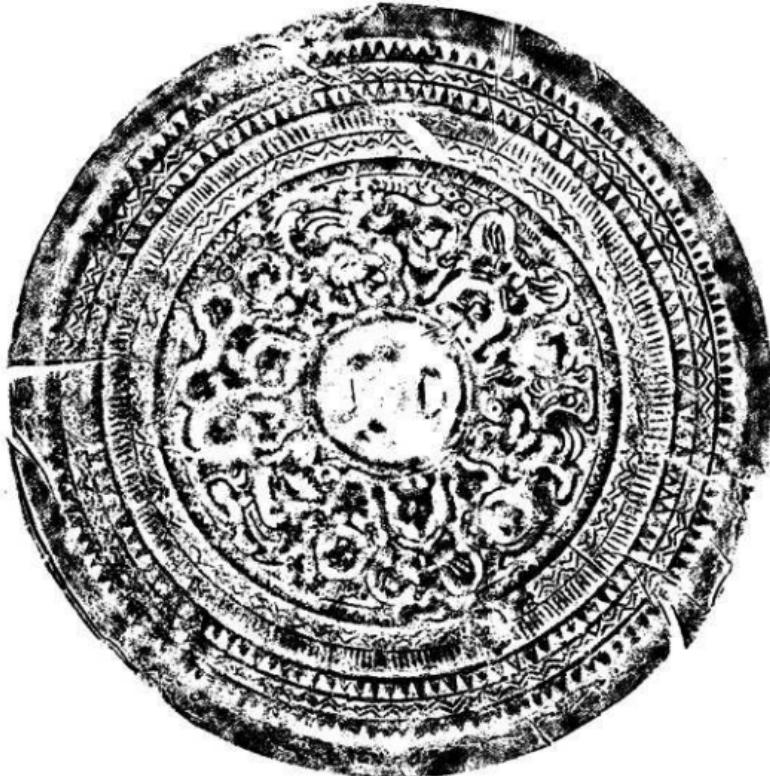


第16図 四獸鏡（竪穴式石室棺内）

これがさらに1個ずつの獸形を従えているので、大きく四獸鏡と呼んでおく。内区は、獸形のまわりを2本の周囲が囲んでいる。次に、内区と外区との間は地文を2周の点列文で埋め、その間に、銘のない半円形と方格形が各4個交互に配されている。外区は、櫛齒文・複合鋸齒文からなる。外縁は平縁であるが、表面には、3本の複線波文があり、空間を蕨手文でうめている。菱雲文の変形である。鏡面には布痕が付着している。

(3) 三神三獸鏡（国版C24、第17図） 径21.5cm。青銅製。 内区は6個ずつ縦列の素乳と火焔形の間に、神像と獸形とを3個ずつ交互に配置し、全体を単線波文でもってかこんでいる。鋸齒文・複線波文・鋸齒文で構成される外区との間は、複線波文・櫛齒文帯がめぐる。外縁は三角縁をなしている。紐座には、細・太2種の周囲をめぐらしている。

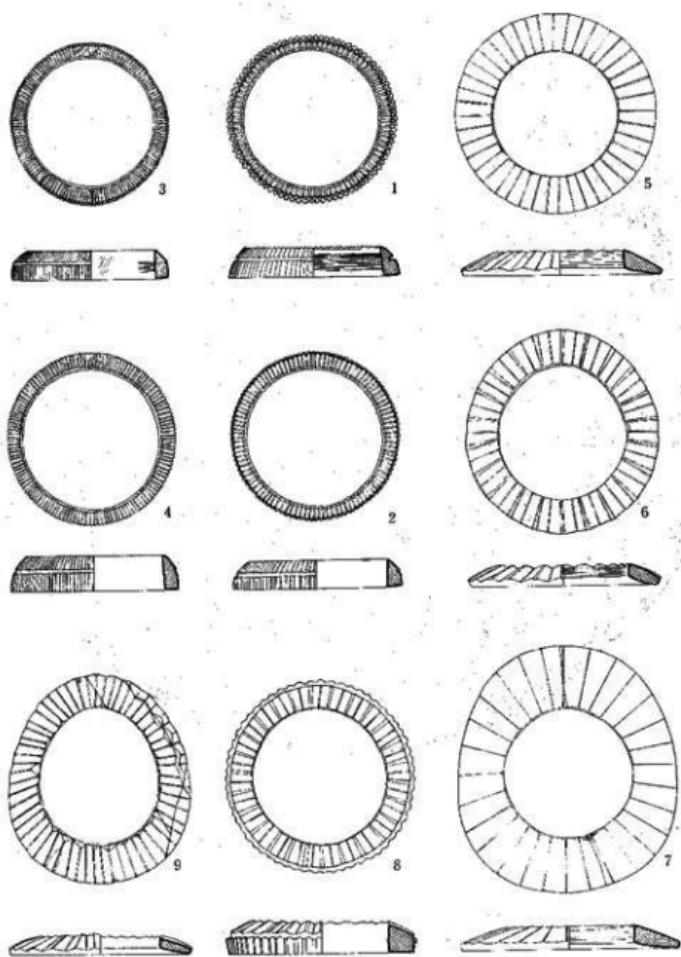
文様は、全体に鋭さがなく、神像の一つでは顔面や衣文が円滑になっていて不明の部分がある。また乳をめぐる周囲に神獸の文様が重なっている箇所もある。鏡型についても、鏡面のひび割れや文様部の型くずれなどが、いくつか認められる。



0 10cm

第17図 三神三獸鏡（竪穴式石室棺内）

(4) 勾玉 (図版C25、第19図) 頭辺から8個、腰辺から1個出土した。頭辺のものは、いずれも小形である。硬玉製であるが、良質で、透明なもの1・2と、緑色半透明で、白色の小斑があるもの3～9とがある。前者には丁字頭がみられる。形態は、C字形にゆるやかに彎曲している。1の頭部には、半円形の切り込みがあり、異形である。頭部の穿



第18図 石劍・車輪石（整穴式石室棺内）

孔は両面からのもの3・4と、片面からのもの(1・2、5~9)がある。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
長さ	1.9	1.4	1.45	1.35	1.0	1.0	0.9	0.9	0.8
厚さ	0.65	0.4	0.4	0.45	0.35	0.35	0.35	0.35	0.35

(5) 頭辺管玉(図版C25、第19回) 頭辺から106個出土した。大きさによって、2群にわかる。碧玉製であるが、直徑が0.6cmぐらいの中型品にあっては、青緑色をした良質のものと、灰白色をした粗質のものとがある。直徑0.2cm前後の小型品はすべて青緑色をした良質のものばかりである。中型品は、ほとんどが、両面から穿孔されているのに対して、小型品は片面からの穿孔である。両者とも、大きさは不揃いである。

(6) 頭辺石劍(図版C26、第18回1~4) 頭辺から4個出土した。いずれも良質の碧玉製で灰青色を呈する。円形の環体の幅よりも高さの方が大きい型式である。環体の中央にめぐる刻線を境として上半部の斜面にも、下半部の垂直面にも、ともに細線を彫刻している。細線が疎なものと、密なものが2個ずつある。

	1	2	3	4	いずれにも内面に横方向の製作痕を
内径	5.9	5.8	5.5	5.9	有し、さらにその上に、縦方向の擦痕
高さ	1.3	1.2	1.2	1.5	も見る。

(7) 頭辺車輪石(図版C26、第18回5~7) 頭辺から3個出土した。扁平な卵形をなすものと、円形に近いものがある。中央には、ほぼ円形の孔がある。卵形をなすものにあつ

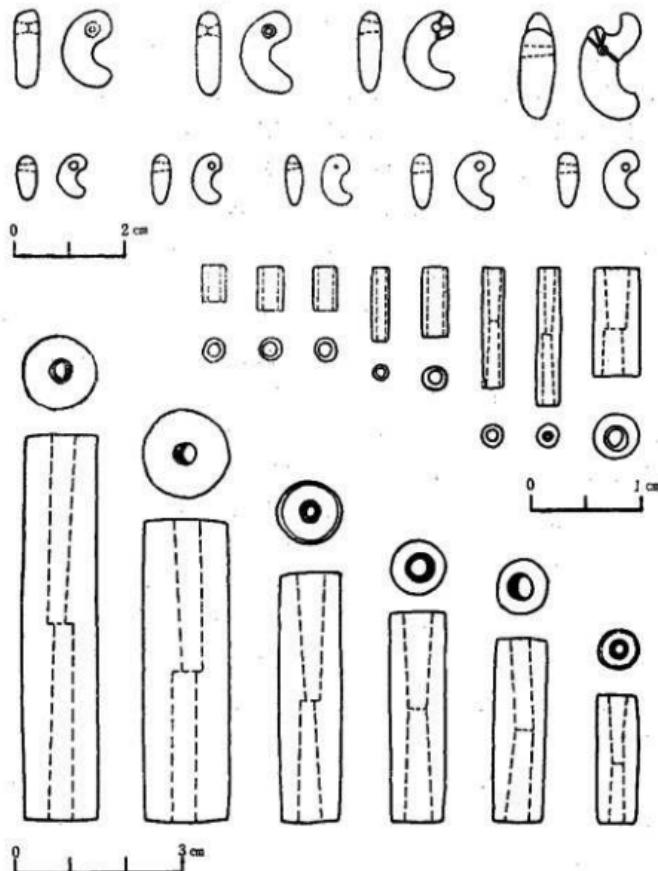
	5	6	7	ては、斜面に幅の広い凹面帯を放射状に彫刻し、
長径	8.7	8.7	10.6	境の稜にも一線を刻している。円形に近いもの
短径	8.6	8.3	9.4	には、凹面帯の中央にも一線を刻している。内
高さ	1.05	0.9	1.0	面の擦痕は上の石劍の場合と同じである。

(8) 頭辺管玉(図版C28、第19回) 頭辺から39個出土した。いずれも直徑が1.2cm前後の大型品である。碧玉製であるが、あまり質はよくなく、灰白色をしている。すべて、両面からの穿孔である。大きさは不揃いである。

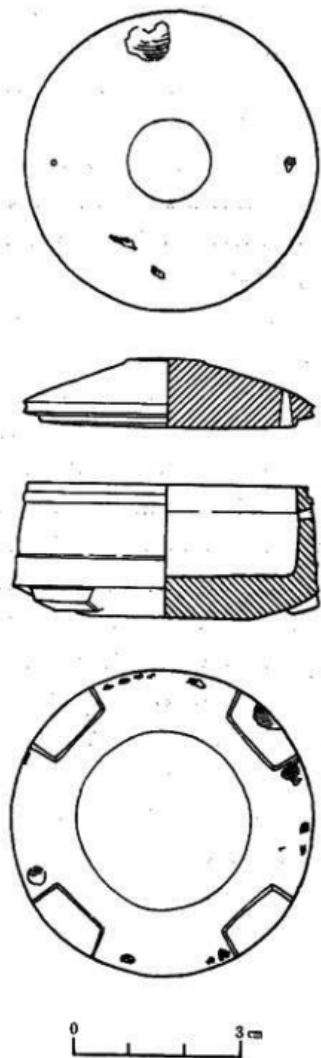
(9) 頭辺石劍(図版C25、第18回8) 頭辺から1個出土した。あまり良質でない碧玉製で、灰白色を呈す。環体の高さと幅はほとんど変わりない。円形の環体の斜面は、放射状の凹面帯と、その中央には細線が、境にはやや太い刻線がきざまれている。斜面と垂直面の屈折部で、横にめぐる刻線を境として、垂直に近い側面には、等間隔に幅広い縦方向

の刻線がめぐる。直径8.2cm、高さ1.4cmを測る。

(10) 脚辺車輪石 (図版C25、第18図9) 脚辺から1個出土した。あまり良質でない碧玉製で灰白色を呈する点は、上の石鉗と同じである。扁平な卵形をなし、中央にも卵形の孔がある。斜面に幅の広い凹面帯を放射状に彫刻し、その中央と境にも一線を刻している。長径9cm、短径7.9cm、高さ0.9cmを測る。



第19図 勾玉・管玉 (堅穴式石室棺内)



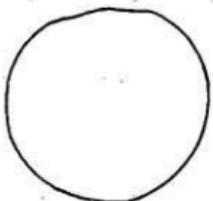
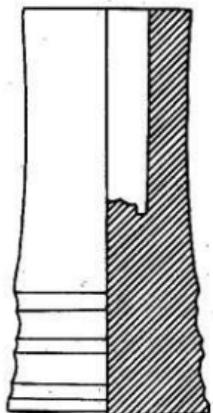
第20図 合子（堅穴式石室棺内）

(II) 翡翠製合子（図版C27、第20図）

1個、良質の翡翠製で、青色を呈す。平面形が円形で、有脚形式である。蓋は側面形が笠形を呈し、頂部には、平面円形の、わずかな隆起をなしている。ツマミ状をしているが、隆起が低いため、裝飾的になっている。周縁端部は凹線をなしている。身との合口部は、身にはまり込むように、底面の周縁がU形にくりこまれている。底面は平滑に近いが、若干下にふくらんである。周縁には、一対2孔の縦通し孔が、底面から穿孔されている。直徑5.2cm、高さ1.25cmを測る。

身は、口径よりも底径がやや大きい円筒状をなす。口縁部の外側は、少しくぼまり、その下は凸筋がめぐる。底に近い側面には、幅0.5cmの若干隆起した帯を残し、そこにはヒ面をつくっている。底部は直徑約3.2cmの多少内凹みであるが、ほぼ平らな底を残して、周縁を斜めに縁取りしている。脚は、縁取り部に4脚をつけるが、底より低い脚のため、脚の用をなさない。内面はくり抜かれている。蓋と対称する位置に、一対2孔が、外側から穿孔されている。口径5cm、底径5.4cm高さ2.4cmを測る。

12 筒形石製品（図版C27、第21図） 碧玉製で、灰白色を呈す。上部が袋状になった筒形をなす。胸部は少し狭まり、下端が太くなっている。底面は微かに隆起している。下端 $\frac{1}{3}$ のところには、3条の狭い凹線が走り、その間は、広い2条の凹線が走る。上部の袋部は、円筒状のものが残るように、同心円状に削り込まれ、あとで、その円筒状部が折りとられている。上端径約3cm、下端径約3.6cm、高さ7.2cmを測る。



0 3 cm  
第21図 筒形石製品  
(竪穴式石室棺内)

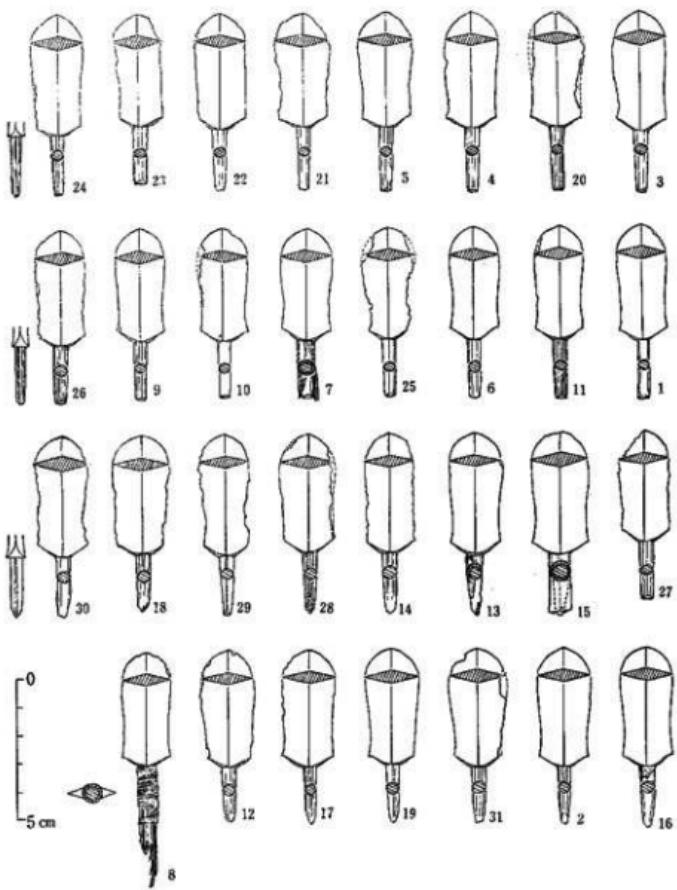
13 銅鐵（図版C29、第22図） 31本。青銅製。すべて柳葉形の身部に茎をもつ有茎鐵である。茎部に笠被をあらわさない類であって、茎部末端が、直截してあるもの（18本）と、尖っているもの（13本）がある。身部の断面は菱形をなし、筋が走る。茎部に遺存した矢柄は竹製である。矢柄の装着は、竹に茎部を挿入したのち、樹皮で巻き、その上に漆を塗ったと思われるものがある（第22図8）。茎部には、長辺と直角方向の研磨が行なわれ、その結果、長辺方向の稜線が数条残っている。身部はいっそう入念な研磨がなされているため、滑沢な面に光沢を放っている。茎部末端が直截されているものにあっては、鋸造が、一度に幾本かが行なわれたらしく、したがってそれぞれを連結、派生させている軸部からは、茎部の両面から切り込みを行なってのちに、折っていることが端的にうかがわれる。銅鐵の法量は下表のとおりである。

鋼鐵計測表

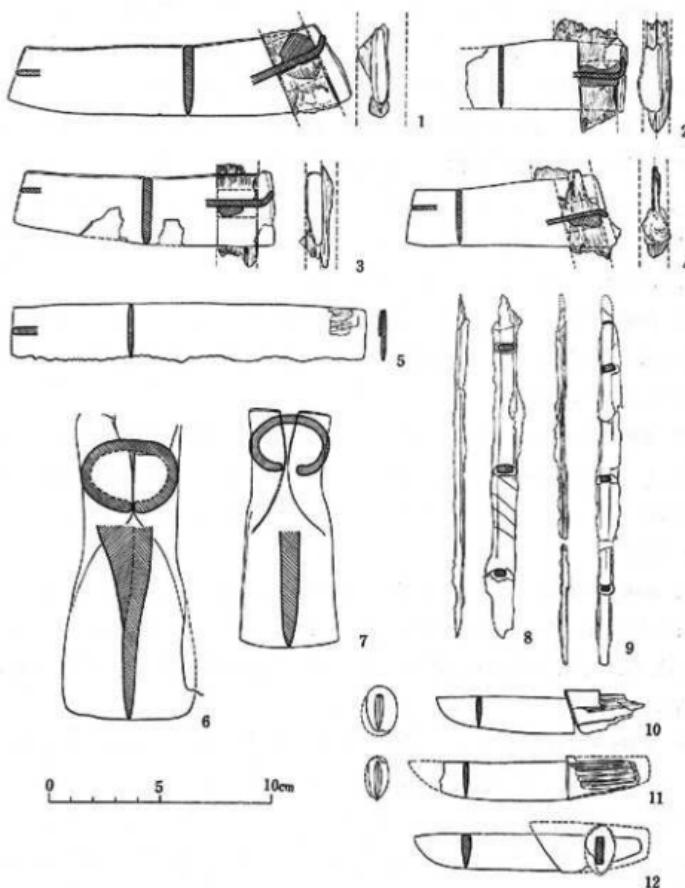
No.	全長 cm	身 cm	峯 cm	幅 cm	重さ g	摘要
1	6.2	4.1	2.1	1.8	14.75	○
2	6.25	4.25	2.0	1.9	15.79	△
3	6.55	4.35	2.2	1.95	19.06	○
4	6.5	4.2	2.3	1.9	16.42	○
5	6.4	4.15	2.25	1.9	15.79	○
6	6.1	4.05	2.05	1.9	16.04	○
7	6.1	4.0	2.1	1.95	15.19	○
8	6.2	4.1	2.1	1.75	14.27	○
9	6.1	4.0	2.1	1.8	14.87	○
10	6.05	4.05	2.0	1.8	12.94	○ ★
11	6.2	4.1	2.1	1.8	14.33	○
12	6.1	4.2	1.9	1.9	14.07	△ ★
13	6.55	4.35	2.2	1.8	16.18	△
14	6.45	4.3	2.15	1.85	17.48	△ ★
15	6.6	4.4	2.2	2.0	20.29	△
16	6.45	4.25	2.2	1.9	18.01	△
17	6.2	4.2	2.0	1.95	15.52	△
18	6.25	4.2	2.05	2.05	15.91	△ ★
19	6.2	4.1	2.1	2.0	15.58	△
20	6.5	4.2	2.3	2.0	13.23	○ ★
21	6.35	4.1	2.25	2.0	14.58	○ ★
22	6.35	4.2	2.15	1.95	15.62	○
23	6.1	4.0	2.1	1.7	12.80	○ ★
24	6.45	4.3	2.15	1.9	17.16	○
25	6.05	4.0	2.05	1.95	11.76	○ ★
26	6.2	4.1	2.1	1.75	13.92	○
27	6.0	4.0	2.0	1.8	12.14	○ ★
28	6.4	4.2	2.2	2.0	16.69	△ ★
29	6.5	4.35	2.15	1.9	15.47	△ ★
30	6.4	4.3	2.1	2.0	16.66	△ ★
31	6.2	4.3	1.9	2.0	14.29	△ ★

○……切取ったもの △……とがったもの

★……部破損しているもの



第22図 銅鑿（整穴式石室棺外）



第23図 縫・鎌・斧・斧・刀子（鑿穴式石室棺外）

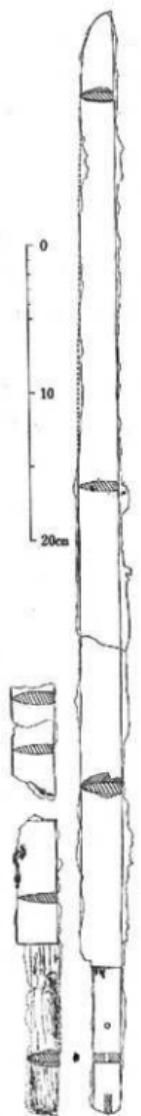
(14) 鉄鎌 (図版C30、第23図) 鉄製。4個。反方形の鉄板の一端を折りまげたものであるが、その座、身と鈍角をなす方向に柄がつくように折りまげたものと、锐角をなす場合のものがある。柄の裝着部に遺存した木質の方向も、上記の折りまげの方向と平行した木目を見せてている。着柄には、柄になる木質を削って、その間に挟んでいる。柄の鋒側に接する部分には、木質の幅が広くなつて遺存しているところを見ると、柄の先端が肥大していたことも考えられる。刃部はやや外彎するものと、現存部から、直刃かと思われるものがある。完形品についてはそれぞれ、全長が15.5cm、11.8cm、9.5cm、最大幅3.75cm、3.15cm、3.5cm、厚さ0.7cm、0.4cm、0.3cmである。

(15) 鉄鎌 (図版C30、第23図) 鉄製。1本。長方形の鉄板をなすが、一方に微かな弯曲を示す。内彎する辺の一部に鎌歯を認めるが、他は不明である。全長16cm、幅2.6cm、厚さ0.2cmである。

(16) 鉄斧 (図版C30、第23図) 鉄製。大小の2個がある。鉄板を両方から折りまげて袋状にした上部は、ゆるやかに広がつた刃先へとうつる。大きい方の長さは14cm、最大幅5.5cm、厚さ0.7cmである。小さいものの長さは、10.8cm、最大幅は4.4cm、厚さ0.9cmである。

(17) 鉄鎌 (図版C30、第23図) 鉄製。2本であるが、いずれも刃部を欠損している。細長い木に溝をほり、身部をはめこみ、そのうえ布で巻きしめている。鉄身部の現長は16cmと15.5cm、幅は0.65cmと0.7cm、厚さは0.3cmと0.4cmである。柄の厚さはいずれも約0.2cmである。

(18) 鉄刀子 (図版C29、第23図) 鉄製。3口。刀形の刃部と、その刃側に直角の闊をもつ茎部からなつていてる。柄は、2枚の板をあわせている。柄元は、柄木が一文字をなして終るものと、三角状に身部へ突出しているものがある。身部の全長は、8.9cm、9.7cm10.4cmを測り、幅は前二者が1.6cmで、他は1.8cmである。厚さはそれぞれ0.2cm、0.4cm、0.25cmである。



第24図 鉄刀（整穴式  
石室抜外）

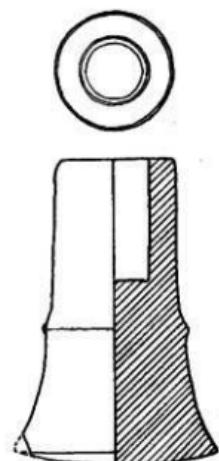
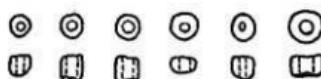
19 鉄刀（第24図） 鉄製。完形1口、破片2個。身部の断面は二等辺三角形を呈し、平脊である。身辺と直角の関を、刃側につくって、茎部へとうつる形態を示す。完形品の全長は75.1cm、幅2.8cm、厚さ0.7cmを測る。破片の現長は、20.7cmと8cmで、幅は2.7cmと2.8cm、厚さは0.7cmと0.9cmである。このほかにもう一口分の破片が2片ある。1個は茎部の破片である。茎の長さは11.7cm、幅1.8cm厚さ0.5cmである。他は長さ7.7cmの身部の破片であるが、幅2.8cm、厚さ0.8~0.6cmを測る。

20 棺材（図版C31、第34図） 高野楓を使用した木棺の棺材の一部が遺存していた。発見当初の残存長44.6cm、幅19.3cm、厚さ2.5cmである。



第25図 木棺材（整穴式石室）

21 筒形石製品(図版C31、第26回) 1個。

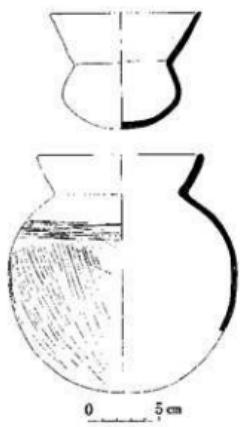


粗惡な碧玉製で、灰青色をしている。袋状の上部から、ゆるやかに狭ばまって、下部へうつり、下端では太くなっている。細くなった胸部の中央より、少し下がったところには、隆起した稜ができる。下面は少しふくらんでいる。袋部の整形は、上記の筒形石製品と同じである。上端径 2.15cm、下端径 3.6cm、高さ 5.45cm である。

22 小玉(図版C31、第26回) 6個。ガラス製。淡青色をして、不透明である。形は不揃いである。

	1	2	3	4	5	6
高さ	0.35	0.5	0.5	0.3	0.45	0.4
直径	0.4	0.4	0.4	0.5	0.5	0.6

第26回 ガラス玉・筒形石製品  
(前方部粘土繩)



第27図 土師器（前方部粘土  
被外）

㉓ 土師器（図版C31・36、第27図） 前方部粘土被外から3個の土師器が出土したが、その中2個は小型丸底土器で、他は壺である。

（イ）小型丸底土器 同形同大のものが2個ある。

復原し得た1個によると、口縁部径10.7cm、腹径8.4cm、高さ8.3cmを測る。破片の亀裂から、撗き上げ手法により作られたことがわかる。口縁径は腹径より大であって、口頭部は比較的長く伸び抜がっている。また部体も腹径に比べて高さが低く、最大腹径は略中位にある。赤褐色を呈し、精良な粘土をもって作られている。類似の器形は河内市小若江北遺跡、柏原市船橋遺跡K地区にみられる（図版C31、第27図上）。

（ロ）壺 口径12cm、高さ16.5cm、腹径16.2cmで、

球形の胴部に短小な内窪する頭部がついている。口縁端は布留式のように内側へ肥厚していないが、全体のプロポーションは布留式に類似している。赤褐色の薄い器壁を有し、内面は削痕がある。外面肩部は横方向に刷毛目がつき、やや荒いが、腹部から底部にかけては縦方向の刷毛目がついている。（図版C31、第27図下）

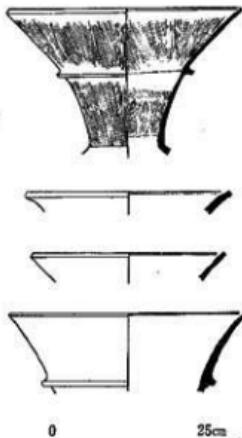
（ハ）その他の土器片 墳丘の後円部前面の盛土下から土師器の破片が10数片出土したが、いずれも細片である。その中2片は壺の頭部の屈曲部をもしくは小型杯の屈曲部とみられるもの（第35図8）、このほかに前方部右IV段稜角付近で、弥生式土器と思われる外面に叩目のある平底の土器片1個（第35図12）が発見された。前方部左側II段下縁から埴輪片と共に土師器高杯の脚部1個（図版C362-27、第35図9）、Cトレンチ内から灰色の粗雑な胎土をもつ土師器高杯脚部片とみられるもの1個（図版C362-28、第35図10）が出土している。

04 塙輪（図版C32～36、第28～34図）　墙丘の各所から破片が発見されたが、完形を知りうるものは1個も存しない。からうじて破片を接合して形態を知り得たものがあるが、それらを便宜上A～Fの各類にわけて記述する。

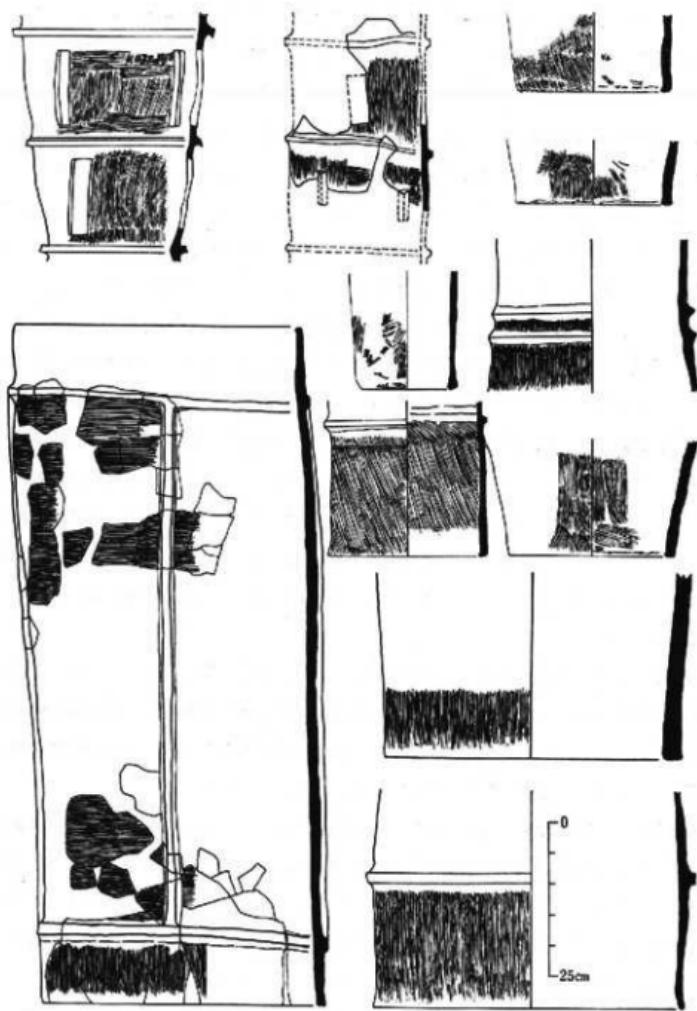
〔A類〕（図版C32-1、第28図）

一般に朝顔形埴輪と呼ばれている類である。全形を復原しうるものはなかったが、破片は各所から発見された。そのうち前方部左第III段斜面から発見されたもの（図版C32-1、第28図最上段）は完好な頭部破片である。口径39.4cm、頭部の高さ22.6cmを測る。頭部下端の直径は12.4cmで小さく、これより上方へ広がり、中央に一条の凸帯をめぐらす、凸帯の断面は方形で細い。この凸帯をつけるとき、内側からおさえるため内面はやや凹みがある。この凸帯よりさらに上方へ広がる口頭部はその口縁端が上方に少しばかり突出したような構造になっていき。こうしたつくりは、古式の土師器の口縁に

も存し、この埴輪が薄い器壁を有することと同じく、忠実に土器を模していることが知られる。朝顔形という名称よりも、壺の形象化としての意味を認めて、壺形埴輪と呼称するのが最もふさわしい。その他の破片も薄片であって、口縁端のつくりも類似している。胎土は一般に良好な粘土を用いている。この類の破片で凸帯の部位で接合した粘土紐が分離した結果、その接合状況の判る資料（第35図11）がある。これによってみると、一旦凸帯のある中位まで捲きあげ、その端部は極めて丁寧にまとめられたものであることがわかる。



第28図 墈輪（A類）

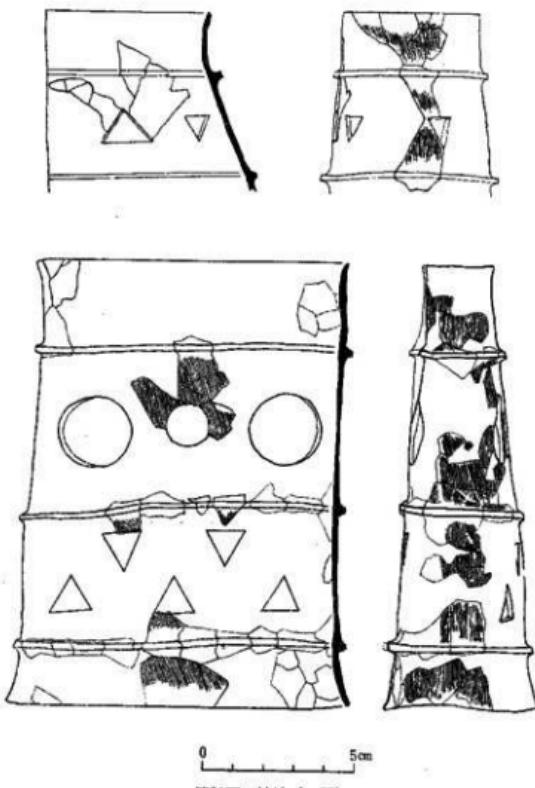


第29図 壁 輪 (B類)・(C類)

〔B類〕（図版C32—2、第29図） 大型の円筒形のもので、數個体分ある。いずれも後円部前面及びその付近で発見したもので、復原した図版C32—2は、本来後円部前面上位に樹ててあったものが、崩壊した結果、上半部が落下散乱したもので、辛うじて接合した。底部は直徑46cmで、下端より高さ23cmまでは接合した。その範圍に横位の凸帯一条が下端より10cm前後の位置にめぐっており、この凸帯より縦位の凸帯が数本つくらしい。横位凸帯より下の外表面は縦方向の荒い刷毛目がつけられているが、凸帯より上方は刷毛目が横につけられている。一方口径は47cmで、下の基底部と大差ない。上方の破片は風化が著しい。口縁端より61.3cmまでを接合し得た。口径の数値の等しいこと、また出土地点の同じこと、外表面の刷毛目及び焼成等からみて、両者を接合して高さ111cmに復原したが、この高さは任意なものである。口頭部には口縁より10cm程度下方に横位の凸帯一条がめぐっている。口縁端のつくりは、端部が内方に肥厚し、下端が厚く平坦なのと相違する。特に注目すべきことは、上下2条の横位凸帯に狭まれた部分には何等凸帯を付けた痕跡の認められないことと、縦位凸帯間が横方向の太い刷毛目をつけるものが3面あるのに、1面のみが縦方向の刷毛目を附していること、また、これほど巨大であり乍ら、透孔の痕跡が見当らないことである。また外面上には焼化しない黒色の部分が幅20cm前後で縦に長く残っている。後円部前面中央に樹立していたことから判断して特殊な埴輪であろう。

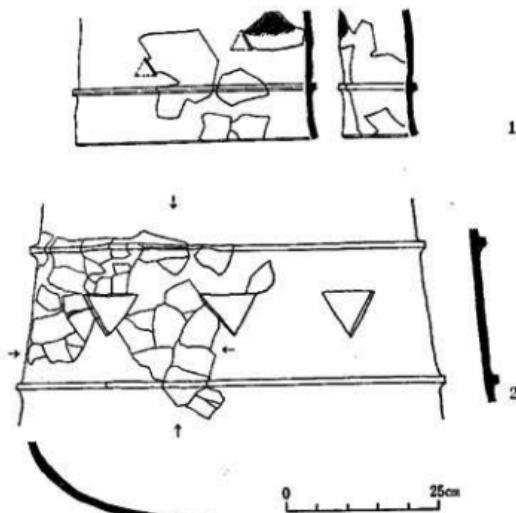
他に大型のものが2、3あるがいずれも基部のみで全形は明らかでない。1個は後円部前面中央下端に位置したもので楕円形をしている。その長径は48cm、短径は40cmを測る。他は前方部左側くびれ部付近に散乱していたもので円筒形である。直徑50cmを測り、下端より20cm上方に低い凸帯一条をめぐらしている。

〔C類〕（図版C32—3・4、第29図） 円筒形で長方形の透孔があり、前方部前面Ⅱ段斜面で発見されたもの（図版C32—3、第29図）は朝顔形埴輪の台部であるらしい。凸帯3条を認めるが、1つの凸帯間の区画には長方形透孔が3ヶ、他の区画には4ヶある。円筒は一方で細くなり、凸帯の部位で急に外方へ広がる。もう一個（図版C32—4、第29図）は左側くびれ付近で出土したもので、狭い長方形の透孔が市松になっている。



第30図 墓輪（D類）

〔D類〕(図版C33) 墓丘の各所から多量に発見されたが完形のものはない。破片を連接していくと長大な楕円形になるところから、どのような型であるか明瞭でなかったが、円筒形埴輪のひずみから楕円形になつたいわゆる楕円形埴輪とは全く相違して、平面形は長大な楕円となり、立面形は平板な直立した台形に近いものであるらしい。いかなるものを形象したものか不明であるが、三角形、円形の透孔がいくつかあって、その配置も図版C33-1にみると、屈曲面にまであててある。また口頭部は体部と異なり、上方

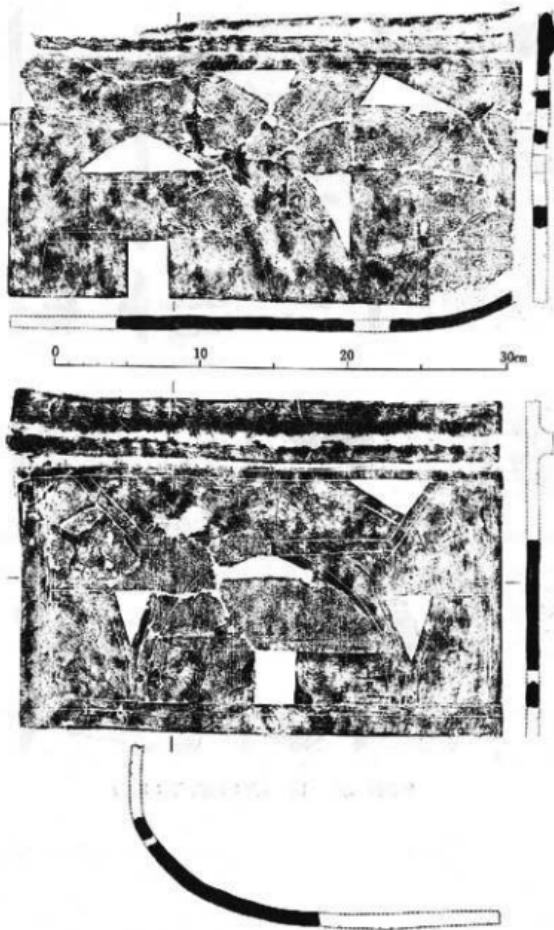


第31図 墓輪（D類）

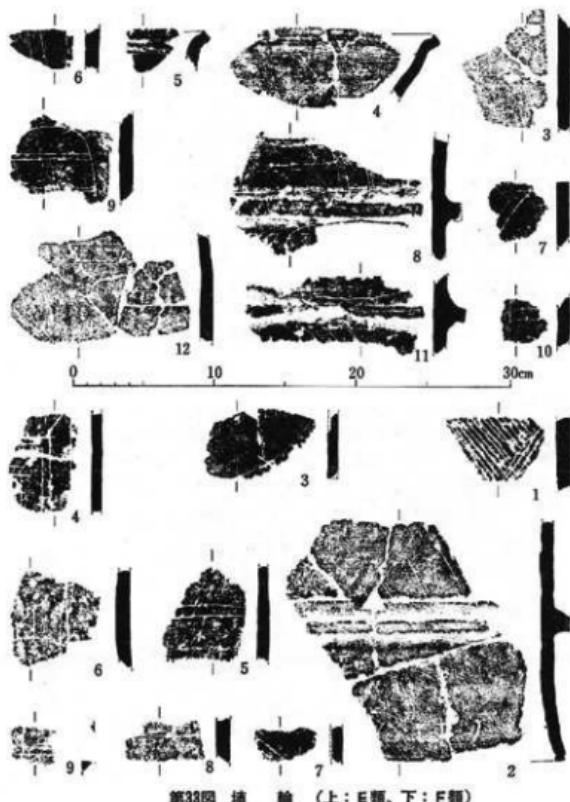
に立上るようになっている。体部下方は判らない。

2は辛うじて復原し得たもので、その高さは任意なものである。しかし、上部と中部には透孔があって、下方は三角形、上方は円形であるらしい。上方の凸帯間は大きな透孔によって、26 cm の間隔であることが知られた。他に 32 cm の間隔をもつものがあることから、ほぼ 30 cm 前後の間隔と推定される。

その他に小型のもの（第31図1）、三角形透孔を一列にあけたもの（第31図2）などがある。（E類）（図版C34(1)・(2)、C35(1)、第32・33図上） 罂形的にはD類とすべきであるが、顕著な文様をもつところから類を分けた。文様は中央に半円弧を描き、その中に2本の直線を横位置にわたしてある。円弧の上方は上開きの直線的な图形に接続し、それぞれの屈折点から、小三角形や直線につながる。こうした文様は、奈良県宮山古墳出土軸の正面下段及び上段を飾る文様と同一であるが細部で異なる。また同種文様は京都府庵寺山古墳の軸にもあって、後代にひきつづく文様である。広義の直弧文であるが、この種の文様の最



第32図 墓輪（E類）

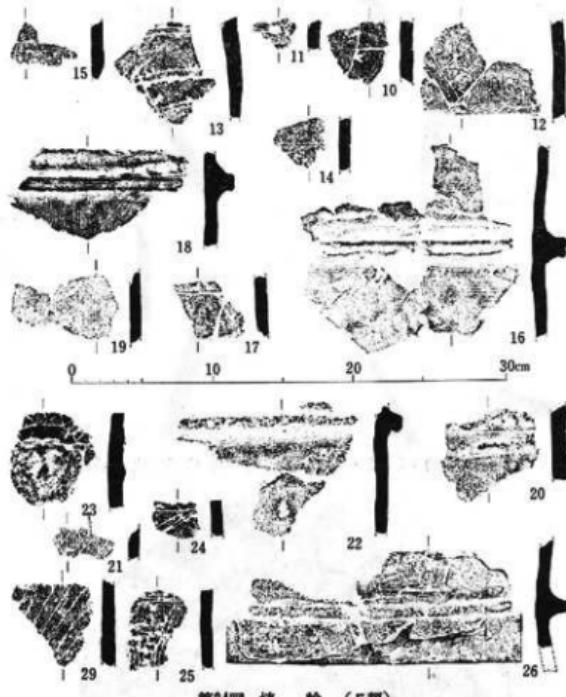


第33図 塚輪（上：E類、下：F類）

も古いものであろうか。ここでは2本の平行線が守られているが、上記二者では次第に単線化しつつある。

図版C34(2)では透孔の小三角形は上辺では交互にあけられ、半円弧では上部に低平な小三角形を、下部に方形の透孔をついている。刷毛目は外面では凸帯と直交する方向につけられ、内面では縦位の斜方向である。

また、図版C35(1)8にみると透孔をつない小円弧がある、この円弧の高さが低いことからみて、同4の口縁部に近い部分と考えられる。しかも4でみると口縁部近



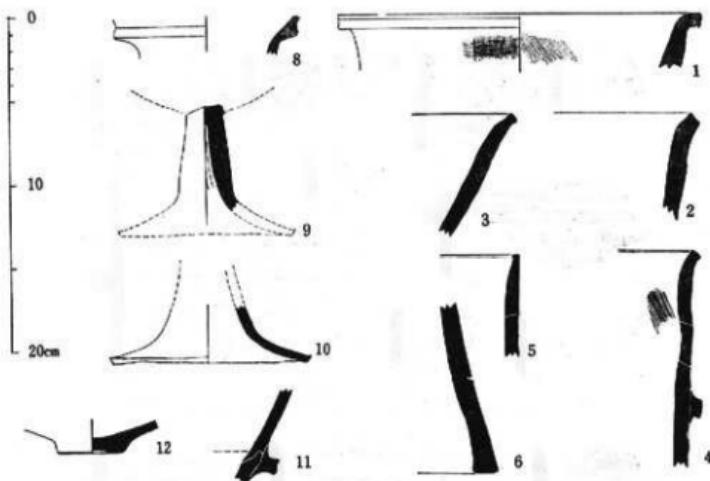
第34図 墓 輪 (F類)

くでも透孔をつけるものがあることが知られる。

文様をもたない破片の中に直線と円弧とを相接してもつものがあって、この間隔をさきの(2)のそれと合せると全く重なるものがあったから、文様をつけることを省略した場合でも透孔は本来の原則に従っているとみられる。

〔F類〕(図版C35(2)、C36(1)・(2)、第33・34図)

上記のいずれにも該当しない類を一括した。第33図下2は三角形の文様をもち、その間に小三角形の透孔をあけたもの、同4・6は方格の線文に対角線の一線を入れてあり、軸の部分にも似たものがある。第34図12、13は通有の直弧文と同類で、同22、23は鋸歯文をもつ円弧文である。同26は細沈線で3~5本の復線で文様をつくっているが、その単位は判明しない。



第35図 塗輪（1～6・11）・土師器（8～10）・弥生式土器（12）



第36図 漢文鏡（後丹部粘土襷）

## 考 察

### A 選地の条件

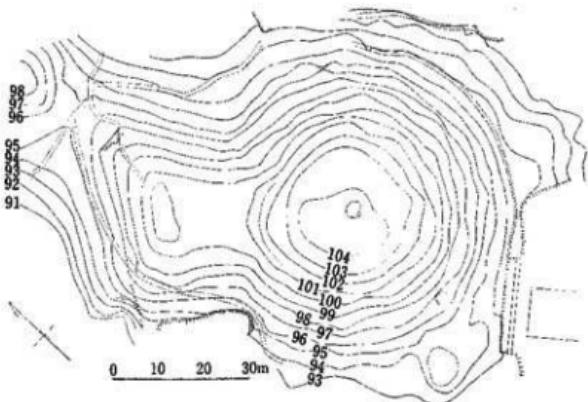
弁天山古墳群の南半部にあるA 1、B 1、C 1の3基の古墳はいずれも前方後円墳であり、丘頂部を占居し、ともに平野部から望見しうる条件を有している。いま、この3基の古墳を対比することによって、C 1号墳の持つ選地の意味を考えてみよう。

B 1号墳は背梁部の最も高い所にあって、後円頂部の標高は104m余である。そのためいずれからもその所在を指摘できる。これに対し、A 1号墳は脊梁部の南端に位置し（標高92.2m）最も平野部に近い。そのため、平野部から望見しうる点ではB 1号墳と同一条件にあるといえよう。一方、C 1号墳の場合は前2者とやや趣を異にし、高さの点ではB 1号墳に劣り（標高94.57m）、尾根の北方に位置するため、平野部からこの古墳を望見しようとすれば、西南方からではかなり地域が限定される。

古墳の造営にあたって、平野部から望見しうること、また古墳のつくられる位置からの眺望が重視されたとすると、3基中最も良い条件にあるのはB 1号墳であり、A 1号墳がこれにつき、C 1号墳は最も不利な条件にある。個々の墳丘の造営について、時間的前後を想定する場合、最初に造営される古墳が最もすぐれた立地条件を選ぶとすれば、その後に造営されるものは、順次条件が限定されていくことになる。このように墳丘の位置の視覚性という観点から、C 1号墳が3基中最も後出的であると推定できる。（第37図・第38図）

3基の古墳の選地について、共通な要素の1つはいずれも丘陵脊梁部にあたる主幹尾根から支脈の尾根が派生する位置、いわゆる尾根の結節点を占居していることである。しかも、これから派生した支脈尾根上には、いずれも小形の古墳が造営されていて、結節点の古墳に対し、支脈尾根上の小墳はあたかも従属的な連累を想わせるかの如くである。A 1号墳では尾根の東端に小円墳（岡本東古墳—A 2号墳）を有し、B 1号墳ではB 2号墳以下数基が一列に並んでいる。また、C 1号墳でも東側に伸びた尾根上にC 2号墳が位置する。

これらの支脈尾根上の諸古墳は主幹尾根上の古墳と包括して考察を加えるべき性格のものであるとすれば、主幹尾根上に立地する意味もまた限定される。墳丘造営の前提として考慮される条件には単に視覚的な意味のみならず、そこから派生する支脈のあること、つまり尾根の結節点という考慮がはらわれたであろうことも加えねばならないのではなかろ



第27図 弁天山B1号墳 外形図

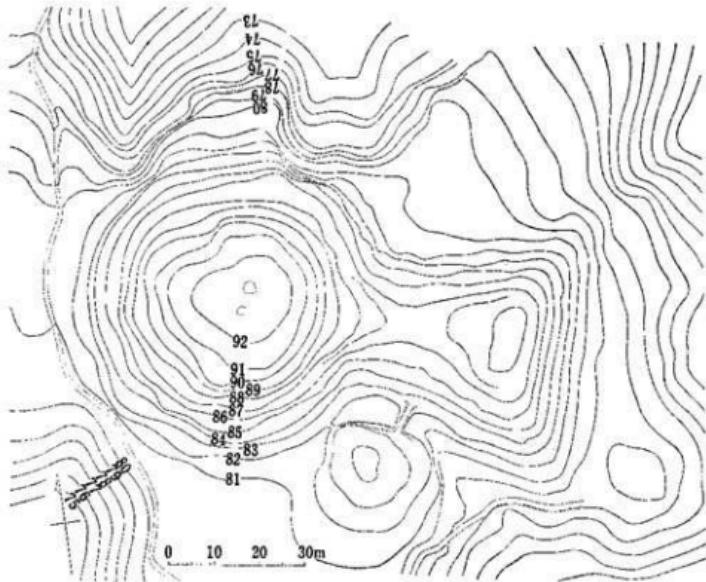
うか。

このようにみて來ると、尾根の結節点に位置している古墳が支脈尾根上の諸古墳よりも年代的に古いならば、それら相互間にさらに、血縁的な関係を想定し、系譜的な意味で解釈することもできる。又A1、B1、C1の3基の古墳についても、これらが、同じ丘陵を占居していることから、3基相互の間に密接な系譜関係を想定し得よう。

つまり、古墳を营造する際、如何なる位置を選ぶかということは重要な意味をもつてゐるではなかろうか。おそらく主幹となる尾根を利用しうるのは首長相当者のみであつて、派生する尾根には当該首長の同族者が順次連なるような形の選地が行われたのかもしれない。

古墳の選地が漠然となされたのでないとするれば、古墳の規模もまた、何等かの基準があったことが考えられる。即ち、营造の位置を決定する要因はまた、規模を決定する条件を部分的に含んでいるかもしれない。そう考えると古墳の規模を決定するのは自然丘の側にあるのではなくて、营造する人の側にあるのであって、营造しようとする古墳の規模に適合する自然丘が選択されたのであろう。

いまA1、B1、C1の3基の古墳を比較すると、概略B1号墳の後円径はA1号墳の後円径に近似している。また、C1号墳の大きさはA1号墳の大きさの約半分に作られている。



第38図 弁天山A 1号墳 外形図

こうした規模の上の類同は偶然生じたものではなく、相互に関連しているようにも見える。その規模を決定するために尺度が用いられたかどうかは別として、後出の古墳の規模は既存の古墳のそれと相対的な関係を有していたのではなかろうか。そこで、3基の古墳について、もっとたち入って検討してみよう。

A 1号墳は名神高速道路を建設する際、前方部が破壊されるので、破壊部について外部調査が行われた。この調査によって、前方部は2段の丘体とこれを取り巻く裾部の葺石面が存することが知られた。この点、前方部の構造はC 1号墳と類似している。ただ、部分的な応急調査であったため、前方丘のすべてについて悉知し得ない恨みがあるが、II段下縁基石列はその幅を求めるので、C 1号墳の同部と比較すると、A 1号墳は21mである。またA 1号墳のIII段下縁は北半部を調査していないが、下縁基石列を発掘した南半部を中心線で復原すると、III段下縁基石列の復原長は58.4mとなる。C 1号墳の同部は29.5mとなつて、II、III段下縁基石列の長さはA 1 : C 1 = 2 : 1という関係にあることを知りう

る。こうした比率は後円径、その他でも認められるから、C 1号墳の規模がA 1号墳と極めて密接な関係を有することが推される。

さて、A 1号墳の外形とB 1号墳の外形を比較してみると、全長ではB 1号墳の前方部が短小なため、B 1号墳は100m、A 1号墳120mで20mの差があるが、後円丘の径は共に70mでその高さもまた、10mを測る。

前方後円墳における後円丘のもつ意味が如何なるものであるかは別として、円丘部が主的なものであることは認めてよいであろうから、この両墳における円丘部の類似は重要な相互関係を示唆しているとみてよいであろう。とすれば、3者間の関係はどのようなものであったのであらうか。A 1・B 1号墳の墳丘内部が不明な現在では断定し難いけれども、外的条件から判断すれば、相対的にはB 1→A 1→C 1と継起的に營造されたとみてよいであろう。

B 1、A 1両古墳について外部から観察したところでは、共に葺石をもって堅固に築かれているものの、埴輪については、破片すら認められない。ただA 1号墳では、後円頂部外縁で土師器の薄片（おそらく壺？）を散見するが、B 1号墳ではそうした破片さえ認められていない。このことも、上記の推定をある程度傍証することになり得よう。

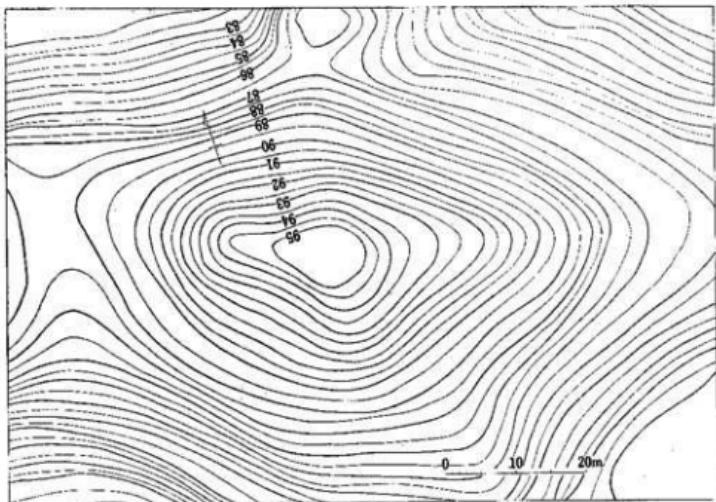
#### B C 1号墳の築成について——墳丘の復原——

それではC 1号墳は本来どのように築成されていたのであらうか。先に観察したところに従って、原墳丘の築成を復原してみよう。

##### 〔地 山〕

調査に際して、葺石下の盛土の積み方、地山の削り方、旧地山表面の検出等、封土の細部にわたって全面的に調査する予定であったが、作業量の甚大なことと、時間的な制約等のため、單にトレンチにより部分的な断面観察しかなし得なかった。そのため、封土に関する諸問題の解決に極めて不充分な資料しか求めえない結果となった。

まず、各トレンチにあらわれた地山の様態を総括的に検討してみると、Aトレンチにみる前方部前面はⅢ、Ⅳ段が地山を削って作られているのに対し、Ⅲ段は盛土である。すなわち、中央の粘土層より前面にかけて、地山面が下降しており、その上に厚い盛土がのっている。この地山と盛土の境目に薄い黒色灰層が部分的に認められたが、この黒色灰層は墳丘築成に先立ち丘陵上の草木を焼いたためにできたものではなかろうか。もし、そうだとすると、この部分には原丘陵の表面が遺存していることになる。



第39図 井天山C1号墳 地山想定図

一方、後円部前面及び背面もまた、大部分が地山を削って作られており、盛土部分は後円部最上段の上半部のみにすぎない。両くびれ部も地山を削った上に石を葺き上げてあった。

こうしてみると、墳丘の大半が丘陵を削ることによって形づくられており、盛土の行われたのは後円頂部と前方部前半部のみに限定される。もっとも後円部では南北の両側に部分を考慮する必要があるが、それにしても、盛土作業の行われた部分は全体からみると僅かな部分である。

ところで、墳丘長軸の断面にめられる地山面のカーブは、後円部前面下半部及び前方部前面下半部を補足することによって、前方部前面の外域の稜線と無理なく繋ぐことができる。そこで、これを手掛りにして墳丘外域の傾斜面を墳丘内の地山面と関連させ地山を復原してみると、第39図の様な地山の復原図が想定される。（第39図）すなわち、墳丘外域にみられる地形は墳丘の長軸線に尾根が伸び、北側と南側とに支脈となる稜線が派生していて、4つの稜線の合する部分が最も高くなっていたとみられる。後円丘はこの最高位を利用して設定されたのである。假りに、この地山想定図が原丘陵の形状に近いものであ



第40図 奔天山C1号墳 削土図

るとして第39図によってその土量を算定すると等高線83m以上で  $24194.10450\text{m}^3$  となる。  
〔墳丘の復原〕

先に、墳丘について観察したところに基づいて、原墳丘がどのようなものであったか復原してみよう。第41図はその復原図で次表に各部の数値を示した。

復原に当って最も問題になるのは、後円部及び前方部の各頂部の高さである。本来、両頂部にあったと考えられる埴輪片が墳頂には1片も存しなかったから、頂部は相当流失していると一応想定しなければなるまい。

ところで、後円部第6区のBトレンチでみたC盛土群がどの程度に盛られたか断定し得  
填丘復原数値表

単位 m	I 段		II 段		III ○		IV ○	
	上縁	下縁	上縁	下縁	上縁	下縁	上縁	下縁
前方部	幅			13.9	22.0	24.3	30.0	
	長		左	18.9	19.7	20.1	22.2	
	高		中	19.1	—	23.6	—	
くびれ○			右	17.1	18.2	17.6	20.3	
					2.4	2.7		11.5
					9.7	15.1	18.1	22.3
後円部	長径	16.5	30.5	40.3		46.9		
	短径	16.3	27.0	30.1	37.2	39.6	43.0	
	高	3.6		2.2		0.5		



第41図 丹天山C1号墳 複原図

ないけれども、B盛土群中、墳頂外縁に置かれた赤褐色粘土質土層が断面三角形を呈し、恰も頂部外縁を意識して置かれたかのように考えられるから、C盛土群が先の盛土を平均して蔽っていたとしても、標高96mを超えることはあり得ないであろう。さらにこのBトレントでみられるI段、II段、III段の各斜面長の比が3：2：1であって、この割合は後円部の他の斜面でも同様な結果が見られたから、一応この比率を考慮するなら現標高95.75mは原頂部の標高に近い高さと考えられる。

前方部の頂部の高さを求めるることは一層困難である。前方部頂部で地山面の認められるのは、後円部前面下縁から5m付近までであって、この範囲が、墳丘築成にあたって削られたと考えられる。その高さは92mから92.6mの範囲にある。本米、前方部の前面によった地域がいくらか高くつくってあったとすれば、その隆起部はすべて盛土からなっていたと判断される。しかし、その盛土部分がどの高さまであったかは知る術がない。しかるに前方部の3側面の各テラスはいずれも前面へ向って徐々に下降し、各斜面の幅も一樣でない。上下の墓石列によって斜面の実長を求めうるIII段斜面では、左右ともくびれ部側が狭く、前面に近づくほど広くなる。もし、II段斜面も、この様な程度の広狭差があったと仮定し、先に第4区で考えたように、II段の斜面の長さをIII段のそれと等しかったとすると、92.6mになる。しかも、その高さは左側くびれ部のI段墓石列の高さとほぼ等しく、頂部の最低位92.0mより0.6m高くなる。前方部の高さを算定し得たとしても、前方部最頂部の原形状がどの様に築成されてあったかは知り得ない。しかし、近接したA1号墳の現状を

考慮すると、本来、前方部前半部が高くつくられ、前面と側面によってつくられる左右の稜線はその最頂部まで一続きに及んでいたと解するのが妥当であろう。<sup>⑨</sup>

これに対し、後円頂部には低い方形の台状の盛土が作られていることが屢々他の古墳で指摘されているので、ここでも同様の構造があったかもしれない。しかし、それが後円頂部にどの様な方向に、どの程度の広さで作られてあったかは全く遺存しない。もし、石室のつくられた墓塚の埋土と関係があるとすれば、墳丘長軸に対して斜行した墓塚を有する本墳では、長軸に斜行した方形土壙を想定しなければならない。

後円部上半の盛土の状況を知ることのできるのは、Aトレント及びBトレントであるが、この両トレントの断面にあらわれた土の様子は同一でない。Aトレントの場合、積まれている土はほとんど粘土質の土である。それに対し、Bトレントの場合は既述のように、砂質土が基礎になっている。Aトレントの場合、後円部前面の下半部から前方部にかけて、地山の上が粘土質であることと関係がある。盛土の基底部に薄くおかれた土は青灰色ないしは灰褐色の粘土質の土であって、これらは前面下半の地山に含まれている青灰色粘土層と同質である。一方、Bトレントの場合には、斜面下方の地山が砂質土からなっているから、この部分の土を削って運び上げた可能性がある。しかし後円部の盛土のうち、上半部を構成している赤褐色粘土質の土は後円部全面に広がっているだけに、量的にも多く（特に第6区では、流失しやすい砂質土を蔽うかのように置かれている）、しかもこれと同様の土は墳丘の地山内には見当らないから、他の場所から運んだものであろう。古墳の外城には、前方部前面の下方や、右側くびれ部の外方一帯のように、あたかも人為的に削平されたような平坦な部分がある。もし、この部分が墳丘の盛土を採取するために削られたとすれば、その可能性は十分考えられることだが、盛土がどこに土を削って積みあげたものであるかを指摘することは容易なことではない。

盛土の積み方は、既に第6区Bトレント及び第4区Aトレントで述べたように、はじめに概略の基礎部分を盛上げておいて、その後周縁部から順次内方に傾斜させつつ積み上げ、最後に内方の凹部を平坦になるように盛り上げる方法をとっている。だから墳丘の形をどのようにつくりあげるかということは、盛土をおきはじめる段階までに、既に地山面に相当の用意が施されてることになる。そしてはじめて、削平する部分と盛土をおく部分とが区別して作業が行なわれたに違いない。それでは墳丘の盛土はどのくらいの量であろうか。試みに算定したのが下表である。

第41図は墳丘の復原図、第40図は墳丘内に包摶されている地山部分のみの図、第39図は最小限にみた場合の原丘陵の復原図である。これら3つの図をもとに、標高83m以上の各50cm等高線間の体積を求めて集計すると、盛土量と削土量の割合は約5:1になった。しかし85m以下になると依然削土量の比が増大するから、さきに墳丘外周の平坦部を人為的な削平の可能性があると考えたように、盛土のはほとんどは、墳丘外周からまかれたといってよいだろう。このことは、さきに盛土の土質についてみたこととも符合する。

盛土のつぎの作業は石を葺きあげることであった。同一斜面の築成において、盛土作業と葺石作業が併行して行われた可能性は少ない。もし併行して行われたとすれば、盛土中に葺石の混入した例があつてもよさそうである。しかし、どのトレンチでも盛土内に塊石を混入したようなものは見当らなかった。盛土の丁寧なおき方から考えてもうなずけることである。しかし、葺石斜面がI段から着手されたか、最下段から着手されたかは分明でない。前方部右側稜角の裾部外方に、葺石に用いられる石が2m四方に積まれた形で遺存していたが、これは恐らく斜面を葺くために予めここに石をまとめておいたのであろう。

高さ (単位m)	50cm 等高線における体積			A-B (盛土量)	C-B (削土量)	(A-B)-(C-B) A-C
	墳丘の復原図	B 地山削除図	C 地山の復原図			
95.6~95.5	23.08700			23.08700		23.08700
95.5~95.0	131.93500	7.24200	7.24200	124.69300		124.69300
95.0~94.5	160.45385	55.44125	55.44125	105.01260		105.01260
94.5~94.0	191.57750	91.37125	91.37125	100.20625		100.20625
94.0~93.5	224.54250	131.61250	133.31750	92.93000	1.70500	91.22500
93.5~93.0	258.27125	176.47125	190.95375	81.80000	14.48250	67.31750
93.0~92.5	301.99000	225.79000	256.47125	75.20000	29.68125	45.51875
92.5~92.0	422.38225	300.54250	323.89875	121.83975	23.35625	98.48350
92.0~91.5	567.97000	387.98625	396.17875	179.98375	8.19250	171.79125
91.5~91.0	626.95750	455.05000	471.38500	171.90750	16.33500	155.57250
91.0~90.5	683.46375	528.21625	555.94250	155.24750	27.72625	127.52125
90.5~90.0	759.44275	627.45150	647.98750	131.99125	20.53600	111.45525
90.0~89.5	907.91375	748.79750	774.06625	159.11625	25.26875	133.84750
89.5~89.0	1018.51500	888.82875	926.49000	129.68625	37.66125	92.02500
89.0~88.5	1142.04375	1032.20750	1061.78625	109.83625	29.57875	80.25750
88.5~88.0	1274.88750	1166.68625	1180.54750	108.20125	13.86125	94.34000
88.0~87.5	1390.17000	1280.88250	1295.03875	109.28750	14.15625	95.13125
87.5~87.0	1487.40875	1379.45750	1396.82875	107.95125	17.37125	90.58000
87.0~86.5	1581.61000	1468.55750	1489.88625	113.05250	21.32875	91.72375
86.5~86.0	1676.51250	1558.50725	1584.67375	118.00525	26.16650	91.83875
86.0~85.5	1770.44500	1668.61000	1701.39500	101.83500	32.78500	69.05000
85.5~85.0	1838.53250	1803.78125	1817.50875	34.75125	13.72750	21.02375
85.0~84.5	1877.68500	1888.75000	1893.12250	7.93500	23.37250	-15.43750
84.5~84.0	1911.42625	1904.81375	1944.21625	6.61250	39.40250	-32.79000
84.0~83.5	1948.26375	1944.52200	1984.47000	3.74175	39.94800	-36.20625
83.5~83.0	1990.65000	1982.22875	2013.88500	8.42125	31.65625	-23.23500
	26168.13710	23685.80525	24194.10450	2482.33185	508.29925	1974.03260

こうした石置場が作業の進行に従って何箇所もつくられたのであろう。

葺石は下方の段ほど大きく、上方の段ほど小さい石が多い。斜面の葺き方は第10区その他で観察したように、一辺5m～3mの三角状の面を接続して構築したものらしい。さきの墳丘復原図によって、各部分の表面積を算定すると次表のようになる。Ⅰ段からⅣまでに限って、前、後面丘の表面積を対比すると約1:3の比になる。しかし、前方部Ⅳ段の表面積を加えると、両者はかなり接近するけれども、なお後円丘が大きい。またテラスの場合も同様である。この点からも後円部が主体的であるといえる。全斜面の表面積1886.61m<sup>2</sup>を既述の平均数値で算定すると葺石の総量は28675個となり、総重量は392tとなる。これらの大量な葺石が近傍の芬川一帯で求められたとしても、これを山上に運搬し、

墳丘各部の表面積

単位 m <sup>2</sup>	後円部				前方部				合計	
	左側	前面	右側	小計	左側	前面	右側	小計		
1. 頂部	—	—	—	212.47	—	—	—	222.16	434.63	
2. 第Ⅰ段斜面	209.94	56.94	204.10	470.98	—	—	—	—	470.98	
斜	第Ⅱ段斜面	218.23	—	194.79	413.02	64.19	64.75	50.03	178.97	591.99
3. 第Ⅲ段斜面	125.46	—	106.65	232.11	67.47	95.03	44.46	206.96	439.07	
西	第Ⅳ段斜面	—	—	—	174.57	145.74	64.26	384.57	384.57	
小計	553.63	56.94	505.54	1116.11	306.23	305.52	158.75	770.50	1886.61	
4.	第Ⅰ段下盤テラス	73.31	—	79.21	152.52	—	—	—	—	152.52
テラス	第Ⅱ段下盤テラス	73.67	—	76.92	150.59	31.25	41.40	32.68	105.33	255.92
小計	146.98	—	156.13	303.11	31.25	41.40	32.68	105.33	408.44	
合計	(2+3)	700.61	56.94	661.67	1419.22	337.48	346.92	191.43	(385.93)	2295.05
	(1+2+3)	—	—	1631.69	—	—	—	—	1097.99	2729.68

しかもこれをもって墳丘表面を葺き上げる作業がいかに困難な労働であったかは驚くべきものがある。またテラスのパラスも全域に敷いてあったとすると23tを加えなければならない。

埴輪が葺石作業と平行したか、前後して行われたかは、その遺存例に乏しいため、断定できない。しかし、後円部前面左列のNo.5及びこれに近いNo.11の埴輪では、かろうじて遺存した円形の基部の周りに小礫をめぐらしたものがあるから、一度葺石の面ができた後

においたものであろう。埴輪片の量を概数で示すと次表のようになる。後円頂部には全く埴輪片が見当らなかったけれども、上記の数値でみるとおり、

第Ⅰ段斜面及び下盤テラス	約4000個
第Ⅱ段	約1000個
第Ⅲ段	約1400個
第Ⅳ段	約100個

第1段斜面及びその下縁のテラスが最も多い。このことは、墳頂部の肩部にあったものが崩落して堆積したものもあったことを示している。中で最も多いのは右側くびれ部の一帯であって、破片の大きなものもまた多い。後円I段左側の斜面上部にあった破片が、その下部の破片と接合できるのみならず、V段と呼んだはるか下方の破片とも接合できたから、上方から落下して相当移動していることは考えねばならない。こうした破片の接合によって知られた例は、前方部右側斜面でもII段下縁のものがIV段裾部の破片と接合し得た例がある。

埴輪列の遺存していたのは後円部前面の3列と、後円部前面左側I段下縁のテラスのみであったが、左列の9本がさらに前方部のNo. 10と--続きのものとして延長できるかどうかは断定できない。しかし、前方部II段斜面にもかなりの破片が墓石上に散乱していたから、これを上方から転落したものの一端とすれば、前方部頂部の肩の付近に樹立された埴輪のあったことが推定できる。また円筒形の破片が左右両斜面に多いのに対し、前方部前面や後円部斜面に長楕円のD・E類が多くみられることは注目してよい。D・E類の埴輪がどのように置いてあったかは、後円部前面右列 No. 1 の例で知りうるとしても、なお十分ではない。もしこの例に従うなら、長軸を列の延長線と平行におくように並べたことになる。後円部前面では左右の列の中央に大型の円筒形埴輪（B類）が並べられてあったが、こうした特異な埴輪が中央にあることは前面の意味を考える上にも重要な手掛りとなるであろう。

さきに第6区のI段下縁テラスに遺存する埴輪で相互の間隔が約1mであったろうと推定したが、もしこれを次表に従って算定するとI段下縁テラスで約90本、前方部平坦部に

各斜面の上縁と下縁の実長

単位 m	後円部	前方部				合計
		小計	左側	前面	右側	
第I段	上縁	54.8	—	—	—	54.8
	下縁	92.1	—	—	—	92.1
第II段	上縁	91.7	49.9	19.0	14.0	141.6
	下縁	105.3	59.3	19.9	21.2	164.6
第III段	上縁	111.3	62.8	20.2	24.8	174.1
	下縁	119.7	74.8	23.5	31.0	194.5
第IV段	上縁	—	85.7	38.0	31.0	85.7
	下縁	—	111.6	46.4	41.6	111.6
上縁の合計		257.8	198.4	77.2	69.8	51.4
下縁の合計		317.1	245.7	89.8	93.8	62.1
						456.2
						562.8

も同様に並んでいたと仮定すると約140本となる。もし、さきの埴輪片の出土状況から、II段下縁までを含めると約250本にも達する。

### C 繊 年 的 位 置

まず、内部施設のうち、後円部の堅穴式石室から考えてみよう。堅穴式石室は、その大半を破壊によって失なっていたが、基底部は比較的よく残っていた。基底部の構造をみると、これまで公表されている堅穴式石室としては新例に属する。つまり、その第一の特色は、墓底に断面U字形の長い凹溝をつくっていることである。この凹溝は地山を掘りくぼめてつくった基礎のはば中央に位置し、木棺を置くために予め掘り回めたのである。これと類似したものとして、京都府妙見山古墳前方部粘土梯・大阪府黄金塚後円部中央粘土梯・大阪府駒ヶ谷宮山古墳前方部第2号粘土梯などがあげられる。これらの例からみると、この構造は堅穴式石室より、かえって、粘土梯によくみられる基底部構造である。堅穴式石室では、その精査例が少ないので、明らかでないが、多少とも関連をもつものとしては、京都府寺戸大塚古墳前方部堅穴式石室・滋賀県安土瓢箪山古墳西北部堅穴式石室・兵庫県萬葉山古墳堅穴式石室などをあげることができる。

これら一群の墓底底部に凹溝を穿つている堅穴式石室の整体をみると、その高さに共通性がみられる。上の3例では側壁の高さが1m前後で、石室の高さとしては低い部類にはいる。この形式の基底部構造では、墓底底部でもある木棺の下底面が石室壁体の底面よりも、低い位置にある。底底が平坦なもの、あるいは、底底に基台をつくりだしている例と違って、この類では壁体の高さを、低減できる。ここから壁体の高さは、底底の構造と密接に関連したものである。

次に、第二の特徴は、粘土床が木棺の基底部のみにとどまらず、石室壁体の下底部全面にわたって貼られていることである。同じ構造のもの管見にふれないが、強いて類例をさがせば、滋賀県安土瓢箪山古墳の後円部中央堅穴式石室の基底部をあげることができる。ここでは、地山の墓底底部、石室内部にあたる部分に、パラスを敷き、板石をおいた上に粘土を貼っている。ところがC1号墳の場合はこの粘土が、周壁の下縁部にまでおよんでおり、しかも粘土の上面は外方へ漸次傾斜している。これは石室内の水を外方へ誘導するための配慮と考えられる。木棺直下の構造について瓢箪山古墳と比較すると細部では相違するが、粘土床が壁体の下底部にも延続しているという点で共通する。このように石室構造についていえば、木棺を収納した堅穴式石室をもつ古墳と共通性をもちながら、粘土梯

をもつ古墳にも近接していることが考えられる。この点で、同じ攝津でも、茨木市紫金山・同將軍山・池田市茶臼山の前方後円墳の竪穴式石室が、平坦な埴底に粘土棺床を設けているという共通した構造を示していることと対照的である。

次に、前方部粘土棺について考えてみよう。この粘土棺は長方形の埴底をうがち、その平坦な埴底に、粘土棺床をつくり、その周囲にバラスを敷設して排水施設としている。このような粘土棺の構造は類例が少ない。かえって、竪穴式石室の壁体を除去した下部の構造と酷似する。いずれも、弁天山C1号墳と同じ大阪府下北摂地域にある、上記の紫金山・将軍山・池田茶臼山などの前方後円墳の後円部主体である竪穴式石室の粘土棺床構造との類似があげられる。

竪穴式石室の遺物のうち、鏡は3面出土した。まず、三角縁三神三獸鏡は波文帶を有するものである。三角縁波文帶三神三獸鏡を出した古墳で、管見にふれた12の古墳については、同範鏡はみつからない。この波文帶三神三獸鏡は、小林行雄が指摘したように、「鏡群の型としては仿製鏡をふくんで新式に廻し、剪玉製腕輪類などのあたらしい要素の副葬品をも有して」いる。波文帶三神三獸鏡を出した古墳をみると、奈良県貝吹山宝塚・新山両古墳のように、多数の船載鏡や仿製鏡を含みながら、滑石製の各種石製品や装身具を出現させている。三重県筒野古墳の場合は、位至三公鏡<sup>①</sup>や変形神獸鏡とも共伴している。岐阜県長塚古墳では、舶載の三角縁神獸鏡や仿製の三神三獸鏡帶鏡・内行花文鏡と共存している。長塚古墳は、小林行雄が行なった、鍛形石の形式による古墳の編年観では且群にはいる。奈良県巣山古墳と同群である愛知縣白山蔵古墳は、円墳で粘土棺を主体としているが、素環頭太刀を含んでいる。これらの古墳は、内部施設に粘土棺が多く、内容遺物にも新しい傾向がみられる。

次に、吾作銘帶二神二獸鏡は、同鏡式群14古墳15例について検討してみると、同範鏡はみい山せなかった。この種の鏡を出す古墳には、構造を例にとると、弁天山C1号墳をはじめとして、香川県岩崎山古墳・兵庫県ヘボン塚古墳などにみられるように、前方後円墳で竪穴式石室を内部主とする古墳から、方墳（大阪府摩瀬町所在古墳・奈良県高円山古市古墳）や円墳（京都府金比羅山古墳・奈良県斑鳩大塚古墳）で、粘土棺を内部にもつものまである。また、遺物についてみても、三角縁神獸鏡・剪玉製腕輪・各種碧玉製品・滑石製品・筒形銅器・巴形銅器やさらに、蕨手刀子・竹櫛を共存していることが知られる。したがって、そのような古墳の構造や遺物からみると吾作銘帶二神二獸鏡には、多少の年

代的な幅があるようである。そこで、弁天山C1号墳にもっとも類似した内容、つまり、同じような構造・遺物群をもつものを採がすと、大阪府又谷北塚古墳・奈良県貝吹山宝塚古墳・兵庫県ヘボソ塚があげられる。

鏡のなかでは、最後に獸形鏡がある。文様構成ならびに法量が類似するものは見あたらないが、この獸形鏡の要素のうち、外縁を飾る菱雲文の変形や、半円方格帯の半円と方格の間を列点文でうめる形式は、奈良県新山古墳出土の変形方格規矩四神鏡や鷺巣文鏡および岐阜県伊香古墳や岡山県鶴山古墳の変形神獸鏡などとも共通性をもち、ひいては、各地の古墳から出土する中国製の画文帶神獸鏡からの影響が考えられる。弁天山C1号墳出土例と同型式のものはないが、小形の仿製獸形鏡としては奈良県吹山宝塚古墳・岡山県丸山古墳とともに、古い例となる。内区の文様や、紐座と内区外縁をめぐる圓線などの点で、奈良県天神山古墳の獸形鏡とも類似している。<sup>⑨</sup>したがって、この弁天山C1号墳出土の仿製獸形鏡は、獸形鏡の内区と、画文帶神獸鏡の銘帯から外縁にいたる外区とが複合した形をとっている。

袋身具の中には、腰辺から検出した角形突起をもつ異形の勾玉がある。良質な硬玉を使っているので、古い時期のものであることにちがいないが、異形勾玉が出現するのも、時期的な特長があるようである。たとえば、古い例では、福岡県一貴山鏡子塚古墳出土品があげられる。そのほか、若干例が知られているが、それほど古く遡る古墳にはないようである。

碧玉製品のうち、石製合子は既発見の20数個の例と比較したが、同じようなものではなく新形式である。類似したものでは、奈良県丸山古墳と貝吹山宝塚古墳出土例がある。宝塚古墳の合子はやや大形であり、縦方向の刻み目装飾がある。また、蓋と身を結縛するための孔が外側に位置していて、新しい部類にはいることが考えられる。丸山古墳出土例や京都府飯岡車塚古墳例は、装飾文をまったく欠き、結縛孔も内側に穿っていること、また、大きさなどの諸点において、弁天山C1号墳出土例と類似している。ただ、弁天山C1号墳の場合、身に蓋受けのためのこしらえがなく、蓋にくり込みをつくって、身との合わせがスムーズにいくようになっている。丸山古墳例が、身に蓋受けのくり込みをつくって、同じような効果を果しているのと、多少の製作手法の相違がある。後者の方法は、宝塚古墳やその他新しい形式のものにみられるものである。丸山古墳では、ほかに合子が1点あるが、質の悪い碧玉製であり、梢円形の平面をもっている。無脚であることとともに、新し

い滑石製の合子に近いものである。弁天山例が既往の発見例のうち、もっとも古いものではないかと考えられる。

碧玉製筒形品については、現在16例を認めるが、奈良県桜井茶臼山古墳やメスリ山古墳が古い時期の例として知られる。そのほか、奈良県東大寺山古墳・三重県石山古墳・同向山古墳・岡山県金蔵山古墳などがある。弁天山C 1号墳のように、下端に2条の広い凹線をもつ型式は例がないようである。ただ、岐阜県白山社古墳では、下端の凹線が1条あって、類例の一つにあげることができる。資料が少なく、また、比較的単純な形態のため、じゅうぶんな型式編年は行なえていない現状にあるが、ともあれ、碧玉製筒形品を出す古墳は、奈良県桜井茶臼山古墳を古い例として、若干年代が降る古墳に多い。

碧玉製石劍は、頭・足両辺から出土したが、頭辺のものはいずれも比較的良質の碧玉をつかっている。その形式は、いずれも單一の形式で、斜面と垂直面の両方に細線を入れた類であって、垂直な面に、何ら装飾を加えない類よりも形式的には古い類である。

銅鏡は、探集品を含めて31本であるが、すべて柳葉形をなす一型式に含まれる。このいずれにも笠被をもたないのが特長である。前期初頭の古墳からは、笠被をもつ銅鏡が発見<sup>⑦</sup>されていない。それに反して、笠被をもつ銅鏡は、やや新しい年代の古墳から出土する。このことからいえば、弁天山C 1号墳は古いタイプの銅鏡の組み合わせ状況を示していることになる。

上にみてきたいくつかの事実は、弁天山C 1号墳の後円部竪穴式石室の年代に関して、古い要素と新しい傾向が入りまじっていることになる。

次に、前方部粘土櫛について考えて見よう。遺物をみると、土師器と筒形品がある。土師器はいわゆる小形丸底壺である。発生期の古墳で棺内に土器を副葬した例は少ない。畿内では、大阪府池田市茶臼山古墳竪穴式石室から出た脚付焼形土師器、大阪府真名井古墳粘土櫛出土の壺などがあり、前期でも新しい年代の古墳に類例がある。前期の古墳には、ときに石製の壺が伴なう。岡山県丸山古墳竪穴式石室から出土した碧玉製壺をはじめとして、奈良県東大寺山古墳のように、滑石製品もある。いずれも、前期の古墳の櫛内から出ているようである。そして、これらの石製品は、土師器からの仮器化の現われと解釈できる。したがって、土師器の小形丸底壺の以前で接しているか、それとも同時的である。碧玉製壺に滑石製品が伴なったり、滑石製壺があつたりして、年代的に新しいといえる。

弁天山C 1号墳前方部出土の碧玉製筒形品は、中央付近に微かな段をもつものである。

筒形品のなかでも、単純でゆるやかなカーブをもつものよりは型式的に古かもしれないものである。前にふれたような粘土櫛の構造や、副葬遺物から、前期でも新しい年代が考えられる。

最後に、後円部粘土櫛について見ておこう。粘土櫛の構造で目だつ点は、墓底を少し掘りくぼめていること、排水施設を敷設していること、そして、墓底に段を2段に設けていることなどである。墓底について、類似の構造が前期の粘土櫛にしばしば見られることはすでに菅及した通りである。排水施設は、粘土床をめぐるバラス敷が一重をなし、両端では厚くつくって塙外へと導く形式である。平面形としては、前期に多いタイプであるが、粘土床周辺のバラス敷は簡略化したものといえる。塙壁の設築の例は、奈良県東大寺山古墳・同前塙古墳のほか、弁天山古墳群でも弁天山B2号墳にみられる。そのうち、奈良県前塙古墳の場合は、段上面に副葬品を埋納した施設があった。この場合、墓底に過剰埋葬と同一レベルに副葬品用の施設をつくるべきところ、墓底掘削の土木量を軽減するために、傾斜する壁面の途中に設けた段を利用したとも考えられる。しかし、副葬施設が、造畠と同一墓域内にあるということが、後に、塙を別にし、さらには同一墳丘からとび出して、副葬用陪塙になるという経過と比較したときに、その時代性が現われているように思われる。奈良県東大寺山古墳の場合、深い墓底の傾斜する塙壁に狭いテラスをもつ段を設けて、傾斜の長さを短かくしなければならない技術上の問題と、木棺を設置し、粘土櫛で覆う作業に階段を設けて、作業の困難さを減少させる効果があると考えられる。

弁天山C1号墳の場合、段上面に粘土塊を置いていたが、この場合も、粘土櫛营造の作業を容易にするために階段を設けたものと考えられる。いずれにしても、墓底掘削の土木量を軽減するという共通性の上に立ちながら、東大寺山型と前塙型との間には、技術上の理由と、副葬用という相違がみられるようである。これらの段築を有する粘土櫛は、前期の古墳に多いようであるが、弁天山C1号墳の場合、東大寺山型に属するといえよう。

出土遺物については、種類・数量が少ないが、撰文鏡は参考となる。撰文鏡については、『月の輪古墳』のなかで、ほかの鏡との伴出関係から分析が行なわれている。それによると、撰文鏡は、羅龜鏡や仿製三神二獸鏡の2種類の大形仿製鏡と、船載位至三公鏡と共に伴っている。また、石鏡を除いたほかの遺物との関係を見ると、車輪石・鍾形石などの碧玉製の腕輪や、紡錘車・筒形品などの碧玉製品、さらに、巴形銅器などの銅製品を共存しない。かえって、滑石製品などとの伴出を見いだす。これらの事実のみからいっても、撰文

鏡が比較的新しい年代の古墳に多いという傾向を看取できる。弁天山C1号墳後円部竪穴式石室から出土した既述の獸形鏡と比較するときも、この撰文鏡にいたる間に形式変化の方向と、そこに横たわる年代的間際を認めることができる。

最後に、3個の埋葬土体の年代的関係についてまとめておきたい。後円部竪穴式石室は、その上部に、粘土被が重複しているので、後者が新しいことは明らかである。上に検討したように、遺物の組み合わせや形式観から判断すると、まず、後円部に竪穴式石室がつくられた。その後、前方部に粘土被がつくられ、最後に、後円部の粘土被が設けられたと考える。相対的年代については、これら3つの埋葬は、前期中葉から末葉にかけての年代が妥当であろう。

なお、浜津三島において、これまでに調査された前期古墳との関係にもふれておきたい。すでに調査された古墳に、茨木市紫金山古墳と同將軍山古墳がある。いずれも詳細な報告は行なわれていないが、断片的に紹介された資料などによって考えてみることにする。紫金山古墳・將軍山古墳とも、前方後円墳であり、平面形は埴輪列や葺石の状況によって、ある程度知ることができる前期古墳で、平面形の形態差をただちに年代差におきかえうるかどうかは問題であって、綱年標準が見い出せない現状では資料の充足を得たねばならない。そこで、後円部に埋納された内部土体である竪穴式石室の構造を見ると、上にもすでにふれた通り、粘土被あるいは粘土床の構造において、紫金山・將軍山両古墳と比較して、弁天山C1号墳は相異している。しかも、弁天山C1号墳の構造が新例に属し、粘土被に共通した粘土床をもっている。したがって弁天山C1号墳は、その点に関していえば、紫金山・將軍山両古墳よりも年代的に新しいといえる。

次に、遺物についていえば、まず、鏡を例にとると、弁天山C1号墳には、新しい鏡式の仿製三角縁神獸鏡と小形の仿製鏡を共存している。紫金山古墳では、船載の三角縁神獸鏡とともに、仿製でも、弁天山C1号墳よりも古い鏡式の三角縁神獸鏡を出している。將軍山古墳では、調査時には、鏡を検出していないが、同古墳出土と考えられる阿為神社所蔵の船載の二神二獸鏡の優品がある。この点から見ても、弁天山C1号墳は、紫金山・將軍山両古墳よりは、新しい鏡群をもっているわけで、後者の2古墳よりは年代的に新しいと考えられる。残余の遺物では、相互に比較しうるものや、また、正確な内容が明らかにされていないので、検討できない。

## 註

- ① 上田宏範は、石室の高さを2類に分類したが、この石室は、いずれもその低い方のA類に属している。中村春寿・上田宏範『桜井茶臼山古墳』（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第19冊）1961。
- ② 小林行雄「初期大和政権の勢力圏」（『古墳時代の研究』所収）1957。
- ③ 位至三公鏡は、船鏡・三角縁神獸鏡および彷彿三神三獸鏡帶鏡と同伴する例があるが、両象鏡や西式帶神獸鏡とは共伴しない。このことから、同じ5世紀代に輸入されたものでも、位至三公鏡の方が古いことが指摘されている（近藤義郎編『月の輪古墳』P.367）1960。
- ④ 小林行雄「鐵形石の研究」（『日本考古学協会彙報』別冊2）1954。
- ⑤ 素環刀については、小林行雄の研究があり（小林行雄『福岡県糸島郡一貴山村田中鏡子塚古墳の研究』1952）、その年代の中心が400年前後に考えられている。その後に発見された古い例としては、京都府大塚山古墳出土例がある。大塚山古墳については、鏡群が船鏡のみである理由から、もっとも古い年代が考えられている。しかし鐵器の種類が、岡山県金獅山古墳のものと類似していること、大塚山古墳出土の鉄鏡の型式が、奈良県東大寺山古墳出土の碧玉製巻形品と同じであること、さらに、堅刃板系革鏡短甲や小札革鏡背も含んでいることなどの遺物群から見るかぎり、これまで考へられてきた年代より新しい可能性はないだろうか。いずれにしても、大塚山古墳の素環刀太刀は古い例である。
- ⑥ 伊達宗泰・小島俊次・森浩一「大和天神山古墳」（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第22冊）1963。
- ⑦ 近藤義郎編『月の輪古墳』P.307、1960。
- ⑧ 堂田直『池田市茶臼山古墳の研究』P.32、1964。
- ⑨ 須直幹・井上薰・北野耕平『河内における古墳の調査』1964。
- ⑩ 鹿谷榮一「石製壙に就いて——特に古墳と上代窯器の連関研究の一資料として——」（『考古学』第11卷第8号）1940。
- ⑪ 石部正志「副葬用陪塚の発達」（『考古学手帖』3）1958。
- ⑫ 今沢惣一「東大寺山古墳の発掘調査」（『大和文化研究』第7卷第11号）1962。

# 弁天山D1号墳

田代克己



## 1. 古 墳 の 位 置

この弁天山古墳群は、その最南端にA 1号墳たる岡本山古墳、最北端にD 4号墳が位置する南北に長く連なる丘陵と、この丘陵から派生して東へ延びる支丘上に点々と築かれた、計14基の古墳で構成されているが、この内D群としてまとまるものは、この古墳群中北にかたよって存在するものである。

A 1号墳の北約270mにB 1号墳、さらに北240mにC 1号墳が存在するが、C 1号墳からD 1号墳の間には、まったく古墳は存在しない。

D 1号墳はC 1号墳の北約300mの地点で東へ延びる、支丘の基部に存在し、このやや北より西側にD 2号墳、D 2号墳の北方約100mにD 3号墳、さらにD 3号墳にほとんど接して北側にD 4号墳が存在し、いずれも標高85mの主丘上に築造されたものである。

## 2. 調 査 の 経 過

弁天山古墳群中、発掘調査の対象となった古墳は、A 1号墳たる岡本山古墳、B 1号墳弁天山古墳等を除いた、総数11基であったが、D 1号墳、D 2号墳、D 3号墳の3基の古墳については、当初調査終了の予定とされた8月末日にいたっても、なお諸種の事情から、未調査のまま残されていたものであった。

このD 1号墳については、この古墳群の調査が開始された当初から、単なる丘陵の高まりにしかすぎないものではないかとの意見もあり、調査に協力を得た各大学の夏期休暇が終了することや、その他の事情からも、最初の調査休制を維持することが困難となつたため、早急にこれが古墳であるのかどうかを確かめる必要が出てきたのである。

そこで、主な目的を古墳であるかどうかを明確にすることにおいて、9月6日発掘調査を開始した。

調査前の状況からは、磐石や埴輪はまったく認められず、古墳であると確實に言い切れるものではなかった。墳頂部中央と考えられる部分を中心に、東西および南北に巾約1mのトレンチを設定し、表土下の土が盛土であるか地山であるかを確かめながら掘下げることにして、まず東および南のトレンチの表土を除去したが、表土下はすべて自然堆積層と推

定される淡青灰色砂質土となり、盛土と認め得るものはなかった。

続いて北および西のトレンチの表土を除去したところ、大部分は表土下すぐ東および南トレンチで認められたと同様の、淡青灰色砂質土地山となったが、西トレンチで赤色顔料を検出し、この部分を精査して、鉄製鏟と鉄剣を検出した。剣は先を東に東西に置かれた状態であり、粘土の使用がまったく認められないことから、東西に長軸を置く木棺直葬の主体部があるものと推定された。

当初古墳であるかないかを確認するためにトレンチを入れてみたのであるが、主体部の存在が確実となり、検出した遺物以外にも表土を除けばすぐ他にも遺物が出土すると考えられ、このまま放置して後に調査を行なうことも困難な状況であったため、引き続き主体部の調査を行なうこととし、9月8日これを完了した。

主体部調査中に、外部施設の有無を確認するため、東西南北各トレンチを、それぞれ墳丘すこまで延長したが、葺石や埴輪はまったく検出されず、段や周溝も認めるることは出来なかった。

9月14日～17日、墳丘の地形測量を行なった結果、直径約30mの円墳と推定される結果となったが、この墳丘の南側にも、東方の芥川へ向って下る細い尾根道によって寸断されてしまっているが、もとはこの古墳の造られた尾根に統一していたと考えられる丘陵が延びており南向きの前方後円墳となる可能性も出て来たため、あらためてこの部分にも東西にトレンチを入れてみたが、表土を除くとすぐ粘土質の自然堆積土となり、葺石や埴輪も検出しえなかつた。

墳丘についての調査は、当時この古墳全体が、附近から切り出される木材の集積場となっていたため、これ以上行なうことはなかった。

### 3. 墳丘

墳丘は主体部の検出状態からみて、すでに墳頂部すらかなり流出していて、盛土はまったく認められず、斜面においても盛土と言えるものは、まったく認めることは出来なかつた。また道をはさんで南へ続く部分でも盛土は認められず、墳丘の段や、周溝等もまったく認められなかつたため、墳丘底底部を決めることも困難であり、地形測量の結果から、直径約30mで高さ約5mの円墳であつて、もともとほとんど盛土をせず、地山を削り整え

て墳丘としているものと推定する以外にない。(図版D 3)

#### 4. 内部主体と遺物の出土状況

内部主体は、墳頂部に長軸を東西にして掘られた、巾1m長さ約4mの土坑中央を、さらに約15cm U状に掘り回めた内に直葬された割竹形木棺と考えられる。

(図版D 1、図版D 4)

ただし墳丘の流失著しく、土坑は底部を残すにすぎず、東側でかろうじて土坑巾を確認し得たのみで、西側では坑底に木棺をえるために掘られたU状の掘り込み部分の下部のみが残存していたにすぎない。

棺は痕跡から底部U状の割竹形木棺と考えられる。長さ3m70cmで残存最大巾約50cmであるが、棺巾は墳丘上面の流出著しいため、この実測値よりかなり増大するものと考えられる。

残存状態が比較的良好な棺東端についても、小口板の痕跡は認められず、丸木をくり抜いただけの簡単なものであったらしい。

棺底には棺東端に近く、鉄斧、鉄鎌、鉄製繫、鉄製鉗、鉄製刀子が棺主軸と直交した状態で一群にして置かれ、棺中央部で先を西に主軸と平行に劍1、棺中央西よりで先を東にして劍1、棺西端近く鉄製鉗1が置かれ、鉗と劍との間で滑石製小玉が検出された。

(図版D 2、図版D 4)

棺底には一面に赤色顔料が検出されたが、東側に多く小口の立上りの部分にも認められた。

棺底は東側が高く、西端に比して17cm高い。遺物の出土状態からも、埋葬は頭を東にして行なわれたと推定される。

#### 5. 出 土 遺 物

このD 1号墳出土の遺物としては、棺内から検出した鉄劍と、刀子、鎌、斧、鉗等の工具類のはかに、滑石製小玉があるのみで、棺外遺物や、埴輪等は一切検出し得なかった。

出土遺物の品目数量は次のとおりである。

鉄 剑	2	鉄製刀子	1	鉄 斧	1
鉄製鉤	2	鉄製整	2	鉄製鎌	1
滑石製小玉					58

#### ○ 鉄 剣

柄中央で先を西にして置かれていたものは、身の長さ29cm、最大巾3cm、厚さ0.6cm、茎の長さ8.5cm、巾1.3cm、厚さ0.3cmで刃先は左右対称でなく、一方がかなり極端に反っていて、先は一見刀のようになっている。身と茎のつながりは、ほぼ直角の関をつくっていて、茎には目釘穴1が認められる。(第2図1)

柄中央西より検出したものは、身の長さ56.5cm、巾3.7cm、厚さ0.8cm、茎の長さ9.4cm、以上巾2cm、厚さ0.3cmで、身と茎のつながりはほぼ直角の関をつくっている。茎には目釘穴1があり、身にはしのぎが認められる。

身の間に近い部分にのみ、鞘の残存とみられる木質が認められる。(第1図)

#### ○ 鉄 製 鉤

柄内東端で鉄斧、鎌等とともに検出したものは全長15.5cm以上刃部長2.3cm、巾1cm、茎巾1cm、厚さ0.3cm。刃部は茎に対して約0.7cm上方に曲がっている。(第2図2)

柄西端で検出したものは、全長22.5cm、刃部長2.4cm、巾1.2cm、茎巾1.2cm、厚さ0.4cmで、刃先から5.2cmの部分まで木質の残存が認められる。刃部は、茎に対して1.3cm上方に反っている。(第2図3)

#### ○ 鉄 製 鎌

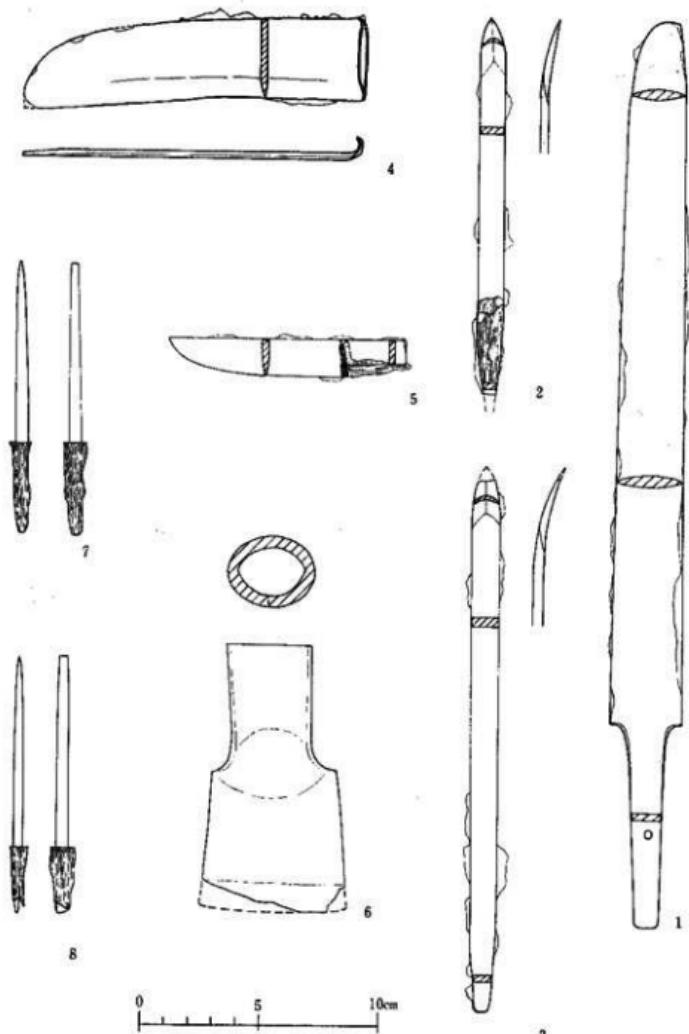
全長14.5cm弧状の背に直線の刃がついている。側端を上方に折り曲げていて、両端は丸くなっている。柄は刃に対してほぼ直角に装着されたものと考えられる。背の厚さ0.3cm、最大身巾3.3cmであるが、かなり研ぎベリが認められる。(第2図4)

#### ○ 鉄 斧

全長11cm、刃部巾6.2cm、柄部は完全な袋状となっていて、内面にの



第1図 D 1号墳出土鐵劍実測図



第2図 D1号墳出土鉄器類実測図

み一方に合わせ目が認められる。袋柄部の直径5.6cm、厚さ0.5cm、刃の一端にかなりの磨滅が認められる。(第2図6)

○鉄製鑑

1は全長11.1cm、刃巾0.3cm、茎巾0.6cm厚さ、0.5cm、刃先から7.4cmの部分から木質が残存する。(第2図7)

他の1は全長10.6cm、刃巾0.3cm、茎巾0.5cm、厚さ0.4cm、刃先から7.9cmの部分から木質が残存する。(第2図8)

○鉄製刀子

全長9.8cm、刃部長7.3cm、巾1.5cm、背の厚さ0.3cmで、刃の側面のみ間をつくっている。背は刃部から茎まで一直線で、茎には木質が残存する。この残存状態からみて、柄は斜に装着されていたものと考えられる。(第2図5)

○滑石製小玉(図版D4)

大は直径0.4cm、厚さ0.4cm、小は直径0.3cm、厚さ0.1cmと大きさはやや不揃いである。大小あるいは、厚いもの薄いものすべて側面がソロバン玉状に面とりされていて、管状のものから切り離した後、一個一個仕上げをしていると考えられる。

# 弁天山D2号墳

田代克己



## 1. 調査の経過

このD2号墳は、先にD1号墳で述べたとおり、8月末日にいたっても、なお未調査のまま残されていたものであったが、先の調査中に、白石太一郎氏を中心に墳丘の200分の1地形測量のみが完了していて、これによって前方後方墳ではないかとの推定がなされたしたものであった。

調査前、墳丘の斜面には、葺石として使用されていたと考えられる河原石が散布し、埴輪の破片も採集し得たことから、葺石や埴輪等の外部施設が確実に存在する古墳であると予想されたため、まず最初に墳頂部の表土を除去し、次に斜面の表土は上から順に除くこととして、表土除去が完了した部分から葺石の清掃にとりかかるとした。なお主体部の調査は斜面の表土除去作業と併行して行なうこととした。

以下発掘調査日誌によって調査の経過をたどってみることにする。

○9月11日

ベルトコンベア、テント等の発掘用器材搬入、墳頂部の中心から、東西および南北に巾約30cmの畦畔を残し、全面表土を除去する。

○9月12日

墳頂部表上下を清掃し、中央部で東西南北の畦畔をはさんで、周辺とくらべてややよごれた感じのする土の色の変る部分を検出。東西巾約1.5m、南北長約5mであり、墳丘主軸と平行に埋葬された、粘土層又は木棺直葬の上坑掘方と考えられる。

さらに西側でこの墓坑掘方と推定される部分にくいこんだ状態で、別に土の変る部分を検出。巾約1m、長さ約3mで、主軸をやや西に振っている様である。

仮に先をa主体、西側で検出したものをb主体と呼ぶことにする。

これらの墓坑の北側で、南北畦畔をはさんで、東で3本、西で1木円筒埴輪が東西に並んで、元位置のまま残存していること判明。

後方部前面の表土除去完了。葺石の残存状態良好で、基底部にはかなり大きな石を使用しているらしく、一直線に並ぶらしい。

前方部頂の表土除去ほぼ完了。西側は大きく土取りによって削られているため、くびれ部分のみがかろうじて残存するようである。

後方部前面葺石基底部近く、西側で円筒埴輪1を検出、東側では後方部前面葺石基底部から約4m南で1、さらにこの埴輪から1.5m南と2.5m南でそれぞれ元位置を保っていると考えられる埴輪を検出。南の埴輪には底部から縦に2本の突筋のはりつけが認められ、単なる円筒ではないらしい。

○9月13日

埴頂部に残した畦畔の断面刨作製後これを除去。東西および南北畦畔交点中央附近から、家形埴輪片がかなりまとまって出土。北側で検出した東西に並ぶ埴輪は、7本元位置を保つて残存していること判明。

後方部前面葺石は、前方部頂と接する部分でのみ段が形成され、これ以上西および東へは段としては周らず、面としては後方部東側面から前面へ続いてくる葺石面と同一面をなしていて、くびれ部で前方部東側面へ続くものと、後方部前面へ続くものとにわかれるだけであることがわかった。

○9月14日

後方部頂の、a主体墓坑内の棺内落込土と考えられる、やわらかい土の除去作業を開始。この結果a主体の棺ぎりぎりに、西側でb主体との間でもう1つ別の主体部のあることが判明したため、東からa、b、cと主体部の呼び方を変えることにする。

a主体は巾2.8m、長さ6mの墓坑内の東側にかたよせて埋葬が行なわれ、b主体はa主体の墓坑を棺ぎりぎりまで切り込んだ墓坑内に木棺を直葬したものらしく、c主体はさらにこのb主体の墓坑を一部切り込んで、主軸をやや西に振った墓坑を設けているらしく、a、b、cの順に埋葬が行なわれたと考えられる。

a主体の棺は、内に落込んだ土を除去した結果、底の平な箱形木棺ではないかと推定され、墓坑北端から1mと、南端から2mの2箇所に、小口板痕跡と考えられる巾15cmで長さ90cm、深さ4cmの落込を検出した。両小口板間中央で刀子1を検出した。またこの両小口板の外にも棺痕跡が続くこと判明。

後方部西側面の表土除去作業完了。下段葺石残存するらしい。

○9月15日

a主体棺内の落込土除去作業を続行する。

北側小口板からさらに北へ1.2m、巾80cmで木棺痕跡が続くこと判明、南側小口板の外にも、巾30cm、長さ40cmの同様の落込みの存在すること判明。

北側では棺内に粘土塊の落込みが認められ、南側では、底一面に赤色顔料が認められ、周辺には材質不明の腐蝕物の残存がみられた。

両小口板痕跡間2.8mが、主棺と推定され、北側へは主棺と同じ巾で長さ1.2m、南側へも小さな副棺とでも呼ぶべきものが付されていたものと考えられる。

墳頂部北側の埴輪を清掃。残存するもの7本であるが、東端と西端のものは上部をほとんど欠失しており、底部が現在の墳頂部に近い位置にあるに比べて、他の5本は、口刃部までほとんど残存しており、底部も深く、両端のものとやや異った感じである。精査の結果巾0.6m、長さ2.5mの同一掘方内に埋められていることが判った。掘方内埋土を除去する際東から3本目と4本目との間で、須恵器壺の破片と土師器高杯細片を検出した。またこの5本の円筒埴輪とまったく異なる埴輪片も埋土内に含まれていることが判明し、第1次埋葬(a主体)に伴うものではなく、第2次埋葬(b主体)あるいは第3次埋葬(c主体)に際して、この5本のみが並べかえられたものと推定される。

後方部西側面、北側面の表土除去ほぼ完了。後方部前面の葺石清掃完了。

残存状態かなり良好で、基底部は直線となり、前方後方墳となることほぼ確実となった。なお葺石中央やや西寄り、基底部から上方に向って、周囲よりもやや大きい石を、ほぼ一直線に積み上げた部分が認められた。

○9月16日

後方部頂北側の埴輪清掃完了。後方部北側斜面の表土除去完了。葺石残存状態良好らしい。

後方部東側斜面の表土除去開始。

○9月17日

主体部写真撮影、a主体のみ棺を出し、bおよびcは掘方のままで行なう。後実測開始。後方部西側面の上段葺石清掃完了、基底部は直線となること明確となったが、背面葺石とのつながり部分である西北隅は流失してしまっていた。

後方部東側面の表土除去ほぼ完了。上段葺石基底部、下段葺石すべて流失してしまっているらしい。

○9月18日

主体部平面実測完了。

a主体の北側副棺内の落込粘土を除去する。

小口板に近く鉄製鉗1が、先を南にして、棺上軸と平行に置かれた状態で検出されたほか、小口板痕跡附近で赤色顔料がうすく認められたにすぎない。主棺底には赤色顔料痕跡すらなし。

b 主体の棺を追求。

a 主体と同様の底の平な木棺を埋めたらしく、棺巾0.6m、長さ4mで、南端と南端から0.5mの位置に小口板痕跡を検出。a主体と同様の副棺が付くものと推定される。

北端では小口板痕跡を検出することは出来なかった。棺底には全面に赤色顔料がうすく認められ、北端および南端近くではかなり多い。棺中央で針状鉄製品と滑石製小玉を検出した以外遺物なし。

c 主体棺内落込土を除去。棺底と推定される赤色顔料の面を検出。一応この面で掘下げを止めるが、底面U字状となり、巾0.6m、長さ2.6mの割竹形木棺と考えられる。

後方部西側斜面の葺石清掃完了。下段葺石は基底部のみが残存。上段基底部とはほぼ平行に、直線となって前方部へ向って続くが、北側では、地山が上段基底部とはほぼ同じ高さにまで上ってしまって、背面へ延る葺石はない。

○ 9月19日

a、b、c 3つの主体部清掃後写真撮影。

前方部東側面、くびれ部の表土除去完了。後方部背面の葺石清掃完了。

墳頂部に近い上部ほど残存状態良好であり、基底部は西北隅に近い部分のみ残存している。下段葺石が本来あるはずの部分は、上段葺石基底部より地山が高くなっていて、葺石を使用した形跡をまったく認めることは出来なかった。

○ 9月20日

東側くびれ部上段葺石の清掃開始。埴輪破片が、落下した葺石間に多く認められる。

後方部前面葺石を精査。基底部に使用された大石は、東西ともにくびれ部近くになくななり、この大石の並んでいる間6.5mが、前方部上面の巾を示すものと推定される。

○ 9月22日

c 主体の棺底を精査。先に検出した面は棺底ではなく、棺内落込土が赤色顔料に染まったものと考えられる結果となつたためこれを除去する。結果棺北端近く刀子1と針状鉄製品1とを検出した。

東側くびれ部上段葺石清掃完了。基底部は前方部から後方部にかけて、ほとんど直角に

曲ることと判明。後方部東南隅は流失している

前方部前面および東側面上段の葺石清掃完了。前方部東南隅基底部が残存し、ほぼ直角となる。

東側くびれ部下段葺石清掃開始。全体に大きな石を使用している。

西側くびれ部は、前方部から後方部にかけて、古く土取りされて崖になっているため、わずかに上部が残存するだけである。葺石清掃の結果、前方部頂からやや下った葺石面で土師器小形丸底壺1を検出。

前方部上面南側で土の非常にやわらかい部分を発見し、主体部が存在すると推定して、精査するも、掘方検出出来ず、さらに西側の土取りによって出来た崖面を削ってみるが、非常にやわらかい砂質地山が続いているものであることが明らかとなった。

○9月23日

東側くびれ部下段葺石清掃完了。上段基底部が後方部に向ってほぼ直角に曲るのに対し、弧状に前方部から後方部へ移ることが判った。

○9月24日

前方部東側面下段葺石の清掃開始。残存状態不良で、基底部もくびれ部から約4m南へ続くのみである。さらに東南端と推定される位置から、前方部前面へ向っては、地山が上段基底部と同一面にまで上ってしまっていて、葺石が葺かれたかどうか明確でなく、東南隅もはっきりしない。後方部背面と同様の省略がなされているものと考えられる。

○9月26日

c 主体墓坑内埋土を除去し、棺底から12cm上方で面を検出。棺は墓坑底をU字形に掘り凹めてすえたことが明らかとなり、東側で棺外に置かれた鉄錆を検出した。

○9月27日

主体部および北側埴輪掘方実測完了。

葺石実測のため、2m四方の方眼割付作業を開始する。

○9月28日～29日

葺石写真撮影および墳丘外形写真撮影完了。

○9月30日

葺石実測のための割付完了。

○10月1日～14日

葺石平面20分の1実測図作製

○10月3日～4日

墳丘100分の1実測図作製

○10月16日

葺石断面実測完了。

○10月17日～19日

墳丘築造状態を知るため、後方部および前方部ともに横断、縦断トレンチを入れる。

前方部、後方部ともに盛土はほとんど認められず、後方部頂でわずかに認められたにすぎない。

葺石基底部に使用されている大石は、斜面から基底部へ移る部分につくられた、高さ約20cmの段にはめこまれた様な状態で置かれ、葺石全体は地山面でなく、わずかに盛土された上に下から積み上げられていることが判明した。

○10月23日

墳丘断面図作製完了。



第3図 D 2 号 墳

## 2. 墳丘

墳丘は全体を見た場合、一応3段に構成されているといえるようである。(図版D10・11・12・14)

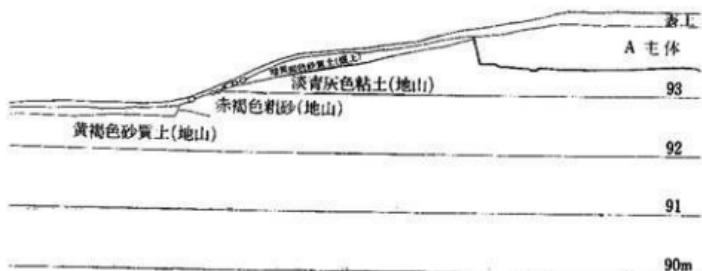
ただし、最下段は葺石から追求すれば前方部側面から続いて後方部側面にまでののみ存在し、前方部前面や、後方部背面には続いていない。すなわちこの部分では本来中段である葺石基底部と同一レベルにまで地山が上ってしまって、完全な3段構成を行なうためにこの部分の地山を削除していない。

中段は前方部前面から後方部背面にまで続いて、墳丘全体を周っており前方部側面や後方部側面では、下段葺石との間に巾1.5mの段を形成している。

上段は、本来、後方部のみを周る段を形成するはずのものであるが、ここでは、前方部頂と後方部前面とが接する部分にのみ段が存在するだけで、葺石からは、東西両側面、背面はともに上段葺石と中段葺石とを区別することは出来ず、上段葺石は中段葺石と同一面をなすものとなってしまっている。

中段のみが墳丘の3段構成本来の状態を示しているだけで、下段、上段とともに省略がみられる。

このような墳丘構成に当っての省略がみられるのは、ほとんど盛土をせずに、むしろ山を削って墳丘の形を整えていることがあるものと考えられる。このD 2号墳の基となって



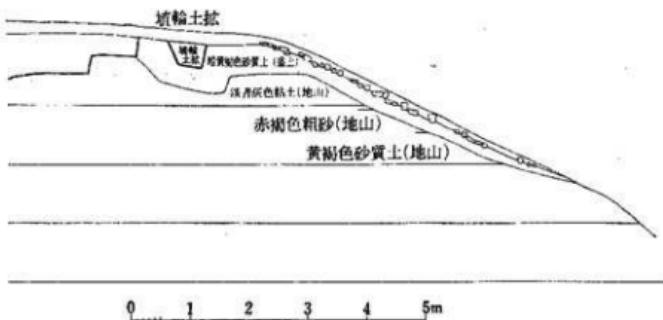
横 斧 線 断 面 図

いる丘陵は、南北に長く連なる標高85mの主丘上に、約9m高出した東西巾40m、南北長70mの一種の独立丘であり、これをを利用して段下段葺石から墳頂まで高さ6mで、長さ40mの占墳を築造しているのであるから、完全な3段築成の古墳とするには、前方部前面では高さ約2mで、長さ約6m、巾20mにわたって丘陵を削らなければならず、後方部背面でも高さ2m、巾6mで葺石基底部までの最少限にしても約20mにわたって丘陵を削る必要があり、墳丘築造に当って、これらの作業が省略されたものと考えられる。

盛土は後方部頂で30cm、前方部頂では20cm認められたにすぎないが、流失したものはあまり多くないと考えられる。葺石はカットした地山面に直接葺かれたものではなく、地山面の上に置土をした後、この上に並べられたものである。(第3図、第4図)

各段の葺石基底部が残存していたのは、前方部では東側面からくびれ部にかけての下段および中段と、前面の中段葺石、後方部では、前面上段葺石と、西側面の中段と下段、および、背面中段の西端近く、後方部西北角に近い部分のみであった。前方部前面の西南隅から、くびれ部にかけての西側面では、土取りによる崖となっていて、わずかにくびれ部分の上部のみが残存し、後方部東側面は中段葺石の上部のみが残存。下段葺石や、中段基底部は、すべて流失してしまっていた。しかしながら、前方部の東半分、後方部の西側面で検出した葺石基底部から、墳丘を復元することは出来る。

すなわち、後方部基底部に於ける東西巾は31mとなり、南北長は、背面へ下段葺石がまわらないため、くびれ部から、この葺石基底部の終る部分まで30mとなるが、もし完全



に3段築成がなされたとすれば、約31mとなり、後方部基底は31m四方の正方形を示すこととなる。

中段は22m四方の正方形となり、基底部と下段葺石の上端との間に巾1.5mで墳丘を周る段を形成する。

上段は後方部前面の前方部頂と接する部分にのみ認められ、東西および背面の葺石面は中段と同一のものとなってしまっていて、段形成はなされていない。

上段の東西および前面の葺石上端はかなり流失してしまっているが、背面葺石の東半分は残存状態良好で、ほとんどその上端は、もとの墳頂面に近いものと考えられ、これによって墳頂部を復元すると10m四方の正方形となる。

次に前方部を復元すると後方部前面の葺石基底部の長さがほとんどそのまま前方部頂の巾となるものと考えられ、また前方部前面上段葺石の上端を、後方部前面葺石基底部と同一レベルにまで復元すれば、前方部頂の長さは10mとなる。

くびれ部からの上段基底部の長さは10mで、前面巾は14.4mとなる。

下段基底部のくびれ部からの長さは段が側面のみで、前面にまで続かないため葺石の残存する部分までを測ると9mとなるが、後方部と同様完全な段築成がなされたとするならば、12mの長さとなつたであろう。

後方部東西および背面の、上段と中段とが一体となってしまっている葺石は、巾6mで墳丘を周り、下段との間に巾1.5mの段を設け、下段葺石は東西側面にのみ、巾3mで葺

かれていたと考えられる。

中段葺石基底部は、前方部上段葺石基底部に続き、前方部を完全にとり巻いているが、葺石全体はくびれ部で後方部前面へ続くものと、前方部側面へ続くものとに分れている。

前方部側面の葺石は、前方部頂端と基底部間3mとなり、下段葺石上端との間に後方部から続く巾1.5mの段が形成され、この下を巾3mで下段葺石が居る。

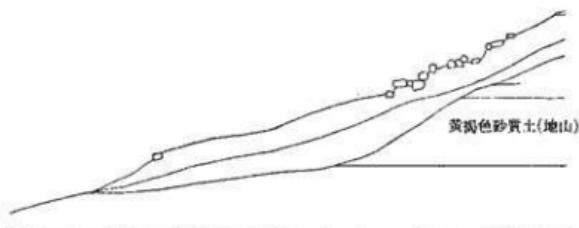
下段葺石基底部は、後方部側面中段葺石基底部の線をそのまま前方部に延長した一直線上にあり、墳丘築成に当ってかなり正確な地剤がなされていてと推定される。また葺石基底部に使用されている大石は、葺石が葺かれた斜面から基底部へ移る部分で段をつくり、この段にはめ込む様にして並べられており、当然のことながら山を削って墳丘の形を整えた時には、すでに各段の基底部、墳頂部等の長さ、巾等がきめられていたと考えられる。なお葺石を葺上げる際には、各所で工程が分割されたと考えられ、前方部上段前面や、後方部上段前面の葺石に、まわりよりやや大きな石が基底部から一直線に上方へ積み上げられている箇所が認められるのは、このことを示すものではないだろうか。

### 3. 内部主体と遺物の出土状況

このD2号墳の内部主体は、墳頂部で検出されたa、b、c3個の、土坑内に直葬された木棺である。いずれもその長軸は、墳丘上軸とほぼ平行しており、aは墳頂部ほぼ中央部に、bはaの西、cはさらにbの西側に並んで存在する。(図版D15・16)

a(第1次埋葬)主体は、墳丘中央部に、墳丘主軸と平行に長軸を置く、巾2.8m、長さ6m、深さ40cmの墓坑を穿ち、坑底をさらに棺をずる部分のみ15cm掘り凹め、この内に巾80cm、全長5mの組合式箱形木棺を埋葬したものである。葬坑端と棺側との間は東で60cm、西は170cmであり棺は葬坑内東端にかたよせて埋められている。巾80cm、長さ280cm、巾90cmで、両棺側からそれぞれ15cmずつはみ出るような小口板をあて、北側へは巾80cm、長さ120cmの副棺とでもいうべきものを付加し、南側にも巾45cm、長さ55cmの小さいが同様のものを付け足した構造のものである。底はほぼ平で、深さは検出当時の最大が23cmである。墳丘地山である青灰色粘土を掘り凹めてすえられていたため、棺底及び棺側は一見粘土床の様な状態であった。

土棺底には赤色顔料は認められず、遺物はほぼ中央で検出された刀子1のみであった。



第4図 D2号墳

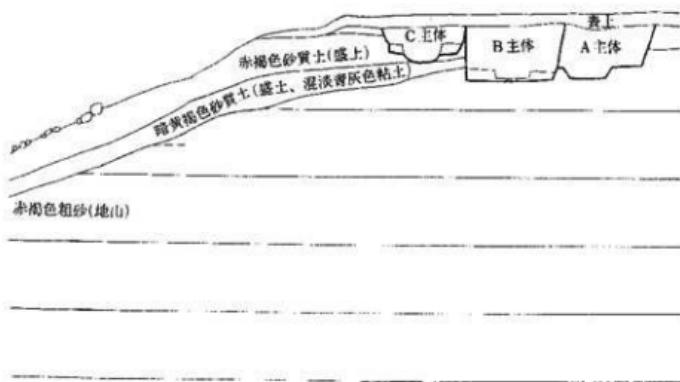
北側副棺の端には主棺のように大きな小口板をあてた痕跡はなかった。内部には上から落ち込んだと考えられる青灰色粘土の高まりが認められ、小口板周辺には赤色顔料が認められた。この落込粘土を除去した結果、主棺同様底は平となり、赤色顔料は底でも小口板周辺のみにしか認められなかった。この副棺内で検出された遺物には、棺底小口板近く先を南に向けて置かれていた鉄製施1があるだけである。

南副棺内には、棺底両側端に赤色顔料が認められ、その内側に不明の腐蝕物の残存が認められた。

主棺、副棺とともに鉄釘は使用されなかったものと考えられる。

b (第2次埋葬) は、第1次埋葬の墓坑西側を大きく切りこんだ状態で、aと平行に巾1.5m、長さ4.8mの墓坑を設け、そのほぼ中央に組合式箱形木棺を直葬したものと考えられる。墓坑底東側端は、a主体の棺西侧端から10cmしかはなれていない。

棺は全長410cm、北端巾60cm、南端巾50cmで、棺南端と、南端から内へ40cm入った箇所とに、a棺同様の小口板痕跡を検出した。南端のものは厚さ10cm、巾65cmで東西兩棺側からそれぞれ10cm外へはみ出している。内の小口板は厚さ10cm、巾105cmで、これも棺側からそれぞれ20cm外へ出ている。この内外両小口板にはさまれる40cmの間は副室と



後 方 部 横 断 面 実 測 図

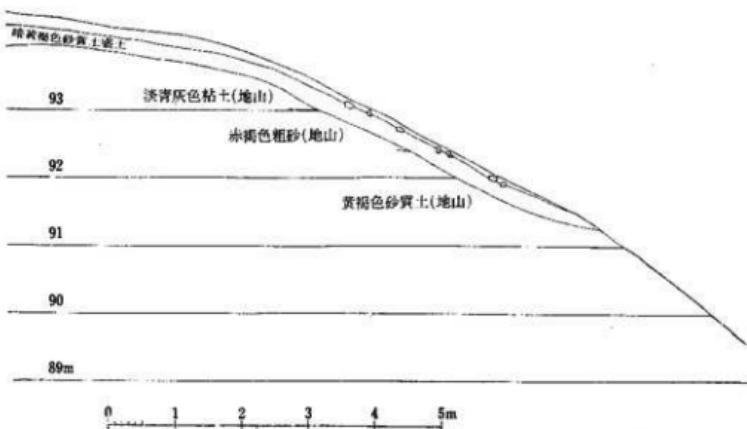
でも呼ぶべきものとなるのであろう。棺北端では南端で検出したような小口板痕跡は検出出来なかった。掘方検出面から棺底までの深さ 53cm、棺底は全体に平で、一面にうすく赤色顔料が認められたが、北端および南端近くで著しく、小口板下にも認められた。

遺物には棺底中央で検出した釘状鉄製品と滑石製小玉がある。

c (第3次埋葬)主体は、b (第2次埋葬)主体の墓壙西端をわずかに切り込んだ巾 1m、長さ 3.3m の隅丸長方形の墓壙内に埋められた割竹形木棺である。

棺は北端巾 60cm、南端巾 50cm、長さ 260cm で、掘方検出面からの深さ 25cm であるが、棺側の埋土を除去したところ棺底から 12cm 上で、面を検出した。東側ではこの面上で鉄錆 4 本が先を北にして、棺と平行に検出され、棺を埋める際、一度この面まで埋めもどしが行なわれ、この後完全に埋めもどしが行なわれたものと考えられる。棺の身部の高さが、この面に近いものであるかもしれない。

棺底一面赤色顔料が認められ、北端近く刀子と針状鉄製品を検出した。



#### 4. 塚 輪

##### 出土状況

この古墳に使用された埴輪には、多くの円筒埴輪以外に、家、鳥、蓋、朝顔形等の形象埴輪があるがそのほとんどは元位置でなく、落下した葺石等の間で検出されたものである。

わずかに元位置を保って検出されたものとしては、後方部頂中央の家形埴輪と、同じく後方部頂北側で列となつて検出された7本の円筒埴輪、前方部頂東側端の2本の円筒埴輪と不明形象埴輪1、前方部西側端の2本の円筒埴輪のみである。(図版D13・15)

後方部頂中央で検出された家形埴輪は、後述する主体北側の埴輪配方内の埋土内からも破片が出土しており、かなりまとまつてはいるが、破片がかなりちらばつた状態であり、元位置を保っていたものとは考えられない。

a 主体埋葬後その直上に置かれていたものが、b 主体埋葬時にはすでに破損していて、  
b 主体埋葬時にその墓坑によってさらに破壊されたものと考えられる。

後方部頂北側で検出された7本の円筒埴輪は、東西に1列に並んではいるが、両端のも

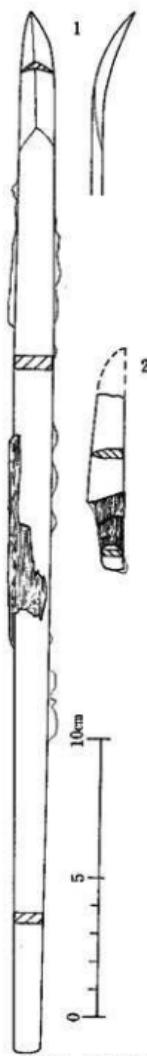
のは底部が主体掘方検出面にあり、上部をほとんど欠失しているのに対し、他の5本は主体部長軸に直交して東西に長く掘られた巾0.6m、長さ2.5m、深さ30cmの同一坑内に埋められていたもので、口辺部まで残存するものもある。この坑内からは、前述した家形埴輪片以外にも、これらの5本の円筒埴輪とはまったく異なる円筒埴輪片も多く出土しており、少なくともこの5本は、a（第1次埋葬）主体に伴うものではなく、b（第2次）あるいはc（第3次）の埋葬に際して並べ変えられたものと考えられる。家形埴輪片が出土していることからbに伴なう可能性がもっとも大である。なおこの坑内からは、埴輪以外に須恵器壺と土師器高杯がいずれも破片となって検出され、土師器高杯はそれと判る程度の復元不可能な細片ばかりであるが、須恵器壺は、口辺部の一部と胴から底部にかけてのすべてを欠失しているが、他は検出した破片すべてを接着することが出来た。

後方部前面、背面、東西両側面とともに、落下した葺石間に多くの円筒、帆飴形等の埴輪片が含まれており、後方部頂四周端に、円筒その他の列として並べられていたと考えられるが、上段葺石の外側等にも埴輪列が存在したかどうかは、元位置を保つもの皆無であるため不明である。

前方部頂には、東西両側に埴輪列の存在したことが、現存する埴輪によって知ることが出来た。東側では後方部前面の葺石基底部から4m南で円筒埴輪1を検出し、これから南1.5mで1本と、さらに南2.5mで底から縦に2本の突堤の付いた埴輪1を検出した。西側では、前方部前面葺石底部から0.3m離れて1本と、さらにこれの南1.5mで1本の円筒埴輪を検出した。いずれも埴輪の直徑よりやや大きい土坑内に埋められている。この西側で検出した2本の埴輪の間隔1.5mで割付けると東側に並ぶ2本の円筒埴輪の間隔とはほぼ合致することになり、前方部頂の東西両側にはほぼ1.5m間隔で円筒埴輪が並べられ、円筒と円筒の間に、東側で検出したように、帆飴形その他の形象埴輪が並べられたのかも知れない。

前方部前面の葺石清掃の際にも落下した葺石や土にまじって埴輪片がかなり出土しており、前方部頂前面にも埴輪列の存在したことが推定される。

前方部西側面は土取りによって消滅しているため推定すら出来ないが、東側面では上段葺石基底部が完存しており、下段葺石もかなり残存しているが、上段と下段の葺石間の段上や、下段葺石の外側、さらに前面上段葺石の外側に埴輪が並べられたかどうかは不明であると言う外ない。



第5図 D2号墳  
・主体出土鉄器実測図

## 5. 遺 物

棺内から出土したものとしては、a 主体から刀子1、鉄製鉈1、b 主体から針状鉄製品1、滑石製小玉10、c 主体から刀子1、針状鉄製品1があり、c 主体からのみ棺外東棺側に接して鉄鎌4が検出されている。(図版D17、第5図、第6図)

埴輪は、後方部頂で検出されたものとして、家形埴輪1があり他には北側で検出された円筒埴輪7がある。(図版D17、第7図、第8図)

前方部頂で検出されたものには、東側で2本の円筒埴輪下部と、不明の形象埴輪下部1があり、西側では円筒埴輪2が検出されている。調査中他にも多くの円筒埴輪片や、形象埴輪片を採集しているが、すべて葺石清掃中に、落下した葺石や土砂に混じって検出されたものばかりである。

これ以外の遺物として埴頂部北側埴輪掘方内から検出された土師器および須恵器があり、西側くびれ部葺石直上から、土師器小形丸底壺1が検出されている。(第9図、第10図)

以下その個々について述べることにする。

### a 主体出土

#### ○ 刀 子

現存全長6.3cmで先を欠失している。身部長4cm、巾1.2cm 背の厚さ0.4cm、茎長2.5cm、刃部へつながる部分にのみ闊をついている。茎には柄と考えられる木質の残存がみられるが、その残存状態から柄は斜に装着されたらしい。

(図版D17、第5図2)

#### ○ 鉄 製 鉈

全長37.6cm、刃部長5cm、巾1.2cm、茎長32.6cm、巾

1.4cm、厚さ0.5cmで刃部先端は茎に対して1.5cm外反している。茎には基部から22cmの部分まで木質の痕跡が認められる。(図版D17、第5図1)

**b 主体出土**

○針状鉄製品

断面0.2cmの円形を程し、全長5cm以上、両端に向って細くなっている。残存する一方の先は尖っている。(図版D17、第6図7)

○滑石製小玉

総数10個であるが、いずれも径0.3cm、厚さ0.2cm内外で径0.1cm内外の穴があけられ、ほぼ大きさは揃っている。側面はほぼ中央から両側へ面とりがなされ、管状のものから切り離された後1個1個仕上げられている。(図版D17)

**c 主体出土**

○刀 子

全長13cm、身部長8cm、巾1.4cm、背の厚さ0.3cm、茎長3.3cm、厚さ0.2cm、身部の背は直線でなく先が外反し、身と茎のつながりは、関をつくらずそのまま先細りになり、端は丸くなっている。

茎には木質の残存が認められるが、柄はほとんど直ぐに付けられていたようである。

(図版D17、第6図5)

○針状鉄製品

全長3cm以上で、断面0.1cmの円形を程す。b主体出土のものとやや異なり、一方のみが先細りになる。(図版D17、第6図6)

○鉄 鐵

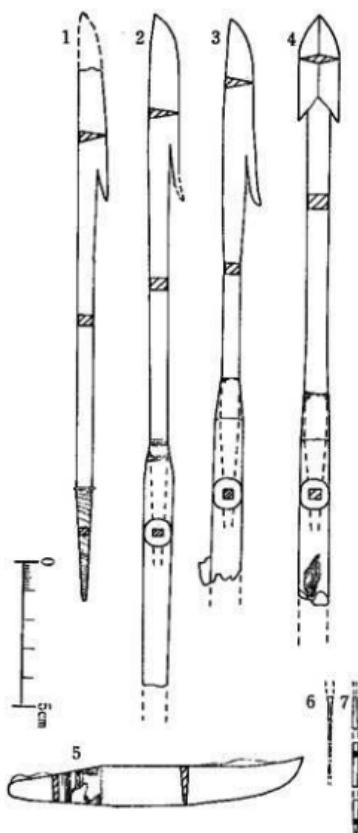
4本の内1本だけが両刃でかえりを有するもので、他の3本は片刃で一方にのみかえりを有するものである。(図版D17、第6図)

両刃のものは、全長20.5cm、刃部長3.6cm、巾1.4cm、厚さ0.4cmで、長さ15cm以上、巾0.8cm、厚さ0.6cmの茎がつく、先から14.5cmの部分から直径1cmの矢柄の残存がみられるが、詳細は、さびのため不明である。(第6図4)

片刃のものの内1本は刃先端部約2cmを失している。現存全長18.3cm、かえり先端までの刃部長4.5cm、巾1cm、背の厚さ0.4cmで茎長さ20cm、巾0.6cm、厚さ0.4cmである。矢柄は残存していないが、茎端から4cmまで巻糸の痕跡が認められる。(第6図1)

2は矢柄を含めて現存全長23.2cm、刃部長さ6cm、巾1cm、背の厚さ0.3cmで、長さ15cm以上、巾0.7cm、厚さ0.5cmの茎が付く、矢柄は先から16cmの部分から付き、直徑1cmである。(第6図2)

3は矢柄を含めての現存長19.4cmで、先からかえり先端までの刃部長6.4cm、巾1.2cm、背の厚さ0.4cmで長さ12cm以上の茎が付く、先から13.8cmの部分からは直径1cmの矢柄が残存する。(第6図3)



第6図 D 2号墳 b, c 主体出土鉄器実測図

### 埴輪

家形埴輪(図版D17、第7図)

切妻形の屋根をもち、四壁の内2面にのみ窓があけられている。倉庫を形どったものであろう。両妻には、棟木を表現した粘土をはりつけている。

棟までの高さ52.6cm、屋根上端長さ60cm、軒の長さ30cmで、軒端上部には1~2cm間隔のきざみを入れた巾2cm、厚さ1cmの突帯をはりつけ、棟の下10cmのところにも同様のものを付けている。帯間はハケ目のみが認められるが、上部の突帯から棟までには5本の綾杉文が付けられ、両側面に続いている。四壁、妻の側は巾28cm、軒側では33cmであり。粗いハケ目が付けられている。

四方の壁の上に、妻の側は壁と同様にまっすぐ壁をのばし、軒の側は両側の壁を上方で棟となる部分で合せて、これに軒をはりつけ、

さらに妻となる部分を両側にはり足して全体を形づくっている。

外面には全面に赤色顔料が塗られ、妻から奥へ入った壁面にもこれが認められる。

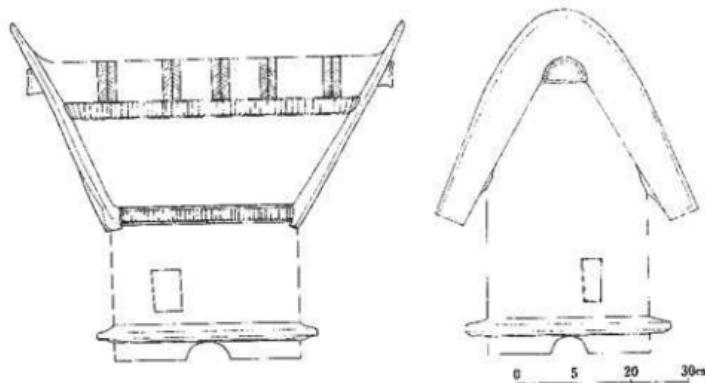
#### その他の形象埴輪（図版D18）

元の位置を保つものとしては、前方部頂東側で円筒と並んだ状態で検出されたものがあるだけであり、これは円筒の側面に巾3cmで厚さ2cmの突帯を縦に2本はりつけていて、上部にどんなものが付いていたかは不明であるが、普通の円筒の様な横の突帯は、まったくみとめられないことから、形象埴輪の内に入るものであろう。

他の形象埴輪としては、朝顔形埴輪、蓋、鳥、甲等の破片がみられるが、朝顔形は、葺石清掃巾、埴丘のいたるところで認められた。いずれも全形を復元し得るものはないが、広く開いた口辺部から下部の円筒に移る部分がくびれる形式のものである。蓋埴輪片は、後方部西側面および前方部東側面で多く採集し得たが、全体を復元し得るものはない。

鳥を表したと考えられる埴輪片は、後方部東側面葺石上から検出されたもので、翼の片側と脚部破片がわずかにあるだけである。もとは後方部頂東側に立てられていたものであろう。

甲と推定される埴輪片は、前方部東側上段葺石清掃中に検出された、草ざりと考えられる部分の破片である。



第7図 後方部頂出土家形埴輪実測図

### 円筒埴輪(図版D18、第8図)

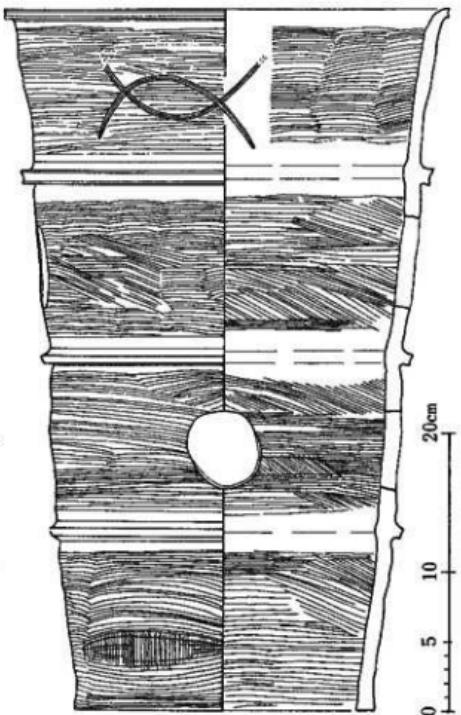
元位置を保ったまま検出されたものは、後方部頂北側の7本と、前方部頂東西両端に並んでいたものそれぞれ2木のみである。後方部頂の7本の内東端と西端のものは、底部近くがかろうじて残存するだけのものであり、東端のものは底部径20cmで、底部から13cm、上方に巾1cmのたがが付けられている。

西端のものは底部径20cmで、残存高12cmである。

他の同一土坑内に埋められていたもの内、東から2木目と4木目のものは、口辺部まで残存し、全形を知ることが出来る。東から2木日のものについて述べると、高さ50.6cm、

底径22cmで外反する径32.

6cmの口辺部を有し、3本の凸唇を割らせ最上段のたがと、中段のたがとにはさまれる部分に、径6cmの円孔が向いあってあけられ、中段と下段のたがにはさまれた部分には、上の段の2つの穴を結ぶ線に対してほぼ90度の位置にやはり向い合って、径5.6cmの円孔があけられている。また上段のたがから口辺部にかけての部分には、弧状の線を弧の内側が向い合う状態にして重ねたヘラ描きのしりがある。これと同様のものが破片ではあるが後方部背面からも出土している。この口辺部まで残存する2本



第8図 D2号埴輪頂部土坑出土埴輪実測図

はともに内外面赤色を程し焼成良好である。他の3本は同様に胴部に凸帯を3本周らし、高さ50cm、底径20cm、口径30cm程のものと考えられるが焼成不良で、表面のハケ目はすべてなくなってしまっている。

明らかに並べかえられた5木と東端および西端の埴輪とを比べた場合、先の5本はとともに、底部から口辺部にかけて急に拡がるのに対し、後者は底部径も小さく、上部でもあまり拡がりをみせないようであり、あるいはこの2木は第1次埋葬に伴うものであるかも知れない。

前方部で検出したものの内東側の2木は、かろうじて底部を残すのみである。北のものは底径25cm、厚さ1cm、南のものは、底径22cm、厚さ1cmである。

西側で検出した2木の内、後方部に近いものは、底径20cm、厚さ1cmであり、底部のみが残存し、南で検出したものは、底径20cm、厚さ1cm、底部から16.5cm上部に凸帯がみられる。胎土粗砂を多く含む。

### 土器類

#### 須恵器壺(第9図)

後方部頂北側の埴輪掘方内から検出された1個体である。口辺部径16.5cm、高さ4.4cmで、口辺部中央に1条のややくずれた突帯を周らし、この上下に櫛状施文具で波状文が付けられている。胴部最大径は21.5cm、外面には、形成途上に付いたと考えられる平行する細かいたき日が付き、底部近くでは、格子状になっているところもある。内面のタタキ目はすり消している。

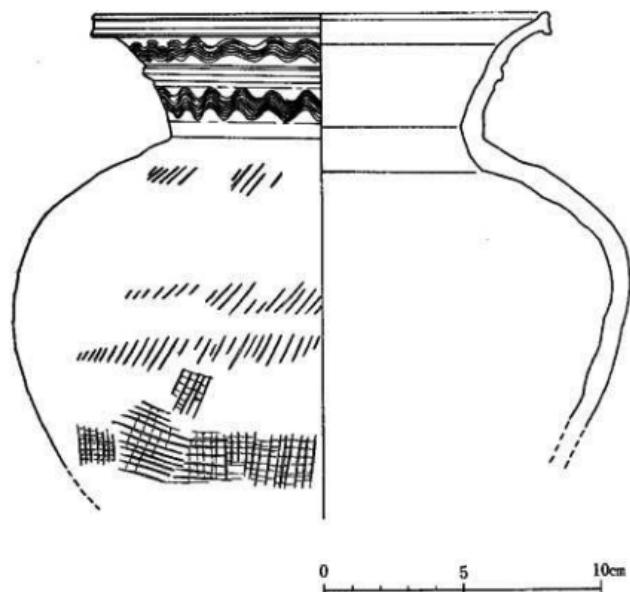
### 土師器

後方部頂埴輪掘方内で検出した高杯は、杯部と脚部との継目のわかる部分以外は、すべて細片であり、全体を復元することは不可能である。

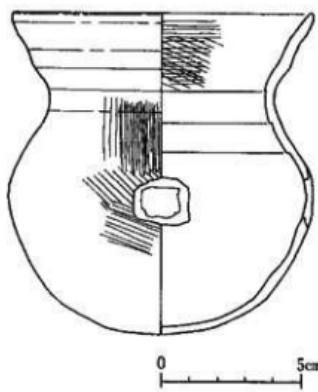
#### 小形丸底壺(第10図)

西側ぐびれ部葺石上面で検出したもので、器高11.3cm、口辺部径10.7cm、高さ3.5cm、胴部最大巾11cmであるが、保存状態不良で表面ほとんど剥落し、かろうじて口辺内部は横に、外側肩部は縦に、それ以下の胴部は斜あるいは横にハケ目が付けられていることが判る。

胴部中央に焼成後内側から外に向ってあけられた孔が1つある。



第9図 後方部頂埴輪土坑内出土須恵器実測図



第10図 西側くびれ部出土土師器実測図



# 弁天山D3号墳

田代克己



## 1. 調査の経過

D 2号墳の調査のめどがほぼついた9月29日～10月1日にかけて、墳丘の外形測量を行なった。墳丘は、東側および西側が大きくえぐれて流出しており、墳形は、まったく想定出来ない状態であった。測量の結果も、方形墳とも円墳とも、あるいは南向きの前方後円墳とも考えられるものとなつたため、一応南向きの前方後円墳と想定し、10月2日から全域の表土除去作業を開始し、10月23日企調査を完了した。ただ調査は、この古墳の築造されている尾根上を走る小道を境に、東側にのみ限って行ったものである。

調査は、まず前方部と推定した部分の表土を除去することから開始したが、表土下はすぐ自然堆積層となり、盛土はまったく認められず、また後円部と推定した部分には調査前から葺石と考えられる河原石や埴輪片が認められたのに、この部分には葺石埴輪等一切認められなかった。

続いて後円部と推定した部分の表土除去を行なったが、この部分では南側および北側の斜面で、葺石として使用された河原石多数と、これらの河原石の間で埴輪片等を検出し、精査清掃の結果南斜面と北斜面とともに二段に周らされた葺石を検出した。最初、後円部と考えた部分を二段の葺石が周ることとなつたわけであり、前方後円墳の後円部の葺石が二段とも後円部を周ることは、まず考えられないことであり、このD 3号墳は前方後円墳でなく、直径約30mの、葺石を二段に周らせた円墳であることが判つたのである。

10月10日～12日墳頂部を稽査し、木棺を土坑内に直葬したと考えられる東西に主軸を認めて南北に並ぶ2つの主体部を検出した。いずれも墳丘の東側が大きく崩れた部分にも延びていたと考えられ、東端は流失してしまっていた。特に南側で検出した主体は棺の西端をかろうじて残すのみであった。

10月16日～21日主体部 $\frac{1}{10}$ 、葺石 $\frac{1}{10}$ の実測図作製後、墳丘築造状態を調査するためのトレンチを入れ、10月23日墳丘断面図を作製して調査を完了した。

## 2. 墳丘

墳丘の流失変形著しく、当初墳形を想定出来なかつたことは、すでに述べたところであるが、調査の結果上下二段に墳丘を周る葺石を検出したことから、直径約30m、高さ5mの円墳であることがわかつたのである。（図版D20・D21）葺石は全体に直徑20cm程度のかなり大きな河原石が使用され、D2号墳等でみられるような基底部に特に大きな石を使用する方法を用いていはず、また全体として雑に葺かれているため葺石基底部を検出するには、かなり困難な作業であった。

上段の葺石は、巾約8mで墳丘を周り、下段葺石は、巾約2mで、墳丘のすそを周るようである。上段と下段との間には、明確な段の存在は認められない。

南面の葺石面の傾斜が約20度であるのに対し、北面は約10度と傾斜がややゆるやかであり墳丘築造にあたって、南から北に向って高くなる尾根を利用しているため地形に影響され、特に北側を大きく削って墳形を整えることをしなかつたためと考えられる。

墳頂部や葺石の間にはさまって、円筒、朝顔形等の埴輪破片を検出したが、元位置を保つものはなかつた。葺石清掃時にも破片の出土少なく、墳頂部でも多くなかつた。あるいは下段葺石の外や、上段葺石と下段葺石との間には、埴輪は使用されず、墳頂部にのみ使用されたのではないかと考えられる。墳丘は、わずかではあるが盛土が認められる。

### 3. 内 部 主 体

この第14号墳の主体部は、墳頂部中央に東西に長く掘られた2個の墓坑内に直葬された組合式箱形木棺で、南北に並んで存在する。（図版D19・D22）

南棺は、墳丘の東側が大きく流失した際、ほとんどの部分がともに失なわれていて、西端部分約1mが残存するのみであった。墓坑の巾110cm、現存長さ100cmで墳丘現存面からの深さ30cmである。この墓坑内に巾43cm、深さ27cm以上の棺端に厚さ10cm、巾77cmの棺巾より巾のある小口板をあてた組合式箱形木棺を埋葬したと考えられる。

棺底には、わずかではあるが全面に赤色顔料が認められたが、小口板痕跡其底部には認められなかつた。

棺内からは、先を西にして棺内ほぼ中央に置かれていた鉄劍の残欠1を検出し得たのみである。

北棺は、長さ3m以上、巾90cm、深さ30cm以上の長方形の上坑内に埋葬された、長

さ2.6m以上、巾40cm、深さ28cm以上の、組合式木棺と考えられる。

棺西端から50cmまでを除いて、棺底には直径5cm程度の礫が敷かれている。棺底全面に赤色顔料が検出されたが、他に遺物は検出されなかった。

#### 4. 遺 物

棺内遺物としては、南棺内でからうじて流失をまぬがれていた鉄劍残欠があるのみで、その他の遺物としては、埴頂部や苔石清掃の際に出土した埴輪と、南側の苔石清掃の際、埴輪破片とともに発見された須恵器器台の破片がある。以下これらの遺物について述べることにする。

##### 鉄 剣

先端から22.4cmの残欠である。身巾2.6cm、厚さ0.6cm。

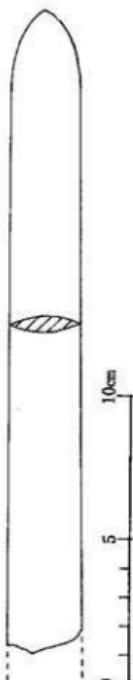
(第11図)

##### 埴 輪 (図版D22)

埴輪、円筒埴輪以外に、朝顔形、眉あるいは羽とされる破片がある。

##### 須 恵 器 (図版D22)

器台と考えられる杯部口辺と、脚部の破片である。わずかに破片5個であるが、焼成良好堅緻で、割口は紫色を呈し、胎土砂をほとんど含まない。同一個体のものと考えられる。杯部口辺には、柳状施文具で突文が施されている。口辺部径約40cmと推定出来る外、器高等は復元不可能である。脚部には三角形及び長方形のすかしがある。



第11図 D 3号墳  
a 主体出土鉄剣実測図

## 結び

以上D 1号墳、D 2号墳、D 3号墳の調査結果について述べて来たが、これによって考えられることを次にまとめて結びとしたい。

(1) 主体部に埋葬された木棺の構造から、これら3基の古墳についてみた場合、D 2号墳のa主体は、底の平らな組合式木棺であって、主棺の両端に副棺とでも呼ぶべきもの付加しており、b主体の木棺はa同様、底の平らな組合式木棺であって、その両側にのみ副棺の取付がみられ、このa b両主体の木棺は極めて類似したものであると言える。D 3号墳のa b両主体の木棺も、組合式の底の平らなものであったと推定され、a主体では棺端に、棺巾より広い小口板が当たっている点で、D 2号墳のa b両主体に似るが、副棺の取付はなかったものと考えられる。b主体は、棺端にaの様な小口板を当たた痕跡なく、箱形の組合式木棺であったと推定される。D 1号墳の棺とD 2号墳c主体の棺は、ともに割竹形木棺であったと推定され、長短の差はあるが、丸木をくり抜いただけの簡単な構造のものであったと考えられる点で、よく似たものであると言える。

墳丘の形状からみると、D 1号墳、D 3号墳はともに円墳、D 2号墳は前方後方墳、さらに北のD 4号墳は前方後円墳であり、外郭施設としての葺石および埴輪は、D 1号墳にのみまったく認められないが、他は両方ともに存在し、このD群に存在する古墳それぞれが異なった様子を示している。

棺内出土遺物についてみると、D 1号墳では、璧、鉤等の鉄製工具類、鉄劍、滑石製小玉等があり、D 2号墳では、a主体北側副棺内から鏡、上棺内から刀子、b主体からは、針状鉄製品と滑石製小玉、c主体では刀子と針状鉄製品が出土し、棺外から鉄鏃が出土している。D 3号墳では、a主体で鉄劍が検出された以外には、b主体内からも何ら残存遺物は検出されなかった。

その他の遺物としては、D 2号墳後方部頂埴輪掘方内から検出された須恵器壺、土師器片、西側くびれ部葺石上面で検出された土師器小形丸底壺、D 3号墳南側斜面で、葺石清掃中落下した葺石や埴輪片に混じって検出された、須恵器壺破片がある。

これらの遺物のうちD 2号墳出土の須恵器壺は、胴部を叩上げて整形した後、内面の叩目を完全にすり消していて、口辺部には凸帯をはさんで2段に横状施文具で波状文が付け

られたもので、須恵器としてはかなり古式の様相を示すものであって、実年代を5世紀後半に求めることが出来るものであろう。須恵器の出土した土坑は、円筒埴輪5本を並べかえる際に掘られたもので、第2次埋葬（b主体）に伴う可能性が最も強く、この須恵器もb主体に伴うものとしてほぼまちがいのないものと考えられる。

b主体墓坑はa主体墓坑を大きく切り込んで設けられてはいるが、棺木体はまったく壊されていないこと、a bの棺構造が極めて類似すること等から、a主体とb主体の埋葬時期には、あまり時間差はなかったと推定され、a主体の埋葬、言いかえれば、このD2号墳の築造年代を、5世紀中頃以降に求めることが出来るのではないかと考える。

D1号墳の主体部は、D2号墳c主体と類似するが、棺内出土遺物からみて、D2号墳b主体と同時期か、あるいはこれよりややおくれるもので、D2号墳c主体よりは先行するものであろう。

D3号墳については、a主体墓坑とb主体墓坑は、互に切り合っていないため、その新旧の決め手はないが、棺構造からa主体を古く考えたい。D1号墳と比較した場合、墳丘の形状は両者ともに円墳であるが、D3号墳には盛土が認められ、やや粗ではあるが葺石が使用され、埴輪も存在するのに対し、D1号墳では、これらは一切認められず棺構造からも比較のしようがないが、その築造はほぼ同時期であったと推定されよう。

（2）この弁天山古墳群中D群としてとらえた北方にかたまって存在する古墳は、その存在のしかたがA1号墳（岡本山古墳）に対するA2号墳（岡本東古墳）や、B1号墳（弁天山古墳）に対するB2号墳、B3号墳等の存在のしかたと、かなり異った様子を示している。A1号墳、B1号墳およびC1号墳は、この弁天山古墳群の存在する、南北に延びる丘陵から派生して、それぞれに延びる支丘と主丘との接点、すなわち、それぞれの支丘での最高所に築造されていて、B2号墳、B3号墳等は、この支丘上に並んで次々と築造されていったものと考えられ、時期的にもかなり段階的にとらえることが出来る様である。これに対しD群の古墳は、南北に延びる主丘上に並んで築造されていて、その築造時期も互にかなり近接したものであると考えられ、特にB群で著しい、最高所に築造された火古墳（前方後円墳）につながる形で、他の古墳が存在するといった様子は、まったくみられないと言えるであろう。

A群、B群、C群がそれぞれ築造された後D群が築造されたのでなく、これらの群が形成されている途中で、その終末近くD群の形成が開始されたと考えられるが、A1号墳、

B 1号墳、C 1号墳等の大前方後円墳に続くものとして、前方後方墳であるD 2号墳や、前方後円墳のD 4号墳を考えるのは、その築造の時間差から多少無理ではないかと考える。しかしながらその規模からはA 2号墳やB 2号墳等の大前方後円墳に付随した形で存在するものと同様に考えることも出来ないものであって、しいて言えばD群の古墳は、それぞれABC 3群の主墳と同様な性格を有するものと言えよう。

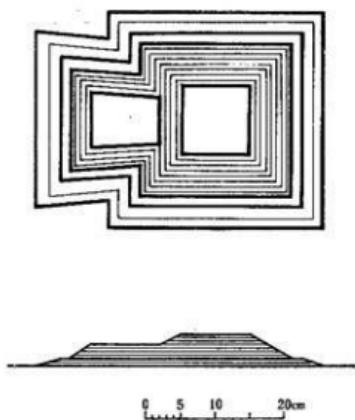
D群を構成する古墳は、円墳2基、前方後方墳1基、前方後円墳1基であり、内に前方後方墳を含むことが何を意味するものであるのか、今後追求されねばならない問題である。ただこの前方後方墳の在り方が、時期的には弁天山古墳群形成の終末近く築造されているとはいへ、京都西山第1号墳、天理市西山古墳、等の畿内各地に存在する前方後方墳とはかなりその性格が異なったものであると言ふことは出来そうである。<sup>⑨</sup>

また弁天山古墳群全体についても勿論のこと、特にD群については、この弁天山古墳群が形成された丘陵の南に広がる平野部に築造された、現饒休天皇陵と今城塚古墳の2基の大前方後円墳といかなる結びつきがあるのかについても追求されねばならないが、4世紀から5世紀後半にかけて形成された弁天山古墳群中の、一休どの古墳の時期に現饒休天皇陵あるいは今城塚古墳築造の時期を考えるかによって、出される結論は非常に異なったものになるはずであり、今後に残された大問題を含んでいると言わねばならない。

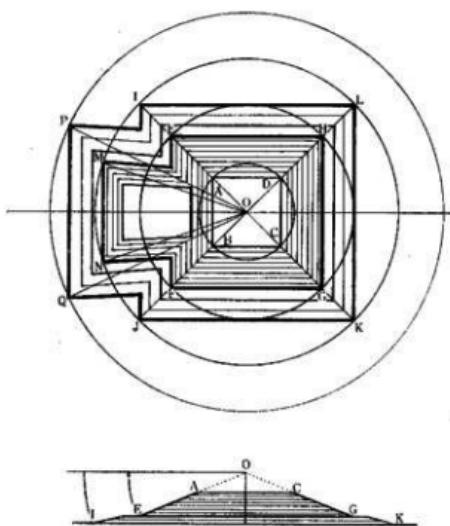
(3) D 2号墳の墳丘築造に際して、後方部背面基底部や、前方部前面基底部等各所に省略のみられることについては、先に述べたとおりであるが、もしこうした省略がなされずにこのD 2号墳の築造がなされたものと考えた場合、第12図で示すような復元図が得られる。すなわち、後方部墳頂部は10m四方、中段基底部は22m四方、下段基底部は31m四方の正方形となり、南側面に中段では、長さ10mで南端基底部巾14.4m、下段ではやはり長さ10mの南端基底部巾24mの前方部が付加され、後方部頂前面端が墳丘全体の中心となっている。

平面的にみた場合後方部頂：中段：下段の一辺の長さの比は1：2：3となるようにみえ、中段および下段南側に付加された前方部の長さも、後方部頂の一辺の長さに一致していく、一応これでこの前方後方墳の地割を説明し得るようであるが、前方部前面基底部の巾24m、さらに上段の巾14.4mと言う数値は多少説明しにくいものとなる。

このD 2号墳が築かれたのは、平地でなく丘陵上であり、しかも盛土をほとんどせずにむしろ山を削って墳形を整えていることを注意すべきである。すなわち、墳頂部から中段



第12図 D2号墳 墓丘復元図



第13図 D2号墳 墓丘地割想定図

および下段の四隅を決める距離は、決して水平に計られたものでなく、斜距離であると言うことである。第13図の後方部頂の中心Oから中段隅までのO E、O F、O G、O H、また下段隅までのO I、O J、O K、O Lは、ともに水平距離によって決められたものでなく、墳頂部中心からの斜距離によって決定されたものであると言える。

さらに前方部前面上段基底巾14.4mと言う数値は後方部頂10m四方の正方形の対角線の長さ  $10\sqrt{2}$ mに極めて近いものであり、恐らくこの対角線の長さで前方部上段基底部を決めたものと考えられる。

このように考えると、このD2号墳構造に際して基準とされた長さは、Oから後方部頂四隅までの水平距離OAと、中段四隅までの斜距離OEではなかったかと推定されるのである。

そこで、Oから下段四隅までの距離OIを当てみると、これはOEの斜距離にOAの

長さを加えたものであり、この長さで円を描くと、前方部上段前面基底部の両隅MおよびNの位置も決まることが判る。

前方部下段前面基底部の巾は、Oから下段隅までの距離OIとはほぼ同じ値となり、両隅PQの位置は、Oから後方部下段隅までの長さOIに、さらにOAを加えて円を描けば決まることになる。

これを整理してみると、

$$\text{前方部前面上段基底部巾} MN = 2OA$$

$$\text{前方部前面下段基底部巾} PQ = OE(\text{斜距離}) + OA$$

$$O \text{から後方部下段隅までの距離} OI = OE(\text{斜距離}) + OA$$

$$O \text{から前方部上段基底部隅までの距離} OM = OE + OA$$

$$O \text{から前方部下段基底部隅までの距離} OP = OI + OA = OE + 2OA$$

となり、さらにこれを整理すれば

$$MN = 2OA \quad PQ = OE + OA = OI = OM \quad OP = OE + 2OA \text{となる。}$$

以上のことから、平地でなく丘陵上に築造された古墳、しかもほとんど盛土されずむしろ丘陵を削り出して墳形を整えている古墳について、その築造を問題にしようとする場合は、単に平面的にみるのでなく、その高さをも考慮に入れねばならないことになる。この場合当然のことながら墳丘基部の決め手となる葺石や、墳頂部の盛土の厚さ等が明確にならなければ正確な地割を明らかにすることは出来ないことになり、今後に残された問題の①つであると言える。

#### 註

① 発掘調査前の墳丘測量は白石太一郎氏を始め、同志社大学学生高木宗次郎、齊藤秀起、新居敬三、村上利孝、梶崎貞夫、今西通晴、立命館大学学生丸山巣平の諸君によるものであり、D1号墳の測量およびD2号墳、D3号墳の調査には、同志社大学大学院学生 蜂嶋、同学生今西通晴、齊藤秀起、新居敬三、梶崎貞夫、村上利孝、石田明二、堀江門也、近森佐太郎、有光斎、花岡敏、樋野政雄、吉田一得、田中則大、大関行一の諸君の協力を得た。

なお写真撮影の多くは高橋猪之助氏によるものである。

② 木棺に副室を設ける構造のもので実物として残存していたものとしては、奈良県三倉堂出土のものがある。(岸熊吉「木棺出土上の三倉堂跡及遺物調査報告」奈良県史第12回昭和9年) このD2号墳と時期のあまり違わないものとしては、宇治市坊主山第1号墳等をあげることが出来る(『坊主山古墳発掘調査報告』京都府教育委員会 1965)が、1.2mの長さにもなる副室(棺)がとり付

けられる構造を有するものは、現在までほとんどないといえる。なお石棺にこの種の副室を設けるものとしては、奈良県塚山古墳（奈良県埋蔵文化財調査報告書第一集、奈良県教委、昭和32年）丹後作り山古墳（京都府史蹟名勝天然記念物調査報告第14回）をはじめ、各地にみられる箱式石棺を上げることが出来るし、やや特殊なものとして河内松岳山古墳の石棺を上げることが出来る。（河内松岳山古墳の調査、大阪府文化財調査報告書第5輯、1957）

- ③ 河内船橋遺跡〇一三出土の須恵器と類似（河内船橋遺跡出土遺物の研究、大阪府文化財調査報告第11輯）
- ④ 大阪府教育委員会によって名神高速道路建設に伴う事前発掘調査が行なわれたもので、いずれも組合式木棺を埋葬したと考えられる主体部が2検出された。
- ⑤ 京都西山第1号墳をはじめ、大和下池山古墳、京都向日神社古墳等、畿内に所在する前方後方墳には、古式のものが多く、現在までに発見されているもので、D2号墳と同時期に考え得るものには皆無である。
- ⑥ 丘陵を利用して、ほとんど盛土をせずに、むしろ山を削って地形を整えている前方後円墳の内、比較的その規模を知ることの出来るものについて、D2号墳で得られた方法で墳頂部からの斜距離を墳丘各所に当たってみると、河内松岳山古墳、北玉山古墳、浜津守軍山古墳、紫金山古墳、三重県石山古墳等は、いずれも墳頂部から後円部基底までの斜距離が前方部前面基底部の巾と一致するようである。しかし、この弁天山古墳群中の前方後円墳であるA1号墳や、C1号墳については、前方部前面基底部の巾が、後円部頂から基底部までの斜距離よりも広くなるようであり、すべてがこの方法で割り切れるものではないらしい。今後とも検討を続けるつもりである。



# 弁天山D4号墳

北野耕平



## 1. 古墳の位置

D 4号墳は弁天山古墳群の中では最北端に位置する前方後円墳であって、高槻市奈佐原の部落から東北東に約300mのところにある。地形をみると南北に走る標高90mの丘陵の北端にあって、その隆起を利用して營まれたもので、東方と西方は傾斜面をなして深い谷に臨んでいる。調査は8月8日より墳形測量をもって始め、9月13日に至ってひとまず<sup>①</sup>終了した。

### 註

①D 4号墳の調査に関しては京都大学・同志社大学・立命館大学・天理大学および大阪大学の学生諸氏の援助を受けたほか、調査の一部について大阪府技師田代克己氏を頼わした。以下に芳名を記して深謝の意を表する。（敬称略）峰龍 堀江門也 米田雄介 芥田雅昭 河野通明 近藤喬一 田中則夫 井上泰尚 有光友学 布引敏雄 丸山竜平 加藤信勝 栗谷茂夫 大橋忠雄 山野 花岡松村

## 2. 墳丘の形状

調査に着手する以前に若干の遺物が採集されて古墳であることは知られていたが、墳丘の形状はかなり改変をうけていたので、今回の調査の結果はじめて南向きの前方後円墳であることが判明した。その長軸線は北より僅かに東に偏っていて、全長45m、後円部の直径30m、前方部の巾15m、後円部の高さ4m、前方部の高さは3mの規模を有している。なお丘陵の地質は後円部の東斜面に砂層が露出しているため甚だしく土砂が流失し、墳丘実測図に明らかのように大きく崩れてしまっている。また戦時中に高槻工兵隊の施設が後円部に設けられ、頂上の部分を削って拡張したことでも墳丘の原状を著しく損うことになった。なお前方部の正面から墳丘を縱断して後円部の西北隅に至る巾1mの小道が通じている。調査区域はこの道路の東側に限られたため調査範囲は墳丘の約3分の2の部分にすぎないが、外部施設および内部構造についてはほぼ充分な調査を行うことができた。

墳丘は現状では2段築成として確かめたにすぎないが、埴輪と葺石の配列から考えるところ墳丘の東西側面においてはさらに一段を加えた3段築成であったかもしれない。その上封土の流失のために本末段の間に設けられていた筈の平坦部があまり明瞭に残っていない

ので、当初築造された際の墳丘がどの程度に整齊なものであったかを推定することは困難である。しかしトレンチの切断面によって観察すると墳丘は丘陵の自然隆起を利用していて、現状では盛土の最も厚い部分においても50cmを越えるところは少ない。外部施設としては前述のように埴輪円筒と葺石の配列がある、前方部の東斜面と後円部の北斜面とによく残っていた。まず埴輪円筒についてみると基底部分のみを残していたにすぎないが、前方部ではそのくびれ部に接して上下段の間の平坦部に5個が配列の状態をとどめている。円筒の直径は22cmないし18cmで、10cm内外の間隔をおいて樹立したことが知られた。後円部の北側では中段と下段の2列に円筒列<sup>⑨</sup>があって、それぞれ段の内側を大きく円弧を描きつつ墳丘を取り巻き、その2列の高さの差はほぼ1mに達していた。中段の円筒列には15個の埴輪が遺存し、10cm内外の間隔をおいて直径20cm程度の大きさの円筒を樹立したことが知られるが、これに対して下段の埴輪はやや大きく直径25cm内外の大きさをもつていて、70~110cmの間隔をおいて配列してあった。

これに対して葺石は墳丘の上段と中段の傾斜面を広くおおっていて、その間の平坦面は埴輪のみで葺石はなかったと認められる。各段の葺石面の下縁には特に直径20~30cmの大の規石とも称すべき大きな自然石を一列に密接して並べ、その上方斜面には直径10cm内外のやや小さい石を密に積上げて封土をおおっている。この規石は前方部の側面においては正しく1直線に並べられ、後円部と接するくびれ部に至って殆んど直角に折れて後円部をめぐる円弧状の配列に続いている。後円部の北側でも2段の葺石列が存していて、その下方の葺石列と円筒列との間隔は広くて1.5m余りあり、葺石列の巾が狭くならんでいることを観察したが、その理由は墳丘の形をととのえるために丘陵の稜線部を特に深く掘り下げるのをしなかったからであると思われる。また下段の円筒列の下の傾斜面には葺石の施設を認めなかった。なお形象埴輪は後円部の頂上においては遺存したもののがなく、すべて墳丘の斜面から円筒片とともに検出したものばかりで、当初配置された位置を確かめることができる例は一つもなかった。東側のくびれ部中段からは小型の鳥形のほか、家形・盾形・櫛形の破片を得たほか、後円部の北側からは大型の水鳥形、および家形の埴輪の破片<sup>⑩</sup>を発見した。

### 註

①西谷正氏の教示によると昭和30年8月頃、後円部から勾玉1個、ガラス玉若干、鉄劍2口、鍍金金具などを採集したことがあって、特に鉄劍は2口が併列していた状態を看取したという。

②なお後円部の埴輪円筒列は嚴密に同じ高さに配置されたものではなく、東は最も低くて西方の中軸線に近づくに従い高くなっているのはおそらく埴丘が丘陵の馬背状の部分をある程度残して形をととのえたためとみられる。円筒は大部分が赤色を呈する厚手の粗質のものであるが、後円部の北側で検出した朝顔形をなす破片に、川色をおびた須恵器の良質のものも混じていた。

③またくびれ部と後円部の壇石上には上方から流下してきた状態で、点々と須恵器の破片が散布していた。その器形は長颈瓶・盞・甌などに属するものである。

(第1図)



第1図 後円部北側より出土の須恵器破片

### 3. 内 部 構 造

調査の結果、後円部の中央はすでに搅乱されていることが判明したので、埋葬施設の構造を明らかにすることはできなかった。調査は埴頂を4区に分かち層位を細分して発掘する方法をとったが、中央から南北部にかけて広範囲に既掘のあとがあり、地山の粘土中に



第2図 後円部頂上の調査状況

まで深く掘り込まれていて、主体部の施設は全く痕跡をとどめることなく破壊されていた。(第2図)僅かに後円部の中央から東方に2m余離れて、赤色顔料の散布した部分が地山上に $1.5 \times 0.6$ mの長方形をなして遺存しているのを発見した。(第3図)

その長軸は埴丘の方向と一致し

ているので、これを副施設とみると主体部も後円部の中央にあたる地山の直上に併行して設けられていた可能性が強い。内部構造は板石を全く発見しなかったため石室の類ではなく、木棺を直接墓坑中に埋葬したかあるいは簡単に粘土で包んだ程度のものであったと思われる。また前方部には地山が地表から浅いところに広がっていて埋葬施設などは認めなかつた。

#### 註

①この部分は後円部の中央より東に偏しているので、主体部に附屬した施設かとみられる。北端は九味をおびていてあたかも盾の頭部のような形状をなし、南端の部分は切断されて失われているので、1.5 mよりもう少し長かったかもしれない。断面はやや内側に凹んでいるが一様な曲率を呈するものではなく、もとは平面をなしていたかとみられる。極めて薄い赤色顔料の被膜で、北端の部分に黒色の帯状をなす2条の漆膜が横に走っている。大きさからいって盾とみたいところであるが漆膜の状態がいわゆる革盾の場合とは著しく異なっているので別種のものであろう。



第3図 後円部頂上遺物散布状態

#### 4. 遺物の配列

赤色顔料の散布した部分を除いては遺構が残存しなかったので、遺物はすべて後円部中央の擾乱された土層の中に破碎した状態で存在した。遺物は少量のガラス小玉を除けば全部が鉄製品で、鉄刀片・鉄鎌・鉄小札などの武器類と、鞍金具・鎧金具などの馬具類のほかに鉄斧・鉄鑿などの工具類に及んでいる。これらはすべて雖然と散乱していて、出土状態から原位置を確かめることのできるものは全くなかった。ただその散布が南北3.5m、東西3mの範囲にわたり、南北の方向に特に密集して認められることは、柵掘の行われた広さを示すとともに、かって主体部の方向も南北に長く存していたことを想像させる一つの手懸りになる。(第3図)

#### 5. 遺物

後円部から発見した遺物は殆んどすべて破碎していたが、これらは鉄製品を主とするもので整理の結果各種の品目に亘ることが明らかとなった。まずその品目と数量を掲げて解説を加えることにする。

1 ガラス玉	15個	2 鉄 刀	破片	3 個
3 鉄鎌破片	若干	4 扇庇付冑	破片	5 個
5 鈐留鉄片	1個	6 頭 甲	破片	2 個
7 鉄 小 札	約 140枚	8 箕手小札	破片	74個
9 鞍 金 具	破片 8 個	10 輪 鎧	破片	6 個
11 鉄地金銅板金具			破片	3 個
12 鉄製鞍具	破片若干	13 鉄 斧		1 個
14 鉄 鑿	1本			

##### 1 ガラス小玉 (第1表)

浅緑色のもの 5 個と、暗青色のもの 10 個からなる。暗青色の小玉は薄い青色から黒色に近い濃紺まで変化がある。大きさについては計測表に示しておいたが、形状は不揃いで扁平な球形から細管を輪切りにしたままのものまである。

第1表 ガラス製小玉計測表

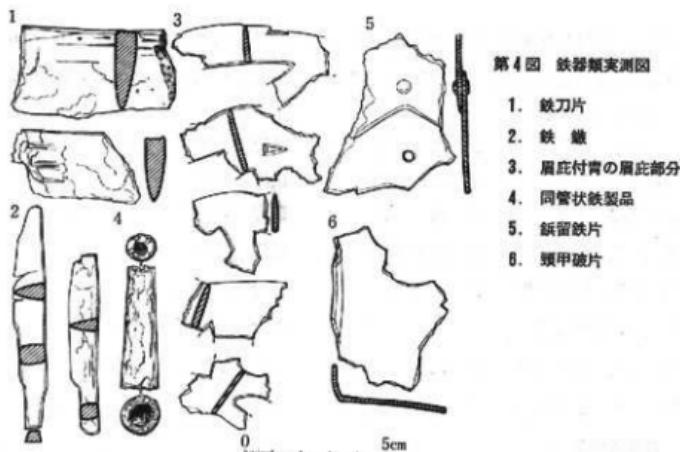
直 径	高	色	直 径	高	色	直 径	高	色
1. 5.7	4.2	浅緑	6. 6.3	4.4	紺青	11. 4.9	2.9	紺青
2. 5.1	4.1	"	7. 6.0	3.1	"	12. 4.9	3.9	"
3. 5.1	4.7	"	8. 5.5	3.1	"	13. 4.2	4.0	"
4. 4.8	3.3	"	9. 5.3	2.4	"	14. 4.3	2.7	"
5. 3.9	5.4	"	10. 5.6	4.6	"	15. 4.4	3.6	"

## 2 鉄 刀 (第4図)

いずれも刀身の一部にあたる細片で全長を明らかにしがたいが、平造りで巾は2.8cm、厚さは0.75cmに達するものもある。すべて鞘木の痕跡を有している。

## 3 鉄 鐛 (第4図)

僅か数本分を採集したにすぎないが、その中ではば完形を有するものをみると長さ8cm、巾1cmの刀子形を呈している。鐵身の中央から先の断面は三角形で、茎にいたる後半は方形である。また口巻にサクラの皮を巻きつけた状態のこる資料もある。



## 4 眉底付冑 (第4図)

鉢金の破片は全く発見しなかったが、眉底の一部と判断される透彫を施した薄い鉄板の破片5個を得た。その中には眉底の前縁にあたる弧形を有するものや、内部を杏仁形に割

った部分もある。(同図3)厚さ2mm内外のものが多い。また頭頂の伏鉢の上に立てて受鉢を支える長さ4cm余、直径1.3cmの管状をなす鉄製品もあって、内部は中空で先端は細くなっている(同図4)

#### 5 鋸留鉄片(第4図)

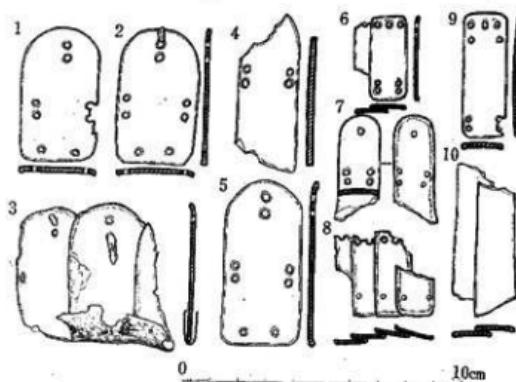
長さ5cm余、巾3cmの小鉄片であるが、ちょうど2枚の鉄板の接合部にあたっている。上の鉄板は一侧をL字形に削っていて、その下に直角に切った板をあてて角を大きな鋸でかしめている。また下の鉄板には接合部から1.5cm離れて一孔を穿っている。厚さ2mmの鉄板を用いているので短甲の一部にあたる可能性もあるがよく分からぬ。なお短甲かとみられる鉄板の破片は他に幾つかある。

#### 6 頭 甲(第4図)

いずれも一侧を強く折り返した鉄板の破片で、全体が軽く彎曲している状態からみても頭部に接する部分にあたることの確実な遺例である。破片が小さいためこれ以上の形状を知りえないのは残念であるが、厚さ2mmで折り返しの高さは1.3cmある。なお内面に黒漆を塗抹した痕跡をとどめている。

#### 7 鉄小札(國版D272)、第5図

採取した小札の数は、ほぼ形状を見得るもの102枚、その他に破片であるが個体数に換算すると38枚分、あわせて140枚内外に達している。小札の形状はすべて頭部が円形をなす長方形で、長さ5.8cm、巾2.7cm内外の大さきのものが大部分を占め、やや短かくて長さ4.8cm、巾2.9cm



第5図 鉄小札実測図 (1~5推定草摺 6~10筆手)

のものがこれに次いでいる。また中にごく僅かであるが巾2.2cmの狭いものも混じっている。厚さはいずれも2mmである。小札は全面に黒漆が塗布され、細部の手法についてみ

ると下縁は直截であるが角は僅かに丸味をもたせて作られていて、周縁には軽度のきめ出しが施されていることを看取しうる。威孔および縦孔の位置はすべて同一で、頭部の中央に縦に2孔の威孔を穿ち、両側縁の中央にそれぞれ2孔と下端の両側に1孔の縦孔を設けている。威し料としては革紐が用いられているが、威し方が特殊なものであったかどうかという点には細部を明らかにする資料はない。小札の中に覆輪を有するものもある、下縁を巾3cmに亘って革で包んだ上を革紐で縫じつけている。この最下段にあたる小札には上述した形状の中で長さの短かい類のものを用いている。これら的小札がもと何に用いられていたかという点について、出土状態からこれを明らかにすることはできないが、小札の種類がほぼ一種類に限られていて、挂甲を構成する場合のように長短数種の組み合せが認められないので、いま最も可能性のある用途として考えられるのは草摺を構成したものにあたるということである。ただし肩甲とみることもできるから断定は避けたい。なお小札の中に反張りを有するものはない。

#### 8 箋手小札 (図版D27(2)、第5図)

前述の小札に比べると一群の小型品で、形状からみて4種に細別しうる。その第1は最も小さくて長方形をなし、長さ3.4cm、巾1.4cmで、頭縁にそって横に3孔を穿ち、下部は左右にそれぞれ2孔を穿っている。第2の小札はいずれも下端を欠いているので全体の大きさは明らかではないが、円頭をなして頭部の中央に2孔があり、両側にもおのおの2孔を穿っている。現存長3.8cm、巾1.4cmある。第3は1よりも大きい長方形で、長さ4.5cm、巾1.5cmの大きさをなし、頭部の中央に1孔と左右にそれぞれ2孔を穿っている。第4は両端が折損していて現存長4.8cm以上あり、一端は1.5cm、他端は狭まって1.2cmである。厚さはいずれも1mm余ある。小札の大きさから箒手と推定しうる上に第4類のように長い細板もあるので箒手に属していたものかと考える。小札はそれぞれきめ出しを有し、表面に黒漆を塗っている。

#### 9 軸金具 (図版D28(2)、第6図)

覆輪金具と済の部分の破片を採集したにすぎないが、すべて鉄製品である。覆輪は断面がU字形をなす金具で、巾1.5cm、高さ1.4cm、厚さ2mmの大きさを有している。覆輪と済金具の鉄板とが接着した破片もある。済金具は厚さ2mmの扁平な鉄板で、半月状をなす部分の破片もあるが全体の形状は明らかにしがたい。その裏側の全面に木質の附着が認められるので、軸橋は木板を台としてその上に鉄板を貼った通有の構造であることが

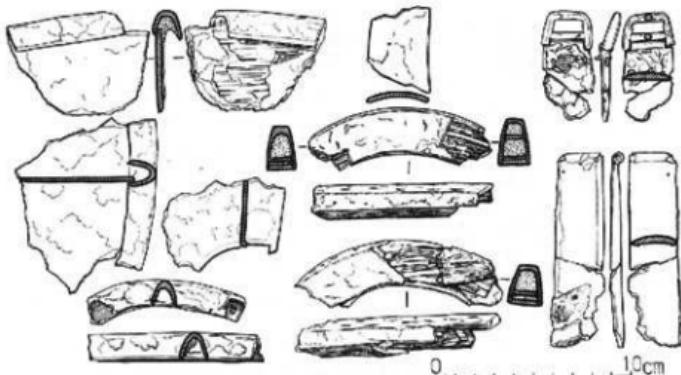
わかる。なお覆輪と銅金具の表面には黒漆が塗られている。

#### 10 輪 鐘 (図版D282)、第6図)

木心鉄張りの構造で、破片は主として鐘の環体をなす上方の部分である。別に鐘を懸垂するための後世の紋板にあたる部分の金具の破片もあるが、これは外方に丸味をおびて彎曲して巾3cm、厚さ1mm余の鉄板からなり、内部に縦の方向に木目をとどめているにすぎない。これに対して踏込の上方にあたる環体の部分は木心をよくのこし、細部の構造を明らかにすることができます。すなわちこの部分は鉄板を折り曲げて断面が丸味をおびた深いU字形の外皮をなすようにし、かつ全体を環状に作り上げたもので、その内部に円形に曲げた心木を嵌めこんでいる。心木の離脱を防ぐため縫の間隔をおいて鉄釘を打ちこみ、内側に帯状の鉄板をはりつけて釘でとめてある。従って踏込につづく部分が巾広く作られているにもかかわらず、外側は丸味をもって狭まっていて洗練された形状を呈している。この環体は巾2.3cm、厚さ1.7cmあり、鉄板の厚さは3mm内外ある。また木心には少くとも2つの板材を組合せて用いていて、その間にさらに鉄の細板を挟んでいるのは保強のためであろうか。環体の断面が方形をなす木心鉄張りの通常の輪鐘に比べると、新しい時期に属する輪鐘である。

#### 11 鉄地金鋼装板金具 (図版D282)、第6図)

形状をみると足る破片は2個あって、その中1つは長さ3.9cm、巾2.5cm、厚さ3mm



第6図 輪金具(左)、輪鐘(中)、鉄地金鋼装板金具(右)、実測図

の鉄地の上に薄い金銅板を被せ、両端を下り折り曲げてとめたもので、その先に長さ1.4cmの鉄製の輪金を有している。一見したところでは尾銃に似ているので帶金具かと考えられるが、刺金を備えていないので用途を決定しがたい。金銅板の上から1対の釘を打つていてその脚は下面に突出し、そこに皮革様のものと布とが接着している。一端を欠失しているため全体の大きさを明らかにしがたい。他の1つはさらに大きなもので現存長9.7cm、巾2.3cmあり、同様な金具である。一端を欠失しているが、他端は丸く曲げてあってもと輪金をとりつけてあつたらしい痕跡をのこしている。裏面には皮革と目の粗い布の接着が認められる。

#### 12 鉄製紋具（第7図）

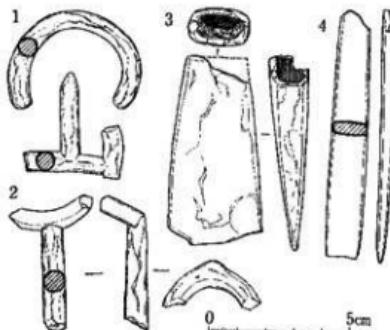
輪金の直径は4.7cm、太さ7mmの紋具で、逆曲した刺金の破片もある。また輪金の一側に棒状の金具のついた破片もあって、やや性格を異にしたものようである。

#### 13 鉄 斧（第7図）

袋部の上端を欠失した無肩式の小型品である。長さ6.7cm、巾は下端の刃の部分で最も広くて3.5cmある。袋部は鉄板を折り曲げて作った鍛造品とみられるが、合せ目は明瞭でなく口縁の形状が長方形をなすこととも特色である。

#### 14 鉄 鋸（第7図）

現存8.7cm、巾1.3cm、厚さ6mmの偏平な棒状品で、下端に刃を付している。上端を欠失しているので全長はもう少し長いと思われる。



第7図 鉄器実測図 1・2 紋具破片 3. 鉄斧 4. 鉄鋸

弁天山古墳群編年表

世紀		400	500	
時期	I	II	III	
A群(岡本山)	1a 1b 後円部石室	2a ? 木棺 粘土使用 排水溝	2a 2b 箱式木棺直葬	
B群(弁天山)	1 不明	2a 2b 粘土 粘土 梯暗渠 排水	3a 3b 粘土 梯暗渠 排水	3c 4 刺竹形木棺直葬
C群(C1号墳)		1a 1b 1c 後円部 粘土都		
D群(D2 D4号墳)			2a 3a 1 2b 3b 2 箱式木棺直葬	4 木棺直葬 刺竹形木棺直葬 箱式木棺直葬
近隣主要古墳墓		茶臼山(現跡休眠)		今城塚(休眠)



# 図 版





(1) 東方からみたB 2号墳



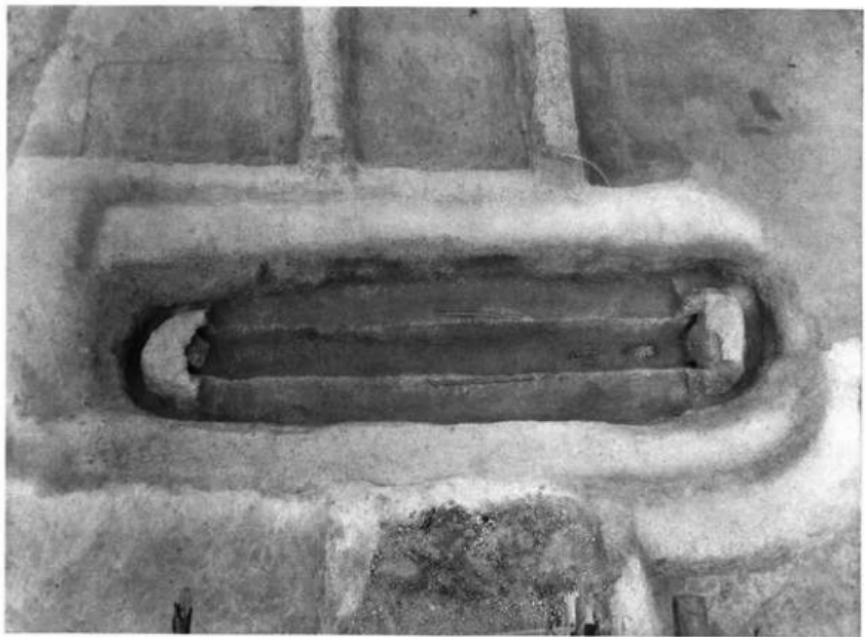
(2) 西方からみたB 2号墳



(1) 東桿粘土桿遺存状態



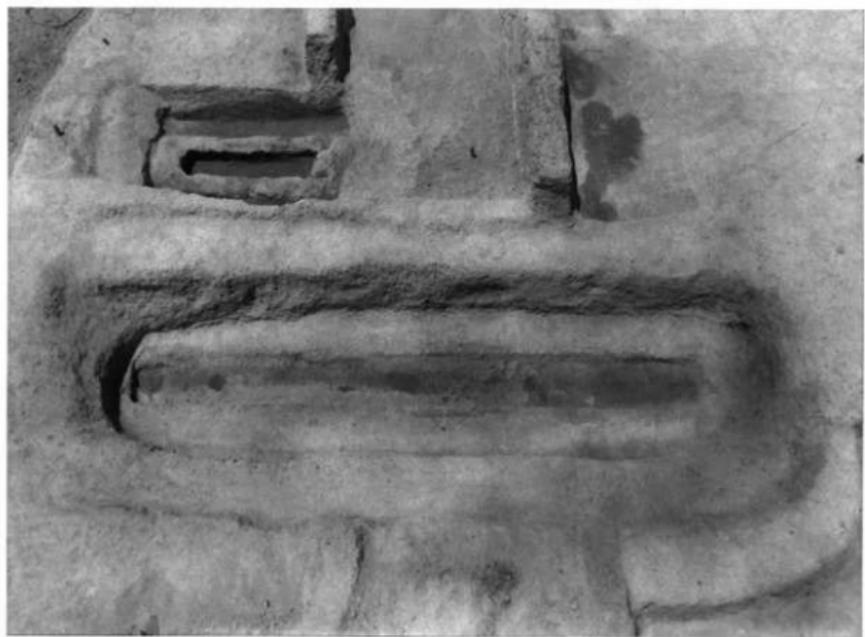
(2) 東桿粘土桿(棺内落下被覆粘土除去および南縁被覆粘土下鉄刀等露呈状態)



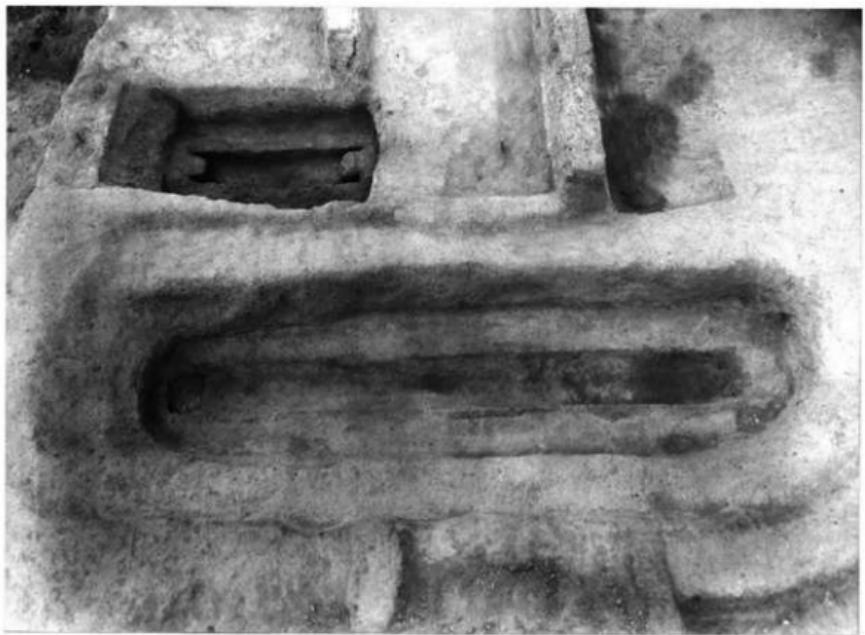
(1) 東櫛粘土櫛



(2) 東櫛粘土櫛(被覆粘土除去後)



(1) 西櫛粘土櫛（上）と東櫛粘土櫛（下）



(2) 同 上



(1) 西櫛・東櫛 墓域と排水施設



(2) 西櫛(上)・東櫛(下) 墓域底



(1) 東椁 排水溝上の遺物



(2) 東椁 排水施設



(1) 西櫛 粘土櫛遺存状態



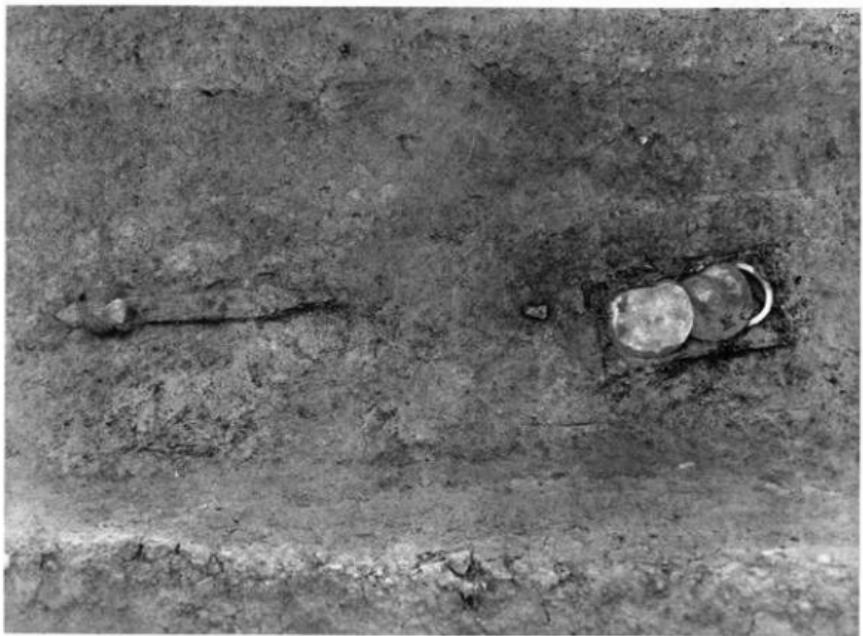
(2) 西櫛 粘土櫛(落込粘土除去後)

(1) 西櫛 粘土櫛木棺痕跡

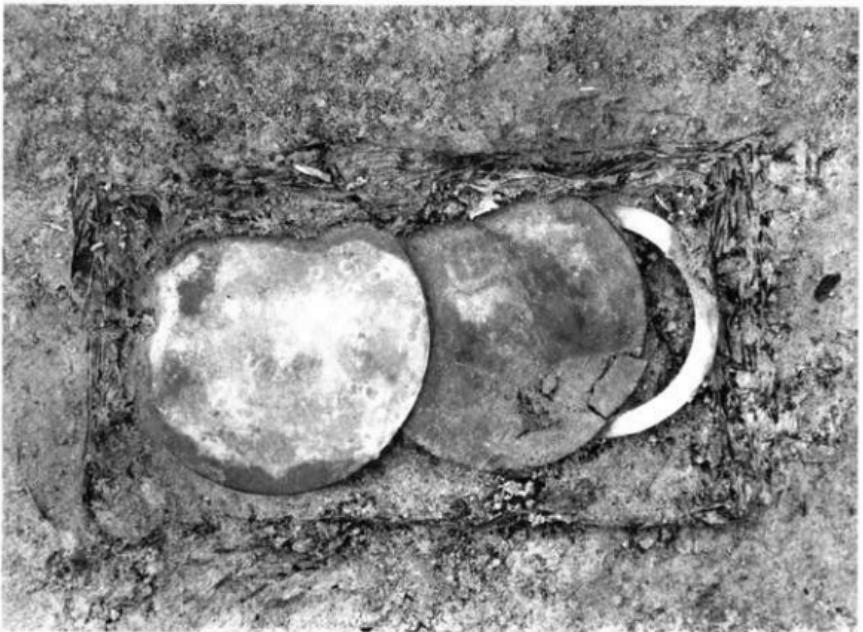


(2) 西櫛 排水施設





(1) 東都 棺内の遺物

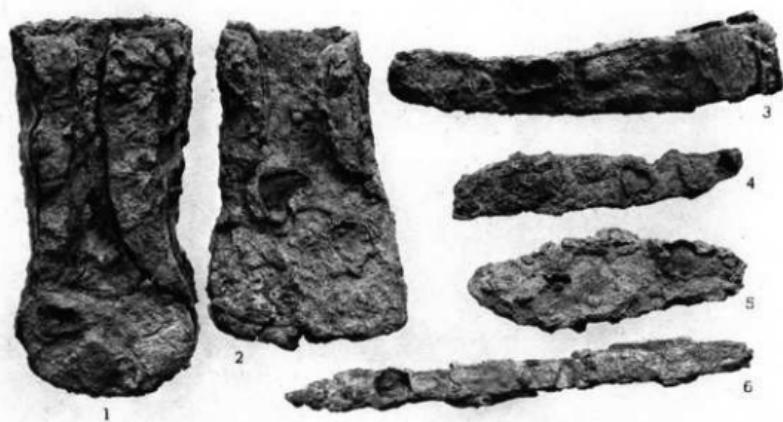


(2) 漆塗鏡出土状態

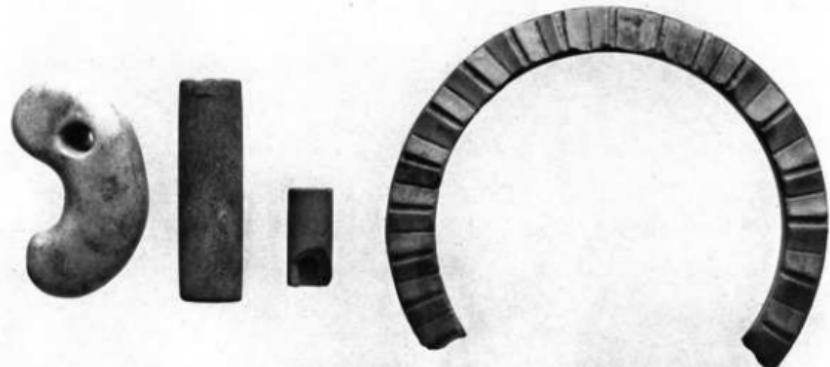


東都 出土 銅鏡類

(1) 鉄劍・鉄刀(東櫛出土)



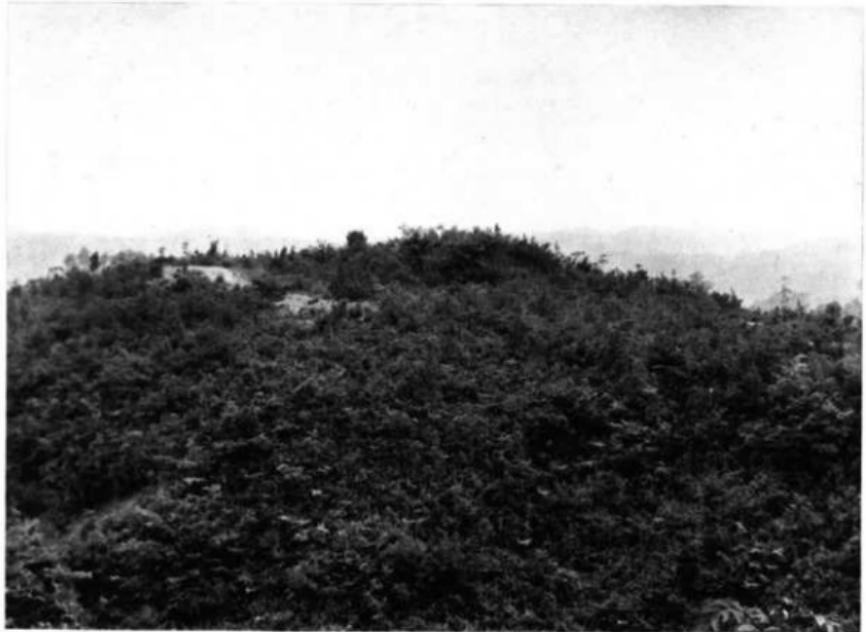
(2) 鉄器類(東櫛出土)



(3) 石劍(東櫛出土)・管玉・勾玉(西櫛出土)



(1) 北方からみた B 3 号墳



(2) 東方からみた B 3 号墳



(1) 後円部粘土層遺存状態



(2) 同 上



(1) 後円部粘土櫛遺存状態、右西櫛、左東櫛



(2) 後円部粘土櫛(落込粘土除去後)



(1) 後円部東側粘土層 被覆粘土落込横断面



(2) 後円部西側粘土層 被覆粘土落込横断面



(1) 後円部粘土櫛(被覆粘土除去後)



(2) 後円部東櫛 粘土床断面